

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

— 42 —

朝倉郡杷木町所在天園・夕月・上池田遺跡

1996

福岡県教育委員会

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

— 42 —

朝倉郡杷木町所在天園・夕月・上池田遺跡



天圓遺跡全景（丘陵上面は夕月遺跡、手前左隅は笠原遺跡）

序

本書は、福岡県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて、昭和54年度から実施している九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録であります。

今回の報告書は、昭和61年度から63年度にかけて調査しました朝倉郡杷木町天園遺跡・夕月遺跡・上池田遺跡の発掘成果を「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告」第42集として取りまとめたものであります。各々、縄文時代、弥生時代、古墳時代、平安～室町時代にわたって断続的に形成された集落および古墳群であります。

発掘調査の記録としては、十分に満足のいくものではありませんが、本書を通して地域の文化財並びに歴史に対する認識と理解を深める一助になれば幸いです。

なお、発掘調査に当たっては、数々のご指導・ご協力を頂いた地元の方々をはじめ、関係各位に対して心から感謝申し上げます。

平成8年3月31日

福岡県教育委員会
教育長 光安常喜

例　　言

- 1 本書は、昭和61～63年度に福岡県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて、九州横断自動車道建設に伴い破壊される遺跡の発掘調査を実施した、天園遺跡・夕月遺跡・上池田遺跡の報告書で、九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告の42冊目にあたる。
- 2 発掘現場での遺構の実測は、井上裕弘、木村幾多郎、中間研志、高田一弘、日高正幸、武田光正、田中康信、高瀬セツ子、本石セツ子、中村光恵、後藤カミヨ、矢野静子、牟田洋子、渡辺輝子が行った。遺構写真撮影は木村・中間が行い、空中写真撮影はフォト・オオツカによる。
- 3 出土遺物の整理は、岩瀬正信氏の指導のもとに九州歴史資料館および文化課甘木発掘調査事務所にて行った。また、鉄器の保存処理は、九州歴史資料館にて横田義章氏が行った。
- 4 出土遺物の写真撮影は、九州歴史資料館にて石丸洋氏の指導のもとに北岡伸一氏が行った。遺物実測は、井上、中間、木下修、大野愛里、西田美代子が行った。
- 5 図面整理・製図作業は、塩足里美、秋吉邦子、渡辺輝子、木下、中間が行った。
- 6 本書で使用している方位は、すべて「座標北」である。
- 7 本書の執筆・編集は、井上と中間が担当し、本文目次中にその分担を記した。

本文目次

	頁
I 天園遺跡の調査	(中間) 1
1 調査の経過	1
2 位置と環境	5
3 縄文時代の造構と遺物	7
(1) 調査の概要	7
(2) 穴穴住居跡	11
(3) 土器	15
(4) 墓臺等	31
(5) 溝状遺構	37
(6) 包含層他出土遺物	37
4 古墳群の調査	95
(1) 天園 1 号墳	95
(2) 天園 2 号墳	105
(3) 天園 3 号墳	113
5 歴史時代の造構と遺物	117
(1) 土器	117
(2) 火葬墓	118
(3) 溝状遺構	118
(4) 包含層他出土遺物	119
6 まとめ	126
(1) 天園遺跡の変遷	126
(2) 森B式・曾根式土器	131

II 夕月遺跡の調査	(井上)	137
1 調査の経過		137
2 遺構と遺物		139
(1) 土塹		139
(2) 溝状遺構		141
(3) 包含層出土の遺物		142
3 まとめ		143
III 上池田遺跡の調査	(井上)	145
1 調査の経過		145
2 位置と環境		149
3 遺構と遺物		150
(1) 純文・弥生時代の遺構と遺物		150
1) 坑穴住居跡		150
2) 土塹		157
3) 包含層出土の遺物		181
(2) 歴史時代の遺構と遺物		199
1) 坑穴遺構		199
2) 土塙		205
3) 土塹墓		207
4) 包含層出土の遺物		208
4 まとめ		211

図 版 目 次

卷頭図版 天園遺跡全景（丘陵上面は夕月遺跡、手前左隅は桜隈遺跡）

天園遺跡	本文対照頁
図版 1 (1) 天園遺跡遠景（西の大谷遺跡から、煙の出ている煙突の左側）	7
(2) 天園遺跡全景（空中写真、西から、上方は夕月遺跡、左下は桜隈遺跡）	7
図版 2 (1) 天園遺跡全景（空中写真、ほぼ完掘時）	7
(2) 1号住居跡（縄文前期、西から）	11
図版 3 (1) 1号住居跡土器出土状態（西から）	11
(2) 1号住居跡内南半土器山土状態（西から）	11
図版 4 (1) 1号埋甕出土状態（上から）	31
(2) 「土器1」出土状態（西から）	33
図版 5 (1) 「土器1」出土状態（上から）	33
(2) 「土器2」出土状態（北から）	35
図版 6 (1) 「土器2」出土状態（西から）	35
(2) 5・9号土壤（東から）	15
図版 7 (1) 5・9号土壤（北から）	15
(2) 5・9・10号土壤（東から）	15
図版 8 (1) 6号土壤（南から）	15
(2) 6・11号土壤（東から）	24
図版 9 (1) 7号土壤（西から）	17
(2) 7号土壤内打製石器・スクレイパー出土状態（西から）	17
図版 10 (1) 8号土壤（東から）	19
(2) 12号土壤（西から）	24
図版 11 (1) 「土器3」土器出土状態（東から）	29
(2) 「土器3」東端部土器出土状態（北から）	29
図版 12 (1) 下層1号溝（東から）	37
(2) 1号墳南下段縄文包含層遺物出土状態（北から）	37
図版 13 (1) 1号墳南下段縄文包含層遺物集中部分出土状態（北から）	37
(2) 1号墳全景（南から）	95

図 版 14	(1) 1号墳全景 (西から)	95
	(2) 1号墳石室と東側周溝 (南から)	97
図 版 15	(1) 1号墳石室 (西から)	97
	(2) 1号墳玄室東壁 (西から)	97
図 版 16	(1) 1号墳羨道部土器出土状態 (西から)	97
	(2) 2号墳全景 (南から)	105
図 版 17	(1) 2号墳主体部 (南から, 閉塞除去前)	106
	(2) 2号墳主体部 (南から, 閉塞除去後)	106
図 版 18	(1) 2号墳玄室遺物出土状態 (西から)	109
	(2) 3号墳石室全景 (西から)	113
図 版 19	(1) 1号土壙 (西から)	117
	(2) 2号土壙 (西から)	117
図 版 20	(1) 3号土壙 (西から, 向こうは1号土壙)	117
	(2) 4号土壙とその周辺 (西から)	118
図 版 21	(1) 1号火葬墓 (西から)	118
	(2) 1号火葬墓焼骨集中部 (西から)	118
図 版 22	(1) 押型文土器 ①.....	37
	(2) 同上裏面.....	37
図 版 23	(1) 押型文土器 ②.....	37
	(2) 押型文土器 ③.....	37
図 版 24	(1) その他の早・前期土器 ①.....	41
	(2) 同上裏面.....	41
図 版 25	(1) その他の早・前期土器 ②.....	41
	(2) その他の早・前期土器 ③.....	41
図 版 26	(1) 薩B式土器 ①.....	44
	(2) 薩B式土器 ②.....	44
図 版 27	(1) 薩B式土器 ③.....	44
	(2) 薩B式土器 ④.....	44
図 版 28	(1) 薩B式土器 ⑤.....	44
	(2) 薩B式土器 ⑥.....	44
図 版 29	(1) 薩B式土器 ⑦.....	44
	(2) 薩B式土器 ⑧.....	44

図版 30	(1) 薩B式土器 ⑨	44
	(2) 薩B式土器 ⑩	44
図版 31	(1) 薩B式土器 ⑪	44
	(2) 薩B式土器 ⑫	44
図版 32	(1) 薩B式土器 ⑬	44
	(2) 薩B式土器 ⑭	44
図版 33	(1) 薩B式土器 (曲線文) ①	59
	(2) 薩B式土器 (曲線文) ②	59
図版 34	(1) 薩B式土器 (曲線文) ③	59
	(2) 薩B式土器 (曲線文) ④	59
図版 35	(1) 薩B式土器 (胴部) ①	44
	(2) 薩B式土器 (胴部) ②	44
図版 36	(1) 薩B式土器 (胴部) ③	44
	(2) 薩B式土器 (胴部) ④	44
図版 37	(1) 曽畠式土器 ①	65
	(2) 同上裏面	65
図版 38	(1) 曽畠式土器 ②	65
	(2) 曽畠式土器 ③	65
図版 39	(1) 曽畠式土器 ④	65
	(2) 曽畠式土器 ⑤	65
図版 40	(1) 曽畠式土器 ⑥	65
	(2) 曽畠式土器 (滑石無し) ①	71
図版 41	(1) 曽畠式土器 (滑石無し) ②	71
	(2) 曽畠式土器 (滑石無し) ③	71
図版 42	(1) 1号埋甕	31
	(2) 「土器1」	33
	(3) 「土器2」	35
	(4) 包含層出土浅鉢	75
図版 43	(1) 繩文後期土器	72
	(2) 繩文晚期浅鉢、精製深鉢	75
図版 44	(1) 晚期浅鉢	75
	(2) 晚期精製深鉢・鉢等	75

図 版 45 (1) 晩期深鉢類.....	75
(2) 磨製石斧 ①.....	79
図 版 46 (1) 塗製石斧 ②.....	79
(2) 磨製石斧 ③.....	79
図 版 47 打製石鎌.....	85
図 版 48 打製石鎌・石錐・小型石斧・尖頭器状石器・石匙・スクレイパー.....	85
図 版 49 石核・使用剥片・石錐・凹石・磨石.....	86
図 版 50 磨石・凹石、1号墳出土土器.....	92・101
図 版 51 (1) 1号墳出土土器・鉄器.....	101
(2) 2号墳出土土器.....	110
図 版 52 (1) 2号墳出土土器・鉄器・玉類.....	110
(2) 包含層等出土土器.....	119
図 版 53 (1) 包含層出土土器・土錐・滑石製品.....	119
(2) 発掘調査現場のオールスタッフ.....	126

夕月遺跡

図 版 54 (1) 夕月遺跡・天園遺跡周辺空中写真.....	139
(2) 夕月遺跡(発掘区西半部)・天園遺跡全景空中写真.....	139
図 版 55 (1) 発掘区東半部全景(西から).....	139
(2) 発掘区東半部近景(西から).....	139
図 版 56 (1) 2号土壙(西から).....	139
(2) 3号土壙(西から).....	139
図 版 57 (上) 4号土壙.....	139
(下) 4号土壙内縄文土器出土状態.....	139
図 版 58 (1) 1・2号溝全景(南から).....	141
(2) 1号溝の列石(西から).....	141
図 版 59 (1) 石器・土製品.....	142
(2) 縄文土器・須恵器.....	139

上池田遺跡

図 版 60 (1) 上池田遺跡周辺全景空中写真.....	145
(2) 上池田遺跡全景空中写真.....	145

図版 61	(1) 発掘区東半部全景.....	145
	(2) 発掘区西半部全景.....	145
図版 62	(1) 1・2号住居跡（西から）.....	150
	(2) 3号住居跡（東から）.....	153
図版 63	(1) 3号住居跡内堆積土層断面（西から）.....	153
	(2) 3号住居跡下層（東から）.....	153
図版 64	(1) 4号住居跡（北から）.....	156
	(2) 5号住居跡（南から）.....	156
図版 65	(1) 5号住居跡内堆積土層断面（東から）.....	156
	(2) 6号住居跡（西から）.....	157
図版 66	(1) 1号土壤（東から）.....	157
	(2) 2号土壤（東から）.....	205
図版 67	(1) 3号土壤（東から）.....	157
	(2) 4号土壤（北から）.....	157
図版 68	(1) 7号土壤（南から）.....	161
	(2) 8・9・20号土壤（南から）.....	161
図版 69	(1) 10号土壤（南から）.....	161
	(2) 11号土壤（南から）.....	161
図版 70	(1) 12号土壤（西から）.....	161
	(2) 15号土壤（西から）.....	163
図版 71	(1) 18号土壤（北から）.....	163
	(2) 19号土壤（南から）.....	163
図版 72	(1) 21号土壤（北西から）.....	169
	(2) 22号土壤（東から）.....	169
図版 73	(1) 23号土壤（東から）.....	169
	(2) 24号土壤（東から）.....	169
図版 74	(1) 26・27号土壤（西から）.....	169
	(2) 28号土壤（南西から）.....	171
図版 75	(1) 29号土壤（北東から）.....	171
	(2) 30号土壤（西から）.....	171
図版 76	(1) 31号土壤（東から）.....	171
	(2) 32・33号土壤（南から）.....	171

図 版 77 (1) 33号土壙（西から）	173
(2) 36号土壙（西から）	175
図 版 78 (1) 37号土壙（西から）	175
(2) 38号土壙（北から）	175
図 版 79 (1) 40号土壙（北西から）	176
(2) 41号土壙（南から）	176
図 版 80 (1) 42号土壙（北から）	176
(2) 45号土壙（北東から）	176
図 版 81 (1) 46号土壙（北東から）	176
(2) 47号土壙（北から）	179
図 版 82 (1) 48号土壙（東から）	180
(2) 49号土壙（東から）	180
図 版 83 (1) 1～4号竪穴群全景（西から）	199
(2) 1号竪穴（西から）	199
図 版 84 (1) 2・3号竪穴（西から）	199
(2) 4号竪穴（東から）	204
図 版 85 (1) 1号土壙墓（北東から）	207
(2) 供獻された土器	207
図 版 86 (1) 2号土壙墓（西から）	207
(2) 3号土壙墓（南から）	208
図 版 87 (1) 住居跡出土土器 ①	150
(2) 住居跡出土土器 ②	150
図 版 88 住居跡・土壙出土土器	150・157
図 版 89 (1) 土壙出土土器 ①	157
(2) 土壙出土土器 ②	157
図 版 90 (1) 土壙出土土器 ③	157
(2) 土壙出土土器 ④	157
図 版 91 (1) 土壙出土土器 ⑤	157
(2) 土壙出土土器 ⑥	157
図 版 92 (1) 包含層出土縄文早期土器	183
(2) 包含層出土縄文中・後期土器	185
図 版 93 (1) 包含層出土縄文後期土器 ①	185
(2) 包含層出土縄文後期土器 ②	185

圖 版 94	(1) 包含層出土繩文晚期土器 ①.....	185
	(2) 包含層出土繩文晚期土器 ②.....	185
圖 版 95	(1) 包含層出土繩文晚期土器 ③.....	185
	(2) 包含層出土繩文晚期土器 ④.....	185
圖 版 96	(1) 包含層出土弥生土器 ①.....	191
	(2) 包含層出土弥生土器 ②.....	191
圖 版 97	(1) 住居跡・土壤出土石器 ①.....	150・157
	(2) 住居跡・土壤出土石器 ②.....	150・157
圖 版 98	(1) 土壤出土石器 ①.....	157
	(2) 土壤出土石器 ②.....	157
圖 版 99	(1) 包含層出土石器 ①.....	193
	(2) 包含層出土石器 ②.....	193
圖 版 100	(1) 包含層出土石器 ③.....	193
	(2) 包含層出土石器 ④.....	193
圖 版 101	(1) 包含層出土石器 ⑤.....	193
	(2) 包含層出土石器 ⑥.....	193
圖 版 102	(1) 包含層出土石器 ⑦.....	193
	(2) 包含層出土石器 ⑧.....	193
圖 版 103	(1) 包含層出土石器 ⑨.....	193
	(2) 包含層出土石器 ⑩.....	193
圖 版 104	(1) 坪穴出土土器 ①.....	199
	(2) 坪穴出土土器 ②.....	199
圖 版 105	(1) 坪穴出土土器 ③.....	199
	(2) 坪穴・包含層出土土製品.....	199・208
圖 版 106	坪穴他・包含層出土土師器.....	199・208
圖 版 107	(1) 包含層出土土師器.....	208
	(2) 包含層出土土師器・須恵器・瓦器・瓦・磁器.....	208

挿 図 目 次

天 國 遺 跡	頁
第1図 九州横断自動車道路線図.....	2
第2図 天國遺跡・夕月遺跡周辺地形図 (1/2,000)	6
第3図 天國遺跡全体図 (下層) (1/300)	8
第4図 南端トレンチ各壁土層実測図 (1/120・1/300)	9
第5図 東西各トレンチ土層実測図 (1/120)	10
第6図 1号住居跡実測図 (1/60)	12
第7図 1号住居跡出土縄文土器実測図① (1/3)	13
第8図 1号住居跡出土縄文土器実測図② (1/3)	14
第9図 4・5・7・8号土壙実測図 (1/30)	16
第10図 7号土壙出土縄文土器実測図 (1/3)	18
第11図 6・9・11号土壙実測図 (1/30)	20
第12図 9~11号土壙出土縄文土器実測図 (1/3)	21
第13図 10・12号土壙実測図 (1/30)	23
第14図 12・13号土壙出土縄文土器実測図 (1/3)	25
第15図 13号土壙実測図 (1/30)	26
第16図 14号土壙実測図 (1/30)	27
第17図 14号土壙出土縄文土器実測図 (1/3)	28
第18図 「土器3」一括出土縄文土器実測図 (1/3)	30
第19図 1号埋甕・「土器1~3」出土状態実測図 (1/20)	32
第20図 1号埋甕・「土器1」実測図 (1/4)	34
第21図 「土器2」実測図 (1/4・1/3)	36
第22図 下層1号溝土層実測図 (1/300・1/30)	37
第23図 包含層他出土押型文土器実測図①(1/3)	38
第24図 包含層他出土押型文土器実測図② (1/3)	40
第25図 包含層他出土縄文早・前期土器実測図① (1/3)	42
第26図 包含層他出土縄文早・前期土器実測図② (1/3)	44
第27図 包含層他出土轟式土器実測図① (1/3)	46
第28図 包含層他出土轟式土器実測図② (1/3)	48

第29図	包含層他出土葬式土器実測図③ (1/3)	49
第30図	包含層他出土葬式土器実測図④ (1/3)	50
第31図	包含層他出土葬式土器実測図⑤ (1/3)	52
第32図	包含層他出土葬式土器実測図⑥ (1/3)	54
第33図	包含層他出土葬式土器実測図⑦ (1/3)	55
第34図	包含層他出土葬式土器実測図⑧ (1/3)	56
第35図	包含層他出土葬式土器実測図⑨ (1/3)	58
第36図	包含層他出土葬式土器実測図⑩ (1/3)	60
第37図	包含層他出土葬式土器実測図⑪ (1/3)	62
第38図	包含層他出土葬式土器実測図⑫ (1/3)	64
第39図	包含層他出土曾畠式土器実測図① (1/3)	66
第40図	包含層他出土曾畠式土器実測図② (1/3)	68
第41図	包含層他出土曾畠式土器実測図③ (1/3)	69
第42図	包含層他出土「滑石無し」曾畠式土器実測図 (1/3)	70
第43図	包含層他出土網文後・晚期土器実測図① (1/3)	73
第44図	包含層他出土網文後・晚期土器実測図② (1/3)	74
第45図	包含層他出土網文後・晚期土器実測図③ (1/3)	76
第46図	磨製石斧実測図① (1/2)	80
第47図	磨製石斧実測図② (1/2)	81
第48図	磨製石斧実測図③ (1/2)	82
第49図	磨製石斧実測図④ (1/3)	83
第50図	打製石錐実測図 (実大)	84
第51図	打製石錐・石鏡・石核実測図 (実大)	87
第52図	スクレイバー・使用剝片実測図 (実大)	88
第53図	石匙等実測図 (2/3)	90
第54図	スクレイバー実測図 (2/3)	91
第55図	石錐・凹石・磨石実測図 (1/3)	93
第56図	磨石実測図 (1/3)	94
第57図	天園遺跡全体図 (上層) (1/300)	96
第58図	天園1号墳地山整形測量図 (1/200)	97
第59図	天園1号墳石室実測図① (1/60)	98
第60図	天園1号墳石室実測図② (1/60)	99
第61図	天園1号墳東側周溝断面実測図 (1/60)	100

第62図	1号墳出土鉄器実測図(1/2)	102
第63図	1号墳出土土器実測図(1/3)	103
第64図	天園2号墳地山整形測量図(1/200)	106
第65図	天園2号墳石室実測図①(第1床面)(1/60)	107
第66図	天園2号墳石室実測図②(上面鏡・第2床面)(1/60)	108
第67図	2号墳出土耳環・玉実測図(実大)	110
第68図	2号墳出土鉄器実測図(1/2)	111
第69図	2号墳出土土器実測図(1/3)	112
第70図	天園3号墳実測図(1/60)	114
第71図	3号墳付近出土土器実測図(1/3)	115
第72図	1~3号土墳実測図(1/30)	116
第73図	2・3号土墳出土土器実測図(1/3)	117
第74図	1号火葬墓実測図(1/30)	118
第75図	1号溝出土銅鏡拓影(実大)	119
第76図	包含層他出土古墳時代以降土器実測図①(1/3)	120
第77図	包含層他出土古墳時代以降土器実測図②(1/3)	122
第78図	包含層他出土土錐等実測図(1/2)	125
第79図	縄文前期の遺構・遺物集中部位(1/300)	128
第80図	天園遺跡出土前期土器共伴關係図(1/6)	133
第81図	柿原野田遺跡(1~18), 天園遺跡(19~24)出土関連資料(1/6)	134

夕月遺跡

第82図	遺構配置図(1/200)	折込138-139
第83図	土壙実測図(1/40)	140
第84図	石器・土製品実測図(1/2・1/3)	141
第85図	縄文土器・須恵器実測図(1/3)	141
第86図	1・2号溝状遺構実測図(1/60)	142
第87図	発掘風景	143

上池田遺跡

第88図	上池田遺跡周辺地形図(1/1,000)	145
------	---------------------------	-----

第89図	発掘風景	148
第90図	上池田遺跡と周辺の縄文・弥生時代遺跡分布図 (1/25,000)	149
第91図	1・2号住居跡実測図 (1/60)	150
第92図	住居跡出土土器実測図 1 (1/3)	151
第93図	住居跡・土壤出土石器実測図 1 (1/2)	152
第94図	3号住居跡実測図 (1/60)	152
第95図	4~6号住居跡実測図 (1/60)	153
第96図	住居跡・土壤出土石器実測図 2 (1/3)	154
第97図	住居跡出土土器実測図 2 (1/3)	155
第98図	1~4号土壤実測図 (1/40)	158
第99図	土壤出土土器実測図 1 (1/3)	159
第100図	5~7号土壤実測図 (1/40)	160
第101図	8~12号土壤実測図 (1/40)	162
第102図	13~17号土壤実測図 (1/40)	164
第103図	18~19号土壤実測図 (1/40)	165
第104図	土壤出土土器実測図 2 (1/3)	166
第105図	20~24号土壤実測図 (1/40)	167
第106図	土壤出土土器実測図 3 (1/3)	168
第107図	25~30号土壤実測図 (1/40)	170
第108図	31~35号土壤実測図 (1/40)	172
第109図	土壤出土土器実測図 4 (1/3)	173
第110図	36~41号土壤実測図 (1/40)	174
第111図	42~44号土壤実測図 (1/40)	175
第112図	45~48号土壤実測図 (1/40)	177
第113図	土壤出土石器実測図 5 (1/3)	178
第114図	土壤出土石器実測図 6 (1/3)	179
第115図	土壤出土石器実測図 (1/3)	179
第116図	49号土壤実測図 (1/40)	180
第117図	縄文・弥生時代遺構配置図及びグリッド設定図 (1/500)	181
第118図	第2トレンチ土層図 (1/60)	182
第119図	包含層出土縄文早期土器実測図 (1/3)	183
第120図	包含層出土縄文中・後期土器実測図 (1/3)	184
第121図	包含層出土縄文後期土器実測図 1 (1/3)	186

第122図	包含層出土縄文後期土器実測図2 (1/3)	187
第123図	包含層出土縄文晚期土器実測図1 (1/3)	188
第124図	包含層出土縄文晚期土器実測図2 (1/3)	189
第125図	包含層出土縄文晚期土器実測図3 (1/3)	190
第126図	包含層出土縄文晚期土器実測図4 (1/3)	191
第127図	包含層出土弥生土器実測図1 (1/3)	192
第128図	包含層出土弥生土器実測図2 (1/3)	193
第129図	包含層出土石器実測図1 (1/2)	194
第130図	包含層出土石器実測図2 (1/3)	195
第131図	包含層出土石器実測図3 (1/3)	196
第132図	包含層出土石器実測図4 (1/3)	197
第133図	包含層出土石器実測図5 (1/3)	198
第134図	1・2号竪穴実測図 (1/60)	200
第135図	竪穴・包含層出土土製品実測図 (1/2)	200
第136図	竪穴出土土器実測図1 (1/3)	201
第137図	竪穴出土土器実測図2 (1/3)	202
第138図	3・4号竪穴実測図 (1/60)	203
第139図	竪穴出土土器実測図3 (1/3)	204
第140図	土壤出土土師器実測図 (1/3)	205
第141図	土壤墓実測図 (1/30)	206
第142図	土壤墓出土土師器実測図 (1/3)	207
第143図	包含層出土土師器実測図 (1/3)	209
第144図	包含層出土土師器・須恵器・瓦・磁器実測図 (1/3)	210

付 図 1 上池田遺跡遺構配置図 (1/200)

I 天園遺跡の調査

1 調査の経過

天國遺跡は、九州横断自動車道関係の第46地点 (STA 267+20~269) として登録されていた地点で、杷木インターチェンジの西側にあたる。昭和61年度に実施した試掘調査 (計300m²) の結果により、丘陵上面と西側斜面に縄文時代等の集落の存在が予想された。さらに踏査により、西側斜面に古墳の石室部が一部露出しているのが発見され、幾つかの古墳の存在も想定された。

調査にあたり、西側斜面の範囲を天國遺跡、尾根上面を夕月遺跡と別称した。さらに、西側の谷を挟んで対岸の部分は、縄文時代～古墳時代にかけての包含層・竪穴式石室等が調査されており、笠限遺跡として報告されるが、これら3者は隣接したもので、立地の違いにより、各時代の遺構・遺物の違いが認められるものである。

調査の工程は、天國遺跡東側の農道のためのC-BOXの建設、および西側谷の小川が天國遺跡を南北に縦断する形で水路変更される工事を急ぐことから、天國遺跡の発掘調査が先行して実施された。

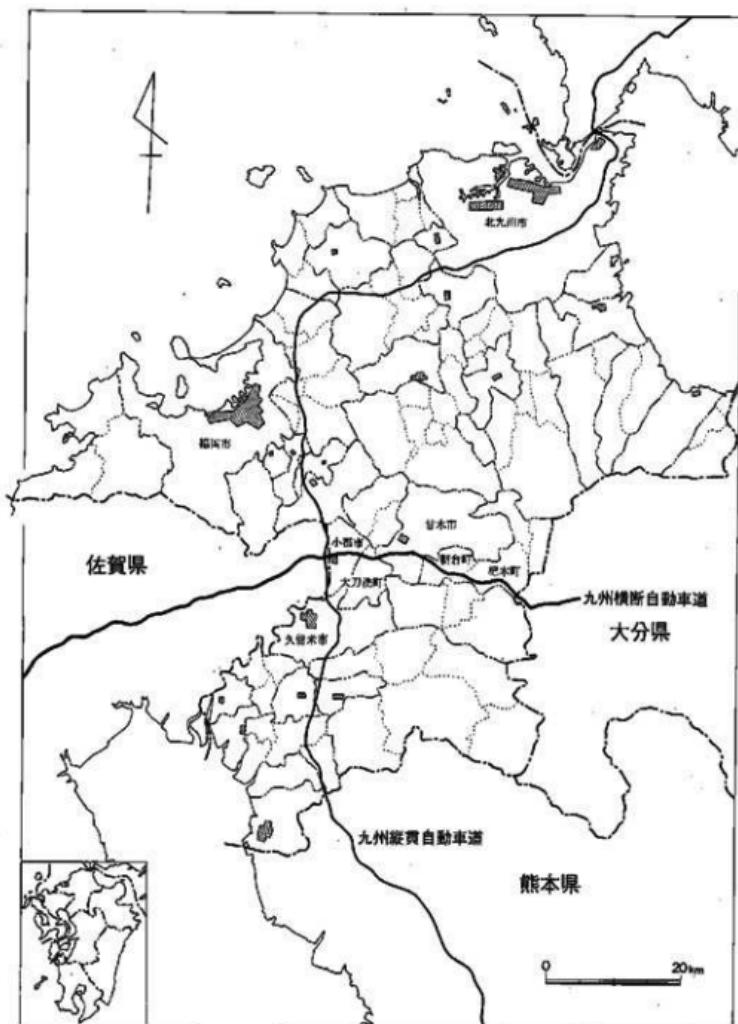
調査は、昭和62年11月13日から開始し、厳寒期の調査となつたが、終了したのは翌昭和63年3月1日であった。

天國遺跡内での調査順序としては、まず、遺跡自体が丘陵西側斜面に位置し、遺跡の西端辺は急な崖となって谷川に落ちていたため、土捨て場の確保のために、谷下の小さな畠部分の縁に堅牢な土留め作業を行つた。次に、遺跡内の上段中央に位置する1号墳の調査にかかり、墳丘が完全に削平されて石室のみ残った状況を確認した。

同時に、南端付近に広く遺物包含層が認められたため、南端辺沿いから西辺にかけてトレンチを掘削し、包含層の状況を確認した。その結果、南西隅側に強く傾斜して、厚く縄文早期・縄文前期・古墳後期・平安末期前後の遺物が多量に混在する包含層が確認された。特に縄文前期の藤B式・曾畠式土器の出土は予想以上のもので、同遺跡内での住居跡等の遺構の存在が期待されることとなつた。

次に、遺跡内西側下段の調査を行い、古墳～平安期の遺構を発掘した。うち、北半についてでは遺構が稀薄で、縄文時代包含層も認められなかつた。それで、上段の2号墳付近に設営していたテント等を、下段の北側に移動させた。

最終的に、南半部分の縄文包含層の掘り下げと、2・3号墳の調査を併行して行い、縄文前期の竪穴住居跡や土壙、多量の遺物を得ることができた。この時期の遺物としては、北部九州域で最大量の出土であり、極めて重要な遺跡と評価される。



第 1 図 九州横断自動車道路線図

調査中は、寒風の吹きつける現場であったが、最後まで発掘作業に御協力頂いた地元の方々には、心から感謝申し上げたい。また、様々にお世話願った杷木町教育委員会並びに町建設課、道路公団の諸氏にも深く御礼申し上げたい。

昭和62年度の調査関係者と、平成7年度の整理関係者は下記のとおりである。

日本道路公団福岡建設局

	昭和62年度	平成7年度
局長	杉田 美昭	倉沢 真也
次長	吉岡 康行	飛田 孝
総務部長	安元 富次	佐野 博志
管理課長	副島 紀昭	三根 敬正
管理課長代理	三野 徳博	前田 正信

日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所

所長	風間 徹
副所長	西田 功
副所長(技術)	友田 義則
庶務課長	徳永 登
用地課長	松尾 伸男
工務課長	後藤二郎彦
朝倉工事長	上野 满
杷木工事長	小沢 公共

福岡県教育委員会

総括	昭和62年度	平成7年度
教育長	武井 宏	光安 常喜
教育次長	大鶴 英雄	松枝 功
指導第二部長	大平 岩男	丸林 茂夫
文化課長	窪田 康徳	松尾 正俊
文化課参事		柳田 康雄
文化課長補佐	平 聖峰	元永 浩士
文化課長技術補佐	宮小路賀宏	
文化課参事補佐	中矢 真人	角 伸幸

文化課参事補佐	加藤 俊一	井上 裕弘
	栗原 和彦	橋口 達也
	大塚 健	川述 昭人
	柳田 康雄	児玉 真一
		新原 正典
		磯村 幸男
		木下 修
		中間 研志
		小池 史哲

庶務・会計

文化課庶務係長	加藤 俊一	管理係長	柴田 恭郎
文化課事務主査	竹内 洋征		
文化課主任主事	沢田 俊夫		東 健二

調査

文化課技術主査	井上 裕弘	(現文化課参事補佐) (天國遺跡調査担当)
文化課技術主査	木下 修	(現文化課参事補佐)
文化課技術主査	中間 研志	(現文化課参事補佐) (天國遺跡調査担当)
文化課技術主査	佐々木隆彦	(現九州歴史資料館参事補佐)
文化課主任技師	伊崎 俊秋	(現甘木歴史資料館副館長)
文化課主任技師	小田 和利	(現九州歴史資料館主任技師)
文化課文化財専門員	木村幾多郎	(現大分市歴史資料館長)
文化課文化財専門員	日高 正幸	(現小石原村教育委員会) (天國遺跡調査担当)
文化課調査補助員	高田 一弘	
文化課調査補助員	武田 光正	(現達賀町教育委員会)
文化課調査補助員	佐土原逸男	
文化課整理指導員	岩漸 正信	(遺物整理担当)
文化課整理指導員	平田 春美	(遺物実測担当)
文化課整理指導員	豊福 弥生	(圓面裂図担当)
文化課整理指導員	北岡 伸一	(写真担当)

発掘作業員

井上 武雄	小川 人己	友納 浩	林 ツユカ
奈須 道子	佐藤扶美子	時川千代子	塙本トシ枝
伊藤 夏子	小川 貞子	藤本 公子	野田 ミエ

山本フミ子	伊藤ミネヨ	梶原ハヤ子	田中サツキ
原田 ヨネ	井手 照子	山下けざ江	山本サチヨ
青柳 美幸	藤本 和子	椎村スズ子	井手 和枝
梶原マツエ	梶原アヤ子		

2 位置と環境

天園遺跡は、福岡県朝倉郡杷木町大字古賀字天園1486, 1487-1・2, 1488-1, 1492番地に位置する。(位置については第82図参照)

朝倉山塊から派生する八ツ手状の丘陵が南方へ延びており、そのひとつ狭い尾根の西斜面に位置する。尾根先端から300m程奥に入った場所で、決して良好な占地とは言えない。

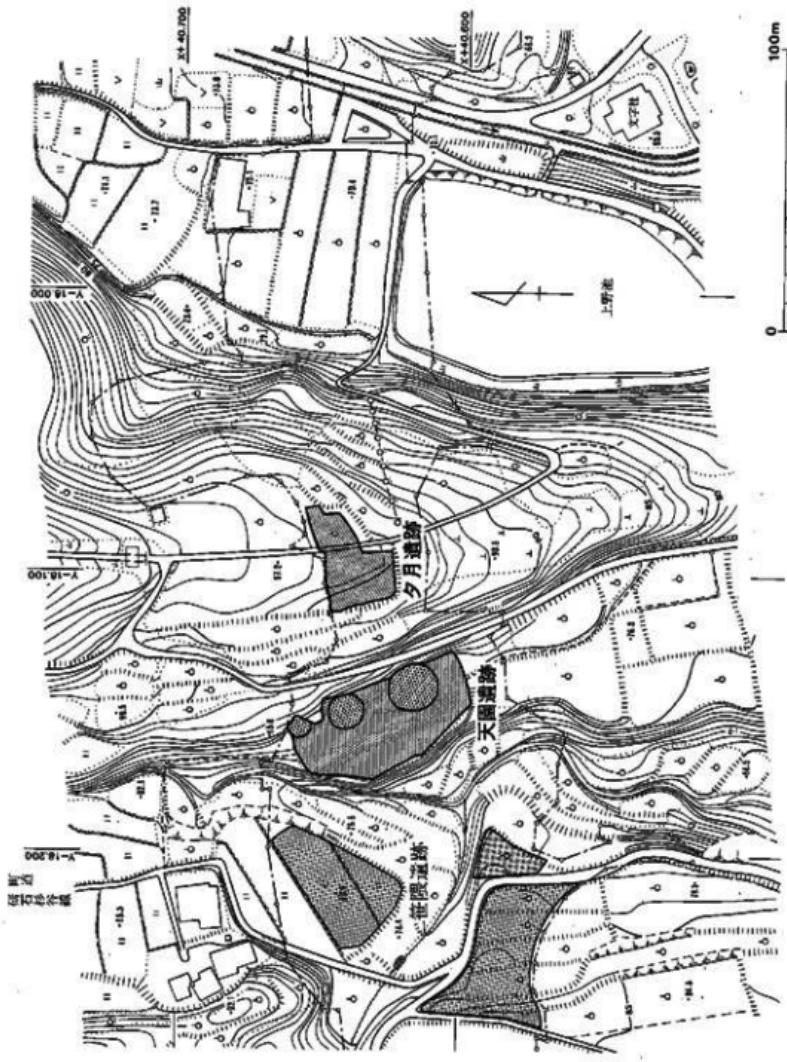
現在では、柿やぶどう畑に開かれているが、往時は谷奥のとても便利な場所とは考えられない土地であったろう。遺跡の東側尾根上には現代の墓地がみられ、その点からは、天園1-3号墳の古墳群が作られたのも、奥津城としての遺地として共通性が認められる。

北緯33°22', 東経130°48'18"に位置する当遺跡は、既に福岡県遺跡等分布地図(1978, 福岡県教育委員会)に、580051夕月遺跡(縄文等散布地、黒曜石・土器片等出土)として登録されている。この丘陵先端付近には、土器散布地が当時より知られており、発掘調査等はなされていなかったが、集落遺跡等がかなり集中する地区のようである。

古墳については、当遺跡から東南方向500mの丘陵上に、径8mの小円墳が2基現存しており、さらに南西方向500mの丘陵先端部にも揚天溝宮古墳(580058)という円墳が残っているが、既知のものの分布状況は群集して大きく古墳群を形成するものとは言えなかった。しかし、今回の横断自動車道建設に伴った発掘調査により、西隣の佐隈遺跡では堅穴式石室等が発見され、さらに西方の大谷遺跡でも横穴式石室の古墳群が、かなり高い丘陵上にて調査されており、東方でも高地性集落として著名な西ノ迫遺跡内に終末期の小横穴式石室が見つかっている。このように、横断自動車道路線自体が、杷木町内では、尾根の付け根に近い高位段丘付近を通っているにも関わらず、古墳群が各地点で調査されており、従来尾根先端上ののみに点的に知られていたことからすると、町内の各尾根の全体に、かなりの数で古墳が存在することが充分推量できる。

天園遺跡は、標高85~78mの丘陵西斜面の小平坦地に存在する。西側は5mの段差で崖となり、小谷川に面している。その西側谷は、現在数枚の可耕水田が拓かれているが、小さな棚田

第2図 天園道路・夕月道路周辺地形図 (1/2,000)



状になっており、往時から生産地として利用されていたとは思われない。

このような高位段丘に相当すると思われる立地において、縄文時代の遺跡が当地域においてかなりの数発見されるようになった。西隣の佐賀遺跡では、唐ノ神式土器から晩期まで出土しており、西方の朝倉町では原の東遺跡、金場遺跡、長島遺跡、上ノ宿遺跡等で多くの縄文時代各時期の遺構・遺物が発見されている。さらに、東隣の把木インターチェンジ内のクリナラ遺跡では、晩期黒川式期の大量の遺物がみられ、谷斜面の大遺跡となっている。このように、かなり谷を湖った高位地に、単なる一時的キャンプ地とは思えないような、まとまった量の縄文時代遺構・遺物がみられる状況は重要である。

縄文早期押型文を中心とする時期には、筑後川氾濫原に面した低位段丘上に、小規模ながら数多くの遺跡が展開しており、これらに対比される高位段丘上の上記大遺跡との関連が強く注目される。

縄文中～後期の大遺跡は発見されていないが、晩期の遺跡の配置状況は、中小遺跡が低位段丘先端～小河川に面した各段丘上に散在し、大規模なものは高位段丘上或は山麓から少し登った谷部に位置するものが多い。この状況は、早期の遺跡の占地状況と概略似ている。

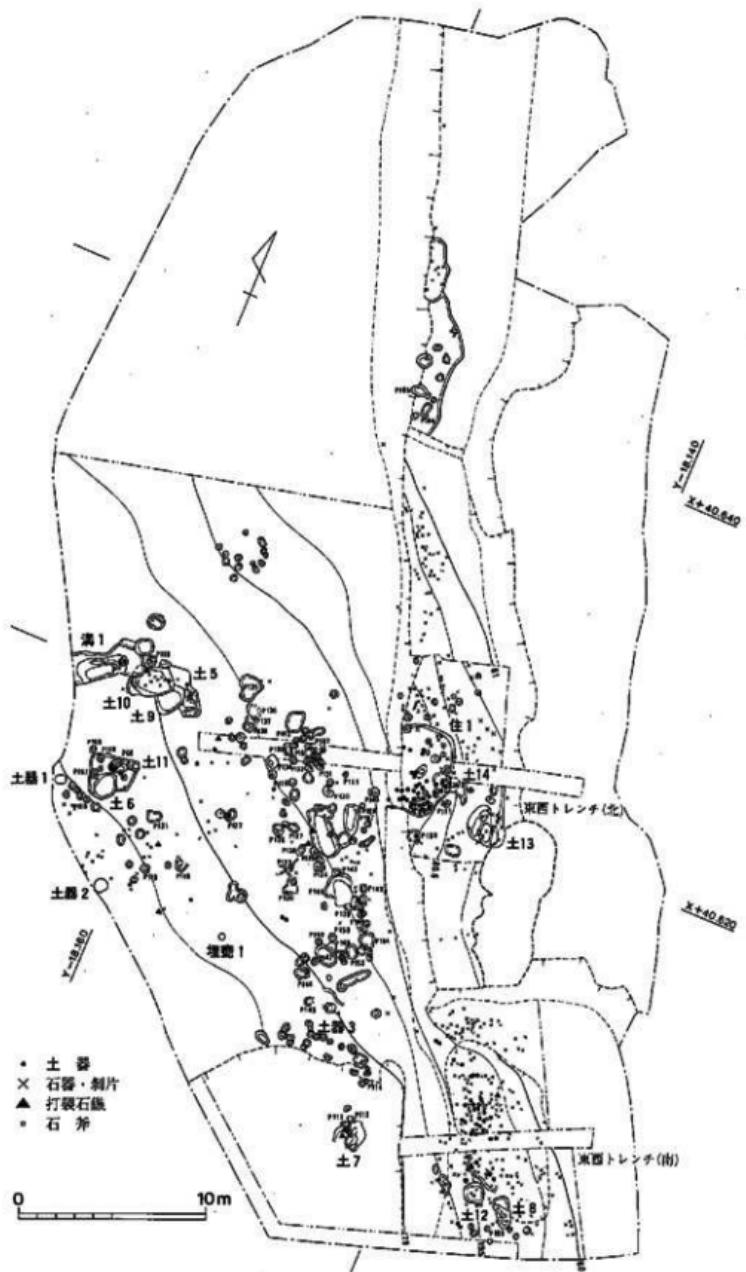
今回の天罰遺跡報告の中では縄文前期の多量の出土品が報告されるが、北部九州域でも屈指の量を誇っている。先の遺跡立地の問題については、横断道報告書刊行がすべて完了した時点で、改めて総合的に検討しなければならないだろう。

3 縄文時代の遺構と遺物

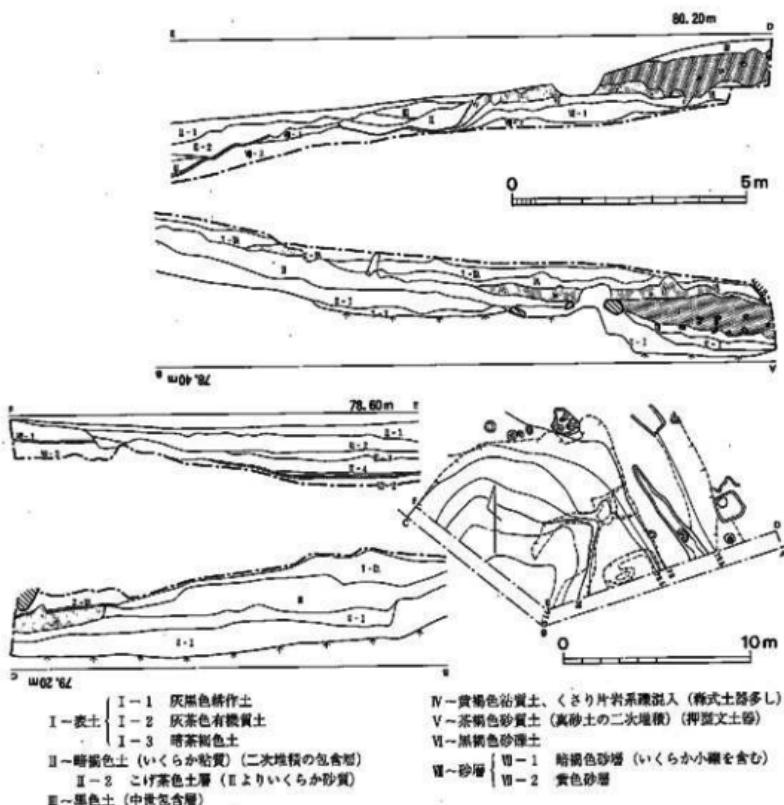
(1) 調査の概要

本遺跡では、調査順序として、1号墳とその南側及び西側下段の古墳～歴史時代の土塚墓・火葬墓・小ピット群・包含層の調査をまず実施した。その過程ですでに縄文前期の曾畠式土器・轟式土器・磨製石斧・打製石錐などが、各遺構内に混入したり、包含層上面に顔を見せていた。その時点で、縄文包含層や下層遺構の存在を推定した。

トレンチ設定 そこで、包含層の層位確認と深さを知るために、地形的に最も下がった位置にあたる南西コーナーにトレンチを設定した。(第4図参照) 深さ1.2～2mほど掘り下げた下から、砂・砂疊層があらわれ、高位段丘の基盤層と判断した。更に、調査後半にあたり、1号墳の南側下段に東西方向に縄文包含層の中央を切るようにトレンチを入れた。「東西トレンチ



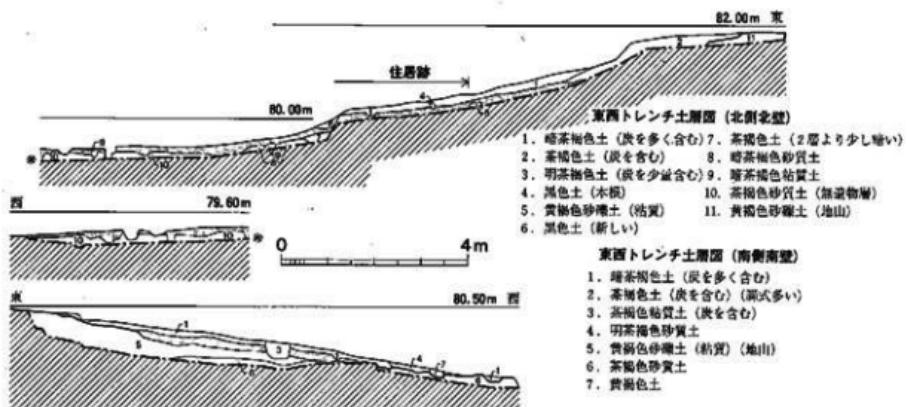
第3図 天國遺跡全体図（下層）(1/300)



第4図 南端トレンチ各壁土層実測図 (1/120・1/300)

(南側)」と称して包含層の状況と下層遺構の有無を確認した。また、1号墳北西側からその下段にかけての縄文包含層を確認するために「東西トレンチ(北側)」を設定した。

土層 第4図の南端トレンチにおいては、I層の表土の下に、暗褐色の遺物を多量含む包含層がみられ、II-1～II-4層まで分けて、遺物の状況を観察したが、いずれの層からも縄文早・前期～平安期までの遺物が混入しており、二次堆積の包含層と判断した。その下にIII層として黒色土層が東寄りの部位に形成され、平安末を中心とする時期の包含層となっている。次のIV層は腐り縄混入の黄褐色粘質土で、縄式土器が多く含み、古墳～歴史時代の遺物を全く含まないことから、縄文前期の単純層と考えられる。このIV層は、東西トレンチ(南側)での第2層、東西トレンチ(北側)の第3層に相当する。南端トレンチの第V層は、真砂土の二次堆積土の茶褐色砂質土で、押型文土器を若干含むが、20cm前後と薄い。これ以下のVI～VII層は砂疊層で、



第5図 東西各トレンチ土層実測図 (1/120)

砂層や酸化鉄でゴチゴチに固まつた境界層などが挟まっており、高位段丘形成層をなしている。なお、本遺跡からは縄文後～晩期の遺物もいくらか出土したが、土層としては上記のトレンチ断面の中では確認できなかった。

遺物取上げ 調査初期の歴史時代遺構検出作業時や、古墳掘り下げ中の埋土中から縄文土器等が出土していたので、縄文土器・石器については、基本的に1/20の実測図中に位置と高さを記入し、No. 1から番号を付けて取り上げた。さらに、南西隅付近は南端トレンチにより確認したとうり、大きな落ち込み部になっており、II層の二次堆積層が主体となっていたため、この南西端包含層のものは層位別に取り上げた。また、古墳～歴史時代の各遺構に混入して出土した縄文土器については、その遺構名で取り上げている。さらに、明らかな縄文時代遺構（住居跡、土壙等）出土のものは、できるだけその遺構毎に図面の中に出土位置を記入し、番号をして取り上げた。第3図の中で各印を付けてドットを落としたものは、上記の取上げ法のうち、最初のNo.を付けたものと、最後の各遺構内での番号を付したものについてのみの分布状況であり、南西端落込み部のものや他時期遺構混入のものについてはドットしていない。

検出遺構 本遺跡内で検出した縄文時代遺構は第3図に示した状況のとうりであるが、名称の付け方として若干記録しておきたい。遺構検出段階で、包含層中の一括土器と誤認して「土器1～3」としたが、うち「土器1・2」は横位近くに埋められており、埋甕或は甕棺と称してよい部類である。「土器3」は、掘り上げた結果は縄文前期の不整形土壙の形状となり、土器も完形品ではなく、土器片廢棄の状況であった。以上の名称については、遺物整理上の混乱を避け

るために、あえてそのままにしておきたい。本遺跡検出の縄文時代遺構は以下のとおりである。

縄文時代早期	包含層（南端トレンチにて一部確認）
前期	堅穴住居跡 1軒
	土壙 8基（「土器3」も含む）
	溝状遺構 1条
縄文時代晚期	埋壺 3基（「土器1・2」を含む）
	土壙 3基
縄文時代の小ピット	多数（詳細な時期不明）

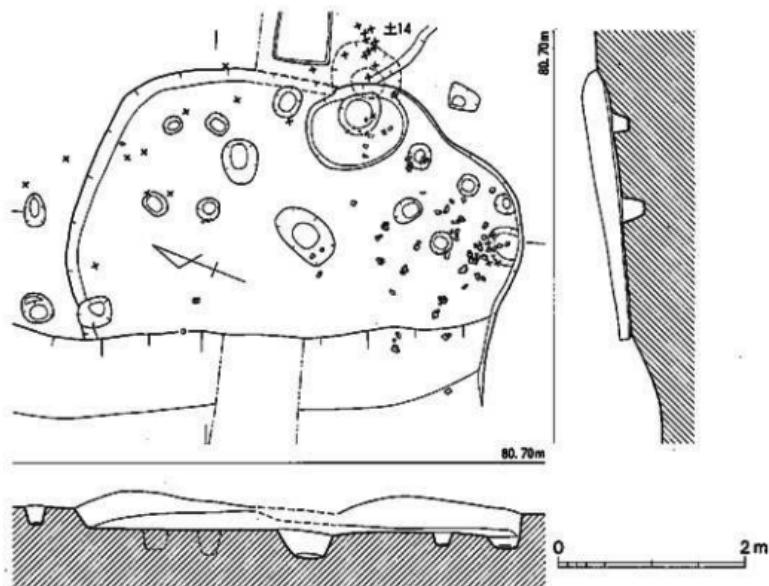
(2) 堅穴住居跡

1号堅穴住居跡（第6図、図版2・3）

遺跡の東半上段面のはば中央に位置する。西半側が段落ちによって削られており、全体の平面形は確認できないが、隅丸長方形ないし不整橢円形プランをなすと思われる。南北径4.6m、東西は4m弱になるかと推定される。現状での深さは30~10cmで、床面は東西方向では西側へかなり傾斜しており、南北方向では中央付近から南方へわずかに傾斜している。床面のはば中央には72×43cmの橢円形の穴があり、埋土には炭・焼土粒が混入しており、屋内中央炉と考えられる。ただし、深さが30cmほどと深めで、同時代の他例からみて、若干疑問も残る。床面には壁からいくらか離れたあたりに小ピットがめぐり、全体としては13個が検出された。これらからみて、主柱穴配置構造の家屋ではなく、壁際小柱間を結束した構造のものであったと考えられる。住居内埋土は、第5図土層図中に示したように、炭を少量含む明茶褐色土で、地山は粘質の黄褐色砂礫土である。この東西トレンチ（北側）の土層断面を観察すると、この住居埋土或は縄文前期包含層としての第3層は、住居以西の下段までずっと連続してみられ、傾斜に則して堆積したものに見える。この点からは、この住居が、単なる斜面の窪地である可能性も考えられ、住居そのものの存在にも疑問が残る。

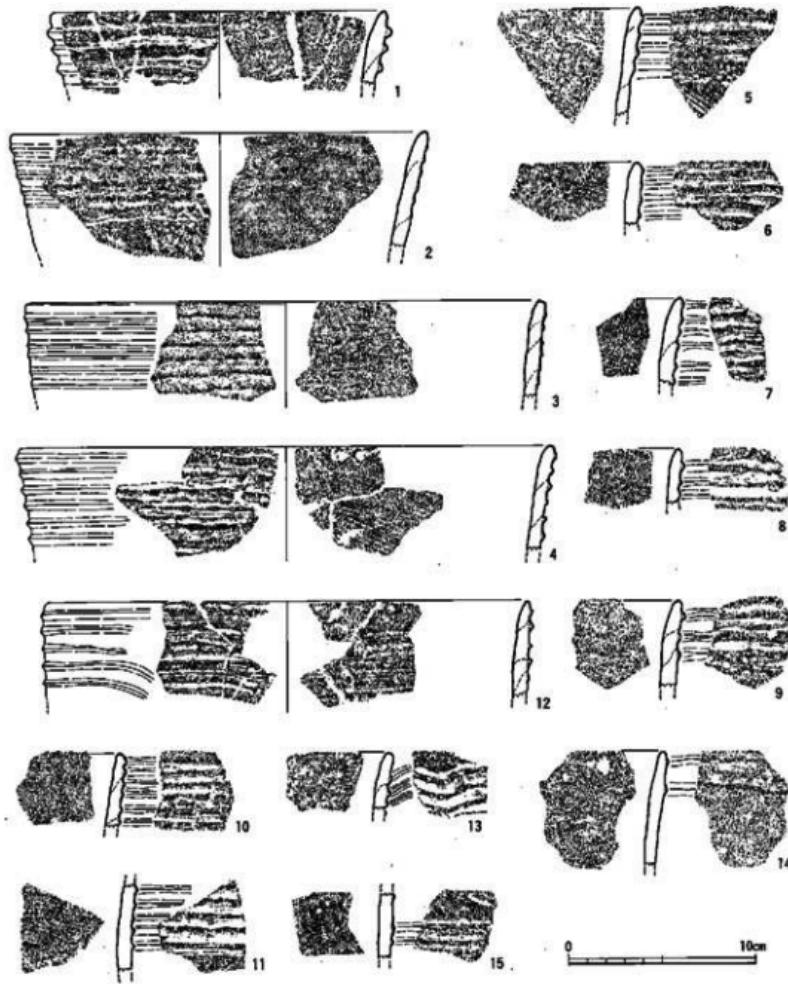
出土遺物（第7・8・51・52図）

轟B式土器（第7・8図1~19）外面口縁下の隆線が細身で低く密に接している類（2・3・5~7）、隆線は細身でシャープだが隆線間に間隔を持っているもの（4・8・10・11・14）、隆線が高くやや大きめで断面カマボコ形に近くなるもの（1・9）、隆線帯が曲線を描く類（12・13・15）などに小分類できる。1は、復原口径18cmで、3条の隆線を持つ小型類である。内面の調整は不明。胎土に粗・細砂粒を多く含み、焼成良好で内外面ともに茶色をなす。2は、復原口径22.5cmで、5条の隆線を持つ小型類である。内面上半は横位擦過状で、下半は丁寧にナデている。隆線は殆ど磨滅して低くなってしまっており、以下の外面はナデしている。胎土に細砂粒を多く含み、焼成やや良好で、内面は灰茶~暗黄褐色、外表面はこげ茶色をなす。3は、復原口径



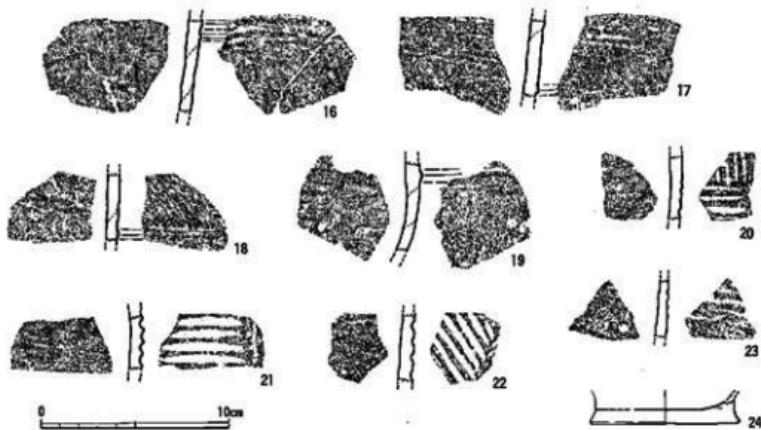
第 6 図 1号住居跡実測図 (1/60)

28cmで、連接する6条の細身で低くわりとシャープな隆線を持つ中型類である。口唇上面が平坦面をなし、内面は条痕の上をナデている。胎土に粗・細砂粒が多く含み、焼成やや良好で、外面は黒褐色、内面は暗茶一黒色をなす。4は、復原口径28.5cmで、6条の細身の隆線を持つ中型類である。内面上半はナデ、下半は斜位条痕が残る。胎土に細砂粒が多く含み、焼成やや不良で、内面は暗黄灰褐色、外面はこげ茶色をなす。5は、外面にやや幅広いが低めの4条の隆線を巡らす。内面は器表剥落しているがナデか。外面の隆線以下は斜位条痕を施す。胎土は細砂粒をかなり含み、焼成不良で、内面は暗茶褐色、外面は黒色をなす。6は、外面に4条以上の隆線を巡らし、内面はナデしている。胎土に細砂粒が多く含み、焼成やや不良で、外面はこげ茶色、内面は暗黄一暗褐色をなす。7は外面に6条の連接する隆線を巡らす。内面はナデ、胎土に細砂粒をかなり含み、焼成不良で、内面は黄灰色、外面は暗褐色をなす。8は、外面に小さめの断面三角形の隆線を3条以上付け、内面はナデしている。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で内面は黒色、外面はこげ茶色をなす。9は、断面カマボコ形の隆線3条を付け、内面はナデ、胎土に細砂粒を多く含む。焼成良好で内外面ともに赤茶褐色をなす。10は、外面に6条の細身ではあるがシャープではない隆線を付ける。内面は丁寧にナデしており、胎土に細砂粒



第 7 図 1号住居跡出土縄文土器実測図① (1/3)

を多く含み、焼成良好で内面は暗黄茶色、外面は茶褐色をなす。11は、外面に細身でかなりシャープな隆線を5条以上付け、内面はナデている。胎土に細砂粒を多く含み、焼成やや良好で、



第 8 図 1号住居跡出土縄文土器実測図② (1/3)

外面はこげ茶色、内面は灰褐色をなす。12は復原口径25.8cmの中型品で、曲線文類となる。外面にわりとシャープな5条の隆線を付けるが、最上端の1条が口縁と平行となり、以下の4条は下方へ垂れており、第35図—110のような重弧文的な曲線文を構成する類と思われる。内面には横位条痕を施し、胎土に粗・細砂粒を多く含み、焼成不良で内面は暗黄褐～暗褐色、外面は黒褐色をなす。13も曲線文類だが、3条以上の隆線を波状に施している。内面はナデで、胎土に粗砂粒をいくらか含み、焼成不良で、内面は暗茶色、外面は黒色をなす。14は外面に2条の隆線を付けるのみのもので、外面はナデでかなり磨滅している。内面はやや雜な横ナデで、胎土に細砂粒を多く含み、焼成不良で、内面は黄褐色、外面は暗茶褐色をなす。15は、隆線文帯下端に2条の平行隆線を付け、その上が弧状の曲線文となる類である。内面は丁寧なナデ、胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で、内面はこげ茶色、外面は暗褐色をなす。16は、2条以上の平行隆線を巡らす類であるが、文様形態は不明。内面は丁寧なナデ、外面もナデでいる。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成不良で、内外面ともにこげ茶色をなす。17は、胴部中位の1条の隆線付近であるが、内外面ともに横位条痕の上をナデでいる。胎土に細砂粒を多く含み、焼成やや良好で内面は暗黄褐色、外面は茶褐色をなす。18も胴部中位片で、内面はナデ、外面は斜位条痕のままとなる。胎土に細砂粒を多く含み、焼成不良で、内面はこげ茶色、外面は黒色をなす。19は、胴部下半片で、丸底状の底部へと続いている。内面は横位条痕をナデ消しており、外面はナデでいる。細砂粒を多く含み、焼成良好で、内面は暗褐色、外面は暗茶褐色をなす。

曾畠式土器（第8図20～23）20は、平行凹線を縱横に施文する脛部片で、内面は横位ナデを施す。胎土に滑石を多く含み、焼成良好で、内面は暗黄褐色、外面は茶褐色をなす。21は、やや太めの凹線を縱横に組み合わせる文様で、胎土に滑石を多く含む。内面は横ナデ調整を施し、焼成良好で、内面は灰黒色、外面は茶灰色をなす。22は、平行四線を斜位に施すもので、内面は横ナデ、胎土に滑石を多く含む。焼成良好で、内面は茶色、外面は暗茶褐色をなす。23は、内外面ともにかなり磨滅するが、外面には横位の平行凹線文を施す。滑石を多く含み、焼成不良で、内面は肌色、外面は暗黄褐色をなす。

底部（第8図24）復原底径8cmの薄手の平底片である。形態的に後～晩期の可能性を持ち、混入品かと思われるが、とりあえず住居内出土ということで報告しておく。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で、内面は暗褐色、外面は赤茶褐色をなす。器表は剥落しており、調整は不明である。

尖頭器状石器（第51図31）横剥ぎを主とする残核に近い角錐状品の先端付近を簡単に調整し、片側刃に押圧剝離による細調整を難に施したものである。裏面はガタガタで、尖頭器的剝離状況ではなく、工具的剥突具と考えられる。長さ5.1cm、幅2.2cm、厚さ1.3cm、重さ8.2gとなる。漆黒色で小さな不純物を幾らか含む黒曜石製で、見かけ上、断面は三稜的になる。

スクレイパー（第52図40）白灰色に著しく風化した安山岩製で、長さ2.7cm、幅5cm、厚さ0.8cm、現存重量10.5gとなる。横長剥片の片側刃と下縁刃に細調整を表裏から施したもの。

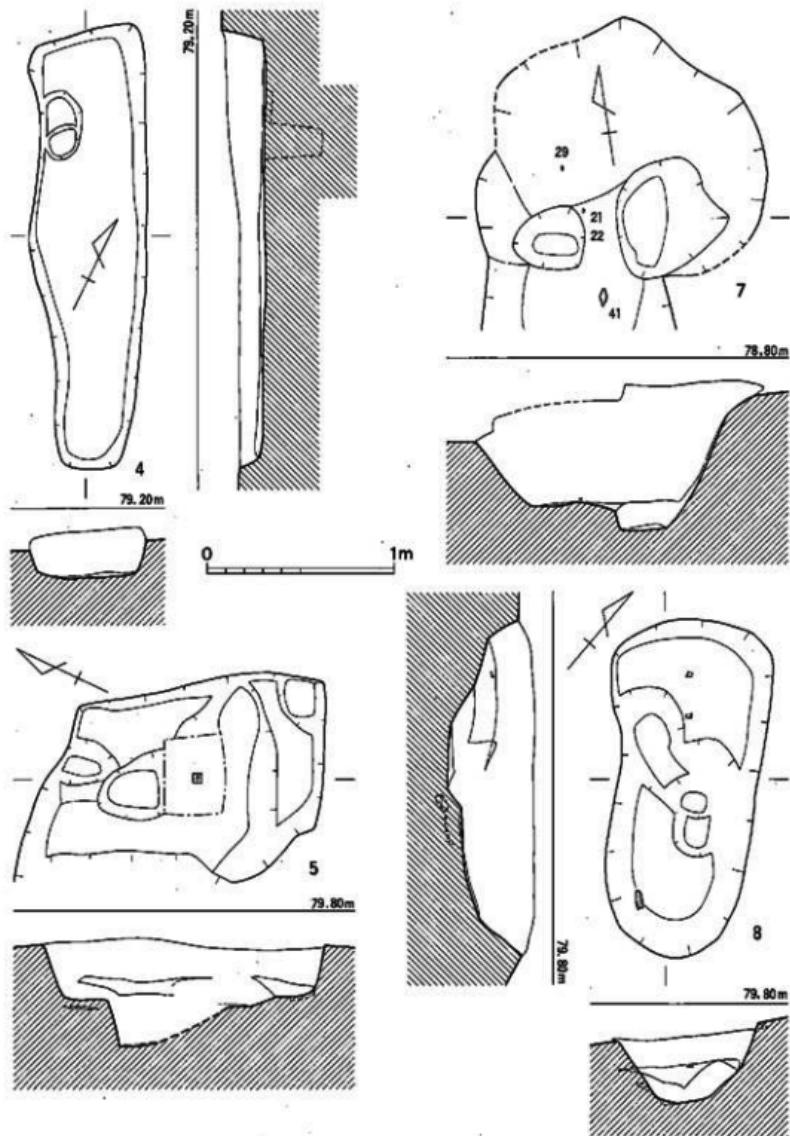
以上の1号住居跡出土の遺物は、隆線が太く間隔があいた類は無く、典型的轟B式土器深鉢が主体をなし、重弧状や波状の曲線文類も含まれている。滑石を含む曾畠式土器も量は少いが共伴している。石器も横型のスクレイパーや、三稜的様相を残す剥突具など、縄文時代前期轟B式典型期の特徴を良く示している。

(3) 土 壤

5号土壤（第9図、図版6・7）

遺跡の西側下段中央の西端寄りに位置する。1号溝、9・10号土壤と連続して造構が重複しているが、その東端にあたる。出土遺物が無く、9号土壤との切り合いも明確ではないが、掘り上げ後の状況からみて、本来9号土壤に切られていたものと思われる。南北にやや長めの角張った不整長方形プランをなし、150×120cmとなる。深さは57cmで、底面は中途にテラスやピットを有する段状となる。性格不明の造構と言わざるを得ない。時期は、9・10号土壤等からみて、縄文後～晩期の可能性も考えられる。

6号土壤（第11図、図版8）



第9図 4・5・7・8号土壤実測図 (1/30)

遺跡西辺近くの中央付近に位置する不整円形土壙である。11号土壙を切っており、縄文後期末～晩期の可能性がある。東西幅150cm、南北が160cmで、深さ35cmとなる。西側にテラスを持ち、底面は凹凸がかなりみられる。出土遺物のうち図示できるものは無いが、縄文後～晩期の性格不明土壙であろう。

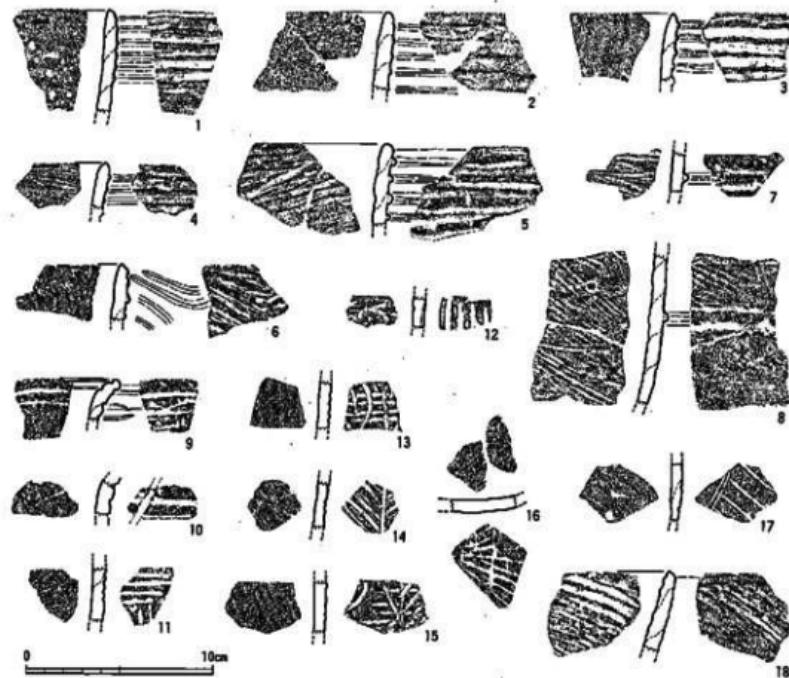
7号土壙（第9図、図版9）

遺跡の南端近くに、古墳時代～中世の遺物包含層である西南端包含層の落ち込みが認められるが、その傾斜面にて検出されたものである。よって、南側の斜面下側の土壙上端ラインは、下方に流れ削平されてしまっている。東西155cm、南北140cm前後の不整椭円形土壙で、壁は全体に大きく傾斜を持ち、底面は小さく、両端に窪みが2ヶ所みられる。深さ78cmで、埋土中から多量の土器・石器が出土した。

出土遺物（第10・50・51・53・54図）

縄B式土器（第10図1～8）1は、極めてシャープで細身の隆線を6条付ける類で、内面は丁寧な横ナデを施している。胎土に粗・細砂粒をいくらか含み、焼成やや良好で、内面は黒一灰色、外面は黒色をなす。2は、細身で低い隆線を5条、間隔を置いて巡らせており、内面は丁寧にナデしている。胎土に粗砂粒を僅かに含み、焼成良好で、内面は淡褐色、外面は黒褐色をなす。3は、小さいが完全に断面カマボコ形の隆線4条以上を付ける類で、内面は丁寧にナデしている。胎土に細砂粒をかなり含み、焼成良好で内外面ともに淡褐色をなす。4は、細身で極めてシャープな隆線3条以上を付け、内面には横位条痕を残す。胎土精良で、焼成良好、内外面ともに暗褐色をなす。5は、外面に高いカマボコ形の隆線を4条付ける類で、内面は横位条痕を残したままである。胎土に粗・細砂粒をかなり含み、焼成不良で、外面は黒色、内面は灰黒色をなす。6は、4条の隆線がすべて曲線となる類で、胎土に細砂粒を僅かに含み、焼成良好で、内面は淡茶褐色、外面は暗褐色をなす。7は、胴部下半片で、外面はナデ、内面は横位条痕のままである。胎土に細砂粒をいくらか含み、焼成良好で、内面は暗褐色、外面はこげ茶色をなす。8は、内面に斜位条痕を残したままで、外面の断面カマボコ形の隆線より上は斜位条痕、以下はナデしている。粗砂粒をいくらか含み、焼成不良で、内面は黒色、外面上半は黒褐色、下半は茶褐色をなす。

曾畠式土器（第10図9～17）9・10・17が滑石を多く含むもので、11～16は滑石を含まない類で第42図と共通するものである。9は、外反する口縁内面に2条の平行沈線、外面には上端に1条の沈線、更にその下に横位の切れ切れになる沈線を施している。焼成良好で、内面は淡褐～黒色、外面は暗茶褐色をなす。10は、口縁直下付近で、内面は丁寧なナデ、外面には横位の2条の沈線と斜めに交叉する沈線で文様が構成されている。焼成良好で、内面は暗茶色、外面は灰茶色をなす。11は、縦横の平行沈線による雷文状の文様構成類で、内面はナデかと思わ



第 10 図 7 号土壤出土縄文土器実測図 (1/3)

れる。細砂粒をいくらか含み、焼成良好で、内面は暗褐色、外面は黒褐色をなす。12は、深い縱位平行沈線文を施し、内面は凹凸が著しい。胎土に細砂粒をわずかに含み、焼成良好で、内面は淡褐色、外面は淡茶褐色をなす。13は、横位平行沈線と、縱位・曲線の沈線を交錯させた類で、内面は横位ナデでとても平滑である。胎土精良で、焼成不良。内面は暗褐色、外面は黒褐色をなす。14は、絞杉状沈線文類で、内面はナデている。胎土に細砂粒を幾らか含み、焼成やや不良で、内面は淡褐色、外面はこげ茶色をなす。15は、胎土精良で、外面文様も13と同様で同一個体の可能性が強い。内面は丁寧なナデで、焼成良好、内面は暗茶褐色、外面は黒褐色をなす。16は、外面に放射状沈線文を施す底部片で、内面はナデしている。胎土精良で、焼成良好、内面は灰褐色、外面は茶褐色をなす。17は、外面に細身で浅い沈線文を施す。内面は横位ナデ、焼成良好で、内面は暗黄褐色、外面は暗茶褐色をなす。

条痕文土器（第10図18）内外面ともにやや粗い斜位条痕を施すもので、胎土に細砂粒をいくら

か含むのみでかなり精良である。焼成やや不良で、内面は暗褐色、外面は暗褐色～黒褐色をなす。後～晚期の粗製深鉢の可能性も残る。

打製石鎌（第50図21・22）21は、平基の三角形剥片鎌で、長さ2.1cm、幅約3.4cm、厚さ0.3cm、重さ0.8gとなる。安山岩製であり風化していない。裏面は縁辺に調整を施しただけで主要剥離面を大きく残したものとなっている。22は、平基で左右不均等の細長タイプである。長さ2.2cm、幅1.3cm、厚さ0.4cmとなる。裏面に主要剥離面をかなり残し、重量1.1gとなる。安山岩製であり風化しておらず、全体に雑なつくりである。

石錐（第51図29）長さ2.5cm、幅2cm、厚さ0.6cm、重さ2.1gで、先端での使用研磨痕はみられない。安山岩製で風化しておらず、裏面中央にも同程度に主要剥離面を残す。

スクレイパー（第53図41、第54図48）41は、塊状に近い横長剥片の両側縁に調整を施したもので、一見、図示したように尖頭器状に見えるが、実際は大きく反っており、基部付近の調整などからみても、縦形のスクレイパー的利器と考えた方がよからう。長さ8.5cm、幅3.4cm、厚さ1.4cm、重さ31.5gとなる。安山岩製であり風化していない。48は、皮部分の横長剥片の縁辺の表面からのみ調整を施しただけのもので、現存の幅3.9cm、長さ2.2cm、厚さ0.8cm、重さ5.3gとなる。安山岩製であり風化していない。

以上の7号土壙出土遺物のうち、轟B式土器は極めてシャープな隆線縞や曲線文も含む典型例であり、曾畠式土器のうち「滑石無し」の例もかなり含まれている。このように1号住居跡出土土器群と若干の差が認められ、時期差が示されているのかもしれない。

8号土壙（第9図、図版10）

遺跡の南端中央に位置し、東西トレンチ（南側）周辺の縄文前期包含層の下層遺構である。南北に長い隅丸長方形的なプランで、底面は中央が崖み、壁はかなり聞く形状となる。長さ181cm、幅86cm、深さ46cmとなる。

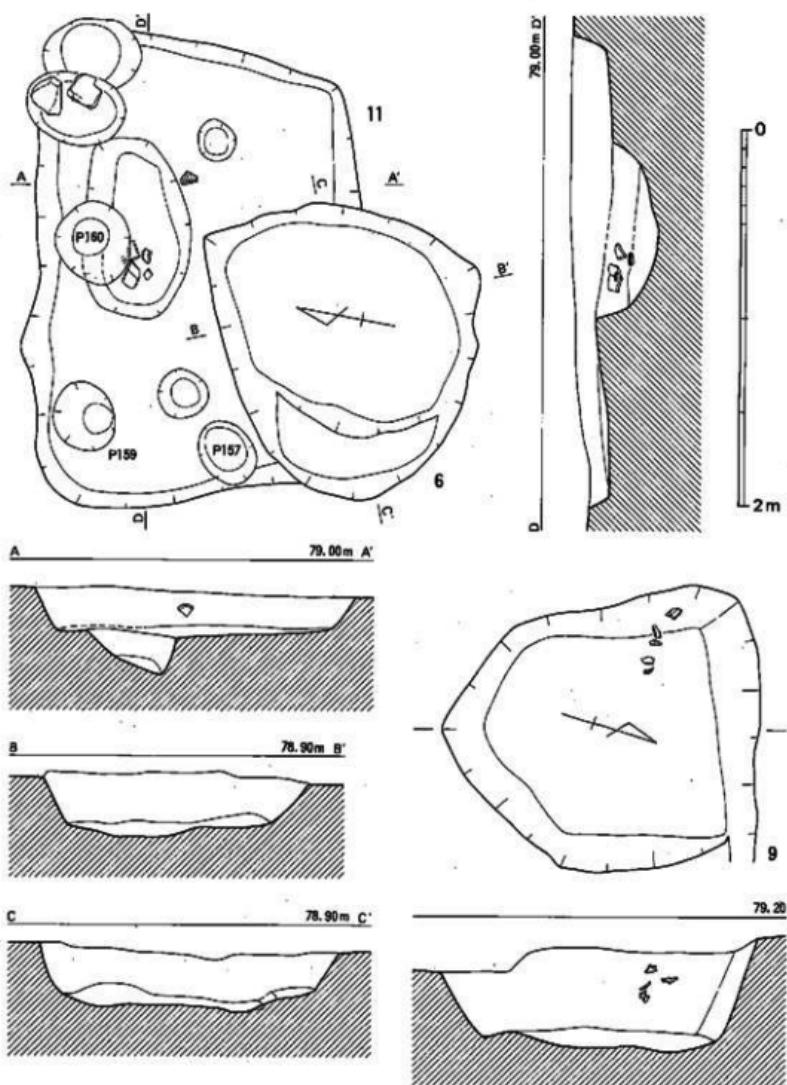
出土遺物（第56図）

磨石（24）灰色の凝灰岩質の石材で、長さ13.6cm、幅13.1cm、厚さ3.5cm、現存重量642gとなる。表裏面ともに磨面ではあるが、凹凸がかなりみられる。全体に風化して磨滅著しい。

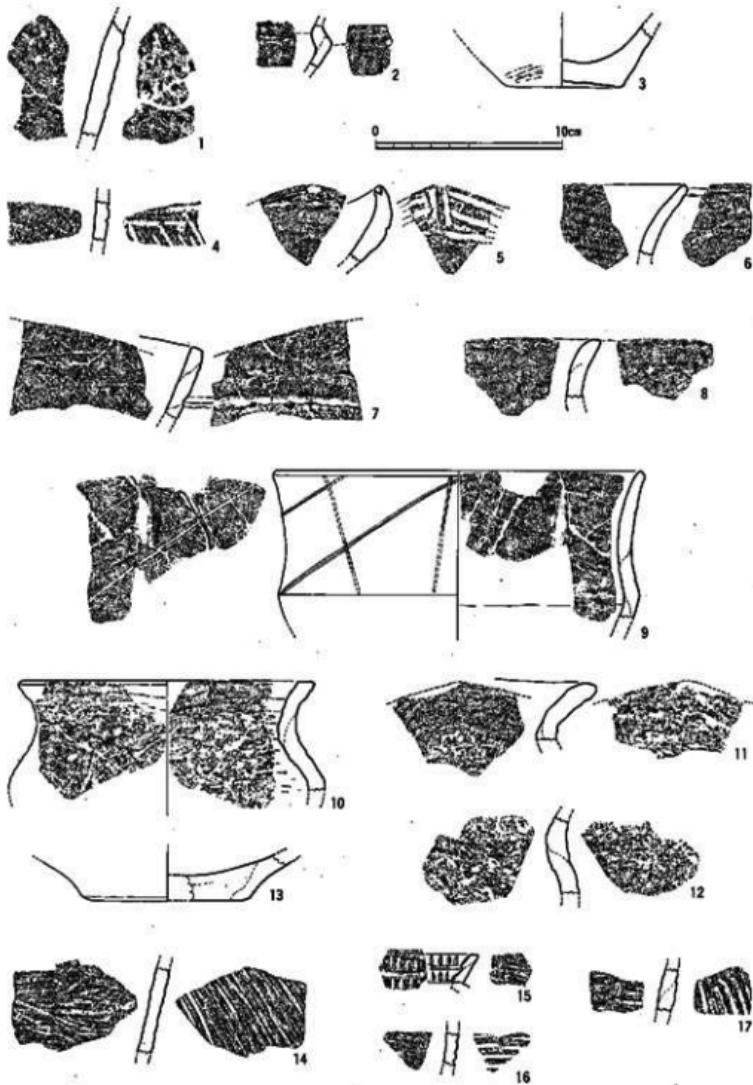
この8号土壙から出土した土器のうち、図示できるものは無いが、検出層位や周辺の状況からみて、当土壙は縄文前期の所産と考えられる。

9号土壙（第11図、図版6・7）

遺跡の西辺寄りの中央付近に位置する。西側で10号土壙、東側で5号土壙と切り合っており、出土遺物からみると、10号土壙を切っているようだ。平面形は南端が尖る五角形状を呈し、長さ170cm、幅150cm、深さ60cmと、わりとしっかり掘り込まれている。底面はやや波打っており、



第 11 図 6・9・11号土壤実測図(1/30)



第 12 図 9-11号土壤出土縄文土器実測図 (1/3)

土器類は中層から上半部にかけて出土した。

出土遺物（第12図1～3）

押型文土器（1）外面に縦位（やや斜位）の横円形押型文（ $8 \times 5\text{ mm}$ ）を施し、下端は消えている。全体に磨滅しており、焼成不良で、内面は灰黒色、外面は淡灰黄茶褐色をなす。胎土に粗・細砂粒を幾らか含む。

浅鉢（2）外面ヘラ磨き、内面ナデの精製磨研浅鉢で、胎土精良、焼成やや良好で内面は黒色、外面は淡褐～暗褐色をなす。繩文晚期後葉古段階のものであろう。

底部（3）底径6.2cmで3mm程の上げ底となる類である。外面に部分的にヘラ磨きがみられ、細砂粒を多く含み、焼成良好である。御領式系精製深鉢の底部である。

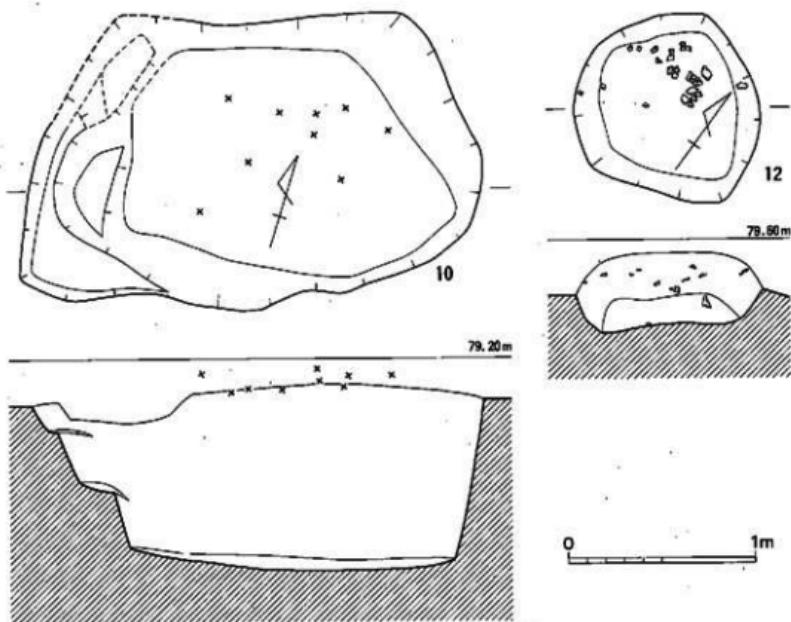
以上の出土遺物のうち、1は古い時期のものの混入品で、2が最新時期を示し、繩文晚期後葉古段階が当土壤の時期と考えられよう。

10号土壤（第13図、図版7）

前述の9号土壤の西隣に重複して検出された。西隅を下層1号構に切られ、東南側を9号土壤に切られている。東端が尖る長い五角形的な形状をなし、長さ250cm、幅160cm、深さ100cmとなる。大きく深いので、墓や貯蔵穴等が考えられるが、いずれも確証はない。

出土遺物（第12・50図）

繩文土器（第12図4～13）4は、滑石無しの曾畠式土器片で、外面に横位の平行沈線の下に斜位の平行沈線文を施す。内面は横ナデで、胎土に粗・細砂粒を幾らか含み、焼成不良で内外面ともに暗茶～黒色をなす。5は、内湾気味に立ち上がる山形突起部分で、上端に1孔の刺突を施し、外面は中央に縦位の2直線の平行沈線を入れて、その左右に2～3条の口線に平行の横位沈線を巡らしている。内面は丁寧なナデで、外面下半は横位ヘラナデ状調整がみえる。繩文後期の精製土器で、北久根式より新しい段階のものと考えられる。胎土精良で、焼成良好、内面は暗灰黄茶、外面は暗褐色をなす。6は、黒色磨研浅鉢片で、内面は横ヘラ磨き、外面は丁寧なナデを施す。胎土に粗砂粒を僅かに、細砂粒をかなり含み、焼成良好で内面は黒褐色、外面は暗茶褐色をなす。晚期初葉前後の精製品となろう。7は、大きく波状口縁となる大ぶりの精製浅鉢片である。内面は横位ナデで極めて平滑であり、外面の段より上はやや雜な横位ナデ、以下は未調整風の雜なナデとなっている。胎土に粗砂粒を幾らか含むが大旨精良で、焼成不良で内面は明茶色、外面は暗茶～暗褐色をなす。晚期初葉段階のものであろう。8は、内外面とも丁寧な横ナデを施す大ぶりの深鉢で、胎土にかなり粗砂粒を含む。焼成良好で内面は茶褐色、外面は暗茶～黒褐色をなす。晚期初葉段階の御領式系深鉢である。9は、復原口徑20cmの小形品である。屈折部以上に丁寧なナデの上に細い沈線文を交叉させる文様を施す。内面は丁寧な横ヘラ磨きで、外面屈折部以下は横位条痕の上を横位ヘラナデしている。胎土に細砂粒をかなり



第 13 図 10・12号土器実測図 (1/30)

含み、焼成良好で、内面はこげ茶色、外面は黒褐色をなす。晩期初葉。10は、復原口径16cm、胴部最大径17cmとなる厚手の粗製土器である。口縁内外面は強い横位ナデ、以下内面は横位の粗雑な削り状擦過、外面の頸部くびれ付近は横位擦過、胴部外面は横方向のナデを施す。胎土に粗砂粒が多く含み、焼成不良で、内面はこげ茶色、外面は黒～暗茶色をなす。外面の頸部以下には煤がこびりつく。後期中葉段階のものであろう。11は、波状口縁の突起部となりそうで、口縁内面はヘラ磨き風の横位ヘラナデ、頸部内面は横位擦過、外面は雑な横位擦過状をなす。頸部外面には煤が付着している。胎土に粗砂粒が多く含み、焼成良好で内面は暗黄茶褐色、外面は暗黄褐色～暗褐色をなす。10と同時期となろう。12は、外面は雑な横位のナデ、内面は極めて雑な引っかき状の横位の条痕を施す。胎土に粗砂粒が多く含み、焼成不良で内面は暗褐色、外面は黄茶褐色をなす。10・11と同じ後期中葉段階のものであろう。13は、復原底径9cmとなる精製深鉢底部片で、内面はナデ、外面は雑なナデを施す。胎土に細砂粒を多量含み、焼成良好で内面は茶褐色、外面は褐色をなす。御領系深鉢の底部となろう。

打製石器（第50図17・18）17は、いくらか半透明良質の黒曜石製で、現存長1.2cm、幅1.8cm、厚さ0.9cm、重さ0.7gとなる。左右非対称形で、つくりはあまり良くない。18は、17と同じく凹基盤であるが、極めて部厚く雑なつくりである。長さ2.4cm、幅2cm、厚さ0.8cm、重さ2.6gとなる。安山岩製で左右非対称となる。

以上の10号土壙出土遺物は、詳述したように、前期・後期・晩期と多時期にわたるが、6～9・13が示す、從来御領段階とされてきた晩期初葉が当土壙の時期となろう。

11号土壙（第11図、図版8）

遺跡の西辺中央付近にて、6号土壙と重複して位置する。東西の長さ253cm、南北幅174cm、深さ25cmほどとなる略長方形土壙である。底面北寄りの中央には、東西に95cm、南北に55cm、深さ30cmの穴があり、その中に土器片がいくらか見られた。図上で書かれたその他の小ピットは、すべて上からの掘り込みによるものである。浅めで小堅穴状を呈するが、遺構の性格は明らかにできない。

出土遺物（第12図14～17）

条痕文土器（14）外面に斜位の、内面には横位のアナグラ条痕を施す。内面上半はナデ消している。胎土に細砂粒をいくらか含み、焼成不良で内面は淡灰褐色、外面は灰褐色をなす。晩期初葉に伴うものようだ。

浅鉢（15）口縁内面に2段の肥厚部をつくり、その上に2段に細い刻目を施す。外面は横位条痕をナデ消している。胎土精良で、焼成不良、内外面ともに暗褐色をなす。晩期初葉前後の精製浅鉢となろう。

曾畠式土器（16・17）いずれも滑石無しの類で、16は外面に横位平行沈線文を施す。内面は横ナデか。胎土に粗・細砂粒をわずかに含み、焼成不良で内面は黒色、外面は暗黄褐色をなす。17は、外面に斜位のやや雑な沈線を施し、内面は横位二枚貝条痕を施す。胎土に細砂を僅かに含むのみで、焼成やや不良、内外面ともに黄灰色をなす。

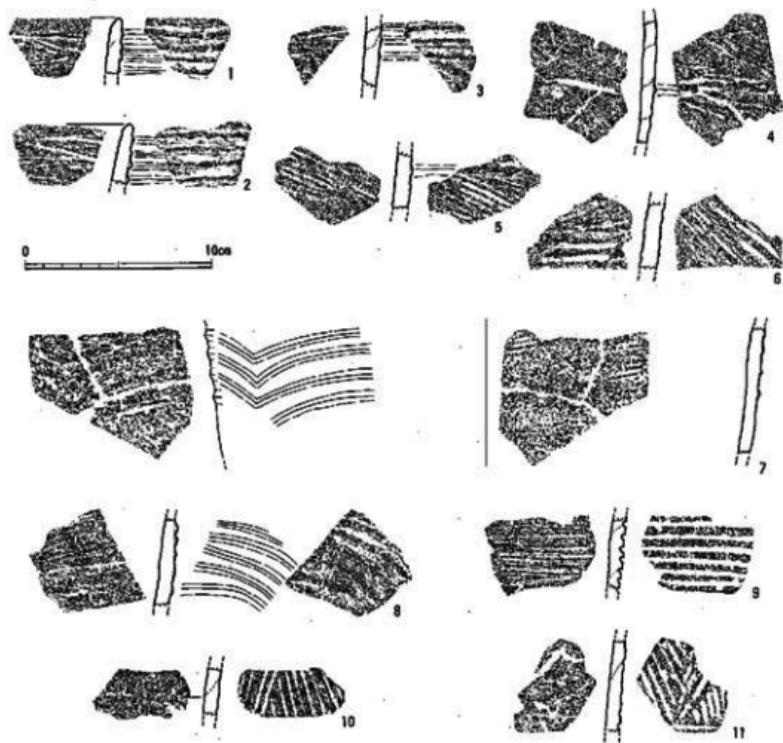
以上の11号土壙出土土器のうち、14・15の示す晩期初葉前後が当土壙の時期となろう。

12号土壙（第13図、図版10）

遺跡の南端の縄文前期包含層中の下層遺構として検出された。101×100cmの不整円形プランをなし、深さは20～10cmと浅い。小さい土壙ながら、埋土中から土器片がかなり出土しており、しっかりした遺構であるが、性格については判断できない。

出土遺物（第14図）

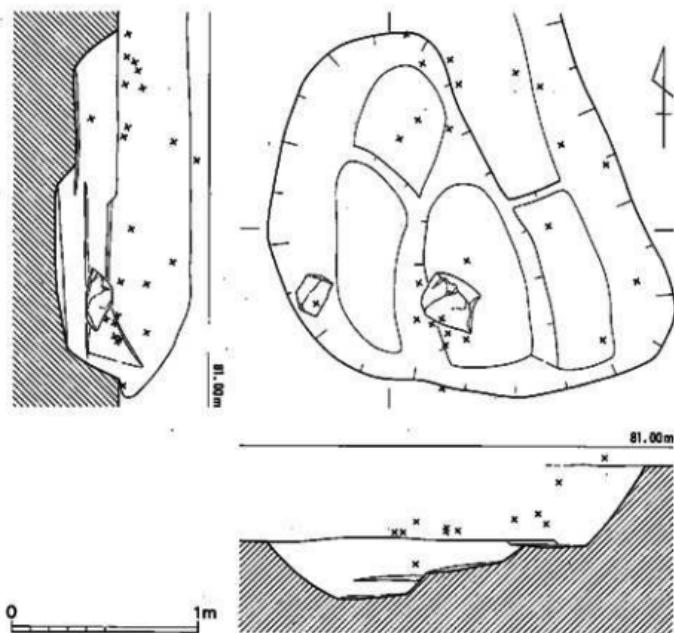
轟B式土器（1～5）1は、連接する低い隆線を付ける類で、内面は横位条痕を残す。胎土に細砂粒をいくらか含み、焼成良好で内面暗黄褐色、外面は暗茶褐色をなす。2も内面は粗い横



第 14 図 12・13号土壤出土縄文土器実測図 (1/3)

位条痕を施し、胎土に細砂粒をいくらか含む。焼成良好で、内面は茶褐色、外面は黒褐色をなす。3は、外面に低くシャープな隆線を付け、内面は横位条痕を施す。外面下半はナデ調整で仕上げる。胎土に細砂粒をいくらか含み、焼成良好で、内面は暗黄褐色、外面は黒褐色をなす。4は、胴部中位片で、内面はナデ、外面は斜位条痕をナデ消している。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で、外面は暗茶褐色、内面は暗茶色をなす。5は、胴部中位片で、低く大きめの隆線を付け、内外面ともに斜位の条痕を施したままである。細砂粒を多く含み、焼成やや良好で内面は黒褐色、外面は明橙褐色をなす。

条痕文土器（6）内面に横位の、外面に斜位のヘナタリ条痕風。又は太めの他原体による条痕が施される異類である。或は早期の原体条痕類と同じかもしれない。胎土に細砂粒を多く含み、



第 15 図 13号土壙実測図(1/30)

焼成良好で、内面は淡黄茶色、外面は二次火熱を受けて、茶～暗褐色をなす。

以上の12号土壙出土遺物は、藤B式を主体とするもので、条痕をよく残すことや、細身の隆線を付けることなどから、典型期のものであり、当土壙もその時期に位置付けられよう。

13号土壙（第15図）

遺跡の東半中央付近の、1号墳掘方の北西隅、1号住居の東側に位置する不整精円形土壙である。当土壙の東側が段になっており、その段の直下に位置する。南北の長さ190cm、東西幅130cm、深さ33cmとなる。底面はテラスがあり、段々になっており、壁も緩やかで壠鉢状となっている。中には塊石が2個みられた。この土壙の周辺は、縄文前期の包含層が拡がっており、その下層造構となっている。遺物は土壙上面から中位にかけて出土している。

出土遺物（第14図7～11）

藤B式土器（7・8）7は、31cmほどの口径になる大ぶりの器種で、隆線4条が重弧状に付け

られる曲線文類となる。隆線は著しく磨滅して不明瞭になっている。内面は横位条痕を施す。胎土に細砂粒をかなり含むが、角閃石が目立つ。焼成やや不良で、内面は茶～こげ茶色、外面もこげ茶色をなす。8は、5条の隆線が重弧状になるもので、内面は横位条痕を施す。隆線は極めて磨滅して低くなっている。胎土に細砂粒をかなり含み、焼成良好で、内面は暗茶色、外面は暗褐色をなす。

曾畠式土器（9～11）9は、滑石無しの類で、外面に横位平行沈線を施し、内面には横位条痕が残る。胎土に粗・細砂粒をいくらか含む。焼成不良で、内面は暗褐色、外面は黒褐色をなす。10は、滑石を多く含み、外面に斜位の平行沈線を組み合わせる文様を施す。内面は横ナデを施し、焼成良好で内面は茶色、外面は黒褐色をなす。11も滑石を多く含む類で、内面は横ナデと思われる。外面には横位沈線の上方に斜位平行沈線を組み合わせる文様を施している。焼成良好で、内外面ともに茶～暗黄褐色をなす。

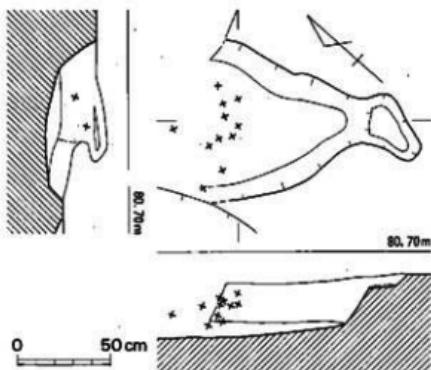
以上の出土土器からみて、当13号土壤は、柵文前期藤B式・曾畠式が共伴する時期の所産と考えられよう。

14号土壤（第16図）

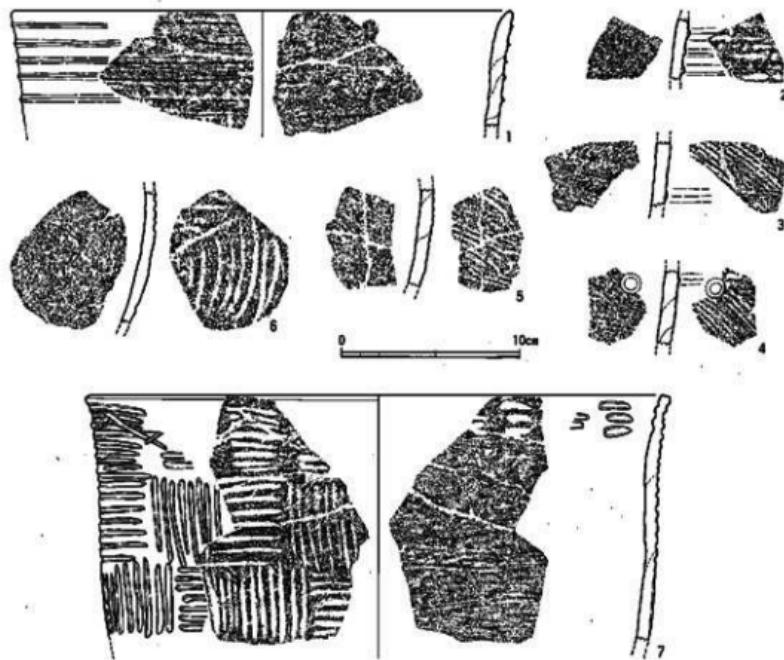
遺跡の中央東寄りの、1号住居跡の東側に接するようにして検出された。北側を東西トレンチ（北側）に切られているが、小規模の落ち込み状遺構であろう。長さ115cm以上、幅90cm程度、深さ28cmとなる。遺物は北側の上～下層にまとめて出土した。

出土遺物（第17図）

柵B式土器（1～5）1は、復原口径27cmで、5条の極めてシャープで細身の隆線を間隔を置いて巡らせている。内面は横位ナデ、下端のみ横位条痕が残る。胎土に粗・細砂粒を多く含み、焼成良好で内面は淡褐色、外面はこげ茶色をなす。2は、間隔を置いた断面三角形隆線を付けている。内面はナデ、胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で内面は暗黄茶色、外面は茶～黒褐色をなす。3は、胴部中位片で、内面は横位ナデ、外面は斜位条痕を施す。隆線は磨滅して低くなっている。胎土に細砂多く含み、焼成不良で、内面は



第16図 14号土壤実測図（1/30）



第 17 図 14号土壙出土縄文土器実測図 (1/3)

暗黄褐色、外面は暗褐色をなす。4は、低く細身の隆線を付けるもので、内面は横ナデ、外面は斜位条痕を施す。両面穿孔の補修孔がみられる。胎土に細砂粒を多く含み、焼成やや不良で、内面は黄茶褐色、外面は黒褐色をなす。5は、轟式土器下半部片と思われるが、他の条痕土器の可能性もある。外面は斜位のアナグラ条痕、内面は磨滅しており、ナデかと思われる。胎土に粗砂粒をいくらか含み、焼成良好で、内面は暗褐色、外面は暗黄褐色をなす。

曾畠式土器(6・7)6は、胴部下半に雑な平行沈線を施したもので、胎土に滑石を多く含む類である。内面は磨滅しており調整は不明。焼成良好で、外面は茶褐色、内面は淡黄褐色をなす。7は、復原口径31.4cmとなるやや大ぶり品である。口縁内面に横位の短沈線を上下三段に施している。口唇面上の刻目或は刺突文があるかどうかは不明瞭。外面は、上から4cm間は横位の平行沈線を3cmの長さ分ずつ施し、その上から斜位の山形に交叉する沈線を重ねている。それ以下は、4.5cm角の正方形区画の中に縦横の平行沈線を施した文様構成となっている。内

面は上から8cmの所までは横位擦過風の上をナデ、それ以下2.5cm間は横位条痕が残る。それ以下の下端は横位条痕の上を横ナデしている。胎土には砂粒を殆ど含まず、滑石を多く入れている。焼成良好で、外面は赤茶～暗紫灰黒色、内面は暗黄褐色～暗茶褐色をなす。

以上の14号土壙出土土器は、細身で間隔をおいたシャープな隆線を持つ縄B式土器と、刺突文ではなく、短沈線を用いた口縁内面文様と外面の縦と横の平行沈線だけで組み合わされた文様構成を持つ曾煙式土器との良好な共伴関係が確認できた。これは、次の「土器3」一括出土品と好対照である。

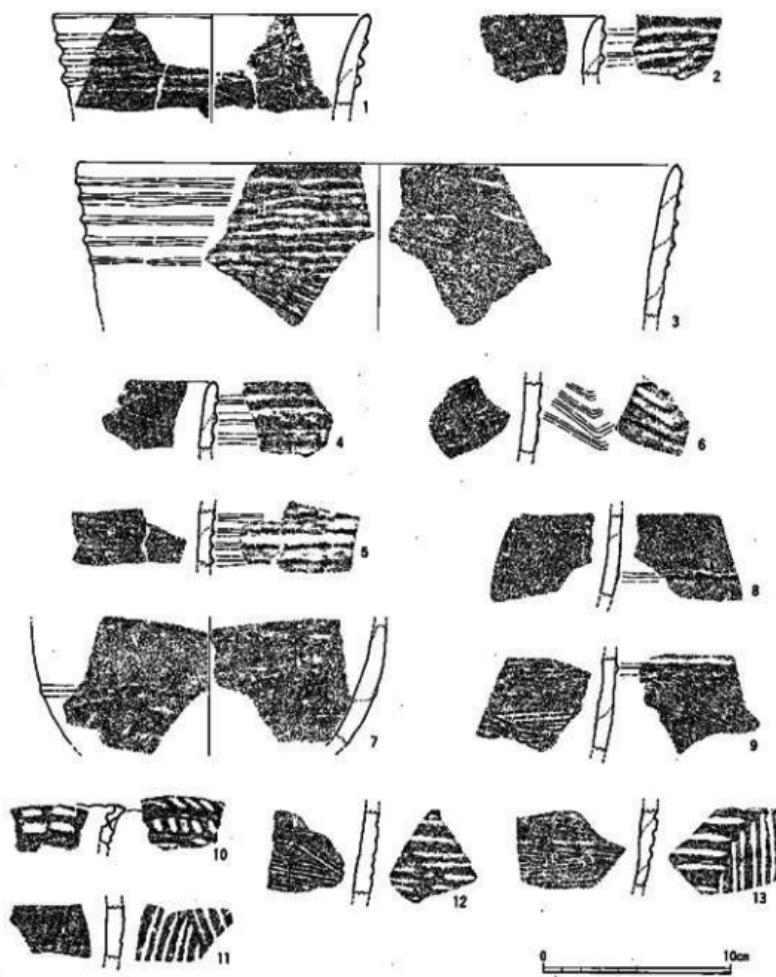
「土器3」(第19図、図版11)

調査当初、包含層中で頭をみせてきたまとまりのある土器群のうち、一個体として接合できそうなものを「土器1～3」と称して、単に縄文包含層の土器として取り上げた。しかし、掘り上がった結果は、「土器1・2」は壇壺状のものに、「土器3」は浅い土壙状の造構の中に廃棄された土器群であることがわかった。

「土器3」は、遺跡の南寄りの中央付近に位置し、西側を4号土壙、東側をP106に切られた浅い土壙である。東西の長さ140cm以上、南北の幅は100cm強になると思われる。深さは10cm前後で、中には大きめの塊石がかなりみられる。土器類はほぼ3ヶ所にわたって出土した。

出土遺物(第18・46・50・53・55図)

縄文土器(第18図)隆線が太めで間隔のあく頬の縄B式土器(1～9)と、滑石を含む刺突文系文様を口縁に用いる曾煙式土器(10・11・13)、外面に切れ切れの横位平行沈線を施す類(12)などがある。1は、復原口径17cmの小型品で、外面に3条の断面カマボコ形隆線を付ける。内面上半は横位擦過状、下半は横位ナデ、外面の隆線以下はナデである。胎土に細砂粒をいくらか含むのみで、焼成やや不良で、内面は暗茶褐色、外面は淡茶～こげ茶色をなす。外面の一部に煤が付着している。2は、断面カマボコ形のやや大きめの隆線を付ける頬で、内面はナデである。胎土に細砂粒を多く含み、焼成やや良好で、内面は黄褐色～黒褐色、外面は暗茶～黒褐色をなす。3は、復原口径32.6cmの大ぶりの類で、外面に間隔をおいて小さめの断面カマボコ形の隆線を付けている。内面は横位条痕で、外面の隆線以下は斜位条痕を施している。胎土に粗砂少量、細砂粒を多く含み、焼成やや良好で、内面は暗茶褐色、外面は暗褐色をなす。4は、やや低いが大きめの隆線を付ける。内面は横ナデで、胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で外面はこげ茶色、内面は暗茶色をなす。5は、内面は横位条痕、胎土に細砂をかなり含み、焼成良好で外面はこげ茶色、内面は暗黄褐色をなす。6は、低い平行隆線が弧状の曲線文となる頬である。内面はナデで、胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で内面は黄褐色、外面は淡橙褐色をなす。7は、低い隆線を調下部に付けたもので、内面は横位擦過の上をナデしている。外面もナデで、図中断面の最上端は撮口縁となっている。胎土に粗・細砂粒を多く含み、焼成



第 18 図 「土器 3」一括出土網文土器実測図 (1/3)

やや不良で、内面は暗灰茶褐色、外面は暗茶褐色を示す。8は、内外面ともナデており、焼成不良で内面は黒褐色、外面の上半は暗褐色、下半は二次火熱で明赤茶色をなす。胎土に粗砂少

量、細砂粒を多量含む。9は、内面横位条痕、外面はナデ調整を施す。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で、内面は淡褐～灰黒色、外面は煤が付着してこげ茶色となる。10は、滑石を多く含む曾畠式土器口縁片で、口唇上面に斜めの長い刻目、内面に1.4～1.1cmの長さの短線文を2段に横走させ、外面にはやや斜位の刺突文を巡らせその下に横位沈線を施している。焼成良好で、外面は黒褐色、内面は暗茶褐色をなす。11は、胎土に滑石を多く含み、外面にやや細身の平行沈線を斜位に組み合わせている。内面は横ナデで、焼成良好。内面は黒褐色、外面は灰茶褐色をなす。12は、外面に切れ切れの横位沈線を施し、内面にはやや斜位の条痕を残したままとなる。胎土に細砂粒をかなり含み、焼成不良で内面は黒褐色、外面は暗茶色をなす。13は、滑石を多く含み、外面に平行沈線を斜めに組み合わせる文様を施す。内面は横位条痕で、焼成良好、外面は茶～黒色、内面は淡茶褐色をなす。

磨製石斧（第46図3）濃青灰色の頁岩質石材で、刃部が欠損している。現存長12.3cm、幅6cm、厚さ3.3cm、重量275gとなる。全体に丁寧に研磨しているが、左右側面中央付近と裏面にやや細かい敲打痕を残す。基部側面は面をなしている。

打製石鎌（第50図2）表裏ともに原剥離面を大きく残す類で、長さ2.7cm、復原幅2cm、厚さ0.4cm、重さ1.1gとなる。安山岩製で、脚部先端が通常と異なる斜めの形状をなし、注目される。石匙（第53図44）安山岩製の横型石匙で、左右の長さ5.6cm、上下の高さ3.9cm、厚さ1.2cmとなる。横長剥片の抉り部と縁辺部のみに簡単に調整しただけのものである。下辺左半が部厚く、作りかけかもしれない。重さ26.7gで表面はいくらか風化するのみである。

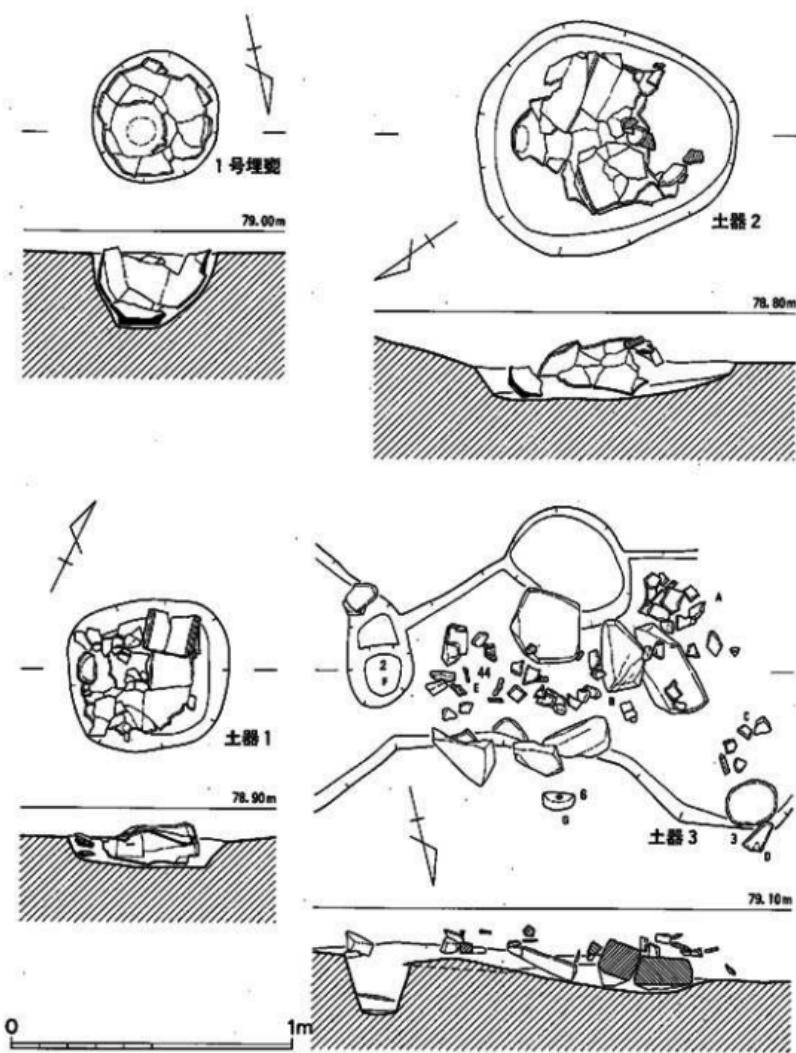
凹石（第55図6）長さ12.2cm、幅11cm、厚さ4.6cm、重量810gとなる。淡灰色の凝灰質石材で、上面は窪面となっており、表裏両面ともに凹部をつくる類である。裏面の中央凹部は4×2.8cmの縱長で、表のものより大きく深い。左側の矢印部分の側面も窪って面をなしている。

以上の出土遺物のうち、轟B式土器は、隆線が大きめで断面カマボコ形をなし、他造構出土地と差異が認められる。これに伴う曾畠式土器は、やや刺突文的であり、胴部の文様構成も平行沈線を斜位に組み合わせる類となる。これらの共伴状況は、1号住居、14号土塙での共伴状況と異なり、より新しい様相が認められる。

(4) 埋 蔽 等

1号埋蔵（第19図、図版4）

遺跡の西南隅のやや西寄りに位置する。周辺は造構が少なくなりつつある部位で、同様の埋蔵と思われる「土器2」まで西へ6.5m、「土器3」まで西北西へ11.5mとなる。深鉢ぎりぎりの直径45cmの円形掘方の中に据えられており、底部はほぼ水平だが、胴部は西側へ傾いており、全体に直立に近いがやや傾けて埋められた可能性が強い。底部近くの胴部下半に2ヶ所、横長



第 19 図 1号埋器・「土器 1~3」出土状態実測図 (1/20)

に土器片が無い部分があり、意図的打ち欠きと思われる。口縁部付近が全く無いが、上半を完全に削平されたためと思われる。

深鉢（第20図）胴部最大径39.4cm、底径14cmで、丸味を持って外反する口縁となる。底部は内面中央が上方へふくらみ、外面全体が僅かな上げ底となるが、さらに丸く外縁に沿って窪んでいる。外面は全面に横位アナグラ条痕を施しており、内面は上から9cmまで横位条痕をかなり残し、以下は条痕の上を横位ナデ調整している。内面下端近くの胴下半部には黒色の炭化物が付着している。胎土に粗・細砂粒を多く含み、焼成やや不良で、外面は暗黄褐色～黒褐色、内面は淡茶色をなす。外面には部分的に煤が付着する。

この1号埋甕は、横位条痕を基本とする大型の粗製深鉢で、胴部に丸味を持ち、口縁が厚みを増しながら外反する様相などから、縄文後期のものと判断される。埋置の仕方が他の晩期初葉の「土器1・2」と異なることも、当遺跡内における時期差として理解されよう。

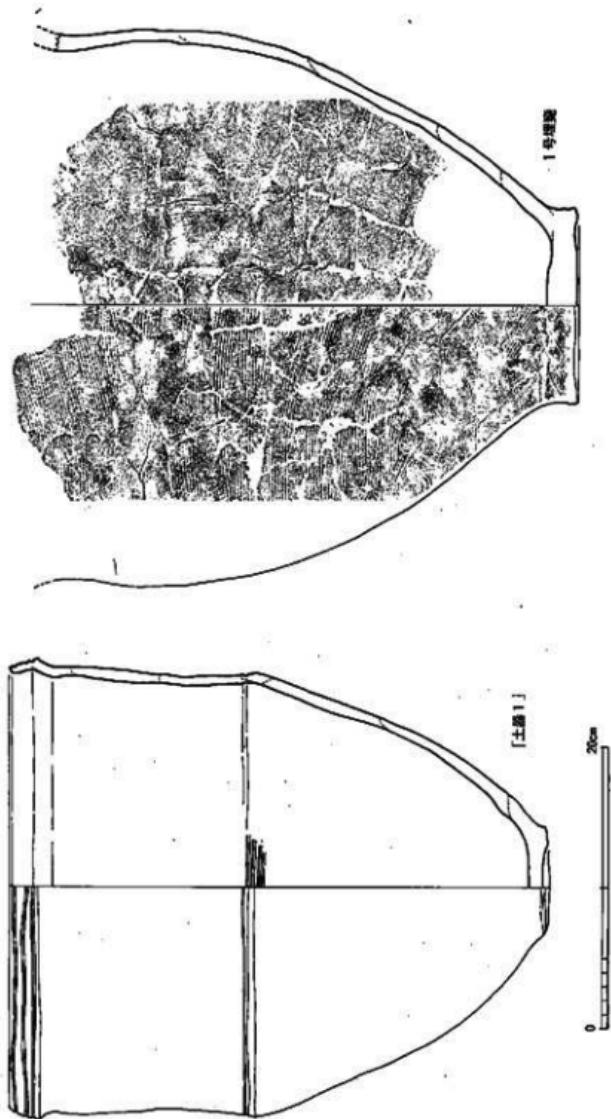
「土器1」（第19図、図版4・5）

遺跡の中央最西端に位置する。ほとんど崖っぷちにあたる部位である。口縁部を東北東に向けて、土器がぎりぎりに入る掘方内に横位に埋置している。礫の多い砂質層に掘り込まれており、口縁側の墓塚がわずかに空いており、木蓋等を差し込んだ可能性を考えておきたい。

深鉢（第20図）口径31.2cm、器高38.5cm、屈折部最大幅31.6cm、底径8cmの精製深鉢形土器である。内傾して立ち上がった口縁部の外面に3本の沈線を巡らせ、屈折部直上には片削ぎ状のシャープな沈線を入れている。底部は外縁部沿いを除いた上げ底となっており、全体に各部のつくりは丁寧でシャープになっている。口縁部外面は横ナデ、屈折部までの内面は横位ヘラナデ（横位擦過状部分もいくらか残る）、以下内面は丁寧なナデでかなり平滑になっている。内面屈折部付近に一部横位条痕が残る。外面は屈折部から3.4cm上までの間が横位ヘラナデ、底部から7cm上までが雑な斜位～横位のナデ、他の外面は右下がり斜位のナデ調整を施している。外面の屈折部から8cm下までの間には煤がこびりついており、それから上の頸部にも煤が付着している。内面の底から2cm上から12cm上までの間は炭化物がこびりついている。以上のことから、この深鉢は明らかに煮沸容器として使われた生活土器の転用品であることがわかる。胎土に粗・細砂を多量に含み、焼成良好で内面は淡茶褐色～淡灰褐色、外面上半は暗褐色～黒色、下半は淡褐色～赤茶色（二次火熱）をなす。

この「土器1」は、所謂大石式であり、著者の言う晩期前葉の時期を示すものである。やや小ぶりな生活土器を埋置した状況は、縄文晩期埋甕の斜～横位埋置への傾向を示した好例だと言えよう。土器中からの出土品は無かったが、ある種の埋葬施設として充分検討に値するものである。

第 20 図 1号埋甕・「土器 1」実測図 (1/4)



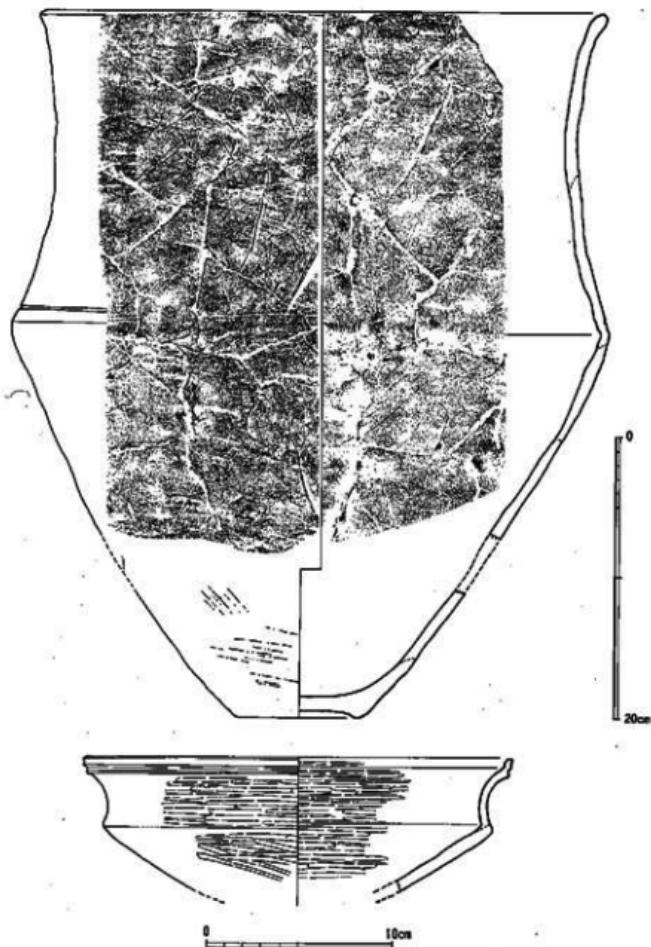
「土器2」(第19図、図版5・6)

遺跡最西端の、ちょうど前述の「土器1」と同様の部位にて検出された。西側は崖となる位置である。「土器1」の5.5m南にあたり、往時の一連の遺構と考えられる。南北に直径93cm、東西に83cmの卯形プランの掘り込みの中に、口縁を南々西に向けて、ほぼ水平に横位に深鉢を据えている。全体に土圧で押し潰されているが、口縁まで良く残っている。口縁部近くに浅鉢の破片が4片、明らかに完形で埋められたものではない状態で出土した。この浅鉢は、出土状況からみると、完全な混入品か、破碎された破片を儀礼的行為として深鉢の口のあたりにばらまいたものか、のいずれかであろう。土器自体の筆者の縦年観からみて、深鉢の方が浅鉢よりも一段階古式であると考えるので、浅鉢破片が単なる混入品であるとすると、深鉢口縁の下までもぐり込んで出土している状況は全く理解できない。後者の破碎埋納行為だとすると、両土器の時期差を、一步引いて同時存在した可能性もあり得ると柔軟に考えると、この出土状況を理解できることになる。とりあえずは、この解釈を探っておこう。深鉢の中の埋土中からは、焼骨等は発見されなかったが、掘方の口縁外側が空間になっており、木蓋等が施され、棺として使用されたものと思われる。

深鉢(第21図) 口径40.5cm、器高50cm、屈折部最大径41.6cmとなる大ぶりのもので、口唇端は斜めに面をなす。屈折部はシャープで、直上に沈線1条が施されている。内面は口縁付近はへラ磨き状で、以下17cm下まで横位ヘラナデ。以下胴部下半の割れ部分までの内面は、横位条痕の上を横ナデ(部分的に擦過状)仕上げしている。胴部下端から底部の内面は丁寧なナデで平滑である。外面の口縁から頸部中位(13cm下)までは横位条痕の上を雜な横位擦過状ナデ、以下屈折部までは丁寧な横位ナデで、一部ヘラナデ状となる。屈折部以下割れ部分までの外面は、横位条痕の上を横位擦過状ナデ、胴部下半の下から7cm以上の外面は右下がりの斜位擦過、以下はやや雜な横位ヘラナデ状となる。底部外面は5mm程の特徴的上げ底となっており、雜な回転方向のナデ仕上げである。外面上半には煤がこびりつき、胴下半部は二次火熱を受けて赤変している。胴部下半内面には炭化物が付着している。以上のように、この深鉢も煮沸容器として使用された生活土器を転用したものであることが判かる。

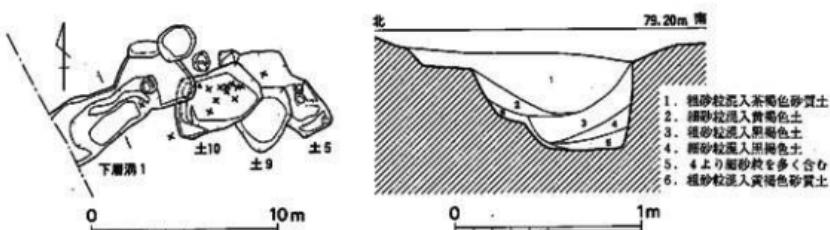
浅鉢(第21図) 接合しても全体の1/5程しか残っていないが、復原口径23cm、屈折部径20.9cmとなる頸部が丸く屈曲して聞く類である。口唇外端はシャープで、口縁の立ち上がり部外面に太めの沈線1条を巡らす。屈折部以下の外面がやや雜な横ヘラ磨きを施す他は、内外面ともに丁寧な横ヘラ磨きを施している。胎土に細砂粒をかなり含み、焼成はやや良好で、内面は黒色研磨、外面は暗褐色~黒色をなす。

以上の「土器2」のうちの深鉢は、各部の特徴からみて、典型的な御領式土器であり、筆者の縦年上からは晩期初葉に位置付けられる。浅鉢は、口縁外面の沈線が凹線ではなく、太めではあるが明らかな沈線になっていること、屈折部直上の沈線がみられないこと、口縁の突出や



第 21 図 「土器 2」実測図 (1/4・1/3)

凹点等の気配が無いことなどから、晩期前葉段階に位置付けられる。既に上述した如く、この時期差については明瞭ではあるが、実際の往時の使用状況を考える時、浅鉢の破碎埋納行為によってしか出土状況を理解できないため、深鉢が伝統的に前葉段階まで古相を残して作製され



第22図 下層1号溝土層実測図 (1/300・1/30)

ていたものか、引き継ぎ前段階のものを所有していたことによるものなのか、いずれかであろう。遺構としての性格は、「土器1」と同様の埋置状況を示していることからも、この斜面中途の小テラス部分端部に墓地としての選地があつたことを推定させてくれる。

(5) 溝状遺構

下層1号溝 (第22図、図版12)

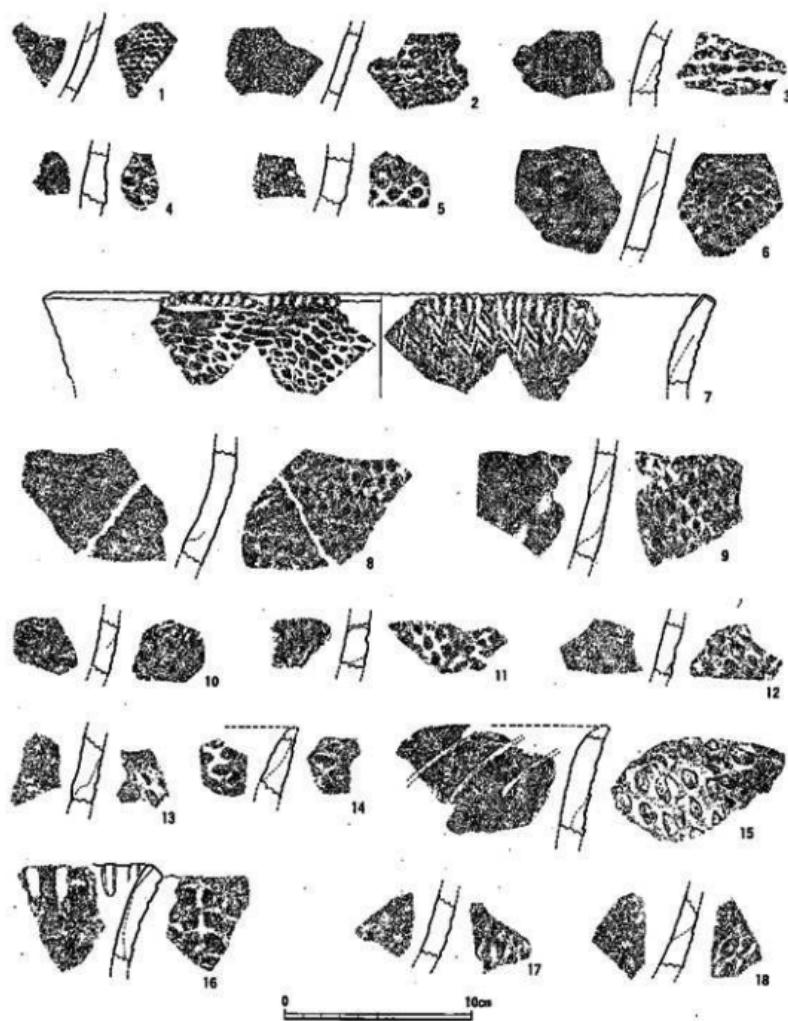
遺跡の中央西端部の、5・9・10号土壠が重複する部の最西端に位置する。古墳～歴史時代の遺構調査後の縄文包含層下面で検出したもので、縄文時代の遺構であることは間違いない。東端で縄文後期の10号土壠を切っており、出土遺物のうち図示できるものは無いが、縄文後～晩期の遺構と考えられる。検出当初、東西に長く延びていたため、溝と考えたが、掘り上げた結果は、底面も一定せず、土壠の一種としてもよさそうである。現存長750cm、幅330cm、深さ54cmとなり、中央南寄りが深くなっている。埋土断面をみると、南側から主とした流れ込みによる自然堆積状況を示している。これが縄文後～晩期のものとすると、埋甕等の墓地の北側を区切る区画施設と想像することもできる。

(6) 包含層他出土遺物

ここでは、本遺跡出土の縄文時代の遺物のうち、既述の住居跡・土壠・埋甕等出土のもの以外の、各小ピット、西南端包含層、各トレンチ、遺跡全体に拡がる縄文包含層等から出土したもの、及び明らかに古墳～歴史時代遺構中に混入したもの等についてまとめて報告しておきたい。文中で示す出土地点のうち、No. を付けただけのものは、遺跡全体に拡がる縄文包含層出土のものを1/20図面に記録して取り上げた番号であり、第3図中に各印を付けてドットしたものがそれである。

押型文土器 (第23・24図、図版22・23)

大きく以下の5類に分類できる。



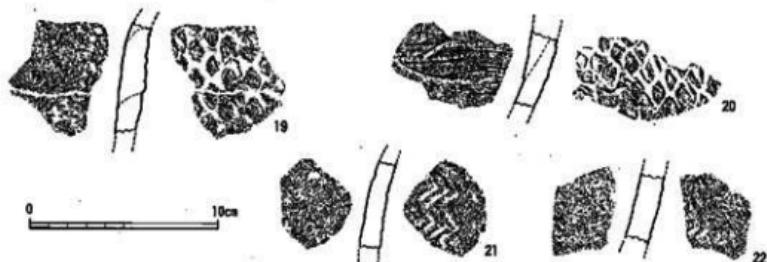
第 23 図 包含層出土押型文土器実測図 ① (1/3)

- A類：横走する穀粒文に近い小さな楕円形押型文…… (1)
- B類：横走する中型の楕円形押型文…………… (2~6)
- C類：斜~縦位に走る中~大型の楕円形押型文…… (7~13)
- D類：斜~縦位に走る粗大な楕円形押型文…… (14~20)
- E類：縦走する粗大な山形押型文…………… (21~22)

A類 (1) P502 出土品で、外面に $4 \sim 5 \times 3 \sim 2$ mm の小さな穀粒文押型文を横位に施す。内面はナデており、薄手で胎土に粗砂粒をいくらか含む。焼成不良で外面は黒色、内面は暗黄灰褐色をなす。

B類 (2~6) 2は、P73 出土品で、外面に $7 \sim 6 \times 5 \sim 4$ mm の中程度の楕円形押型文を横位に施す。内面は磨滅しており、薄手で、胎土に粗砂粒を僅かに、細砂粒をいくらか含み、焼成不良で内面は黒色、外面はこげ茶色をなす。3は、西南トレーナー中央暗褐色土出土品で、外面に $7 \sim 8 \times 4 \sim 5$ mm の楕円形押型文を横位に施し、内面は丁寧な横位ナデ、胎土に粗砂粒を多く含む。焼成やや良好で、内面は淡黄褐色、外面はこげ茶色をなす。器壁が厚く C類的である。4は、南端トレーナー出土品で、 10×5 mm の横位楕円形押型文を施し、内面は横位にナデしている。胎土に粗砂粒を僅か、細砂粒をいくらか含み、焼成やや不良で内外面ともに暗茶褐色をなす。部厚く、D類になるかもしれない。5は、南側下段包含層出土品で、 8×6 mm の横位楕円形押型文を施し、内面はナデかと思われる。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成やや良好で内外面ともに黄灰褐色をなす。厚手であり、C類に入れた方が良いのかもしれない。6は、西半下段包含層出土品で、 7×5 mm の横位楕円形押型文を施すが、かなり磨滅している。内面はナデているが凹凸がある。胎土に粗砂少々、細砂粒をいくらか含む。焼成良好で、外面は淡茶色、内面は暗茶~黒褐色をなす。

C類 (7~13) 7は、No. 80と No. 179 とが接合したもので、復原口径36cmの大型品である。口唇面に原体押圧刻目を施し、外面には横→斜位の $10 \sim 8 \times 5 \sim 4$ mm の楕円形押型文を、口縁内面上端には縦位の原体押引きによる短線が、その下に接して横位の粗大な山形押型文が巡らされている。胎土に細砂粒を多く含み、焼成不良で内面は肌色~灰黒色、外面はこげ茶色をなす。8は、南西端包含層 II-2 層出土品で、 8×5 mm の縦位楕円形押型文を施すが下半はかなり消えている。内面はナデで、胎土に角閃石が目立ち、黒曜石小片 2 点も含む。焼成やや不良で、外面は淡褐色、内面はこげ茶色をなす。9は、No. 14で、外面に縦位の $8 \sim 9 \times 5 \sim 6$ mm の楕円形押型文を施し、内面は丁寧にナデしている。胎土に粗・細砂粒を多く含み、焼成不良で内面は灰黒色、外面は暗茶褐色~こげ茶色をなす。10は、西側下段包含層出土品で、 8×6 mm の縦位の楕円形押型文を施し、内面は指押さえの凹凸が多くみられる。細砂粒を多く含み、焼成不良で内面は淡褐色、外面は淡褐色~灰色をなす。11は、西半下段包含層出土品で、 $7 \sim 8 \times 5$ mm の縦位の楕円形押型文を施す。胎土にかなり粗砂粒を含み、焼成やや不良で内面は橙褐色をなす。



第 24 図 包含層他出土押型文土器実測図 ② (1/3)

色、外面は淡灰茶色をなす。12は、南西端包含層Ⅱ-1層出土品で、外面に 9×6 mmの斜位の梢円形押型文を施し、内面はナデで指押さえ痕がみられる。胎土は大旨精良で、内外面ともに黄茶色をなす。13は、南西端包含層Ⅱ-2層出土品で、外面に 9×4 mmの梢円形押型文を斜位に施し、内面は凹凸が多くナデかと思われる。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成やや良好で、内面は暗黄茶褐色、外面はこげ茶色をなす。

D類 (14-20) 14は、南端トレンチ出土品で、内外面に 10×6 mmの横位梢円形押型文を施す口縁部片である。胎土に細砂粒をいくらか含み、焼成やや不良で、内面は淡褐色、外面はこげ茶色をなす。15は、No. 49で、外面に $14-12 \times 7-6$ mmの粗大な梢円形押型文を斜行させ、上端付近はナデ消している。内面はナデで、斜位の長い沈線が 2.5 cm間隔に施されている。胎土に粗砂粒をかなり含み、焼成良好で内面は暗茶褐色、外面は煤が付着してこげ茶色となる。16は、南端トレンチ出土品で、 $15-13 \times 10$ mmの菱形に近い異様に粗大な梢円形押型文を斜位に施し、内面上端には丸い棒状の原体を押圧した縦位の短線がみられる。胎土に粗砂粒をいくらか、細砂粒を多く含み、焼成不良で内面は淡褐色、外面は黒色をなす。17は、南西端包含層Ⅱ-2層出土品で、 10×5 mmの斜位の梢円形押型文を施す。胎土に細砂粒を多く含み、焼成不良で内面はこげ茶色、外面は黄褐色をなす。18は、南西端包含層Ⅱ-2層出土品で、17と同一個体と思われる。19は、南西端包含層Ⅱ-2層出土品で、 $13-11 \times 9-8$ mmの梢円形押型文を縦位に施す。粗砂粒をわずか、細砂粒をかなり含み、焼成やや良好で内面は黄茶色、外面はこげ茶色をなす。20は、No. 42で、 $13-12 \times 9-8$ mmの縦位梢円形押型文を施し、内面は横位ナデである。胎土に細砂粒をかなり含み、焼成やや良好で内面は淡褐色、外面は暗赤茶～暗褐色をなす。

E類 (21-22) 21は、南端トレンチ東端茶色粘質土出土品で、外面に縦位の粗大な山形押型文を施す。右半分は施文されていない。内面はナデか。胎土に粗砂粒をかなり含み、焼成不良で内面は暗褐色、外面は赤～淡褐色をなす。22は、南端トレンチ出土品で、外面に縦位の粗大な山形押型文を施している。厚手で、胎土に粗・細砂粒を多く含み、焼成やや不良で外面は黒褐

色、内面は茶褐色をなす。

以上の押型文土器のうち、A類だけは押型文前半期のものであるが、他はすべて後半段階と考えた方がよい。特にD・E類は、押型文単独時期内では最新段階に位置付けられる。ただし、この類でも以後の手向山式土器との継がりは見出しえない。

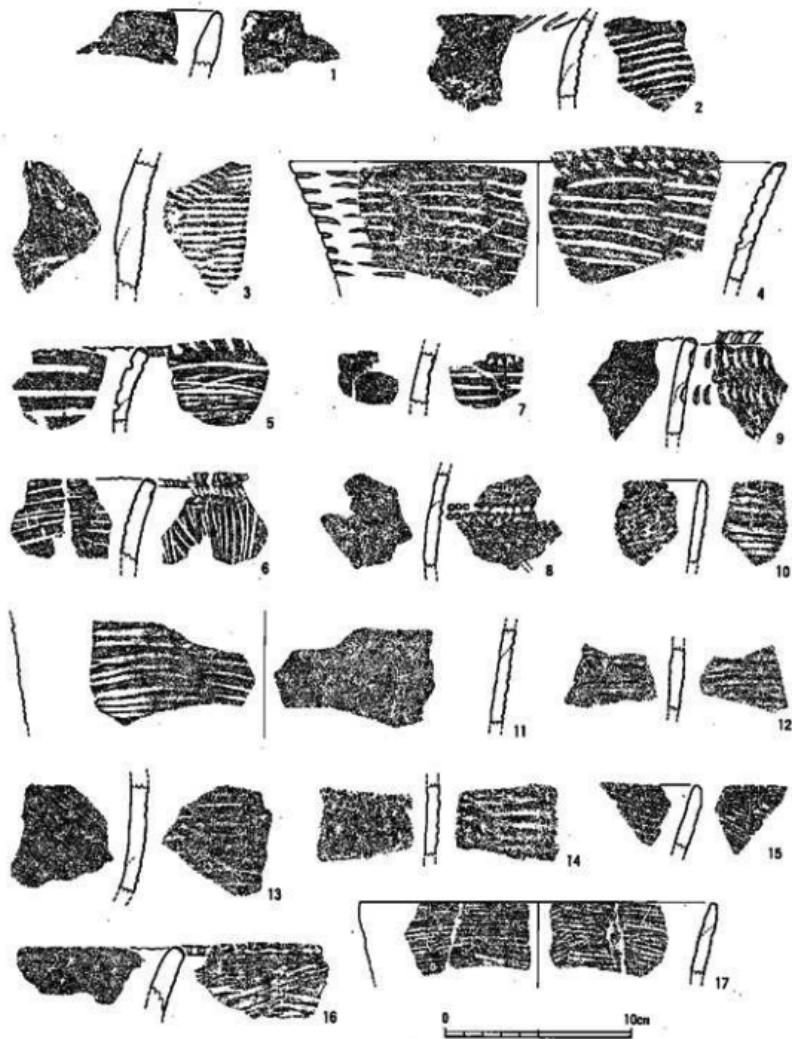
その他の早・前期土器（第25・26図、図版24・25）

無文土器（1）早期押型文土器に伴う厚手無文土器と思われる。他にこの種の破片は殆ど目につかなかった。1号墳の西側下段包含層出土品で、厚さ1.2cm。外面はやや雜な横位ナデ、内面も横位ナデであるが下端は横位擦過状をなす。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成不良で内外面ともに淡茶褐色をなす。

撚糸文土器（2）1号墳の西側下段包含層出土品で、外面にやや左下がり横位の撚糸文を施す。内面上端には指頭によると思われる斜位の凹線を連続させる。以下内面はナデ。胎土に粗砂粒をかなり含み、焼成良好で内面は暗紫褐色、外面は茶褐色をなす。早期の押型文D・E類と平行する新期のものであろう。

厚手条痕文土器（3）大きな波長をもつ二枚貝横位条痕を施す厚手土器（1.6～1.2cm）で、早期末段階に位置付けられる。条痕は上半で斜位になっていたり、一部が切れ切れになっており、前期の轟A式やD式に継がる様相を持っている。南西端包含層II-2層出土品で、内面は縦位のナデ上げで凹凸が多い。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で内面は明茶色、外面は暗い肌色をなす。器形は押型文新期段階と同様の口が開いたものとなろう。

轟D式1類系土器（4～7）もちろん轟貝塚出土の同類とはかなり趣きが異なるが、外面と内面上半に切れ切れになる明らかな沈線による横位平行文を持つものをここにまとめた。各々バラエティーに富むが、当然曾畠式土器とも関連してゆく重要な類である。また、同様に外面に切れ切れの横位平行線文を構成する10～14については、条痕文的施文類として一応分離した。4は、No. 281で、復原口径26.6cmとなりやや直線的に開く。口唇上面と内面直下に刺突連点文を施し、内面の5.5cm下まで長さ5～5.5cmの短線を、外面には長さ3～4cmの横位短線を施している。胎土に粗・細砂粒を多く含み、角閃石が目立っている。焼成良好で、内面は褐色、外面はこげ茶色をなす。5は、P119出土品で、口唇面に深めの棒押圧による刻目を施す。内面には切れ切れになると思われるしっかりした沈線を入れ、外面は口縁直下に1条の沈線を巡らし、それ以下は横位アナグラ条痕が施されている。胎土に細砂粒をかなり含み、焼成やや良好で、内面は茶～黒色、外面は黒色をなす。6は、2号墳西包含層出土品で、口唇上面に浅い棒押圧による刻目を施している。外面直下には細身の工具端による密な刺突文が施され、外面には縦位の雜な細身の沈線を、内面には切れ切れになる雜な細身の沈線文を施している。滑石無しの曾畠式土器に関連する重要な土器である。胎土に細砂粒をかなり含み、焼成やや良好



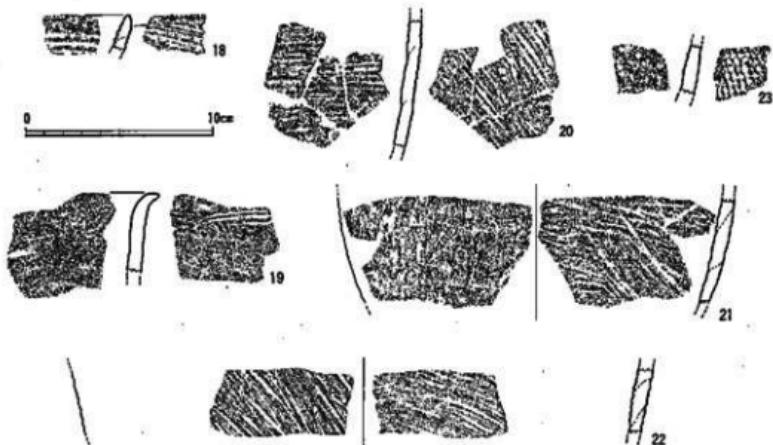
第 25 図 包含層他出土繩文早・前期土器実測図① (1/3)

で内面は暗褐色、外面は黒褐色をなす。7は、P135出土品で、上端に刺突連点文、それ以下に横位の切れ切れになる沈線を施している。胎土には細砂粒をいくらか含むのみで、焼成不良で内面は暗褐色、外面はこげ茶色をなす。内面は丁寧にナデている。

刺突文土器（8・9）各々全く違うタイプと思われるが、小さな刺突連点文下に斜位の直線沈線を施すものと、爪形文を連続させるものである。8は曾畠式土器に関連するものであろう。9も爪形状刺突連続文であって、前期後半代におけるバリエーションのひとつと考えられる。8は、No. 145と2号墳西包含層出土品とが接合したもので、外面は横位条痕の上に2段の小さな刺突連点文を施し、その下には斜めの1本の沈線が認められる。直線を大きく斜位に交叉させる類となろうか。内面はナデており、胎土に細砂粒をかなり含み、焼成やや不良で、外面は黒色、内面は茶褐色をなす。9は、P32出土品で、口唇上面に斜位のヘラ刻目を施し、外面には2段の爪形状刺突連続文を施す。縦の長さ10mm、幅2-3mm、深さ2mm程度で、中に仕切り状の高まりがみられる。内面上半は横位ナデ、下半は横位擦過状の調整がなされる。胎土に細砂粒を多く含み、焼成やや良好で内面は茶～黒色、外面は茶～褐色をなす。

条痕的彫D1類系土器（10～14）変な名前を付けたが、ここでの分類上の便宜によるもので、正式型式名の検討は別に行う。外面の切れ切れになる横位平行施文が、1本ずつの沈線によりはっきりと施される類ではなく、二枚貝腹縁や他の原体により、浅く地文的に条痕的に施される類をここにまとめた。もちろん4～7や曾畠式との関連が考慮されるべき重要な土器である。10は、No. 540で、内面は横位条痕の上をナデしており、外面の横位原体条痕は右端が切れている。胎土に細砂粒を多く含み、焼成不良で外面は黒褐色、内面は淡褐色をなす。11は、No. 144で、復原胴部径27cmと大きめで、外面には二枚貝条痕が切れ切れに施される。内面はナデで、細砂粒を多く含み、焼成やや良好で内面は暗褐色、外面は黒褐色をなす。12は、西下半段包含層出土品で、内面は横位条痕、外面には内面より太めの条痕が切れ切れに施される。胎土に細砂粒を多く含み、焼成不良で内外面ともに黒褐色をなす。13は、南西端包含層II-3層出土品で、内面は丁寧なナデ、外面には細身の切れ切れの沈線（間隔の空いた条痕か）を入れている。胎土に粗砂粒を少量、細砂粒を多く含み、焼成良好で内面は淡褐色、外面は明茶～暗茶色をなす。14は、1号墳裏込め出土品で、かなり磨滅しているが、内面はナデ、外面には太めの原体による切れ切れの横位条痕がみられる。胎土に細砂粒を多く含み、焼成やや良好で内外面ともに淡褐色をなす。

条痕文土器（15～22）15は、1号墳西側下段包含層出土品で、内面は条痕をナデ消しており、外面は斜位条痕を施している。胎土に細砂粒をいくらか含む。焼成良好で内面は茶色、外面は暗茶色をなす。16は、南西端包含層II-2層出土品で、口唇上面に浅めの棒押圧刻目を施す。内面はナデでやや凹凸がある。外面は横位条痕をやや雜に施している。胎土に粗・細砂粒をかなり含み、焼成良好で内面は白褐色、外面は淡褐色をなす。繩文後期の可能性もある。17は、



第 26 図 包含層他出土縄文早・前期土器実測図② (1/3)

No. 512で、復原口径19.1cmの小ぶり品となる。内外面ともに横位アナグラ条痕を施す。胎土に細砂粒をいくらか含み、焼成良好で内面は暗黄褐色、外面は黒褐色をなす。18は、P157出土品で、内外面ともにアナグラ条痕を施す。胎土に粗砂粒をかなり含み、焼成不良で内外面とも黒色をなす。19は、1号墳の西側下段包含層出土品で、口縁が外反する異類で、他時期のものかもしれない。口縁直下の外面に横位条痕が1単位分みられ、以下の外面と内面はナデている。胎土に細砂粒を多く含み、焼成不良で内面は暗黄茶～こげ茶色、外面は黒色をなす。20は、No. 330で、内面は横位の、外面は斜位のアナグラ条痕を施し、焼成良好で内面は明橙褐色、外面は暗褐色で下半に煤が付着している。胎土に角閃石がかなり目立ち、細砂粒をかなり含む。21は、No. 215で、内面は横～斜位条痕、外面は継位条痕を施している。胎土に細砂粒を多く含み、焼成不良で内面は黒褐色、外面は暗茶褐色をなす。22は、No. 40で、内外面ともに斜位条痕を施し、径が31cm以上と大きい。胎土に細砂粒を多く含み、焼成やや良好で、外面は淡茶褐色、内面は暗黄褐色をなす。

縄文土器 (23) 南端トレンチ出土品で、磨滅しているが、外面に斜位縄文を施す。胎土に細砂粒を少量含み、焼成良好で外面は暗褐色、内面は茶褐色をなす。

縄B式土器 (第27~38図、図版26~36)

本遺跡からは多量の縄B式土器が出土しており、本遺跡の主体をなす。この出土量からみると、縄文期の不明遺構のうちのかなりの数のものがこの時期と考えられる。土器は、外面の隆

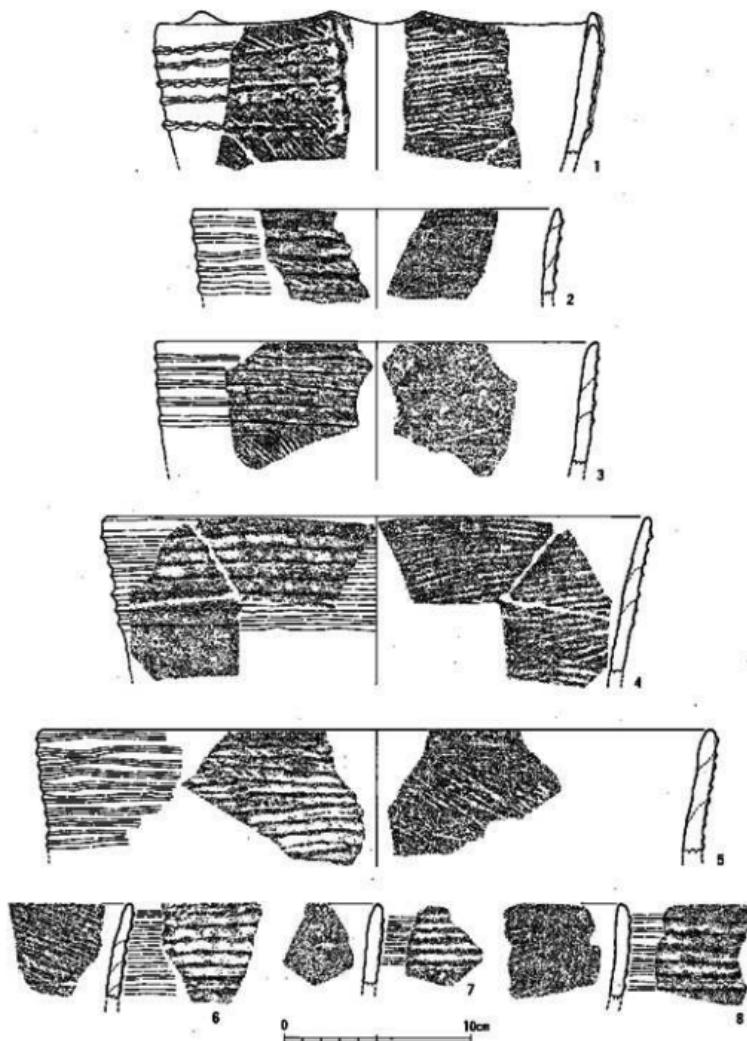
線帯の状況等により、以下の7類に細分できる。なお、胸部片や底部近くの破片については、個別の説明の中で類別を記す。

- 1類：縦位の隆線を持ち、指つまみ状につくるもの……………(1)
- 2類：低く細身の隆線が連接して密に施されるもの……………(2~29)
- 3類：細身でシャープな隆線が間隔をおいて付けられるもの…(30~80)
- 4類：隆線がやや大きめの中程度のもの……………(81~96)
- 5類：隆線が細身の断面カマボコ形のもの……………(97~104)
- 6類：隆線が太い断面カマボコ形のもの……………(105~110)
- 7類：隆線が曲線文帯をつくるもの……………(111~147)

ただし、上記の細分類のうち7類は、分類の視点が違うため、隆線の断面形態でみると、2~5類のものがほぼ含まれている。更に7類中の曲線文様の構成や隆線間の幅の違いなどで、細かく分けることは可能である。しかし、全体の分類の過程の中での様相を見つめていると、大きく3段階に分ける方が本遺跡資料内では適切であると考えられる。即ち、1類、2~5・7類、6類の3段階である。時期的なものや曾畠式土器等との共伴関係については、この3段階を踏まえた上で、まとめの項で検討したい。

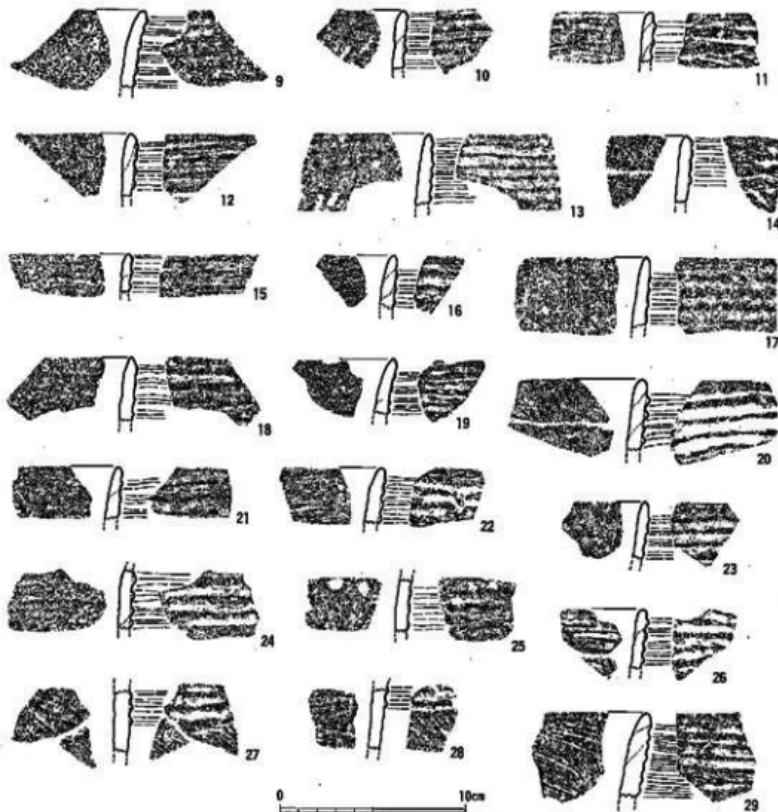
1類(1) No. 17で、内湾気味に外傾して立ち上がる器形で、口縁部の方が厚く丸くなっている。口径23.8cmに復原され、數は不明だが小さな山形突起部がみられ、その外面に縦位の指つまみの隆線が付けられる。5条の横位平行隆線も指つまみ痕が特徴的である。内面には横位条痕、外面地文にも粗い斜位条痕を残したままで、胎土には微細砂は多く含むが、所謂砂粒は含んでいない。焼成はやや良好で、外面は黒色、内面は暗褐色をなす。

2類(2~29) 2は、西南端包含層Ⅱ-1層出土品で、復原口径19.6cmとやや小ぶりである。僅かに外反気味に開く頃である。内面は横位条痕の上をナデしており、胎土に細砂粒をいくらか含み、焼成良好で、内面は白茶褐色、外面は明茶色をなす。3は、復原口径23.8cmとなるP168出土品である。低くてシャープな連接する隆線を5条付ける。胸部外面は斜位条痕、内面は横位条痕の上を横ナデ、胎土に粗砂少量、細砂粒を多く含む。焼成良好で内面は暗褐色、外面はこげ茶色をなす。4は、No. 142・148・149が接合したもので、復原口径29.5cmとなる。7条の細身の連接した隆線を付ける。内面は横位アナグラ条痕が施され、焼成不良で内面はこげ茶色、外面は黒褐色をなす。5は、南西端包含層Ⅱ-2層出土品で、10条の連接した細身の隆線文を施すが、やや乱れている。口唇部内外面は横ナデ、内面上端付近は横位の、それ以下は斜位の条痕を施す。胎土に粗砂粒をいくらか、細砂粒を多く含む。角閃石が目立つ。焼成良好で内面は茶一暗褐色、外面は煤がこびりついて黒色をなす。復原口径36.4cmの大形品となる。6は、南端トレンチ東端茶色粘質土出土品で、7条の小さい隆線を連接させている。内面は斜位条痕、胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で内面は茶褐色、外面は暗茶褐色をなす。



第 27 圖 包含器他出土器物實測圖① (1/3)

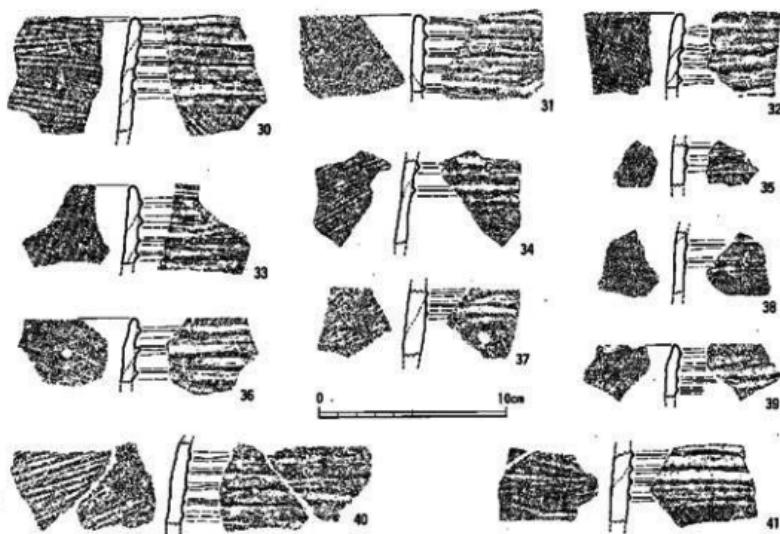
7は、No. 143で、極めて低く密接した5条の隆線を施したもので、内面はナデか。胎土に細砂粒をかなり含み、焼成良好で内面は暗黄灰～淡茶色、外面は茶色をなす。8は、No. 418で、やや内湾気味に立ち上がり、極めて低い隆線6条を連接して付ける類である。内面は横位条痕で、細砂粒をいくらか含み、焼成不良で内面は淡黄白～黒色、外面は黄白色をなす。9は、No. 377で、内外面ともに磨滅著しく、6条の隆線もシャープさが無くなっている。細砂多く含み、焼成不良で内面は暗茶褐色、外面は黒褐色をなす。10は、西半下段包含層出土品で、5条の連接したシャープな隆線を付ける。胎土に細砂粒を多く含み、焼成やや良好で、内外面とともに暗灰褐色をなす。11は、西半下段包含層出土品で、内面は横位条痕の上をナデている。細砂粒をかなり含み、焼成良好で内面は暗黄褐～暗褐色、外面は黒褐色をなす。12は、西半下段包含層出土品で、内面はナデている。胎土に細砂多く含み、焼成良好で内外面ともに濃灰褐色をなす。13は、No. 172で、6条のとても密に連接する隆線文を付ける。内面はナデで、細砂粒を多く含み、焼成不良で内面は暗褐色、外面はこげ茶色をなす。14は、No. 374で、4条の連接する隆線を付けるが、磨滅してかなり低くなっている。内面はナデで、細砂粒をかなり含み、焼成良好で内面は暗黄茶色、外面はこげ茶色をなす。15は、No. 117で、内面は横ナデで、胎土に細砂多く含み、焼成良好で、外面はこげ茶色、内面は暗灰褐色をなす。16は、P78出土品で、内面は横位条痕の上をナデしている。胎土精良で、焼成良好で外面は黒褐色、内面は暗褐色をなす。17は、No. 326で、極めて磨滅しており、4条の隆線も低くなっている。細砂粒を多く含み、焼成良好で内外面ともに淡橙褐色となる。18は、南西端包含層II-1層出土品で、低いがシャープな4条の隆線を付け、焼成やや良好で内面は暗褐色、外面は黒褐色をなす。内面はナデしており、胎土に細砂粒をかなり含む。19は、西南端包含層II-1層出土品で、極めて低い隆線を付け、内面はナデしている。胎土に細砂粒をいくらか含み、焼成良好で内外面ともに暗黄褐色をなす。20は、No. 468で、内面は丁寧なナデ、細砂粒を多く含む。焼成やや良好で外面はこげ茶色、内面は暗黄茶色をなす。21は、西半下段包含層出土品で、隆線は磨滅して低くなっている。内面はナデ、胎土に細砂粒をいくらか含み、焼成良好で内面は黒褐色、外面は暗茶褐色をなす。22は、西半下段包含層出土品で、内面は横位条痕を施す。粗・細砂粒を多く含み、焼成良好で内面は淡灰褐～淡茶色、外面は暗褐色をなす。23は、No. 459で、内面はナデしており、やや凹凸がみられる。器壁が薄く、つまみ出したような隆線文で、特殊な小型品となりそうだ。細砂粒をいくらか含み、焼成良好で内面は暗黄茶色、外面は暗茶色をなす。24は、西半下段包含層出土品で、内面は横位条痕、胎土に粗・細砂粒をかなり含む。焼成やや不良で内面は淡褐色、外面は黒褐色をなす。25は、西半下段包含層出土品で、外面の隆線は磨滅して低くなっている。内面はナデで、2ヶ所に指頭圧痕がみられる。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で、内面は暗茶褐色、外面は黒褐～暗褐色をなす。26は、No. 509で、内面は横位条痕を施す。細砂粒をかなり含み、焼成やや不良で内面は黒色、外面は暗褐色をなす。27は、



第28図 包含層他出土蔵式土器実測図② (1/3)

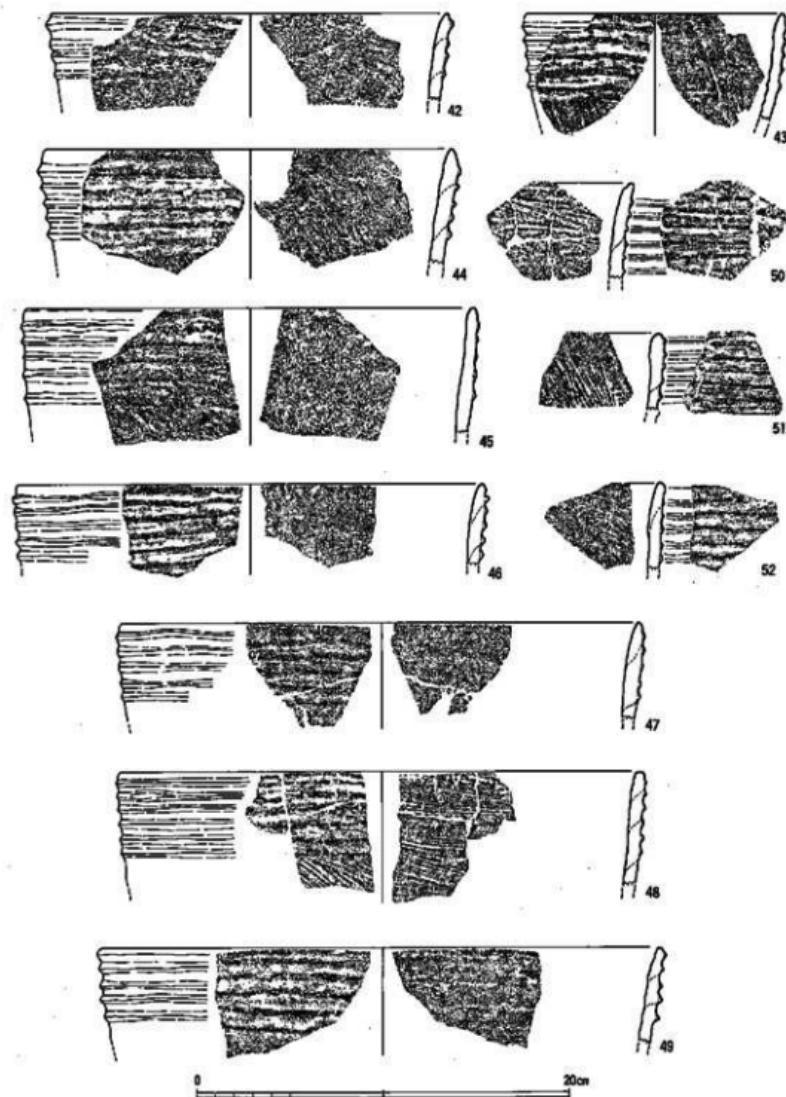
No. 526で、内面は強い斜めナデで、外面胴部は斜位条痕を施す。細砂粒を多く含み、焼成良好で内面は暗褐色、外面は黒褐色をなす。28は、4号土壙（歴史時代土壙墓）内の混入品で、内面は横位条痕の上をナデ、外面は斜位条痕の上をナデている。粗・細砂粒をかなり含み、焼成良好で内面は淡褐色、外面は明茶色をなす。29は、1号壙の西側下段包含層出土品で、7条の隆線は密接しており、低くて太い凹線文のような感じを受ける。内面は右下がり斜位の条痕を施し、胎土には微細砂粒をかなり含む。焼成はやや良好で、内外面ともにこげ茶色をなす。

3類 (30-80) 細身でシャープな隆線が間隔をおいて付けられた類である。30は、No. 37で、



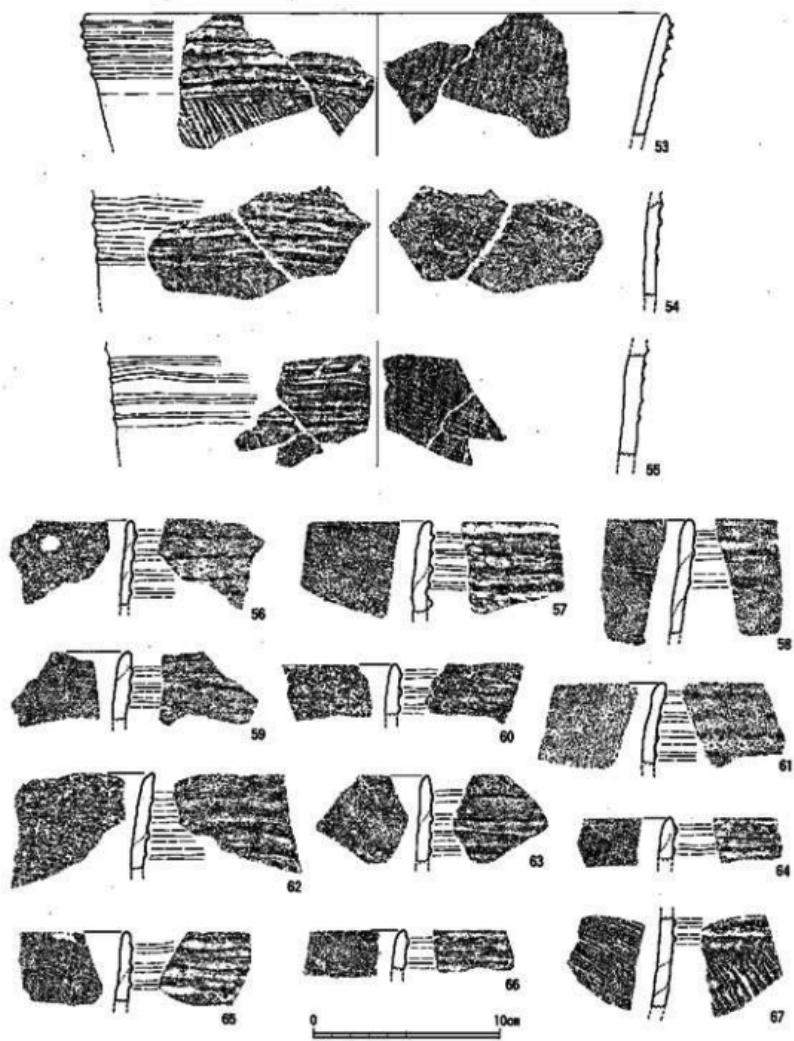
第 29 図 包含層出土器実測図③ (1/3)

かなりシャープな隆線 5 条を付け、口唇部が平坦面をなし、直口する類である。内面は横位条痕、外面は斜位条痕の上をナデしており、胎土に細砂粒をいくらか含む。焼成やや不良で、内外面ともに茶褐色をなす。31は、No. 104で、細身でシャープな 5 条の隆線を付ける。内面は磨滅しており、細砂粒をかなり含み、角閃石が目立つ。焼成やや良好で、外面はこげ茶、内面は暗茶褐色をなす。32は、西半下段包含層出土品で、指つまみ状の隆線を付ける。内面は丁寧にナデしており、細砂粒多く含み、焼成良好で内外面ともに明茶褐色をなす。33は、西南端包含層 II-1 層出土品で、高くしっかりシャープな隆線を付ける。内面はナデ、粗・細砂をかなり含み、焼成やや不良で内外面ともにこげ茶色をなす。34は、西南端包含層 II-3 層出土品で、極めてシャープな隆線を付ける。内面はやや斜位の条痕、外面は丁寧な横ナデを施す。胎土に細砂粒をわずかに含むがかなり精良で、焼成やや良好で内面は黒色、外面はこげ紫色をなす。35は、南西端包含層 II-2 層出土品で、シャープでしっかりした隆線を付ける。内面は丁寧なナデ、外面は斜位条痕を施す。細砂粒を多く含み、焼成不良で、内面は灰黒色、外面は黒褐色をなす。36は、No. 211で、シャープな隆線を付け、内面はナデしている。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で内面は茶褐色、外面は黒褐色をなす。37は、表採品で、極めて低く小さい隆線を付け、以下外面は斜位条痕をナデ消している。内面は雑なナデか。細砂多く含み、焼成良好



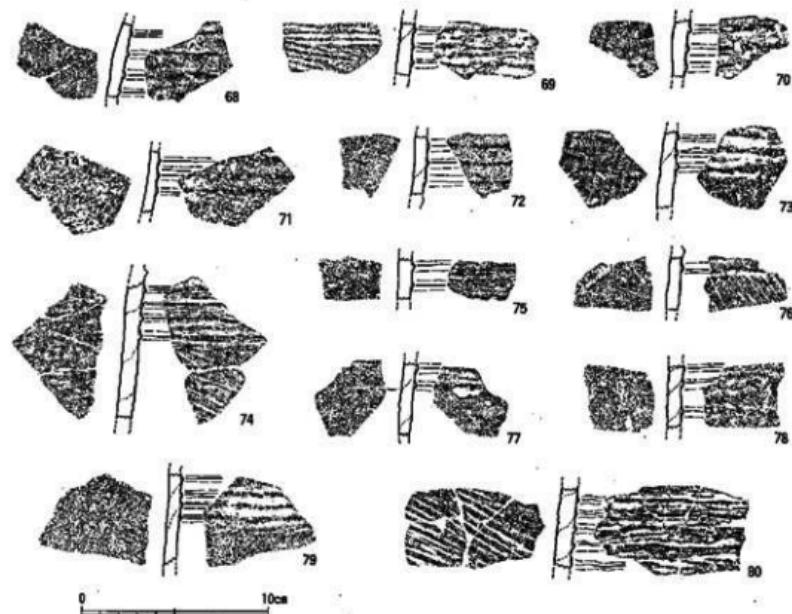
第 30 図 包含層他出土縄式土器実測図④ (1/3)

で内面はこげ茶色、外面は茶褐色で煤が付着している。38は、P61出土品で、低くシャープな隆線を付ける。内外面ともに丁寧なナデで、細・粗砂粒をかなり含む。焼成不良で内面は黒褐色、外面は暗褐色をなす。39は、P100出土品で、器壁が薄く、小さく低い隆線を付ける。内面はナデ、胎土に細砂粒をかなり含む。焼成良好で、外面は茶色、内面は暗茶褐色をなす。40は、P58出土品で、低くやや雑な隆線を付ける。内面は横位条痕で、胎土に粗・細砂粒をかなり含む。焼成不良で内外面ともに黒色をなす。41は、No. 36で、細身で丁寧な隆線となる。内面は横位条痕で、細砂粒をかなり含み、焼成良好で外面は黒褐色、内面は暗褐色をなす。42は、No. 57で、4条の隆線を付ける中型類であるがかなり磨滅している。復原口径21.2cmで、内面はナデ調整か。細砂粒をいくらか含み、焼成不良で内外面ともに黒褐色をなす。43は、No. 107で、復原口径13.6cmの小型品となる。5条の隆線を付け、以下外面はナデ、内面は磨滅しているが横位条痕であろう。胎土に雲母をかなり含み、焼成良好で内面は茶褐色、外面はこげ茶色をなす。44は、No. 267で、5条の隆線を付ける中型品である。復原口径21.8cmで、内面は斜位条痕を横ナデで消しており、外面胴部も斜位条痕をナデ消している。胎土に粗・細砂粒を多く含み、焼成不良で内面は灰黄褐色、外面はこげ茶色をなす。45は、No. 528で、復原口径24cmの中型品となる。5条の低い隆線を付け、内面はナデか。胴部外面は斜位条痕を施し、胎土に粗砂粒を少量、細砂粒をかなり含む。角閃石が目立つ。焼成不良で、内面は暗黄灰褐色、外面は下半分に煤がこびりつき、黒褐色をなす。46は、No. 141で、復原口径25cmの中型品で、内面は丁寧にナデしている。胎土に細砂粒を多く含み、焼成やや不良で、内面は茶～灰黑色、外面は淡茶色をなす。47は、No. 265で、口径28cmの中型品である。低い5条の隆線を付け、内面は丁寧にナデしている。胎土に細砂粒を多く含み、焼成やや不良で内面は黒褐色、外面は暗灰褐色～茶色をなす。48は、No. 162で、復原口径28.3cmの中型品となる。わりとシャープな6条の隆線を付け、内面は横位条痕、外面は斜位条痕を施す。胎土に細砂粒をかなり含み、焼成不良で内面は黒～一部明茶色、外面は暗茶褐色をなす。49は、No. 461で、30.4cmの復原口径の大型品となる。内面はナデか。粗砂いくらか、細砂粒を多く含み、角閃石が目立つ。焼成やや良好で内面は淡茶～灰黑色、外面は明淡茶色をなす。50は、2号墳掘方内出土品で、6条の細身の隆線を付け、外反状に開く類となる。内面上半は横位条痕、下半はナデ消している。胎土に細砂粒をかなり含み、焼成不良で内外面ともに暗黄褐色をなす。51は、西南端包含層II-3層出土品で、内面は斜位条痕を施す。細砂粒を多く含み、焼成やや良好で、内面は暗褐色、外面は黒褐色をなす。52は、No. 392で、低く小さな隆線を付けるがかなり磨滅している。内面は擦過状で斜位条痕か。細砂粒を多く含み、焼成良好で内面は暗黄～灰黑色、外面は淡茶褐色をなす。53は、西南端包含層II-1層出土品で、復原口径31cmの大型品となる。5条のシャープな高い隆線を5条付け、内面は丁寧な横ナデを施す。胴部外面は斜位条痕を施し、全体に薄手精製品である。胎土に粗砂少量、細砂粒をいくらか含む。焼成不良で、内面は暗褐色、



第 31 圖 包含層他出土新式土器実測図⑤ (1/3)

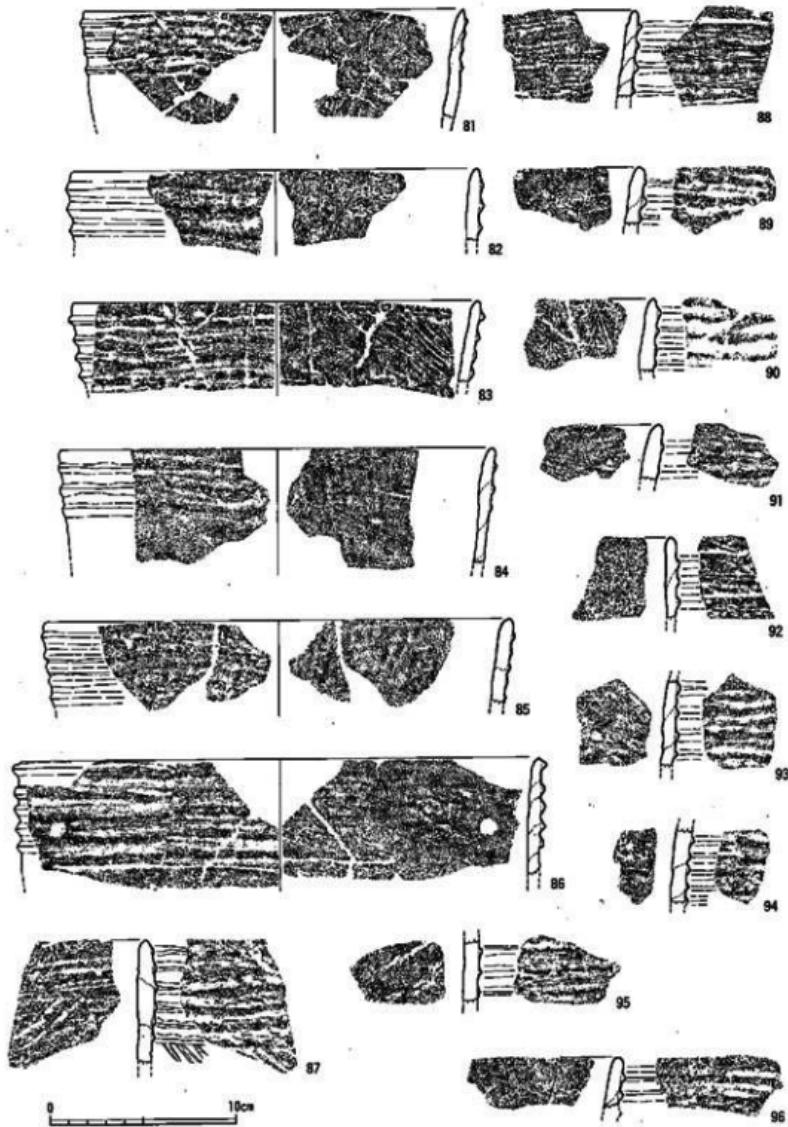
外面は黒褐色をなす。54は、No. 340で、口径30cm以上となる大型品であろう。内面はやや斜位の条痕をナデ消しており、外面も斜位条痕の上をナデしている。粗砂かなり、細砂多く含み、焼成良好で内面は灰褐一灰黑色、外面は暗褐色をなす。55は、1号墳の西側下段包含層出土品で、内面はやや斜位の条痕の上をナデしている。胎土に細砂粒をかなり含み、角閃石の微細粒が目立つ。焼成不良で、内外面ともに暗茶褐色をなす。56は、No. 360で、全体に極めて磨滅しており、隆線も低くなっている。粗・細砂粒が多く含み、焼成やや不良で、内面は灰茶褐色、外面は暗茶褐色をなす。57は、No. 484で、内面はナデしている。粗・細砂をかなり含み、焼成やや良好で内面は暗灰褐色、外面は黒褐色をなす。58は、西半下段包含層出土品で、隆線3条はかなり磨滅して低くなっている。内面は横位条痕の上をナデしている。細砂粒を多く含み、焼成やや不良で、内外面ともにこげ茶色をなす。59は、西半下段包含層出土品で、低く雑な隆線を付ける。内面はナデか。胎土に粗砂少量、細砂粒を多く含む。焼成不良で内面は黒色、外面は暗褐色をなす。60は、No. 374で、内外面ともに極めて磨滅しており、隆線も低くなっている。粗砂いくらか含み、焼成やや良好で内面は暗灰褐色、外面は暗茶褐色をなす。61は、No. 159で、内外面ともに磨滅著しく隆線も低くなっている。粗・細砂粒をかなり含み、焼成不良で内外面ともに暗灰褐色をなす。62は、No. 388で、外面は極めて磨滅しており、隆線も低くなっている。内面は横位条痕、胎土に細砂粒を多く含み、角閃石が目立つ。焼成不良で内外面ともに淡黄褐色をなす。63は、西半下段包含層出土品で、磨滅して隆線はかなり低くなっている。内面はナデしており胎土に粗・細砂粒を多く含む。焼成やや良好で、内面は淡茶褐色、外面は暗褐色をなす。64は、No. 470で、内面は丁寧なナデで、胎土に粗・細砂粒をいくらか含む。焼成不良で内面は黒褐色、外面は淡褐色をなす。65は、No. 259で、内面はナデしている。胎土に細砂粒を多く含み、焼成やや良好で、内面は暗灰褐色、外面は黒灰褐色をなす。66は、No. 460で、内面はナデしている。胎土に粗・細砂粒をかなり含み、焼成不良で内面は暗灰褐色、外面は穢褐色をなす。67は、包含層出土品で、内面は横位条痕、外面は斜位条痕を施す。胎土に細砂粒を多く含み、焼成やや良好で内面は茶褐色、外面はこげ茶色をなす。68は、No. 238で、内面はナデしており、胎土に粗・細砂を多く含む。焼成不良で、内面は暗灰茶褐色、外面は茶褐色をなす。69は、No. 93で、内面は横位条痕を施す。焼成不良で内面は暗褐色、外面は黒褐色をなす。70は、No. 471で、内面はナデ、胎土に粗砂少量、細砂粒を多く含む。焼成不良で内面は灰褐色、外面は淡褐色をなす。71は、包含層出土品で、極めて磨滅著しく、隆線も低くなっている。粗砂粒をかなり含み、焼成不良で内面は暗茶色、外面は黒色をなす。72は、2号墳淡道部敷石下出土品で、内外面ともにかなり磨滅するが、内面はナデ、胎土に細砂粒を多く含む。焼成良好で内面は暗茶褐色、外面は黒褐色をなす。73は、南西端包含層Ⅱ-3層出土品で、内面は横位ヘラナデ、胎土に細砂粒をいくらか含む。焼成やや不良で内面は暗灰茶色、外面はこげ茶色をなす。74は、1号土墳への混入品で、内面は横位条痕をナデしており、外面は



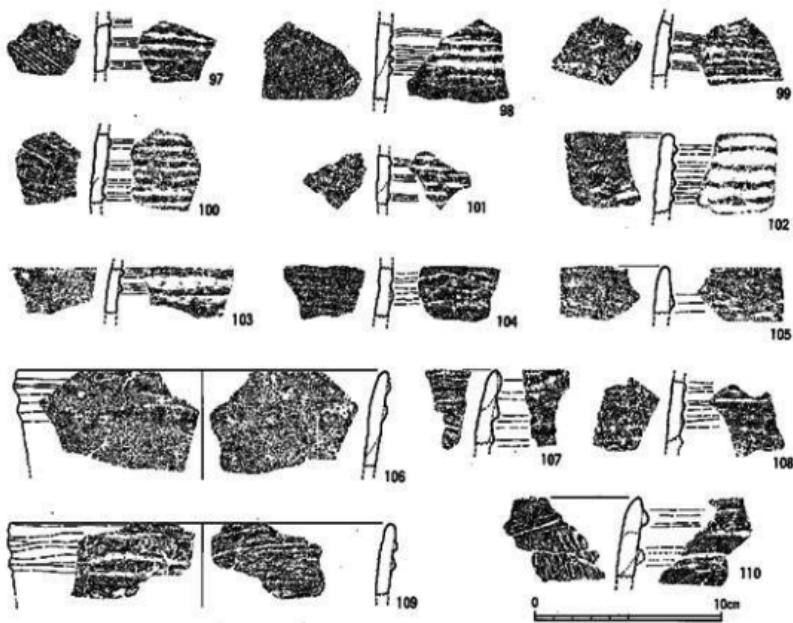
第32図 包含層他出土縄式土器実測図⑥ (1/3)

斜位条痕を施す。胎土に細砂粒を多く含み、焼成やや良好で内面は暗黄褐～暗褐色、外面は黒褐色をなす。75は、No. 471で、低くシャープさが無い隆線で、内面はナデている。胎土に細砂粒をかなり含み、焼成不良で、内外面ともに淡褐色をなす。76は、No. 135で、内面は条痕をナデ消しており、外面は斜位条痕を施す。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で内面は暗黄茶褐色、外面は暗褐色をなす。77は、No. 487で、内外面ともにナデており、胎土に細砂粒をかなり含む。角閃石が目立つ。焼成良好で内外面ともに淡橙褐色をなす。78は、No. 362で、隆線間に斜位条痕が残り、内面はナデか。粗砂少量・細砂多く含み、焼成不良で内面はこげ茶色、外面は暗茶色をなす。79は、No. 470で、かなり細身の隆線文となる。内外面ともにナデしており、粗・細砂粒を多く含む。焼成不良で、内面は暗茶褐色、外面はこげ茶色をなす。80は、No. 24で、内面は斜位の粗い条痕のままで、胎土に細砂粒をかなり含む。焼成不良で内面は暗褐色、外面は黒褐色をなす。

4類 (81～96) この類は隆線がやや大きめで中程度のものである。81は、西半下段包含層出土品で、4条の低めの隆線が連接している。復原口径20.4cmのやや小ぶりの中型品で、内面は丁



第 33 図 包含層他出土器実測図⑦ (1/3)



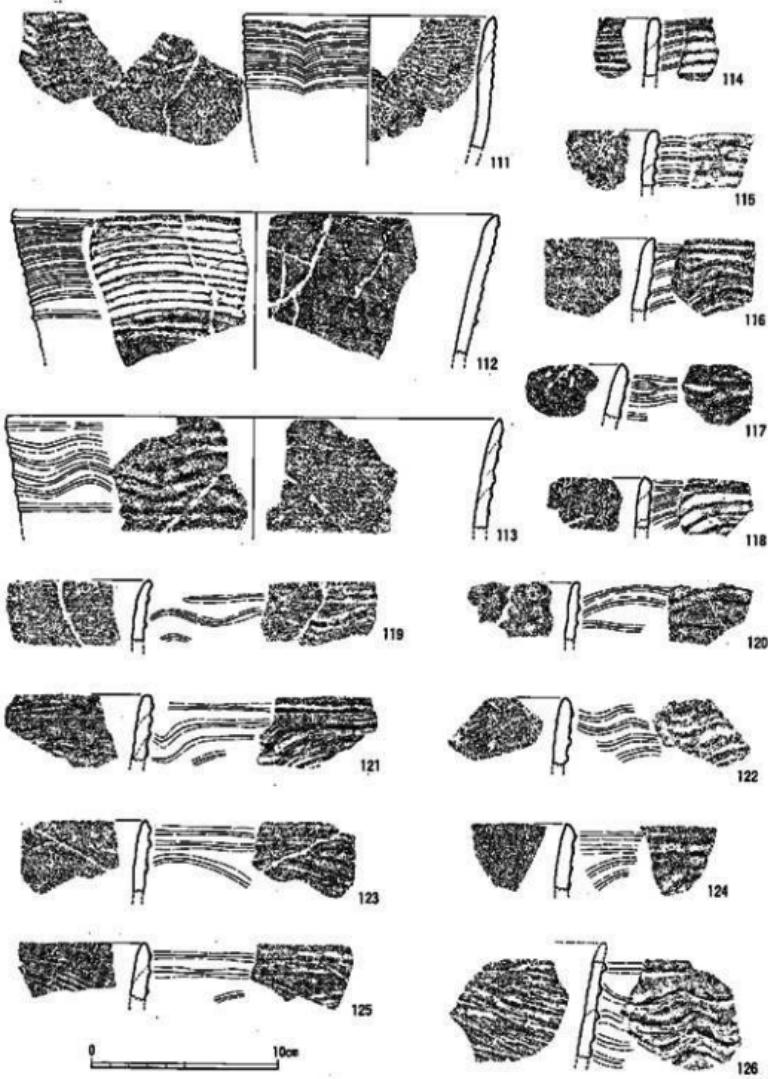
第34図 包含層他出土縦式土器実測図③ (1/3)

寧なナデ、外面はナデでいる。器壁が薄手で、隆線もやや乱れがちである。胎土に細砂粒を多く含み、焼成やや不良で、内面は淡茶～灰褐色、外面は煤が付着してこげ茶色をなす。82は、No. 178で、復原口径22cmの中型品となる。隆線はかなりシャープで、胎土に細砂粒をかなり含み、長石と角閃石が目立つ。内外面ともに磨滅しており、調整は不明。焼成良好で内面は暗黄褐色、外面は暗褐色をなす。83は、No. 267で、復原口径22cmの中型品となる。隆線のうち下3条は波打っており、7頸に含まれるのかもしれない。内面は斜位条痕を施し、細砂粒を多く含む。焼成不良で内外面ともに黒褐色をなす。84は、西下段包含層出土品で、復原口径23.5cmの中型品となる。3条の隆線は低いがシャープではない。内面は横位の丁寧なナデ、外面も横位ナデで仕上げている。胎土に粗・細砂粒をかなり含み、焼成不良で内面は黒褐色、外面は暗褐色をなす。85は、No. 477で、復原口径25.2cmのやや大ぶりの中型品となる。内面は丁寧なナデで、連接する隆線はかなり磨滅して低くなっている。粗・細砂粒を多く含み、焼成やや不良で、内外面ともに淡茶褐色をなす。86は、No. 420とNo. 421とが接合したもので、復原口径28cmの大型品となる。5条の隆線は高く、内面は横位の板ナデで擦過状となる。補修孔

が1ヶ所、両面から穿孔されている。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成やや不良で外面は濃褐色、内面は黒～淡茶褐色をなす。87は、No. 15で、内面は横位条痕の上に斜位のヘラ先痕がみられる。6条の隆線のうち、下の2条は指つまみによる。外面の隆線以下にも斜位のヘラ先痕がみられる。胎土に細砂粒をいくらか含み、焼成やや良好で内面は黄茶褐色、外面は煤が付着してこげ茶色になっている。88は、P135 出土品で、高い隆線だがあまりシャープではない。内面は横位条痕で、細砂粒をかなり含む。焼成良好で内面は肌色、外面はこげ茶色をなす。89は、包含層出土品で、内面はナデかと思われる。粗・細砂粒を多く含み、焼成不良で内面は暗灰褐色、外面は灰黑色をなす。90は、No. 344で、内面はナデ、隆線は太めで磨滅してかなり低くなっている。焼成良好で内面は茶褐～暗灰褐色、外面はこげ茶色をなす。細砂粒を多く含む。91は、西半下段包含層出土品で、内面は丁寧なナデ、胎土に粗・細砂粒をいくらか含み、焼成やや良好で、内面は橙褐色、外面は暗褐色をなす。92は、No. 348で、内面はナデ、口縁外面に横位条痕を残す。細砂粒を多く含み、焼成やや良好で、内面は暗茶色、外面は黒褐色をなす。93は、No. 378で、内面は横位の雑なナデで凹凸が多い。胎土に細砂粒を多く含み、角閃石が目立つ。焼成良好で内面は暗黄茶褐色、外面はこげ茶～暗茶色をなす。94は、南西端包含層Ⅱ-2層出土品で、内面は雑な横位ナデを施す。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で外面は肌色、内面は暗黄褐色をなす。95は、No. 471で、内面はナデており、細砂粒を多く含む。焼成不良で内面は灰褐色、外面は淡茶褐色をなす。96は、南西端包含層Ⅱ-3層出土品で、内面はナデている。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で内外面ともに暗茶褐色をなす。

5類 (97-104) 小さな断面カマボコ形隆線文の類である。97は、P135 出土品で、内面上半はナデ、下半は斜位条痕を施す。細砂粒をわずかに含むが、胎土精良で、焼成良好で内外面ともに茶色をなす。98は、No. 50で、内面は斜位条痕をナデ消しており、外面下半もナデている。胎土に細砂粒を多く含み、焼成不良で内外面ともに黒褐色をなす。99は、1号墳包含層出土品で、内面はナデ。特徴的に小さなカマボコ形の隆線を付ける。粗・細砂を多く含み、焼成不良で内面は茶色、外面は暗褐色をなす。100は、No. 506で、内面は横位条痕をナデ消しており、胎土に細砂粒をかなり含み、焼成良好で内面はこげ茶、外面は黒色をなす。101は、No. 103で、内面はナデしており、細砂粒をいくらか含み、焼成良好で内外面ともにこげ茶色をなす。102は、P59 出土品で、内面は雑な横位ナデを施す。胎土に細砂多く含み、焼成良好で内面は暗褐色、外面はこげ茶色をなす。103は、No. 372で、内面はナデで、粗・細砂粒をかなり含み、焼成やや良好で、内外面ともに灰褐色をなす。104は、南西端包含層Ⅱ-1層出土品で、内面はナデしている。細砂いくらか含み、焼成やや良好で内面は淡茶色、外面は暗褐色をなす。

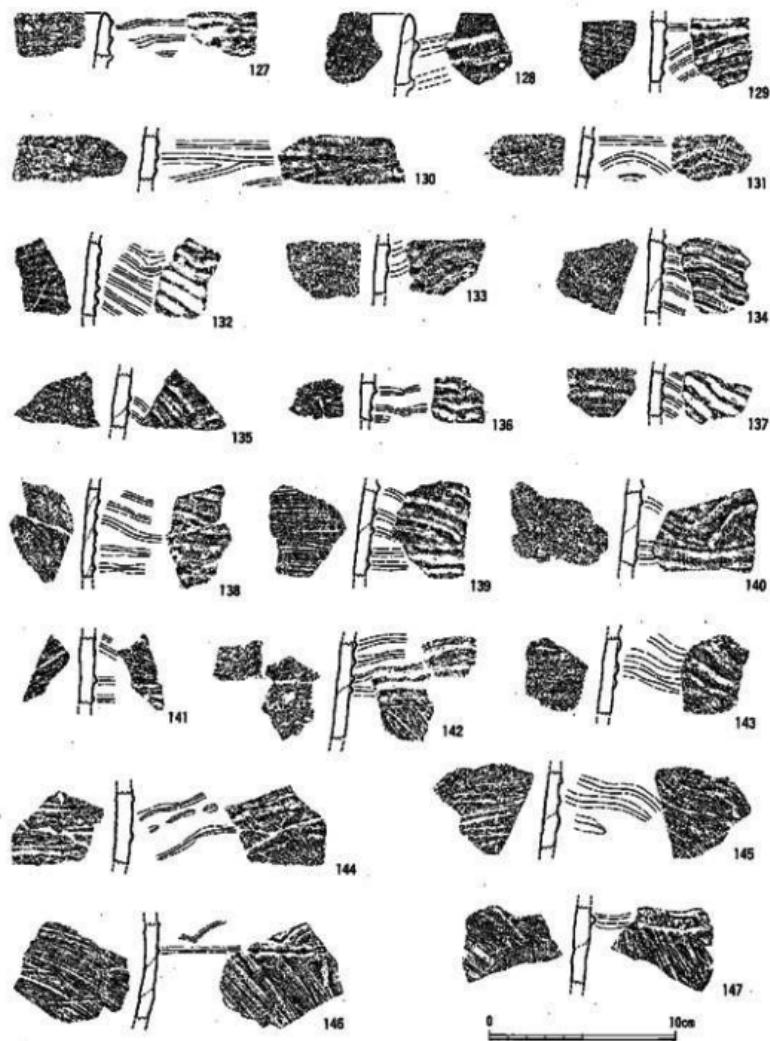
6類 (105-110) 太い断面カマボコ形の隆線を付ける類で、断面梯形の大型類を数本付ける最終段階に通じる類である。105は、1号墳西側下段包含層出土品で、内面はナデしており器壁が厚く、胎土に細砂粒をかなり含む。焼成良好で、内面は暗茶色、外面はこげ茶色をなす。106



第 35 圖 包含層他出土器物實測圖⑨ (1/3)

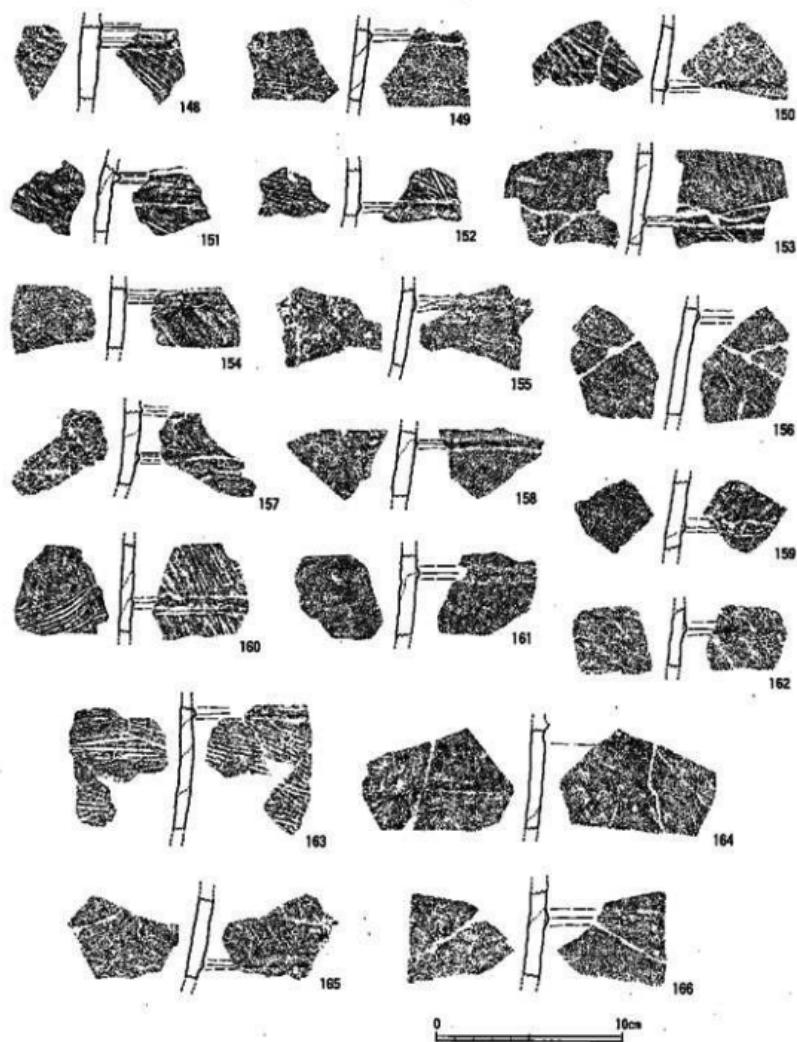
は、No. 365で、復原口径20cmのやや小ぶりの中型品で、幅1cm程の太い隆線を2条付ける。内外面ともに極めて磨滅している。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成不良で、内外面ともにこげ茶色をなす。107は、南端トレンチ出土品で、内面は横位条痕を施し、連接する粗大な隆線を付ける。胎土に粗砂粒をいくらか含み、焼成良好で内外面ともに暗褐色をなす。108は、包含層出土品で、胎土は大旨精良で、焼成やや不良で内外面ともに暗橙褐色をなす。109は、No. 11で、復原口径20.7cmとなる。2条の断面カマボコ形の隆線を付けるが、やや乱れ気味である。内面は雑な横位条痕を施し、粗・細砂粒を多く含み、焼成不良で、内面は黒褐色、外面は暗茶～黒褐色をなす。110は、No. 39で、部厚く、隆線も完全に凸帯状になっており、当遺跡では極めて異類である。内面は斜位条痕を施し、胎土に粗・細砂粒をかなり含み、焼成良好で内外面ともに淡茶色をなす。

7類(111～147) 隆線文帯が曲線文で構成される類である。さらに大きく3種類に分けられる。即ち、重弧状文様で弧が上向きのもの(111・112・116・121)、重弧状文様で弧が下向きのもの(126)、波状に隆線群がうねるもの(113・119・122)である。これらのうち中型品以上のものではどの文様においても隆線文様の上・下端は直線(水平)の隆線が施され、文様帯の区画をきちんと作っている。ただ、小型品においてはこの区画隆線を付けていない。また、126を重弧状文様で弧が下向きの類と上記したが、波長が短いようであり、波状文類の亞種とした方がよいとも思われる。なお、この7類の中には、先に分類した隆線形状による各類のうち2～6類のすべてを含んでいる。111は、No. 372とNo. 374で、復原口径13.5cmの小型品で、7条の隆線文が1ヶ所で下方へ下がり、その部分は全周で4～5ヶ所になりそうである。内面は横位条痕で、外面胴部は磨滅しているがナデであろう。胎土に粗砂粒を僅かに含み、焼成不良で内外面ともに黒色をなす。112は、P101出土品で、復原口径26.2cmの大きく外傾して開く類で、上下端に1条ずつ水平な隆線を付け、その間に細い棒先で沈線状に施文した結果9条の細い隆線文状になった曲線文帯を構成させている。上下端の各1条は間の9条に比べやや大きく、上下端だけが貼り付けによるものと考えられる。内面は丁寧なナデ調整で、胎土に細砂粒をいくらか含み、焼成不良で内面は茶～灰褐色、外面は煤が付着してこげ茶色をなす。113は、No. 243で、復原口径26.5cmとなる中型品で、著しく磨滅して隆線は低くなっている。上下端の隆線は水平になり、その間の4条は波状にうねっている。胎土に粗砂いくらか、細砂粒を多く含み、焼成やや不良で内面は暗黄褐色、外面は黄褐色～こげ茶色をなす。114は、2号壇西包含層出土品で、細くシャープな隆線で、内面は横位条痕を施す。細砂粒をかなり含み、焼成不良で内外面ともに黒褐色をなす。115は、西半下段包含層出土品で、内面は磨滅している。粗・細砂を多く含み、焼成良好で内面は淡褐色、外面は黒褐色をなす。116は、No. 493で、上端の1条の隆線のみが水平となる。内面はナデで、細砂粒を多く含み、焼成良好で内面は淡灰茶色、外面は煤が付着して暗褐色をなす。117は、南西端包含層II-1層出土品で、内面はナ



第 36 圖 包含層他出土器物實測圖⑩ (1/3)

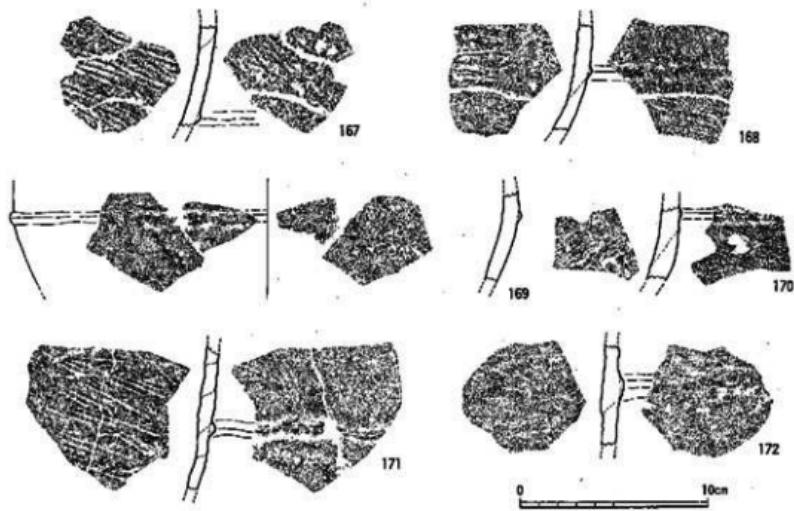
ており、隆線文は波状文類になろう。細砂粒をいくらか含み、焼成良好で内面は暗褐色、外
面は茶色をなす。118は、南西端包含層II-1層出土品で、内面はナデている。細砂粒をかなり
含み、焼成やや不良で、内面は暗黄褐色、外面は暗褐色をなす。119は、No.189で、内面は
横位条痕を施す。細身の隆線で間隔をあけた波状文を施している。細砂粒を多く含み、焼成不
良で外面は茶褐色、内面は暗褐色をなす。120は、No.184で、薄手小型品で、内外面ともに極
めて磨滅している。上2条の隆線が下弦の弧をなしており、下の1条は水平になりそうだ。細
砂粒をかなり含み、焼成不良で内外面ともに黒色をなす。121は、No.306で、内面は横位条痕
の上をナデしている。上端の1条だけ水平になっている。細砂粒をいくらか含み、焼成良好で内面
は黄褐色、外面はこげ茶色をなす。122は、No.158で、4条の小さな断面カマボコ形の隆線
が波状文を構成している。内面はナデしており、粗・細砂粒を多く含み、焼成良好で内外面とも
に茶褐～こげ茶色となる。上端の水平な隆線が無い。123は、No.97で、上の2条の隆線が水
平に付けられている。内面は磨滅しており、細砂粒をかなり含み、焼成やや良好で内面は暗茶
褐色、外面はこげ茶色をなす。124は、1号墳の西側下段包含層出土品で、上端の2条の隆線
が水平となっている。内面はナデしており、胎土に細砂粒をいくらか含み、焼成良好で内面は黄
褐色、外面は淡茶色をなす。125は、西南端包含層II-1層出土品で、内面は斜位条痕を施す。
上端の2条が水平に付けられている。細砂粒を多く含み、焼成良好で内面は茶～黄褐色、外面
は黒褐色をなす。126は、No.468で、上端にしっかりした水平の隆線が付けられ、以下に上弦
の重弧状に隆線が飾られている。内面はやや斜位の条痕で、胎土に細砂粒をわずかに含むのみ
で、焼成不良で内面は暗褐色、外面は暗黄茶色をなす。127は、南西端包含層II-2層出土品
で、内面は横位条痕をナデしている。細砂粒をいくらか含み、焼成やや不良で内面は暗黃褐色、
外面は淡褐～暗褐色をなす。128は、南端包含層II-3層出土品で、太く高い断面カマボコ形の
6類となる隆線を付ける。内面は横ナデで、細砂粒をかなり含み、焼成良好で内外面ともに
茶～黒褐色をなす。129は、P135出土品で、内面は横位条痕の上をナデしている。細砂粒をい
くらか含み、焼成良好で内面は淡褐色、外面はこげ茶色をなす。130は、No.471で、内面は横ナ
デを施す。粗・細砂粒をいくらか含み、焼成良好で内面は灰黒色、外面は茶褐色をなす。131
は、No.189で、内面は横位条痕が残る。胎土に粗・細砂粒をかなり含み、焼成不良で内面は
こげ茶色、外面は暗黄茶褐色をなす。132は、No.507で、内面は横位条痕の上をナデしている。
細砂粒をいくらか含み、焼成不良で内面は黒色、外面は茶～暗褐色をなす。133は、No.99で、
磨滅がひどく、波状の隆線も低くなっている。細砂粒を多く含み、焼成不良で内面は黒褐色、
外面は暗褐色をなす。134は、南西端包含層II-1層出土品で、内面は丁寧なナデを施す。焼
成良好で内面は茶褐色、外面はこげ茶色をなす。135は、南西端包含層II-1層出土品で、内
面はナデしている。粗・細砂粒をかなり含み、焼成良好で外面はこげ茶色、内面は淡茶色をなす。
136は、No.37で、内面はナデか。細砂粒を僅かに含み、焼成良好で内外面ともに淡茶色をな



第 37 圖 包含層他出土器物實測圖① (1/3)

す。137は、No. 487で、内面は横位条痕の上をナデている。胎土に細砂粒をかなり含み、焼成良好で外面は黒色、内面は黒褐色をなす。138は、No. 467で、内面はナデしている。下端の2条の隆線が水平に付けられている。胎土に細砂粒をいくらか含み、焼成良好で内面は橙褐色、外面は暗褐色をなす。139は、南西端包含層II-3層出土品で、内面は横位条痕を施す。下端の2条が水平に平行して付けられている。胎土に粗砂少量、細砂多く含み、焼成やや不良で、内面は黒褐色、外面は淡茶一こげ茶色をなす。140は、南西端包含層II-2層出土品で、内面はナデしている。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で内面は淡茶色、外面は黒褐色をなす。141は、No. 318で、内面はナデしており、胎土に細砂粒を少量含み、焼成良好で外面はこげ茶色、内面は暗黄褐色をなす。142は、No. 153で、内面はナデで、下端に水平に1条の隆線を付ける。外面下半は斜位条痕を施す。胎土に細砂多く含み、焼成良好で内面は暗茶色、外面は黒色をなす。143は、P164出土品で、内面は横位条痕で、細砂粒を多く含み、焼成良好で内面は暗黄褐色、外面は暗褐色をなす。144は、No. 18で、内面は横位条痕を施す。細砂粒をいくらか含み、焼成やや良好で内面はこげ茶色、外面は黒褐色をなす。145は、包含層出土品で、内面は横位条痕を施す。細砂粒を多く含み、焼成良好で、外面はこげ茶色、内面は淡褐色をなす。146は、南端トレンチ東端茶色粘質土出土品で、極細の隆線を付ける。内面は条痕の上に斜位擦過痕がみられる。内面は斜位条痕で、胎土精良、焼成やや不良で内面は暗褐色、外面は黒色をなす。147は、南西端包含層II-3層出土品で、内面は斜位条痕の上をナデ、外面は斜位条痕を施す。胎土に粗・細砂粒をかなり含み、焼成良好で内面は灰黒色、外面は淡茶褐色をなす。

胴部片 (148-172) 148は、No. 507で、内面は斜位条痕の上を雜なナデ。外面は斜位条痕で、粗細砂粒を多く含み、焼成良好で内面は淡褐色、外面は黒褐色をなす。149は、南端トレンチVI層出土品で、内面下半は横位条痕、上半と外面はナデを施す。胎土に細砂粒をいくらか含み、焼成やや不良で内面は淡褐色、外面は暗褐~黃茶褐色をなす。150は、No. 328で、内面は斜位条痕、外面は磨滅している。粗砂粒を多く含み、焼成不良で内面は黒色、外面は淡褐~暗褐色をなす。151は、No. 124で、内面は丁寧なナデ、外面もナデしている。胎土精良で、焼成良好で内面は灰黒色、外面は茶色をなす。高いカマボコ形の隆線が特徴的である。152は、No. 90で、内面は横位条痕、外面は斜位条痕を施す。胎土に細砂粒をかなり含み、焼成良好で内面は茶色、外面は茶褐色をなす。153は、No. 134で、内面は横位擦過の上をナデ、外面は丁寧にナデしている。細砂粒をかなり含み、焼成良好で内面は淡茶一灰褐色をなす。154は、西下半段包含層出土品で、外面は斜位条痕、内面はナデか。細砂粒を多く含み、焼成良好で内面は暗褐色、外面は黒色をなす。155は、No. 365で、内面はナデしており、胎土に細砂を多く含む。焼成不良で内外面ともにこげ茶色をなす。156は、No. 206で、内面は丁寧にナデしている。細砂粒を多く含み、焼成不良で内面は暗黄褐色、外面は黒褐色をなす。157は、No. 152で、かなり磨滅している。粗・細砂粒を多く含み、焼成良好で内面は暗茶褐色、外面は黒~赤茶色をなす。158は、西下



第38図 包含層他出土器実測図② (1/3)

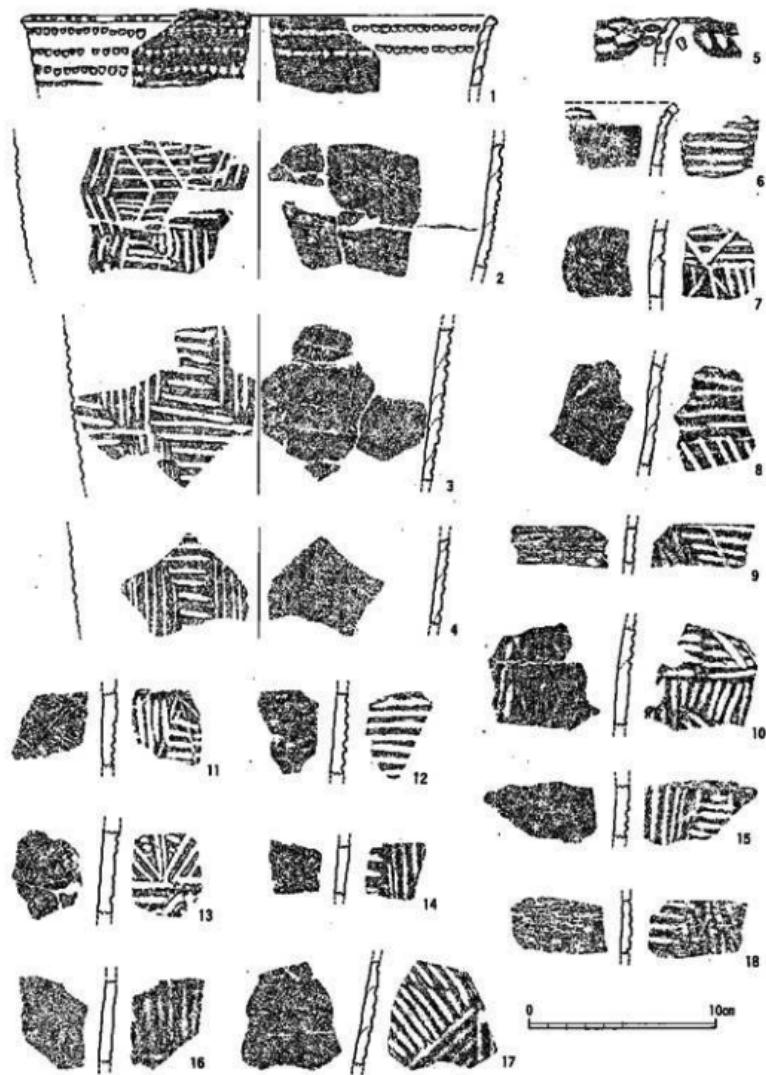
段包含層出土品で、内外面ともにナデている。胎土に細砂粒を多く含み、焼成やや不良で内外面ともに暗黄褐色をなす。159は、No. 250で、内面は丁寧にナデしている。胎土に細砂粒を多く含み、焼成やや良好で外面はこげ茶色、内面は暗茶色をなす。160は、No. 624で、内面上半は横位ナデ、下半は斜位条痕、外面は雑な斜位条痕を施す。胎土に粗・細砂粒をかなり含む、焼成不良で内面は黒色、外面はこげ茶色をなす。161は、No. 470で、内面は横ナデ、外面は丁寧なナデを施す。胎土に粗・細砂粒をかなり含む。焼成やや不良で内面は暗灰褐色、外面は淡茶色をなす。162は、No. 309で、内外面ともに極めて崩滅している。細砂粒をかなり含み、焼成良好で外面は黒色、内面は暗茶色をなす。163は、西南端トレンチ暗黒褐色土出土品で、内面は横位条痕で上端のみナデしている。外面は斜位条痕が明瞭で、胎土に細砂粒を多く含む。焼成不良で内面は黒褐色、外面は暗褐色をなす。164は、No. 140で、内面は丁寧なナデ、外面は斜位条痕をナデ消している。細砂粒を多く含み、焼成やや不良で内面は暗褐色、外面は茶褐色をなす。165は、No. 98で、内面はかなり剥落し、外面はナデている。粗・細砂粒をかなり含み、焼成やや不良で、内面は暗黄～こげ茶色、外面は茶褐色をなす。166は、No. 268で、幅広い隆線を付ける。内外面ともにナデで、内面にはやや凹凸がある。粗・細砂粒を多く含み、焼成良好で内面は暗茶褐色、外面は黒褐色をなす。167は、No. 521で、内面は斜位条痕で、外面は条痕の上をナデしている。粗・細砂をかなり含み、焼成不良で内面は黒褐色、外面はこげ茶色～暗

黄茶色をなす。168は、No. 303で、内面は横位条痕をナデ消し、外面上半はナデ、下半は斜位条痕をナデ消している。細砂粒を多く含み、焼成良好で内面は灰黒褐色、外面は暗茶色をなす。169は、No. 500で、内外面ともにナデしており、粗・細砂粒をかなり含む。焼成良好で、内面は暗茶色、外面は明橙褐色をなす。170は、1号墳の西側下段包含層出土品で、内外面ともにナデしている。胎土に粗・細砂粒を多く含み、焼成やや不良で内面は淡灰褐色、外面は淡褐色をなす。171は、No. 268で、内面は斜位の雜な条痕を施し、指オサエ状の凹凸が多い。外面は磨滅している。粗砂粒をいくらか、細砂粒をかなり含む。焼成不良で内面は黒褐～暗褐色、外面上半は黒褐色、下端は暗褐色をなす。172は、No. 216で、幅の広いだらけた凸帯を付ける類である。内外面ともに極めて磨滅するが、内面は横位条痕かと思われる。胎土に細砂粒をいくらか含み、焼成やや不良で、内面は黒色、外面は淡褐色をなす。

曾畠式土器 (第39~42図、図版37~41)

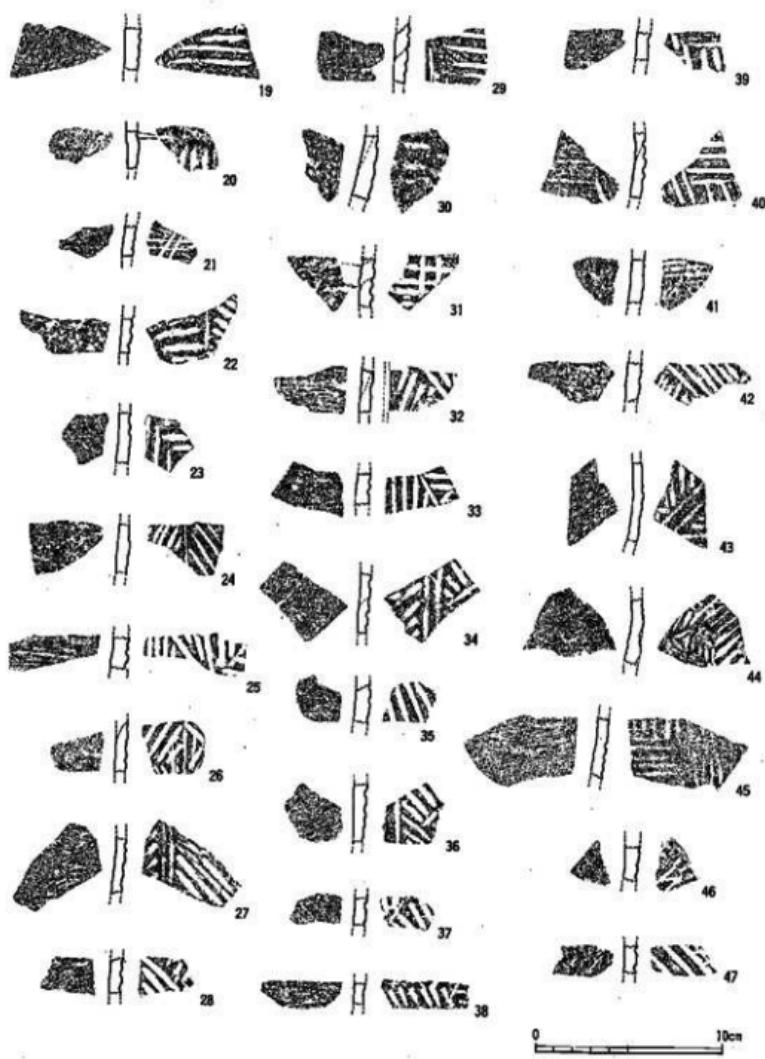
ここでは、まず単純に滑石を含むものと含まないものとに意識して分けた。滑石を含むものの中には轟D式1類と関連するものもあり、口縁部周辺に刺突文系施文が卓越する類も分離できそうであるが、胴部施文と接合する例が少ないので、敢えて細分類は避けた。

1は、1号墳の南下段黒色包含層出土品で、復原口径25.6cmの中型品となる。口唇上面に刺突文を、口縁内外面に見盤腹線を下から突っ込んだ横位連続施文を各々2・4条行っている。内外面ともに極めて磨滅しており、地文は判からない。胎土に滑石を多く含み、焼成良好で内面は暗紫茶褐色、外面は黒紫褐色をなす。2は、No. 28で、直径26cm強となる。横位平行沈線に斜位沈線を加えて所謂幾何学文を構成している。内面は横位擦過、或いは粗いナデ。胎土に滑石をかなり含み、焼成良好で外面は黒褐色、内面は灰茶色をなす。3は、No. 367とNo. 368とが接合したもので、縱と横の平行沈線で文様を構成している。内面はナデで、胎土に滑石を極めて多く含む。焼成良好で内面は灰茶～灰黑色、外面はこげ茶色をなす。4は、No. 363で、文様は3と同じ類である。内面は横位ナデかと思われ、滑石を多く含み、焼成良好で内面は暗茶褐色、外面は黒褐色をなす。5は、南西端包含層II-2層出土品で、口唇上面には浅い斜めの棒押圧の刻目を施している。口縁内面には横位の楕円形の、外面には角ばった斜位の刺突文を施している。滑石を多く含み、焼成良好で内面は茶褐色、外面は黒褐色をなす。6は、西半下段包含層出土品で、内面に2条の沈線、外面に両端が切れる平行沈線を施す。滑石を多く含み、焼成良好で内面は淡褐色、外面は暗茶褐色をなす。轟D式1類と関連してくるものと思われる。7は、No. 523で、斜位の沈線を加えている。滑石を多く含み、内面はナデか。焼成不良で内面は茶褐色、外面は黒色をなす。8は、No. 382で、横位平行沈線の下に斜位沈線を施す。滑石を多く含み、内面は横位ナデを施す。焼成良好で、内面は暗褐色、外面は灰茶～こげ茶色をなす。9は、No. 353で、滑石を多く含み、焼成良好で、外面は淡灰茶色、内面は灰黒

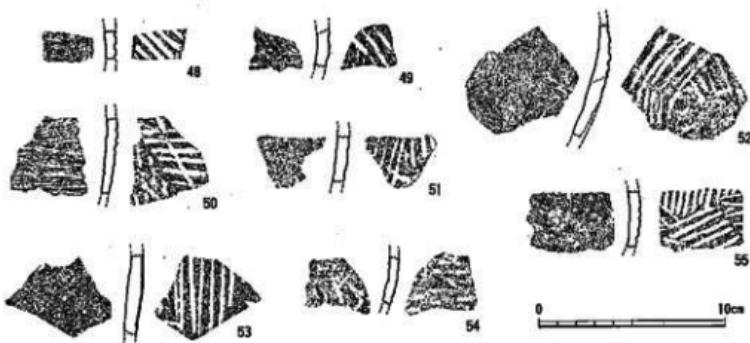


第 39 図 包含層他出土曾姬式土器実測図① (1/3)

色をなす。10は、No. 244で、縦横の沈線による幾何学文様が施されている。滑石を多く含み、焼成良好で内面は黄茶褐色、外面は暗褐色をなす。11は、No. 192で、滑石を多く含む。焼成良好で外面は暗茶紫色、内面は暗茶褐色をなす。12は、南西端包含層Ⅱ-2層出土品で、内面は横位ナデとなる。滑石を多く含み、内面は暗茶褐色、外面は黒色をなす。13は、No. 591で、内面はナデており、滑石を多く含む。焼成良好で内面は茶色、外面は暗茶紫色をなす。14は、1号墳西側下段包含層出土品で、滑石を多く含み、焼成良好で内面は暗茶褐色、外面は黒色をなす。15は、No. 188で、内面はナデか。滑石を多く含み、焼成良好で内面は暗褐色、外面は暗茶色をなす。16は、No. 108で、内外ともに磨滅著しい。外面下端には2本の横位沈線がある。滑石を多く含み、焼成良好で内面は淡褐色、外面は暗褐色をなす。17は、No. 260で、斜位の平行沈線を組み合わせた幾何学文となっている。内面は横ナデか。滑石を多く含み、焼成良好で内面は暗茶褐色、外面はこげ茶色をなす。18は、No. 361で、内外ともに極めて磨滅している。滑石を多く含み、焼成不良で内面は灰黒色、外面は灰暗黄色をなす。19は、No. 274で、内面は横ナデで、滑石を多く含む。焼成良好で内面は灰茶色、外面はこげ茶色をなす。20は、造構検出時の出土品で、内外ともに磨滅している。上端に横位の沈線がありその下に縦位の太めの沈線を施している。滑石を多く含み、焼成不良で内外ともに茶褐色をなす。21は、P124出土品で、滑石を多く含み、内面はナデかと思われる。焼成良好で内外ともに茶褐色をなす。22は、包含層出土品で、内外ともにかなり磨滅している。外面には、縦の沈線の両側にやや斜位の平行沈線を配した文様を施している。滑石を多く含み、焼成良好で内外ともに灰褐色をなす。23は、南西端包含層Ⅰ-2層出土品で、内面は横ナデを施す。滑石を多く含み、焼成良好で内面は茶褐色、外面は黒色をなす。24は、No. 290で、滑石を多く含み、綾杉文がやや細身の沈線で施されている。内面は横ナデかと思われ、焼成良好で内面は暗茶色、外面は暗茶褐色をなす。25は、西下半段包含層出土品で、内面に横位条痕がわずかに残る。滑石を多く含み、厚手で、焼成良好で内面は茶灰色、外面は黒褐色をなす。26は、No. 535で、上端の割れ面は接合面である。滑石を多く含み、焼成良好で内面は茶色、外面は黒褐色をなす。27は、No. 454で、滑石を多く含み、内面は横ナデかと思われる。焼成良好で外面は茶褐色、内面は暗褐色をなす。28は、No. 131で、滑石を多く含み、焼成良好で内外ともに暗褐色をなす。内面は横ナデか。29は、南西端包含層Ⅱ-1層出土品で、滑石を多く含み、内面は横位擦過状となる。30は、南西端包含層Ⅱ-1層出土品で、滑石を多く含む。全体に磨滅著しく、焼成良好で内面は灰褐色、外面は茶色をなす。31は、包含層出土品で、滑石を多く含み、横位平行沈線の上から縦線を入れている。内面は雑な横ナデで、焼成良好で内面は茶色、外面は暗褐色をなす。32は、No. 364で、滑石を多く含み、焼成良好で内外ともに灰黒色をなす。内面は横位条痕のようである。33は、No. 450で、滑石を多く含み、内面に横位条痕がかすかに残る。焼成良好で内面は茶褐色、外面は暗茶褐色をなす。34は、No. 454で、滑石を多く

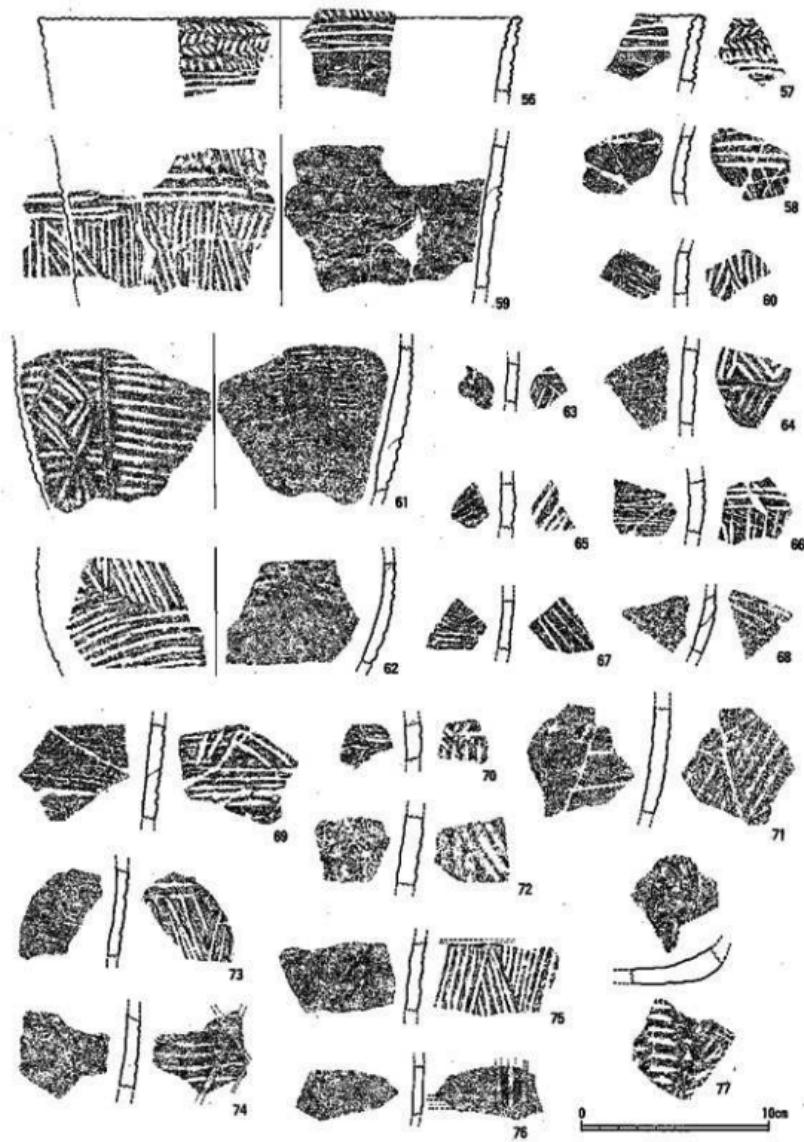


第 40 四 包含滑石出土曾窑式土器实测图② (1/3)



第 41 図 包含層他出土曾畠式土器実測図③ (1/3)

含み、内面はナデている。焼成良好で外面は暗灰茶褐色、内面は茶褐色をなす。35は、1号墳の西側下段包含層出土品で、滑石を多く含み、内面は横位条痕のようである。焼成良好で外面は黒褐色、内面は茶色をなす。36は、No. 452で、内面は横位ナデで滑石を多く含む、焼成良好で内外面ともに暗茶褐色をなす。37は、No. 453で、滑石を多く含み、焼成良好で内外面ともに暗茶褐色をなす。38は、No. 354で、滑石を多く含み、内外面ともに極めて磨滅している。焼成良好で内外面ともに灰黒色をなす。39は、1号土壇に混入していたもので、滑石を多く含み、焼成良好で内外面ともに暗い海老茶色をなす。40は、西半下段包含層出土品で、滑石を多く含み、内面は横位条痕の上をナデしている。焼成やや不良で外面は明茶色、内面は灰茶色をなす。41は、No. 190で、滑石を多く含み、内外面ともに磨滅している。上端に横位の3本沈線がみられ、焼成良好で外面は黒色、内面は茶色をなす。42は、南端トレンチ出土品で、滑石を多く含み、内面はナデと思われる。焼成良好で内外面ともに明茶色をなす。43は、No. 443で、滑石を多く含み、内外面ともにかなり磨滅している。焼成良好で内面は茶～黒褐色、外面は灰茶褐色をなす。44は、1号墳裏込出土品で、滑石を多く含む。内面はナデかと思われ、焼成良好で内面は茶褐色、外面は黒色をなす。45は、No. 380で、滑石を多く含み、全体にかなり磨滅している。焼成良好で内面は明茶色、外面は茶～暗褐色をなす。46は、2号墳掘方内出土品で、滑石を多く含み、焼成良好で内外面ともに海老茶色をなす。47は、遺構検出時の採集品で、滑石を多く含み、焼成良好で内面は明茶色、外面は灰黒色をなす。48は、No. 261で、滑石を多く含み、内面は横ナデかと思われる。焼成良好で内面は暗茶色、外面は暗褐色をなす。49は、南西端包含層Ⅱ-3層出土品で、滑石を多く含み、内面はナデている。焼成良好で外面は暗褐色、内面は灰褐色をなす。50は、No. 355で、滑石を多く含む。内面は横位条痕かと思われ、焼成良好で外面は灰茶色、内面は黒褐色をなす。51は、No. 175で、滑石を多く含み、内面



第 42 図 包含層他出土「滑石無し」曾根式土器実測図 (1/3)

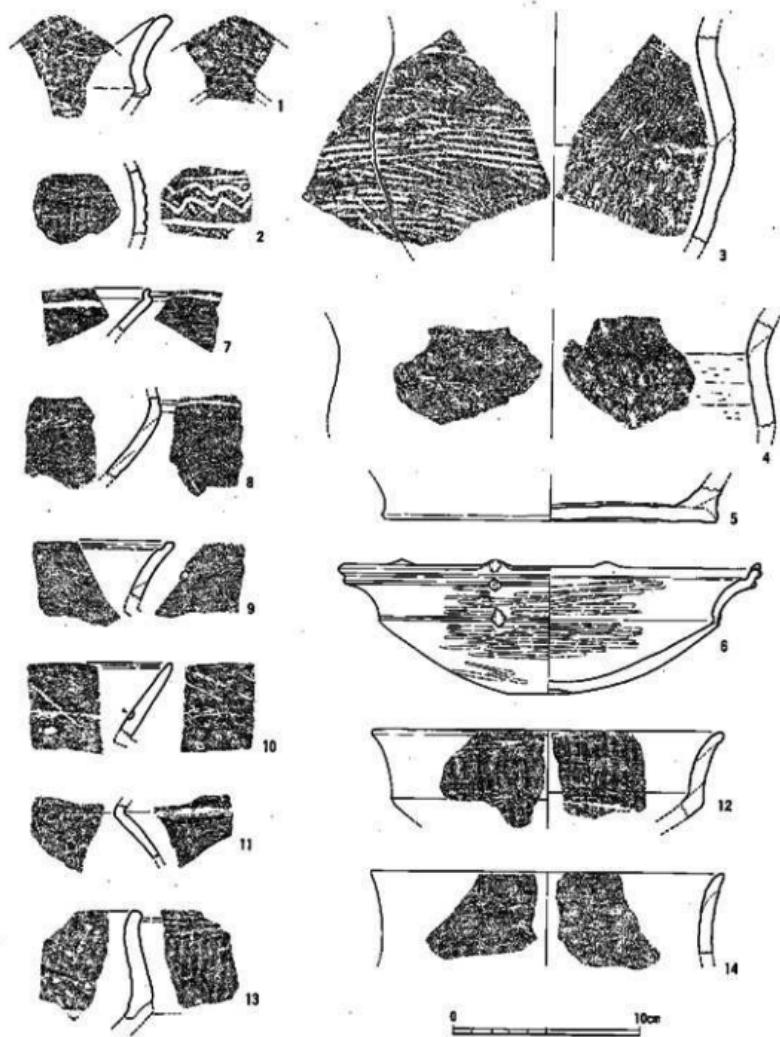
はナデと思われる。焼成良好で内面は暗茶褐色、外面は黒褐色をなす。52は、No. 41で、滑石を多く含み、内面は横ナデかと思われ、焼成良好で内面は灰黄一灰黑色、外面は茶褐一こげ茶色をなす。外面下半は剥げている。53は、包含層出土品で、滑石を多く含み、内面はナデかと思われる。焼成良好で内面は灰茶色、外面は灰黄褐色をなす。54は、No. 356で、滑石を多く含み、内面は雜なナデで凹凸が多い。外面は無文部分で横位の雜なナデで凹凸が多い。焼成良好で内外面ともにこげ茶色をなす。55は、No. 443で、薄手で丸く内溝しており、小型の椀状の器形になると思われる。内面はナデのようで、滑石を多く含み、焼成良好で外面は灰茶褐色、内面は暗黄茶褐色をなす。

「滑石無し」曾畠式土器 (56~77) 56は、1号墳の南下段黒色包含層出土品で、復原口径26cmとなる。口唇上面に斜位の押圧刻目を施し、内面には4条の平行沈線、外面には4段の刺突文とその下には平行沈線が施される。胎土に粗砂粒をわずかに、細砂粒をかなり含む。焼成やや不良で内外面ともにこげ茶色をなす。57は、No. 139で、56と同様の文様構成を持つ。内面は丁寧なナデで、胎土に細砂粒をかなり含み、焼成良好で外面は黒色、内面は暗褐色をなす。58は、P150出土品で、口縁直下片で内面上端に横位の切れ切れになる沈線が1条みえる。外面は切れ切れになる横位平行沈線の下に、浅めの一部交叉する斜位沈線文が施される。59は、No. 186で、直径24cm程に復原できる。内面は横位ナデで、外面は長さ9cm程で切れる3条の横位沈線を境に、上は綴沈線、下はやや細めの沈線による複合錐曲文状幾何学文で飾っている。60は、1号墳の西側下段包含層出土品で、内面には斜位条痕が残る。胎土に粗砂粒をわずかに含み、焼成不良で内外面ともに黒色をなす。61は、包含層出土品で、直径21.4cm程に復原できる。内面は横位条痕、外面は太めの片端が浅くなるような沈線で、横位平行線を基本とし、それに縦位に繰ぐ菱形文を施している。胎土に粗砂粒を少量、細砂粒を多量含み、焼成不良で内面は黒褐色、外面は暗黄褐色をなす。62は、No. 132で、直径19.2cmほどに復原できる。内面は横位ナデで、外面には斜位沈線による施文がなされる。見様によっては魚骨文のように見えるが、左上方には縦位の沈線も見えており、更に胴部下半のために横一斜位の沈線で底まで統く類と考えられるため、単純に魚骨文であるとは言えない。胎土に粗砂粒をかなり、細砂粒を多く含み、焼成良好で内面は黒褐一淡褐色、外面は茶色をなす。63は、No. 98で、外面に浅く細い沈線で文様を施す類である。内面は磨滅しており、胎土精良で焼成やや不良で、内外面ともにこげ茶色をなす。64は、2号墳表道部敷石下出土品で、内面は横位ナデかと思われる。胎土に粗砂わずか、細砂多く含み、焼成不良で内外面ともに黒褐色をなす。65は、No. 141で、内面は斜位条痕を施す。胎土に粗・細砂粒をわずかに含み、焼成やや良好で、内面は黒色、外面は赤茶色をなす。66は、No. 8で、内面は横位条痕を施している。外面上半には横位に3本の沈線を、下半には縦位沈線を施している。胎土に粗・細砂粒を多く含み、焼成やや不良で内外面ともにこげ茶色をなす。67は、南西端包含層Ⅱ-3層出土品で、内面は横一斜位条痕を施

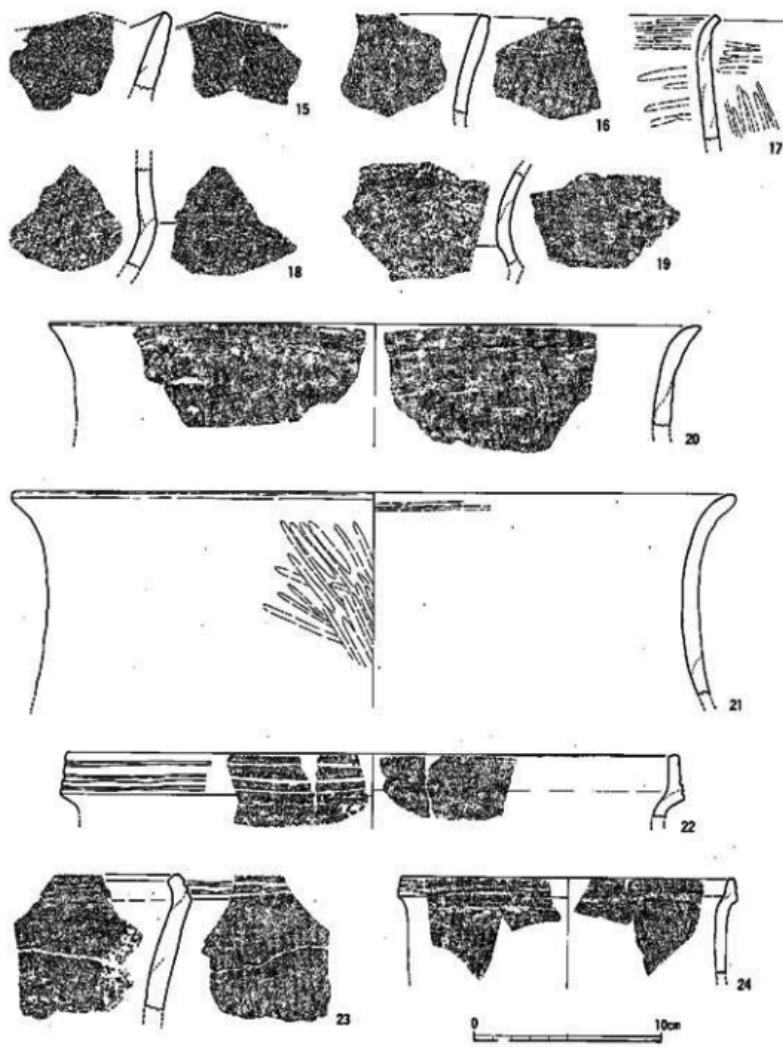
し、外面には細い斜位平行沈線がみられる。細砂かなり含み、焼成良好で内外面ともに暗黄茶色をなす。68は、No. 121で、内外面ともに著しく磨滅している。外面には細身の斜位沈線がみられる。胎土に粗・細砂粒をかなり含み、焼成良好で内面は淡褐色、外面は煤が付着して茶色をなす。69は、P73 出土品で、内面は横位条痕で、外面には横位と斜位沈線で文様を施している。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で内面は暗黄茶褐色、外面はこげ茶色をなす。70は、西半下段包含層出土品で、かなり磨滅しているが、内面はナデかと思われる。胎土に粗砂粒をわずかに含み、焼成良好で外面は茶～暗黄褐色、内面は茶色をなす。71は、No. 282で、内面は横位条痕をナデ消している。外面は斜位沈線が施されているが極めて磨滅している。胎土に粗砂いくらか、細砂多く含む。焼成やや不良で、内面は暗黄褐色、外面は暗褐色をなす。72は、2号墳西包含層出土品で、内外面ともに極めて磨滅著しい。外面に太めの沈線を施す。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成不良で内面は暗褐色、外面は黒褐色をなす。73は、西側下段包含層出土品で、内面は丁寧なナデ、外面にはやや細身の沈線で雜に施文されている。胎土に粗砂粒をわずかに、細砂粒をかなり含み、焼成不良で内面は黒褐色、外面は暗茶黑色をなす。74は、西半下段包含層出土品で、内外面ともに磨滅著しい。外面は横位沈線の上に斜位の沈線を交叉させている。細砂多く含み、焼成良好で内面は淡褐色、外面はこげ茶色をなす。75は、No. 137で、内面は丁寧なナデで、外面の文様は59と同類である。胎土に細砂粒をかなり含み、焼成不良で内外面ともにこげ茶色をなす。76は、西半下段包含層出土品で、内外面ともに磨滅著しい。外面は綴と横の平行沈線を組み合わせる類で、胎土に細砂粒を多く含む。焼成不良で内面はこげ茶～茶褐色、外面は暗茶～黒褐色をなす。77は、2号墳埋土内出土品で、曾畠式土器で実測できた唯一の底部片である。安定した丸底となり、外面にはやや雜な短沈線が中心に向かって施されている。内面はナデで、胎土に粗砂少量、細砂かなり含み、焼成やや良好で、内面は明茶～暗黄、外面は暗茶色をなす。

縄文後晩期の土器（第43～45図、図版42～45）

後期（1～5）1は、南西端包含層Ⅱ～3層出土品で、屈曲して開く口縁部が大きく波状口縁となる類である。口縁内面から外面全体はヘラナデ仕上げで、内面には雜な横位擦過がみられる。胎土に粗砂粒をいくらか含み、焼成良好で内面は黒色、外面上半は黒色、下半はこげ茶色をなす。北久根山式段階と思われる。2は、No. 2で、2本の沈線間に2本の波状沈線を入れ、その間を斜位縄文で埋めている。内面は横位ナデで、胎土に粗砂粒を多く含み、焼成不良で内面は黒色、外面はこげ茶色をなす。三万田式期にあたる。3は、No. 19で、厚手の粗製土器で、外面上半は横位条痕をナデ消し、下半は横位アナグラ条痕、内面上半は丁寧なナデ、下半は上方への擦過痕を残したものとなっている。胴部最大径19.4cmとなり、胎土に粗・細砂粒を多く含む。焼成良好で、内面は黒～暗褐色、外面は下半部に二次火熱を受けており暗黄～茶色をなす。4は、No. 16で、器壁が厚く、後期のいずれかの段階の深鉢と思われる。頭部径23cm程と



第 43 圖 包含磨他出土繩文後・晚期土器実測図① (1/3)

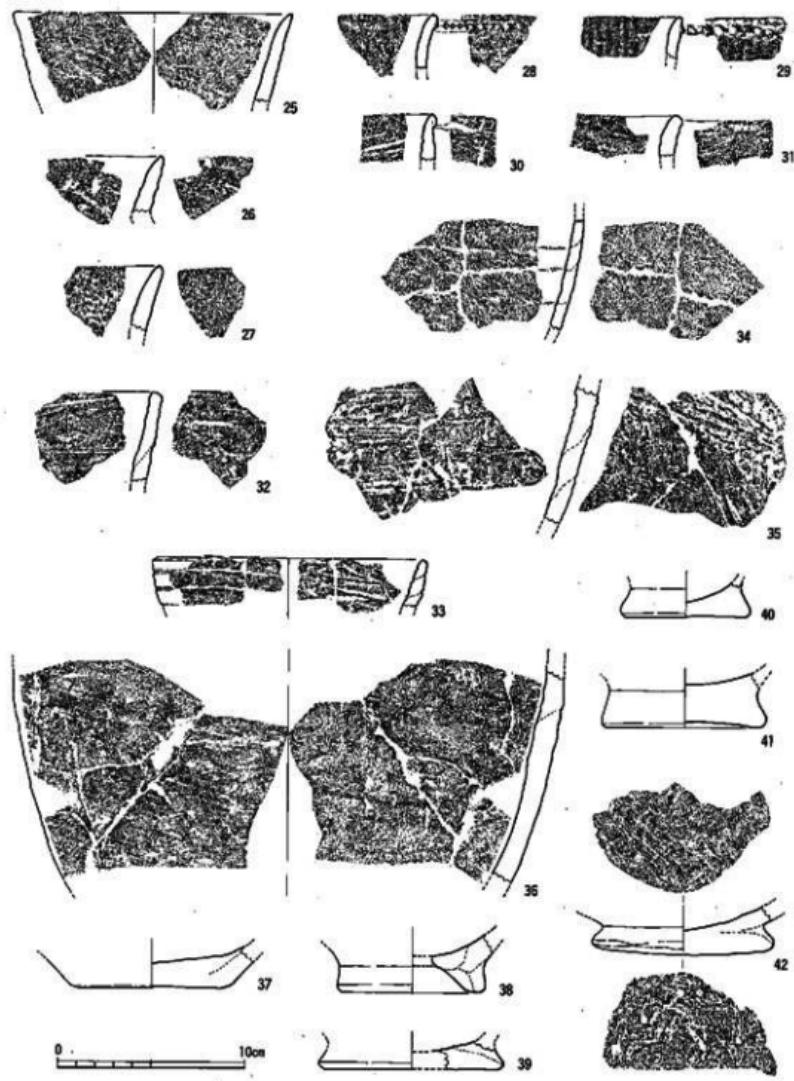


第 44 図 包含層他出土編文後・晚期土器実測図② (1/3)

なり、外面と内面の屈折稜以上は丁寧なナデ、以下内面は横位擦過状となる。胎土に粗砂いくらか、細砂粒をかなり含み、焼成やや不良で、外面は黒褐色～暗褐色、内面の上半は暗褐色、下半は茶褐色をなす。5は、No. 482で、復原底径18.1cmとなる大きな底部片である。内面はナデ、外面は横位条痕の上をナデ、底外面は雜なナデを施す、胎土に粗石英粒・細砂粒を多く含む。焼成良好で内外面ともに褐色をなす。

晚期浅鉢（6～13）6は、No. 50で、1/2強残存している。口径22.7cm、器高6.8cmとなり、内外面ともに丁寧な横ヘラ磨きが施されている。口縁外面には凹線と沈線の中間ぐらいのイメージの幅広い沈線が施され、体部屈折部直上には細い沈線が巡らされている。小さな突起部が全周に5ヶ所つくられ、その外面と真下2ヶ所に凹点が施される。口縁外面のものと体部屈折部の凹点は指頭あるいは棒状のものの押圧であるが、口縁下端のものはヘラ刻日に近い施文法である。底部は直径3.5cmの上げ底となっており、胎土に細砂粒を多く含む。焼成やや良好で、内面は暗黄褐色～暗褐色、外面は黒褐色～暗灰色をなす。晚期初葉の所産。7は、P22出土品で、内外面とも横ヘラ磨きで胎土精良、焼成良好で内面は淡茶色、外面は淡褐色～黒色をなす。晚期中葉古段階のもの。8は、P94出土品で、体部屈折部直上に沈線を入れており、内外面ともに丁寧なナデを施し、外面はヘラ磨きかもしれない。胎土に細砂粒を多く含み、焼成不良で内面は暗褐色、外面は橙褐色～暗褐色をなす。晚期前葉段階の精製品。9は、P167出土品で、直線的に開く口縁の内側に浅い沈線を入れている。外面は横ナデ、内面は磨滅しているが横ナデか。胎土に細砂粒を多く含み、焼成やや良好で、外面は暗茶褐色、内面は暗褐色をなす。晚期末葉の精製浅鉢。10は、No. 4で、内外面ともに器表は磨滅しているが、口縁内面に沈線のような凹部がみえる。胎土に細砂粒をいくらか含み、焼成やや不良で、内面は淡黄褐色、外面は灰色をなす。内面に長さ6.45mm、幅3.6mmの米圧痕がみられる。9と同じく、黒川式系統の浅鉢で、末葉段階まで下がる類と考えられる。11は、南端トレンチ出土品で、内面稜以上と外面は横ヘラ磨き、内面は横ナデを施している。胎土に細砂粒を僅かに含むが大旨精良で、焼成不良で外面は淡茶褐色、内面は暗褐色をなす。晚期後葉段階のもの。12は、南端包含層II-1層出土品で、復原口径19cmとなる。内外面とも横ヘラ磨きで、胎土に粗砂粒いくらか、細砂多く含む。焼成やや不良で、内面は暗黄褐色、外面は暗褐色をなす。晚期末葉のもの。13は、No. 412で、外面は横位ナデ、内面上半は横位擦過、下半は横位の強い指ナデがみられる。胎土に細砂粒をかなり含み、焼成やや良好で内面は暗黄褐色、外面は暗褐色をなす。晚期末葉の半精製の大ぶり品である。

晚期精製深鉢（14～24・28・29）14は、No. 52で、復原口径19cmとなる小型品である。外面は横位ヘラナデ、内面は横位ナデを施し、胎土に細砂粒を多く含む。焼成良好で内面は暗褐色～茶褐色、外面は煤が付着しており黒～淡茶色をなす。晚期初葉の所産。15は、No. 57で、強く開いて単純な波状口縁をなす。内面は横位ナデ、外面は横位ヘラナデを施す。胎土に粗砂粒をか



第 45 圖 包含磨他出土繩文後·晚期土器實測圖③ (1/3)

なり含み、焼成やや不良で、内面は明茶～灰黑色、外面は茶色をなす。晚期前半代か。16は、No. 58で、内外面ともに丁寧なナデで平滑となる。胎土に細砂粒を多く含み、焼成やや不良で内面は黒褐色、外面は暗茶褐色をなす。晚期後半代の精製深鉢である。17は、西半下段包含層出土品で、口縁内外面は横ヘラ磨き、内面下半は横位条痕の上を雜な横ヘラ磨き、外面下半は雜な縱ヘラ磨きを施す。胎土に粗・細砂粒を多く含み、焼成やや不良で、内面は暗茶褐色、外面は暗褐色をなす。口唇部が面をなし、しっかりしており、晚期初葉の小型精製深鉢と考えられる。18は、3号土壙への混入品で、屈折部にしっかりした稜をつくる。内面はナデしており、外面上半は横位条痕をナデ消し、下半は横位擦過の上をナデしている。胎土に粗砂粒を多量に含み、焼成良好で内外面ともに茶褐色をなす。晚期前葉前後の特徴を示している。19は、No. 182で、内面の屈折部より上方に稜をつくる類で、内面は磨滅しているが丁寧なナデか。外面は横位ヘラナデかと思われる。粗・細砂粒をかなり含み、焼成不良で内面は黄灰色、外面は暗褐色をなす。晚期後葉古段階の精製深鉢である。20は、No. 412で、復原口径35cmの大型品である。内面は横ナデでやや凹凸がある。外面はかなり粗い縱位ヘラナデを施している。胎土に金雲母を多く含み、粗・細砂粒をかなり含んでおり、焼成良好で内外面ともに茶色をなす。晚期初葉段階のものであろう。21は、表採品で、復原口径39cmの生活土器としては大型品となる類である。内面は丁寧な横位ナデ、外面は斜位の磨きを施している。細砂粒を多く含むが、雲母が目立つ。焼成良好で内面は茶褐色、外面は橙褐色をなす。晚期初～前葉のものか。22は、No. 71で、復原口径33cmとなる。立ち上がった口縁外面にやや雜なヘラ沈線を3条施し、内外面ともに横位ナデ仕上げである。口縁外下端の角はシャープである。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で内面は暗茶褐色、外面は暗褐色をなす。晚期前葉の典型タイプである。23は、No. 68で、短かく内傾する立ち上がり部外面に切れ切れの沈線2条を巡らせてている。内外面ともに上半は横位ナデ、内面下半は横位ヘラナデ、外面下半はやや右下がりの丁寧な横位ヘラナデを施す。胎土に粗砂粒を多く含み、金雲母・石英が目立つ。焼成良好で内面は茶褐色、外面は暗茶褐色～黒色をなす。かなり大口径となりそうで、晚期前葉新段階のものである。24は、西半下段包含層出土品で、内外面ともに丁寧な横位ナデを施す。復原口径17.9cmの小型品で、口縁の立ち上がり部は、肥厚状になり、外面は沈線ではなく横位条痕を施している。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で内面は暗茶褐色、外面は暗褐色をなす。晚期中葉新段階に近い類である。28は、No. 273で、口縁に接して刻目凸帯を付ける類である。内外面ともに磨滅しており、刻目は小さな捺押圧によるものである。細砂粒をいくらか含み、焼成不良で内面は暗茶褐色、外面は淡褐色をなす。口縁が聞く器形と刻目凸帯の状況からみて、弥生早期ではなく、晚期末葉のものと考えられる。29は、南西端包含層Ⅱ～3層出土品で、捺押圧の斜位の刻目凸帯を付ける類である。内外面ともに極めて平滑でヘラ磨きかと思われる。胎土精良で焼成やや良好で、内外面ともに黒色をなす。口唇部が平坦面をなし、器形や諸特徴から見て、28と同じく晚期末葉

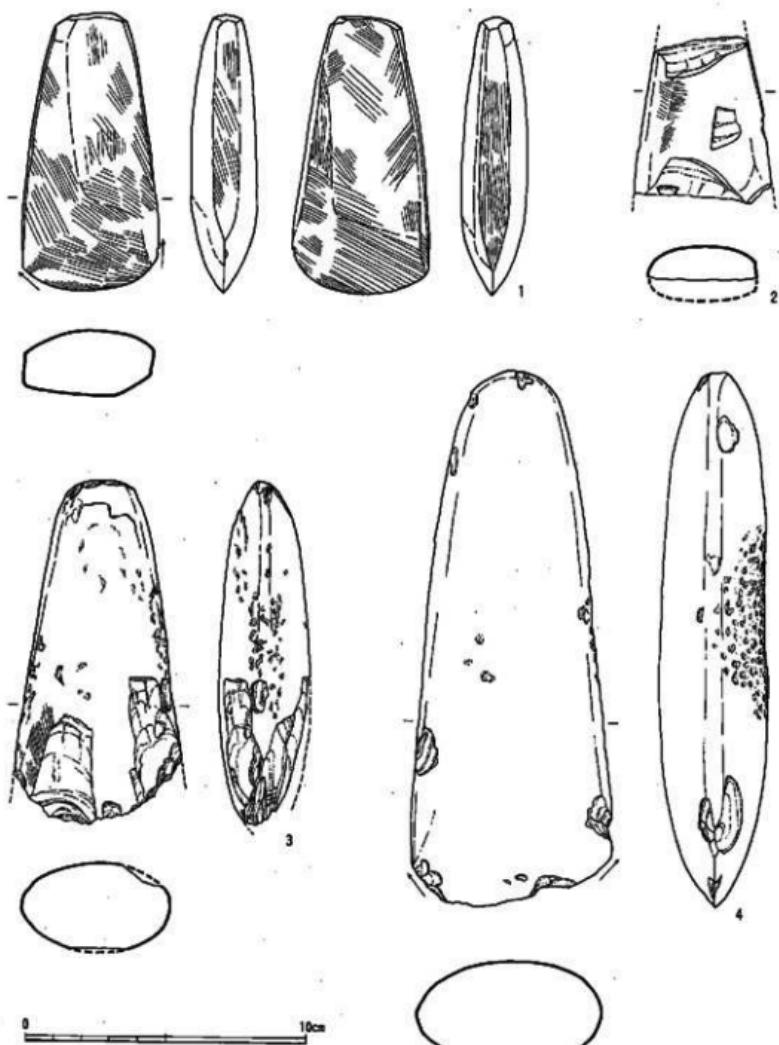
葉段階の類と考えられる。

晩期粗製深鉢（25～27・30～36）25は、遺構検出時の採集品で、復原口径15cmの小型鉢状製品である。内面は丁寧なナデ、外面は横位条痕の上をナデ消している。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で内面は黄褐色～灰褐色、外面は暗褐色をなす。晩期前半代のものか。26は、南西端包含層II-3層出土品で、内面は磨滅しており、外面は雑な横位ナデで凹凸がある。胎土に細砂粒をかなり含み、焼成やや不良で内面は灰褐色、外面は暗褐色をなす。口縁が折れて短かめに開く類になりそうで、晩期中葉段階のものか。27は、包含層出土品で、内外面ともに磨滅著しく調整不明。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で内外面ともに暗茶褐色をなす。晩期前半代のものであろう。30は、P135出土品で、小さな玉線状に口縁を折り曲げたものである。内面は横位条痕か。外面は磨滅。胎土に細砂粒をいくらか含み、焼成やや良好で、内面は淡褐色、外面は暗褐色となる。小型で晩期後葉段階のものと考えられる。31は、No.50で、内外面ともに磨滅しているが雑な横位擦過と思われる。粗・細砂粒を多く含み、焼成やや良好で内面は茶色、外面は橙褐色をなす。晩期後葉古段階までのものであろう。32は、P67出土品で、内外面ともに横位条痕をナデ消しており、外面はかなり凹凸がある。粗砂多く含み、焼成やや不良で内面は暗黄褐色、外面は明茶色をなす。晩期後葉新段階を中心とする時期。33は、No.98とNo.166が接合したもので、復原口径14.8cmの小型特殊品で、頭部がくびれる精製深鉢となるかもしれない。内面は横位条痕をナデ消し、外面はナデているが、粘土紐の接合部を意図的に残して沈線状にみせた頸となっている。胎土精良で、焼成やや良好、内面は淡橙褐色、外面は暗褐色をなす。晩期中葉古段階の、肥厚した口縁外面に沈線を巡らす精製深鉢を意識したもので、時期的には中葉新段階まで下がるかもしれない。34は、No.450で、内外面ともに磨滅しているがナデかと思われる。胎土に粗・細砂粒をかなり含み、角閃石が目立つ。焼成良好で内面は明茶色、外面は暗茶褐色をなす。35は、No.67で、内面は横位条痕の上をナデ消し、外面上半は極めて雑な斜位板ナデ（擦過）、下半は丁寧なヘラナデを施す。粗砂粒を多く含み、焼成良好で内面は黄白褐色、外面はこげ茶色をなす。大ぶりな深鉢の下半部である。36は、No.66で、内面は横位擦過の上を横ナデ、外面は雑な横ナデを施す。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で内面は淡褐～暗褐色、外面は黒褐色をなす。晩期前半代の精製深鉢の下半部となろう。底部（37～42）37は、No.414で、復原底径8.4cmの平底頸で、内面はナデしている。外面は磨滅しており、胎土に細砂粒を多く含む。焼成良好で内面は橙褐色、外面は暗褐色をなす。晩期初葉の精製深鉢底部である。38は、No.295で、復原底径8cmの高い上げ底状となる頸で、内外面ともナデしている。細砂粒を多量含み、焼成良好で内面は黒褐色、外面は暗茶褐色をなす。39は、No.584で、復原底径10cmで外端部が張り出す平底頸で、円盤貼り付け的作りである。細砂粒を多く含み、焼成良好で内面は黄茶褐色、外面は赤茶褐色をなす。内外面ともに磨滅して調整不明。40は、No.383で、復原底径7cmの平底頸で、内外面ともに磨滅している。細砂粒

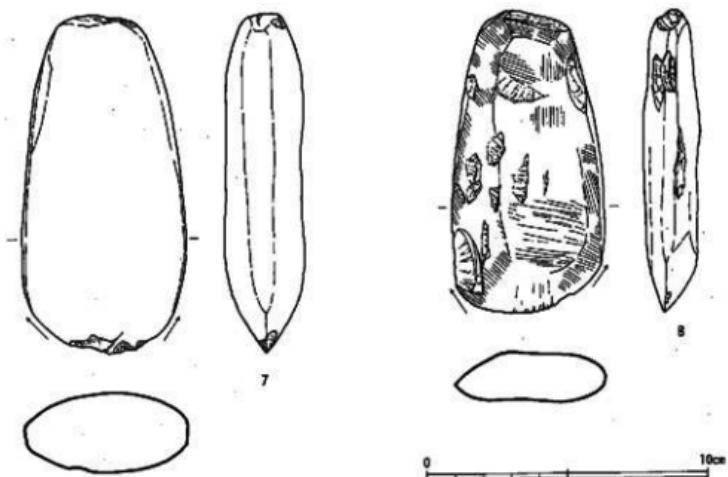
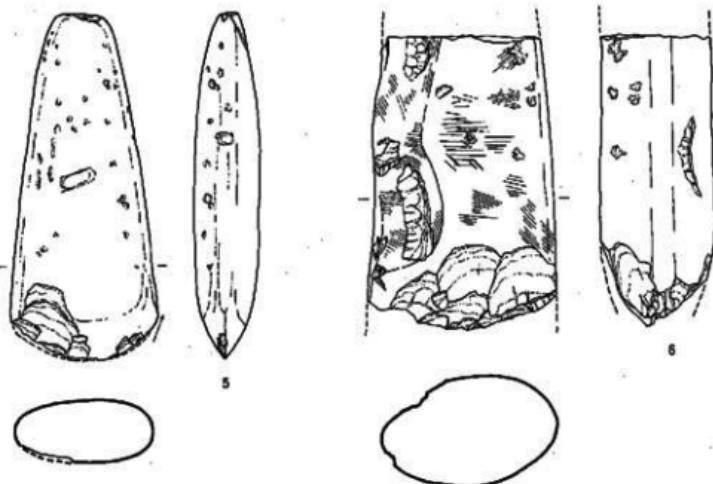
を多く含み、焼成良好で内面は黄褐色、外面は橙褐色をなす。41は、No. 75で、復原底径8.8cmとなり、3mm程のわずかな上げ底となる類である。部厚く、細砂粒を多く含み、焼成やや良好で内面は黒褐色、外面は黄褐色をなす。内面調整は磨き風で、外面はナデ。底外面には縦方向の線状擦痕がみられる。丁寧なつくりで晩期前半代のものであろう。42は、P91出土品で、底径9.8cmのやや凸レンズ状となる類である。内底中央は一方向への強い指ナデでその周辺はナデしている。底外面は雑なナデである。粗砂粒を多く含み、焼成やや不良で、外面は暗茶色、内面は暗黄褐色～茶色をなす。晩期後半代のもの。

包含層他出土石器（第46～56図、図版45～50）

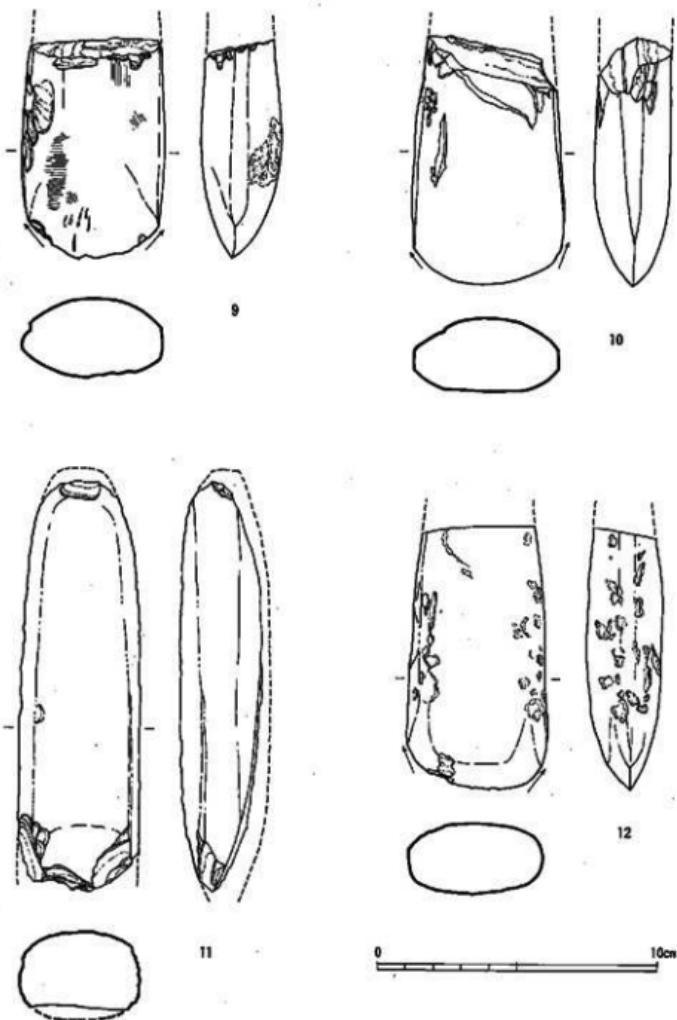
磨製石斧（第46～49図）1は、南西端包含層II-2層出土品で、濃淡のある緑色に白い筋が入る極めて良質の石材を選んで作っている。定角式のやや小ぶりの類で、全面を丁寧に研磨しており、側面はきれいな面取りがなされている。長さ9.3cm、幅4.9cm、厚さ2.3cm、重さ150gとなる。玉斧的な感じのする精緻な逸品である。儀礼用であろうか。2は、南端トレンチ出土品で、灰色の頁岩質石材で、薄く縱半分に割れた破片である。右側面の上半部には明瞭な面取りがみられる。丁寧に研磨されており、現存長5.8cm、幅4.9cm、厚さは2cm程となろう。3は、「土器3」の項で報告済。4は、「石斧No.3」として取り上げたもので、西下段包含層出土品である。淡灰色の頁岩質石材の完形品で、全体に丁寧なつくりである。裏面中央部だけに細かい敲打痕がよく残っており、ややへこんでいる。柄を付ける工夫か。長さ19.1cm、幅7.1cm、厚さ4cm、重量716gとなる。割れ部分まで全体に風化が著しい。基部の側面は面取り状となっている。5は、南西端包含層II-2層出土品で、灰黒色の頁岩製で全体に丁寧なつくりである。研磨は丁寧であるが、わずかに敲打痕が残っている。長さ12.3cm、幅5.2cm、厚さ2.2cm、重量210gで、撮影の中型品である。6は、No.373で、灰黒色の縞が入る粘板岩系の石材で、太い大型品となり、晩期の可能性もある。粗材の整形が不充分なままで、凹部をかなり残したまま研磨している。現存長10.4cm、幅6.8cm、厚さ4cm、現存重量450gとなる。7は、「石斧No.1」として取り上げたもので、西下段包含層からの出土品である。淡灰色の粘板岩製で、全体に丁寧に研磨している。長さ12.1cm、幅5.8cm、厚さ2.8cm、重さ319gで、極めて風化が著しい。表裏ともに中央部がへこんでいる。8は、「石斧No.2」として取り上げたもので、西下段包含層からの出土品である。淡灰色の硬質粘板岩質石材で、やや片刃気味の中型品である。長さ10.8cm、幅5.5cm、厚さ1.7cm、重量165gとなる。粗材の整形調整が不完全で、両面ともに凹凸が多く、強引に研磨で整形したという感じで、全体に扁平気味である。切り出しナイフ的に斜めになる刃部の中央付近には、使用磨耗痕が認められる。9は、2号墳石室の上面出土品で、淡灰色の頁岩製で全面を丁寧に研磨している。左側面には小さな面取りがみられる。現存長7.8cm、幅5cm、厚さ2.9cm、重さ165gとなる。10は、No.191で、青灰～灰色の粘板岩



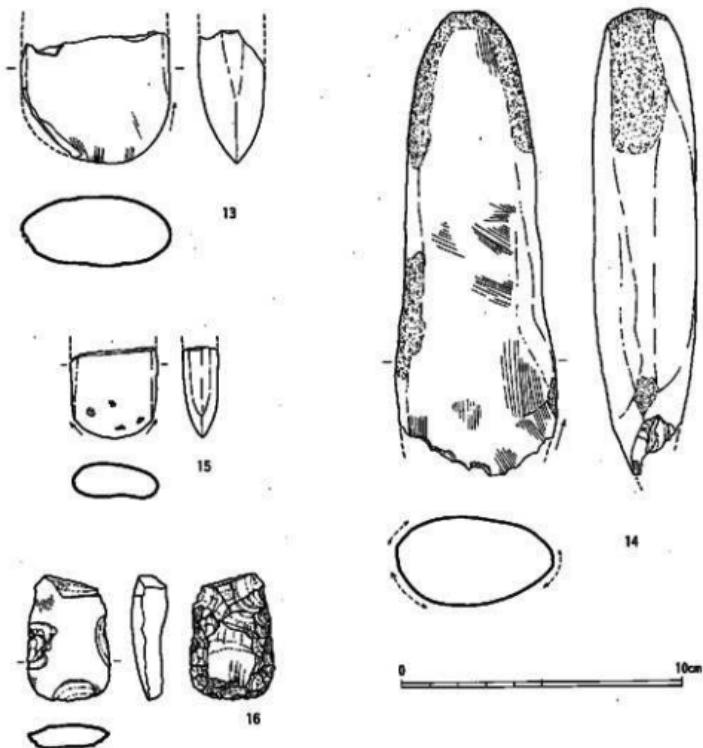
第 46 図 崩裂石斧実測図① (1/2)



第 47 圖 磨製石斧尖測圖② (1/2)

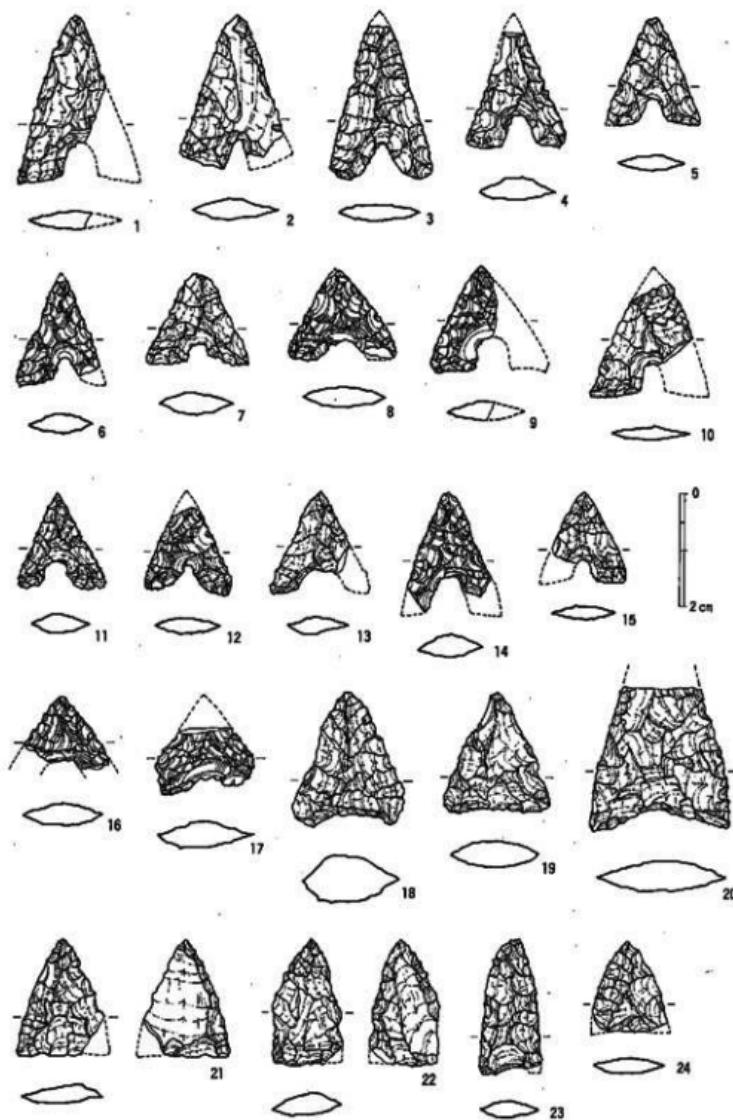


第 48 図 剥製石斧実測図③ (1/2)



第 49 図 磨製石斧尖端図④ (1/2)

質石材で、表面が風化して研磨・使用痕は見えない。全体に丁寧なつくりで、裏面中央は平坦面をなす。両側面ははっきりした稜線を持った面取りとなっている。現存長8.7cm、幅5.4cm、厚さ2.6cm、重量180gとなる。11は、No. 23で、細長い棒状タイプとなり稀例である。濃青灰色の頁岩質石材で、全面板めて風化が著しい。一見敲打痕的な小さいくぼみが全面みられるが、著しい風化によるものと考えられる。現存長14.7cm、幅4.3cm、厚さは3.1cm程と考えられる。重量297gとなる。12は、南西端包含層II-1層出土品で、濃灰色の頁岩製で、かなり風化している。作りは全体に丁寧であるが、側面付近には敲打痕が残っている。やや片刃気味で、現存長9.4cm、幅5cm、厚さ2.5cm、重量190gとなる。13は、1号墳南包含層出土品で、濃灰色の頁岩風石材で、刃部付近だけが使用磨面状をなしており、他は磨いてはいるが風化してい



第 50 圖 打製石鏃實測圖 (實大)

る。現存長さ4.6cm、幅5.3cm、厚さ2.4cm、重さ67gとなる。14は、No. 359で、自然の細長い河原石に研磨を加えただけの、極めて特異な例である。目の粗い砂岩、或は長石を多く含む淡緑灰色の火成岩製で、基部側面や両側面の一部に原材のザラザラした自然面を残している。左側面の基部以外の部分はしっかりと稜線を持った研磨面がみられる。研磨は特に刃部付近が丁寧になされている。現存長16.5cm、幅5.8cm、厚さ3.1cm、重量472gとなる。15は、南西端トレンチ包含層II-1層出土品で、淡灰黄色をした硬質砂岩風の石材を用いた、石のみ状の小型異類である。全面が風化著しく、裏面中央はやや窪んでいる。現存長3.2cm、幅3.1cm、厚さ1.2cm、重量17.4gとなる。16は、表採品であるが、大型の磨製石斧片の割れ面側に再調整削離を加えて、15と同類の小型のみ型品の製作を意図しているものである。頁岩質の石材で、長さ4.4cm、幅3cm、厚さ1.3cm、重量18gとなる。

打製石器（第50・51図1～27）脚の長くない鉄形器（1～16）、凹基器（17・18・20）、平基三角形器（19・21・24～26）、細長い類（22・23）、純粹な剥片器（27）などに分けられる。脚の長くない鉄形器は特徴的で、縄文前期の高B式・曾畠式期を代表する器である。特に5～16の小型類は、本遺跡の特徴的製品で、当該時期を如実に示している。1は、No. 5で、安山岩製で表裏面ともにやや雑なつくりである。長さ2.9cm、復原幅2.2cm、厚さ0.3cm、重さ1gとなる。2は、「土器3」出土品で、既に報告済。3は、P117出土品で、白色不透明な蛋白石風石材の異品で、全体に丁寧なつくりである。現存長2.7cm、幅1.8cm、厚さ0.3cm、重量1.3gとなる。4は、No. 223で、表裏ともやや雑な安山岩製である。右側線先端側は新しいガジリで、現存長2cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm、重さ0.9gとなる。5は、No. 1で、極めて風化した安山岩製で、長さ1.9cm、幅1.7cm、厚さ0.25cm、重量0.6gとなる。6は、P120出土品で、やや半透明で良質の黒曜石製で雑なつくりである。現存長1.8cm、復原幅1.5cm、厚さ0.35cm、重さ0.7gとなる。7は、2号墳玄室第1床面出土品で、安山岩製で両面とも雑なつくりである。長さ1.6cm、幅1.8cm、厚さ0.4cm、重さ0.7gとなる。8は、No. 88で、漆黒色良質の黒曜石製で、長さ1.6cm、幅1.9cm、厚さ0.35cm、重さ0.7gとなる。9は、No. 241で、やや半透明良質の黒曜石製で、長さ1.9cm、復原幅2.1cm、厚さ0.35cm、現存重量0.5gとなる。10は、南西端包含層II-2層出土品で、安山岩製の扁平な類である。かなり風化しており、両面とも粗い作りで、復原長2.3cm、復原幅2.1cm、厚さ0.25cm、現存重量0.6gとなる。11は、南西端包含層II-1層出土品で、左右非対称の安山岩製である。長さ1.7cm、幅1.55cm、厚さ0.35cm、重さ0.4gとなる。12は、南西端包含層II-1層出土品で、本遺跡出土中唯一の姫島産黒曜石製品である。現存長1.6cm、幅1.55cm、厚さ0.3cm、重量0.4gとなる。13は、表採品で、安山岩製のやや粗いつくりである。長さ1.8cm、復原幅1.8cm、厚さ0.3cm、重量0.4gとなる。14は、表採品で、漆黒色良質の黒曜石製である。脚が欠損後も脚端部を再調整して使用しているようだ。現存長2.1cm、現存幅1.5cm、厚さ0.4cm、重量0.6gとなる。15は、西南端包含層II-3層

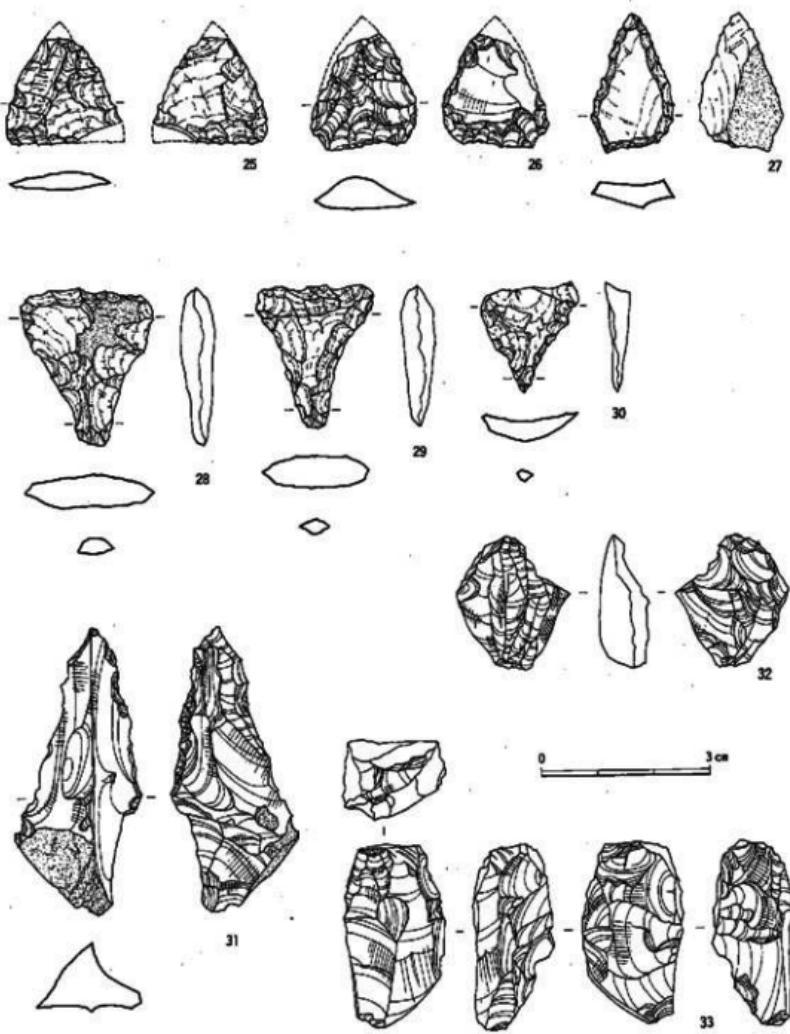
出土品で、風化の著しい安山岩製である。長さ1.55cm、復原幅1.55cm、厚さ0.25cm、重量0.3gとなる。16は、P152出土品で、良質の黒曜石製である。わりと丁寧なつくりで、現存長1.3cm、現存幅1.5cm、厚さ0.4cm、重さ0.4gとなる。17・18は10号土壙出土品で、既にその項で報告済。19は、No. 105で、雑なつくりの安山岩製である。長さ2.1cm、幅1.9cm、厚さ0.45cm、重さ1.3gとなる。20は、P84出土品で、安山岩製の特大型の異類である。現存長2.6cm、幅2.5cm、厚さ0.55cm、重量3.8gとなる。縁辺部に細調整を丁寧に施している。あまり風化していない。21・22は、7号土壙出土品で、その項で既に報告済。23は、No. 47で、長さ2.4cm、幅1.1cm、厚さ0.3cm、重さ0.8gとなる。安山岩製の柳葉形品である。24は、No. 6で、長さ1.6cm、幅1.35cm、厚さ0.3cmとなる。安山岩製で0.5gとなる。25は、3号土壙への混入品で、安山岩製の扁平な剥片鐵の類である。長さ1.9cm、幅2cm、厚さ0.3cm、重さ1.2gとなる。裏面ともに原剥離面を大きく残す。26は、P22出土品で、漆黒色良質の黒曜石製で、部厚く、小型スクレイパーにした方がよいのかもしれない。裏面に主要剥離面を大きく残し、現存長2cm、幅1.9cm、厚さ0.6cm、重さ1.9gとなる。27は、南端の東西トレンチ上層出土品で、片面の縁辺のみにプランティング状調整を施しただけのものであり、技術的には石錐のそれではない。ただ、機能的には錐でもよからう。安山岩の皮剥ぎ時の不定形横長剥片を利用しておらず、長さ2.5cm、幅1.5cm、厚さ0.5cm、重さ1.6gとなる。

石錐（第51図28～30）28は、P93出土の安山岩製品で、極めて風化している。表面には自然面を、裏面中央には主要剥離面をかなり残す。長さ2.8cm、基部幅2.35cm、厚さ0.6cm、重さ3.4gとなる。形態的には29とともにT字的になり、縄文期通有の基部が丸っこく部厚く錐部分が細くなる類とは趣きを異にしている。錐ではなく、他の工具なのか、或は縄文前期の時期的特徴をなす石錐形態を示しているものなのかもしれない。29は、7号土壙出土品で、既にその項で報告済。30は、No. 92で、安山岩の不定形小剥片を使用しており、裏面は主要剥離面の縁辺に細調整を施したのみである。あまり風化しておらず、長さ2cm、幅1.7cm、厚さ0.35cm、重さ0.9gとなる小型品である。錐部先端は銳利であるが、使用磨痕は認められない。

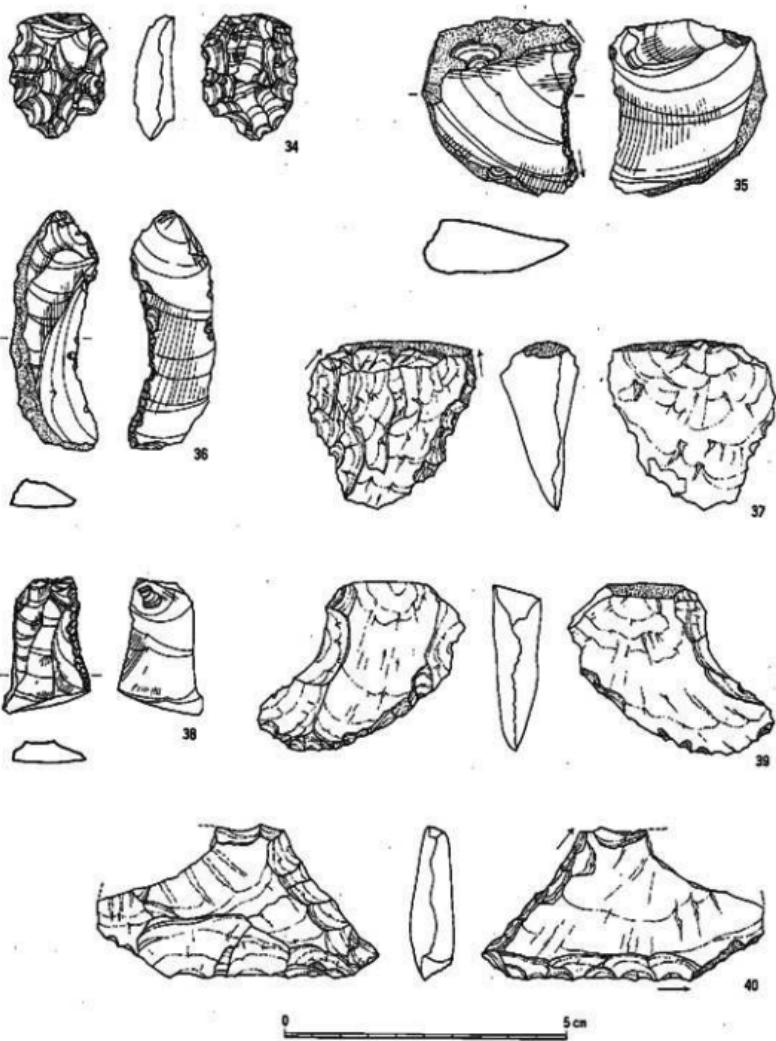
刺突具状石器（第51図31）縄文前期の1号住居跡出土品であり、施核状の剥片を利用したもので、既に住居の項で報告済。

石核（第51図32・33）32は、No. 405で、漆黒色良質の黒曜石の小石核である。表面に細石刃剥取状の橢状剥離がみられるが、定型的石核ではない。小剥片採取用の類で、長さ2.3cm、幅2cm、厚さ0.9cm、重さ2.6gとなる。33は、No. 158で、漆黒色良質の黒曜石石核である。上下端を調整して打面とする縦長剥片採取と、更に側面も打面として不定形小剥片採取も行われている。長さ3.25cm、幅1.8cm、厚さ1.4cm、重さ7.5gとなる。

スクレイパー（第52～54図34～50）34は、南側下段黒色包含層出土品で、上端に僅かに礫面を残すが、ほぼ全周に小さい調整を施している小型スクレイパーの類である。漆黒色良質の黒曜

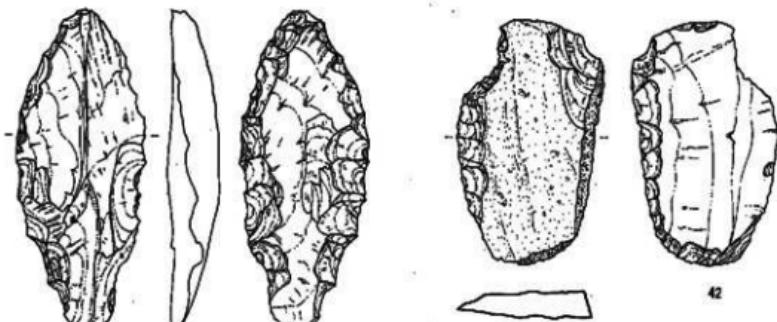


第 51 圖 打製石器・石錐・石核実測図 (実大)



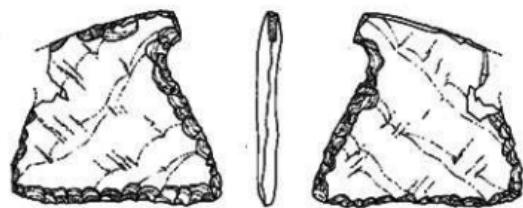
第 52 図 スクレイバー・使用制片実測図（実大）

石製で、長さ2.2cm、幅1.7cm、厚さ0.7cm、重さ2.9gとなる。35は、南端トレンチ出土品で、片刃のみに細調整を施しただけの使用剝片である。漆黒色良質の黒曜石製で、長さ3.1cm、幅2.8cm、厚さ1cmとなる。縫面を残したままの剝片採取技法が認められ、バルブカットが施されている。36は、南端トレンチ出土品で、縦長石刃状剝片の片側縁に微細な調整を加えた使用剝片である。まだらに半透明な黒曜石製で、長さ4.2cm、幅1.3cm、厚さ0.5cm、重さ3.7gとなる。側面に縫面を残したままの石核から採取しており、直角方向の皮部除去作業もみられる。打面調整を行っている。37は、南西端包含層Ⅱ-1層出土品で、厚みのある不定形剝片の片面側のみに調整を加えた使用剝片に近い小型スクレイパーである。表面右辺は鈍角なプランティングの細調整が施されている。玻璃質安山岩製で、長さ3cm、幅3cm、厚さ1.4cm、重さ8.8gとなる。38は、南西端包含層Ⅱ-2層出土品で、縦長剝片の片縁に微細な調整を施した使用剝片である。漆黒色で小さな不純物をいくらか含む黒曜石製で、長さ2.4cm、幅1.6cm、厚さ0.4cm、重さ1.5gとなる。36と同じように片側面に自然面を残したままの石核から採取しており、打面は調整している。39は、1号墳の西側下段包含層出土品で、不定形剝片の片縁のみに軽く細調整を施しただけの小ぶりのスクレイパーである。安山岩製で打面は縫面で、あまり風化していない。長さ3cm、幅3.7cm、厚さ0.9cm、重さ6.6gとなる。40は、1号住居跡出土の安山岩製スクレイパーで、既にその項で報告済。41は、7号土壙出土品で、既にその項で報告済。42は、南西端包含層Ⅱ-1層出土品で、横長剝片の皮部分を使用して、抉りを意識した縦型石匙に継がるスクレイパーである。長さ6.5cm、幅3.9cm、厚さ0.7cm、重さ14.7gとなる。安山岩製で、表中央面は粗面ではないが粗材風化面である。43は、No.7で、安山岩製横型石匙の薄手品である。極めて風化して灰白色をなす。横長剝片の縁辺のみに調整を加えたもので、長さ5.2cm、幅5.6cm、厚さ0.6cm、重さ19.5gとなる。44は、「土器3」出土品で、その項で既に報告済。45は、No.299で、縦長状の不定形剝片の縁辺に簡単な調整を加えた安山岩製石匙である。打面は自然面で、長さ5.5cm、幅4.4cm、厚さ0.7cm、重さ15gとなる極めて薄手品である。46は、No.298で、不定形剝片に抉り部をつくり、刃部は殆ど調整していない。安山岩製で、あまり風化しておらず、刃こぼれが若干みられる。長さ4.8cm、幅4.5cm、厚さ1cm、重さ18gとなる。47は、3号墳石室下段包含層出土品で、安山岩の縦長状不定形剝片のバルブ部分が除去され、表面縁辺に調整を加えたものである。あまり風化しておらず、エンドスクレイパー的となる。長さ5.6cm、幅3.8cm、厚さ1cm、重さ20gとなる。48は、7号土壙出土品で、既にその項で報告済なので省略。49は、南西端包含層Ⅱ-1層出土品で、横長剝片に抉りを入れて半裁し、裏面下辺のみに調整を加えたものである。安山岩製で長さ3.5cm、幅5.3cm、厚さ0.8cm、重さ14.6gとなる。あまり風化していない。50は、No.35で、安山岩の横長不定形剝片の下辺に表面からのみ調整を施したものである。長さ4.6cm、幅6.7cm、厚さ1cm、重さ25gとなる。あまり風化していない。

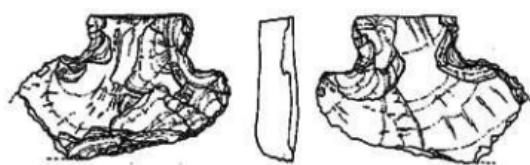


41

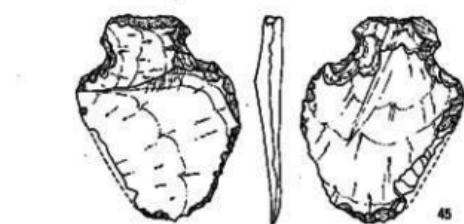
42



43

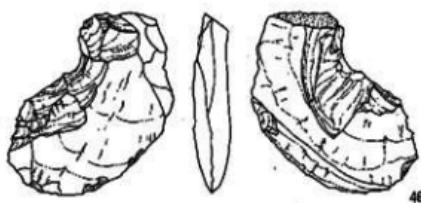


44

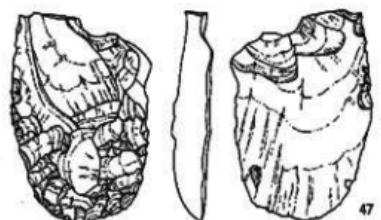


45

第 53 圖 石器等實測圖 (2/3)



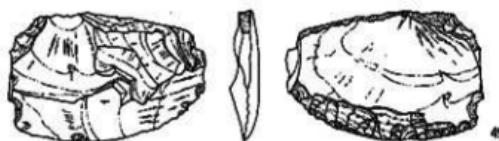
46



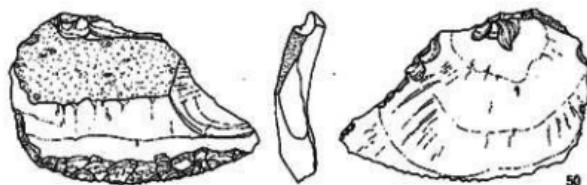
47



48



49



50

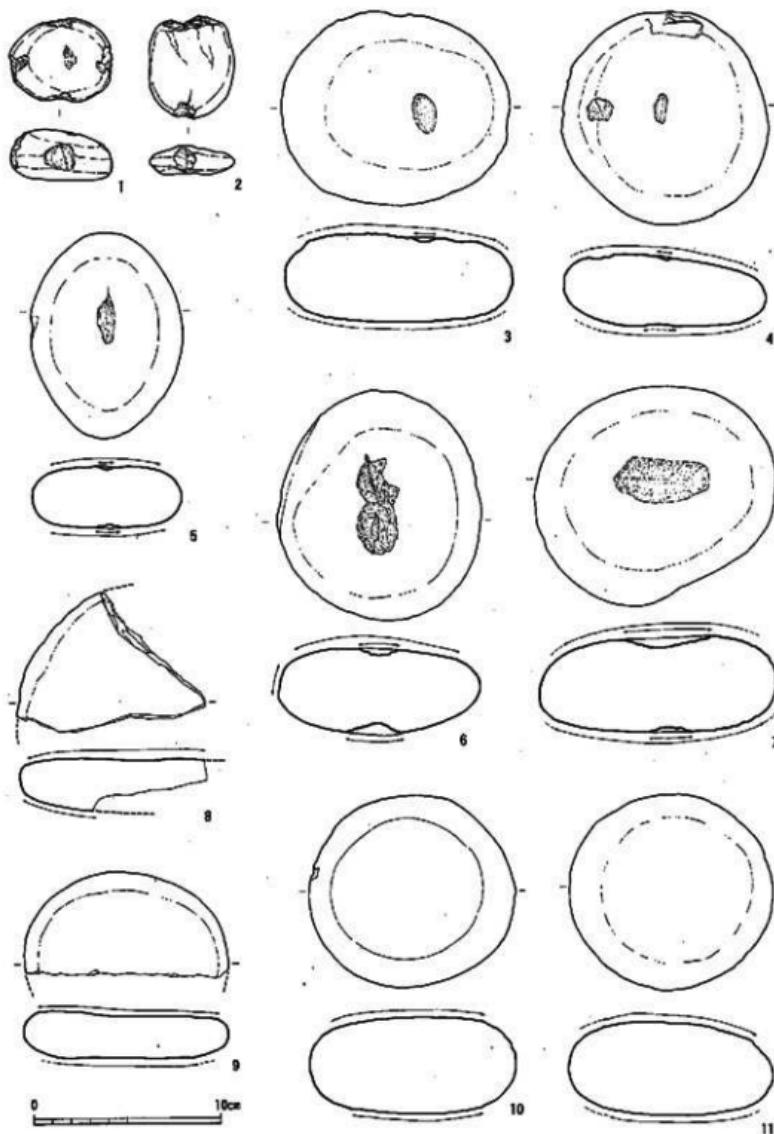


第 54 図 スクレイパー実測図 (2/3)

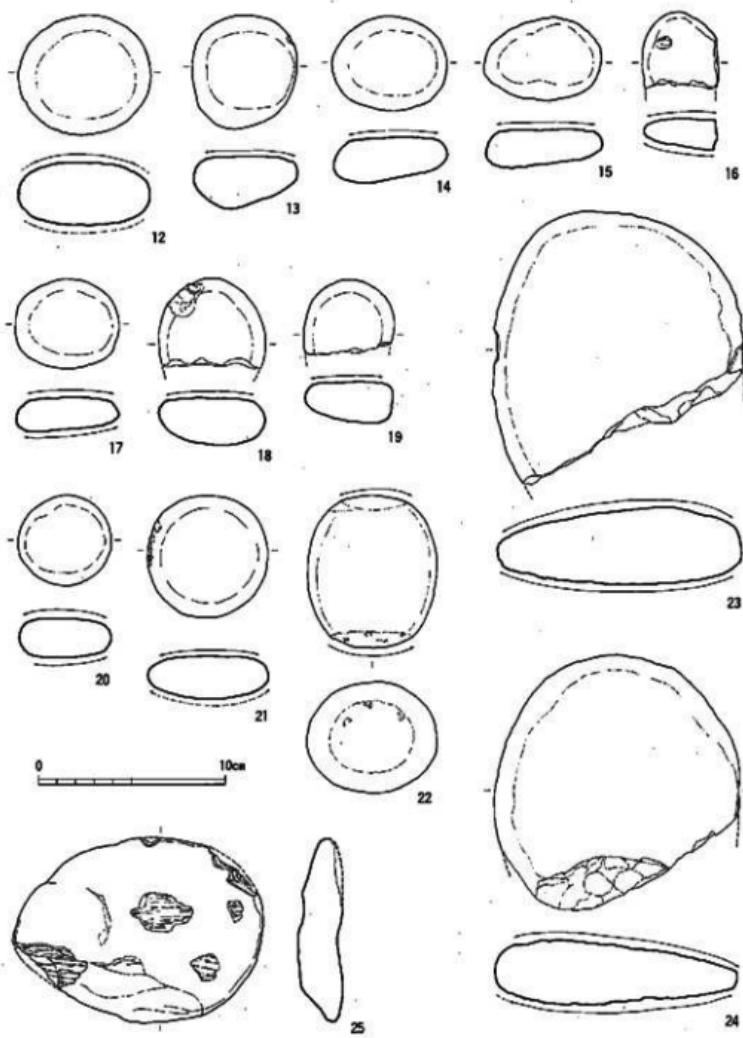
石錘 (第55図1・2) 1は、南端トレンチ出土品で、淡灰色の凝灰質花崗岩の河原石に4ヶ所打ち欠きを施しただけのもの。径 $5.5 \times 4.5\text{cm}$ 、厚さ 2.7cm 、重さ 94g となる。2は、1号墳南包含層出土品で、緑色片岩の河原石製の両端打ち欠き石錘である。径 $5.5 \times 4.6\text{cm}$ 、厚さ 1.6cm 、重さ 55g となる。

凹石 (第55図3~7) 3は、1号墳包含層南の2号土壙に混入していたもので、灰色の凝灰質石材の河原石で、表裏面ともに磨面となっており、表面に $2.2 \times 1.2\text{cm}$ の凹部を持つ。径 $12.3 \times 10.4\text{cm}$ 、厚さ 4.7cm 、重さ 895g となる。4は、2号墳西包含層出土品で、淡灰色の凝灰質石材の河原石を使用している。表裏面とも磨面となっている。表面中央に $1.5 \times 0.7\text{cm}$ の小さい凹部をつくる。裏面中央には、脈に沿って剝げた部分があり、あるいは意図的に凹部をつくろうとしているのかもしれない。径 $11.3 \times 11.1\text{cm}$ 、厚さ 3.8cm 、重量 643g となる。5は、2号墳西包含層出土品で、凝灰質の河原石を用いている。表裏ともに磨面で、表面中央には $2.6 \times 1\text{cm}$ の細長い凹部が、裏面中央にも $2.1 \times 1\text{cm}$ の縦長の凹部をつくっている。径 $11 \times 8.2\text{cm}$ 、厚さ 3.2cm 、重さ 450g となる。6は、「土器3」出土品で、既にその項で報告済。7は、3号墳石室下段出土品で、凝灰質の石材の河原石を用いている。両面ともに磨面で、表面中央には $5.1 \times 2.5\text{cm}$ の大きな凹部をつくり、裏面中央部分にも、 $2 \times 3\text{cm}$ の小さいがきちんとした凹部をつくりっている。径 $13 \times 11.7\text{cm}$ 、厚さ 5.1cm 、重量 $1,100\text{g}$ となる。

磨石 (第55・56図8~25) 8は、No. 109で、淡灰~黃灰色の凝灰岩質の河原石を用いている。表裏面ともに磨面で、径 10cm 以上、厚さ 2.8cm 、重さ 160g となる。9は、1号墳の西側下段包含層出土品で、多孔質の白褐色凝灰質河原石を用いている。表面中央はへこんでおり、裏面も磨面となっている。直径 11cm 、厚さ 2.5cm 、重量 190g となる。10は、No. 20で、灰色をした多孔質の凝灰質河原石を用い、表面はかなりはっきりした稜線をもつ磨面となり、裏面もかなり使用して平坦となった磨面をなす。径 $11 \times 10.4\text{cm}$ 、厚さ 5.1cm 、重さ 819g となる。11は、2号土壙への混入品で、淡灰色の凝灰質の河原石を用いている。表裏ともに磨面で、径 $10.9 \times 10.6\text{cm}$ 、厚さ 5cm 、重さ 695g となる。12は、1号墳西側下段包含層出土品で、淡灰色の凝灰岩河原石を用い、表面は磨面で、裏面は一応使用されている程度である。径 $7.1 \times 6.3\text{cm}$ 、厚さ 3.3cm 、重さ 190g となる。13は、南西端包含層II-2層出土品で、淡紫灰色の凝灰岩の河原石を用いる。表面だけが磨面で、径 $6 \times 5.6\text{cm}$ 、厚さ 2.8cm 、重さ 117g となる。14は、南西端包含層II-2層出土品で、淡灰色の凝灰質石材の河原石を用いる。表面のみが磨面となり、径 $6.2 \times 5\text{cm}$ 、厚さ 2.4cm 、重さ 102g となる。15は、南西端包含層II-2層出土品で、多孔質の淡灰色凝灰岩河原石を用いる。表面だけが磨面となっており、径 $6.3 \times 4.4\text{cm}$ 、厚さ 2cm 、重さ 70g となる。16は、南西端包含層II-2層出土品で、淡赤灰色の凝灰岩の河原石を用いる。表裏両面ともに磨面となっており、径 4cm 以上、厚さ 1.8cm 程で、重さ 37g となる。17は、遺構検出時の採集品で、多孔質の淡灰色凝灰岩質の河原石を用いる。表裏両面ともに磨面となって



第 55 圖 石錐・凹石・磨石実測図 (1/3)



第 56 圖 磨石実測圖 (1/3)

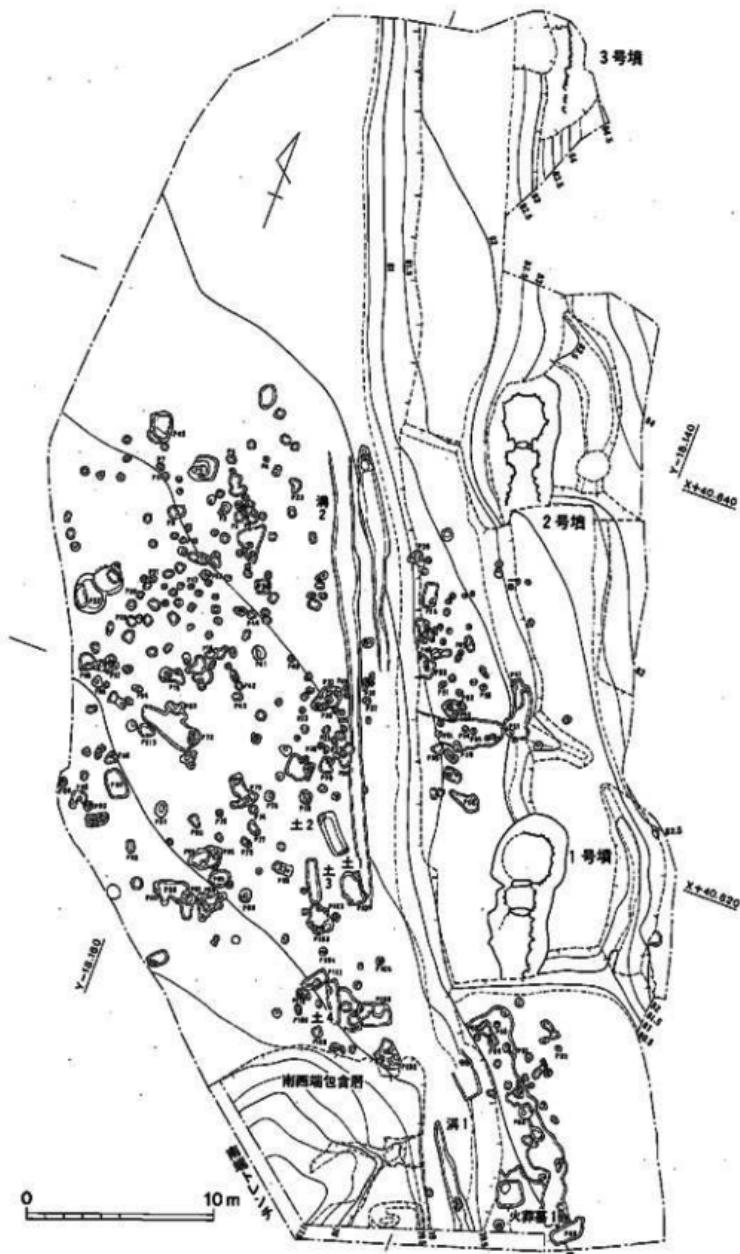
おり、径 5.5×4.8 cm、厚さ1.7cm、重さ69gとなる。18は、1号墳西側下段包含層出土品で、白～淡赤灰色の凝灰質花崗岩の河原石を用いている。表面のみが磨面となっている。径5.7cm以上、厚さ2.5cm、重さ85gとなる。19は、南端包含層Ⅱ-1層出土品で、淡灰～淡赤色の凝灰質花崗岩河原石を用いている。表面のみを磨面としており、径4.9cm以上、厚さ2.2cm、重さ60gとなる。20は、1号墳包含層南出土品で、多孔質の灰白色凝灰岩系河原石を用いている。表裏面ともに磨面としており、径 5×4.8 cm、厚さ2.1cm、重さ75gとなる。21は、南西端包含層Ⅱ-2層出土品で、淡灰色の凝灰岩質石材の河原石を用いている。表面は平坦に磨っており、裏面も凸面ながらかなり擦れている。径6.5cm、厚さ2.4cm、重さ142gとなる。22は、P97出土品で、淡灰色の凝灰岩質河原石を用いる。梢円形環の両端を磨石（杵状）として使用したもので、両面ともわりとしっかり面をなす。長さ8.1cm、直径7×6cm、重さ500gとなる。23は、南端トレンチ出土品で、灰色の凝灰岩質石材の河原石を用いる。表裏両面ともに磨面となっている。長さ14.5cm以上、幅13.4cm、厚さ4cm、重さ870gとなる。24は、8号土壙出土品で、既にその項で報告済。25は、P87出土品で、黒色片岩で全体に赤く焼けている。扁平な磨石的な河原石で、下辺及び表面がやや擦れたような感じだが、意図的なはっきりした研磨面はない。径 13.5×9.8 cm、厚さ2.3cm、重さ390gとなる。

4 古墳群の調査

(1) 天園1号墳

本遺跡では、予想外に横穴式石室を主体とする円墳3基が発見された。この古墳群は、あまり広いとは言えない尾根の西側斜面に、センターに平行して3基並んでいる。尾根先端ではなく、かなり奥まった位置であり、群集墳としては明るいイメージは無い。当尾根上面は夕月遺跡として今回調査しているが、古墳があった痕跡は無い。この尾根の西側の谷、つまり当古墳群が面している谷は極めて狭く、沖積部分は殆どみられない。この谷を挟んで西側対岸の斜面には竪穴式石室群がみられ、この谷筋が奥津城としての機能を伝統的に維持していたことが考えられる。これに対して、この尾根の東側の谷は広く、奥行きもあり、現在でも谷水田の可耕地が続いている。ところが、この東側谷沿いには現在のところ古墳群は発見されておらず、両谷の差が、生産の場と墓地とに明瞭に使い分けられていたことを示すようだ。

3基の古墳は、南端、つまり尾根先端寄りの1号墳が最大で、北のものほど小規模になって



第 57 圖 天國遺跡全體圖 (上層) (1/300)

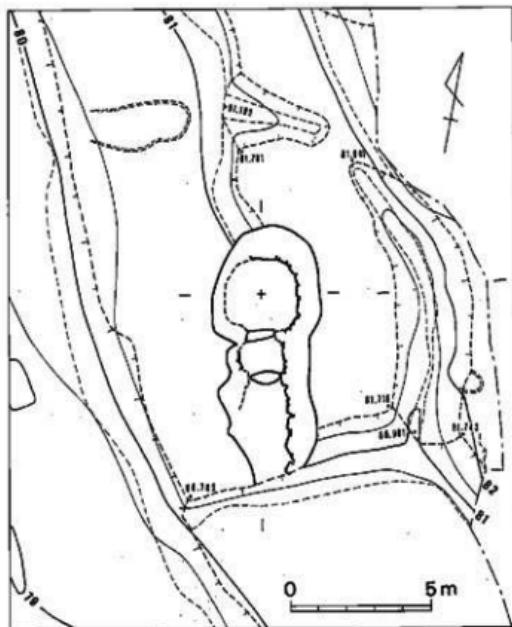
おり、築造順序が推定できる群である。

墳丘（第58図）

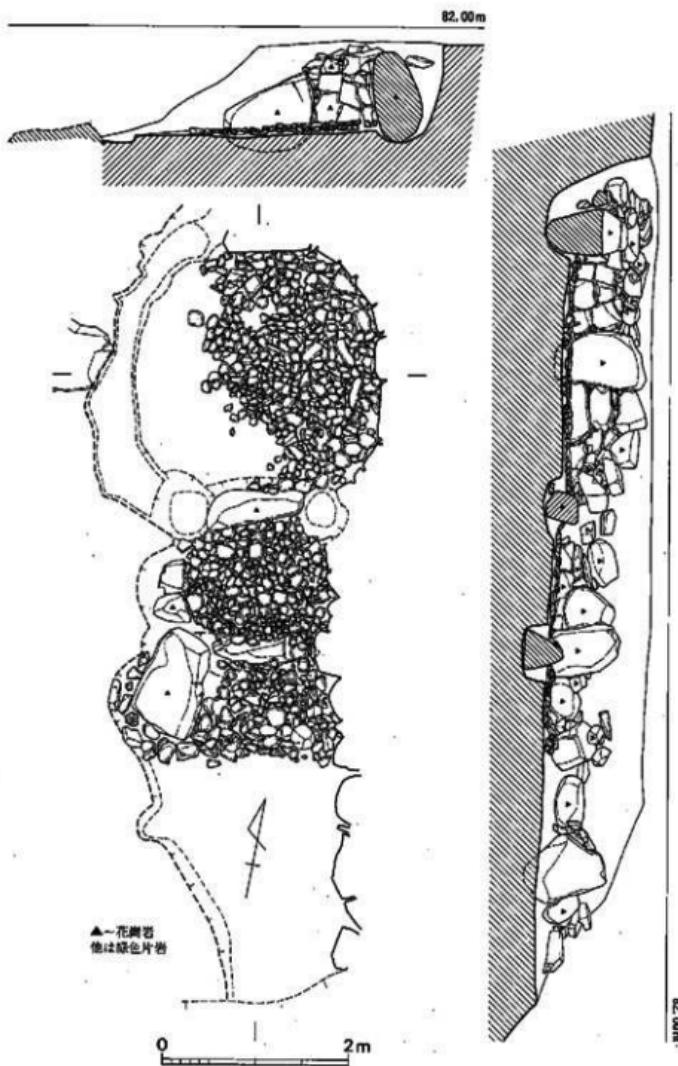
当古墳群の現状は3基とも、斜面中途の段々畝であり、当初の封土は全く残っていない。当1号墳は更に西側と南側を畝によって切られており、約1/2部分の周溝が残るのみである。周溝は北東側で切れており、周溝底が南方と西方へ急激に下がって行っている。斜面築造における馬蹄形周溝の通常の在り方とは異なる。周溝の幅は東側で最大2.7m、北側でも同様である。深さは、東側土層最上部で67cm、東南端で82cm、北側で54cmとなる。周溝埋土の大半は真砂土の汚れた類であり、周溝自体を東側急斜面まで掘り込んでいるため、急斜面側からの流入土でかなり早い時期に埋没したものと推定できる。以上のことから、墳丘の本来の高さは推定できないが、周溝内縁までの直径は10m、周溝外縁までは15mとなる円墳であったと想定できる。ただし、羨道部が長く残っており、そこまで封土がかぶっていたとしたら、南側に3m程延びることになり、南北方向にやや長い形状であったかもしれない。

主体部（第59～61図）

主軸を N11°W の略南北にとる複室横穴式石室である。羨道部端（石積部南端）から奥壁までの全長7.7mとなる。石積部南端以南が畝の段でカットされているので、素掘りの墓道の有無、規模、形状は判からない。玄室は、長さ2.54m、幅2.6m、の胸張りというよりも、ほぼ円形に近いプランをなす。現状は、玄室西壁の腰石までのすべてと玄門部の左右両袖石が完全

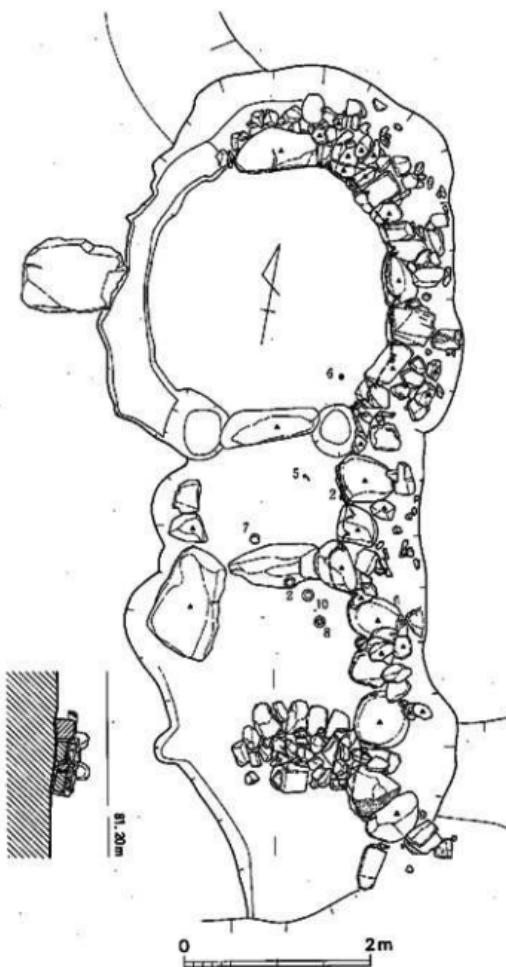


第58図 天塹1号墳地山整形測量図 (1/200)

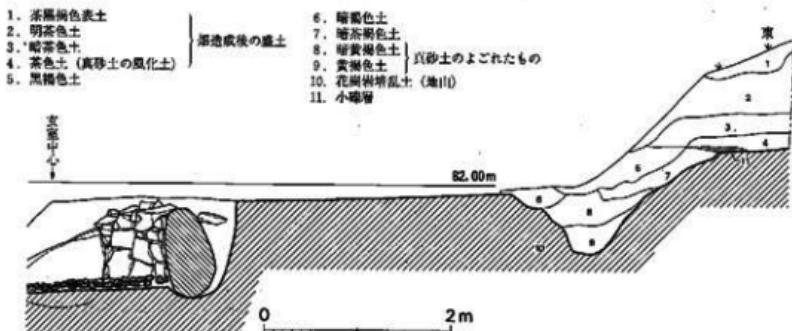


第 59 圖 天國 1 号墳石室実測図① (1/60)

に抜き取られており、それらの抜き跡痕を確認したのみであった。奥壁の鏡石の花崗岩も上半を打ち割られて除去されていた。これは、丁度、煙の段がほぼ石室主軸線と同じ位置にあたり、その西半分が縦に石材等の除去が行われたということである。この状況は、前室西壁が一段分の石列しか残っていないということ、前室の西側袖石の立石が倒されているということ、更に、羨道部西壁の石積が全く残っていないということと同じ理由によるものである。玄門部東袖の石まで抜かれているということは、この立石が煙の耕作に邪魔になるほど高いものであったことを推定させる。さて、石室の築造順序としては、まず腰石の幅の2倍の広さをもった墓壙を掘り込む。下端においてはそれより狭くなり、腰石のうちの大きなもの（奥壁鏡石、東壁中央の立石等）は後ろに若干の余裕をもつ程度（人が立って作業ができる程度）の墓壙掘り込みとなっている。次に奥壁鏡石を据え、設計に従って玄門部両袖石を立て、玄室左右両壁の中央に大きめの石を立てる。同時に前門部両袖の立石もしっかりと立てられたであろう。



第 60 図 天園 1 号墳石室実測図② (1/60)



第 61 図 天塹1号墳東側周溝断面実測図 (1/60)

玄室左右両壁中央の立石は、円形プランク玄室の計画の中で重要な作業であったろう。西壁のものについても、丁度その位置の外側に倒れた大石が残っており、左壁中央立石であったと考えられる。以上の要の位置の大石設置の後に、その間を埋めるように、緑色片岩を主として石積を行っている。それらの腰石は通有の横穴式石室においてみられるような大きな石ではなく、二段目以上の積石とあまり変わらないような塊石を、平積み的に据えている。三段目まで残っているが、各段毎にその上面ラインをほぼ描えている。大旨重箱積みを基本としている。さらに各々の積石の間隙には、小さな緑色片岩片を充填して補強している。積石は下半部では前面を垂直にするが、上半ではやや内側へせり出させており、本来在った上方ではかなり持ち送りで狭くなっていたと考えられる。天井石等近辺にみられず、上半部の構造は判からない。玄門部の軀石は、花崗岩の大きい石で、下半部を20cm程深く埋め込んでいる。床面の敷石は、ほとんどが直径10cm内外の河原石で、下部に片岩の大きめの角礫が若干みられる。玄室西半部はかなり除去されているが、残存部からみると、かなり丁寧に敷かれている。次に、前室であるが、長さ1.3m、幅1.54mとなり、小規模な、形ばかりの複室構造を保ったという感じである。両側壁は円弧状に胴張りをなし、玄室同様の企画性がうかがわれる。前門部東側の袖石は花崗岩の長い石を立てており、敷石上面から73cmほどの高さがある。側壁の積石は、玄室のそれと比べて、腰石も小さめで、その上の積石もやや粗雑になっている。前門部の軀石はこの規模の石室にしては異様に大きく、地山を30cm程も掘り込んで据えている。前室床面の敷石は、円形の河原石を密に施しており、原状を良く保っている。次に、羨道部は、東壁積石で見る限り長さ3.3mまで残っている。南端では、東側外方へ積石部が開いて行く部位がみられ、墳丘内腰列石が本来適っていたのかもしれない。羨道部床面は、奥から1mの間までが敷石があり、それより手前は素掘りの床面となっている。敷石の有無がはっきりと区画をなしているので、嚴密にはこの敷石部分だけが天井石のかぶった羨道部であったのかもしれない。羨道部東壁の石積

は、大きい石を使ってはいるが雑である。羨道部床面はわずかに南側へ低くなっている。これは、玄室床面が最も高く、前室から羨道部へと全体に低くなってくる状況の一環である。閉塞石は、羨道部のほぼ中間位置で、床面敷石部から約20cm南側へ離れた位置に設けられている。この点からは、少くともこの閉塞石の位置までは天井石がかぶさっていたことが考えられ、前言の敷石部は必ずしも天井石の南限を示すものでは無いとも言える。閉塞石は、幅1mの間に、奥壁側に大きめの石を並べ、その反対の外側にも大きい石を横位に置いて、その間を小さな石で埋めている。閉塞石の残りは悪く、30~40cmの高さまでしか残らず、すぐ横の東壁の石積の高さからみて異様に低い。また、この閉塞石の下部がしっかりと床面の地山に密着していることからも、この閉塞石は初葬時からのものであり、追葬時に上半の積石が除去されてしまったものと考えられる。

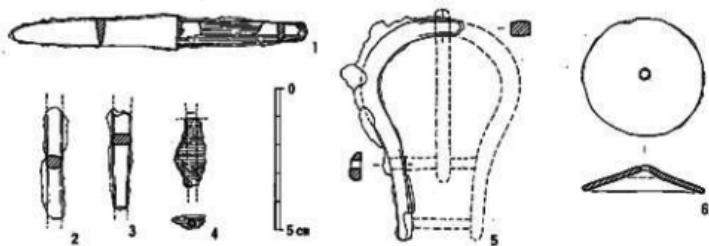
遺物出土状態（第60図）

全体として、石室内の擾乱や破壊がひどくて、副葬品としての原位置を示すものは少いと思われる。まず、玄室からは、床面から同安窯系青磁皿、鉄製紡錘車、埋土中から黒色土器片、底部糸切土師器小皿片、鉄鎌片1点等が出土しており、平安末期の再使用時の様相だけが突出している。鉄器類は擾乱を受けて動いているようである。次に前室では、床面から7世紀前葉代の須恵器杯蓋、7世紀中葉の須恵器杯身、土師器碗、鉄製鉗具、鉄鎌片、埋土中から須恵器杯蓋片、土師器皿、瓦器碗、土鍋片などが出土しており、7世紀中葉の追葬時の副葬品が集中している。さらに、羨道部では、床面から7世紀中葉の須恵器杯蓋、同時期の杯身、直口小壺、土師器杯3点、平安末頃の土師器杯、鉄刀子、鉄釘等が出土している。これらの出土状況から、初葬時の副葬品は大抵玄室の両袖寄りと前室に、追葬時の副葬品は前室と羨道部に、平安時代の再使用時には玄室・前室・羨道部とともに副葬品・遺物が残された状況が判断される。ただし、平安時代のものは土鍋片が混じる等、副葬状況とは必ずしも言い難い部分もあり、もっと他の用途でこの石室が利用されたことも考えねばならないだろう。次に、周溝や墳丘内での明らかな埋納等の遺物は見られない。ただし、南西端包含層や1号墳の南下段包含層中から、二次堆積遺物としてかなりの古墳時代土器がみられることから、本来当古墳の前庭や墓道、南~西の周溝中に土器がかなり在ったものと推定される。

出土遺物（第62・63図、図版50・51）

鉄刀子（第62図1）前室寄りの羨道部床面から出土したもので、全長10.5cm、身幅は関部で1.2cm、刃部長6cm、背の厚さ2.5mmとなる。茎部は長く、柄の木質が付着している。

鉄鎌（第62図2・3）2は、前室床面出土品で、現存長3.9cm、幅5.5mm、厚さ4mmの断面四角形をなす。3は、玄室埋土中出土品で、現存長3.5cm、上半は6.5×4mmの長方形断面をなす。



第62図 1号墳出土鉄器実測図 (1/2)

下半がやや細身になる。

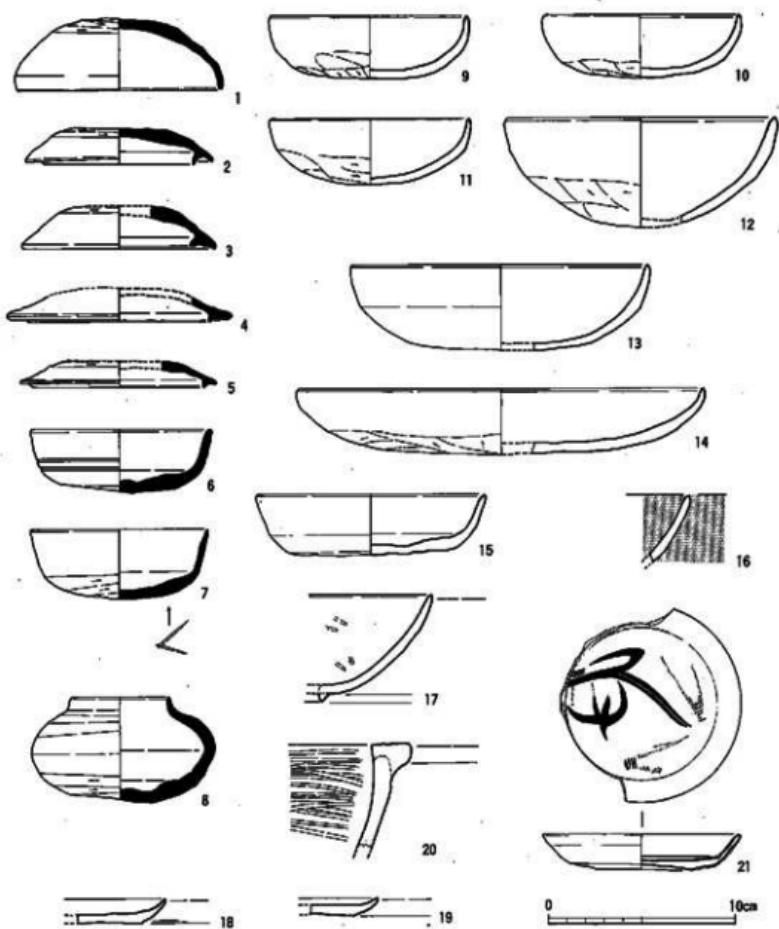
鉄釘 (第62図4) 現存長2.6cmで、上端で直径3.5mm、下端で3mmほどの断面円形をなす。上端部を除いて以下は横方向空目の木質が付着しており、歴史時代の板に打ち込まれたものと考えられる。前室寄りの羨道床面から出土したものであるが、1本だけの出土であり棺使用のものかどうかは断定できない。

鉄具 (第62図5) 前室の床面から出土したもので、復原すると長さ8cm、最大幅5.7cm、基部幅3cm程となる。上方の曲線部分は7×5mmの断面長方形となり、基部側は10×4mmの断面半円形となる。横棒を2ヶ所復原図示しているが、上段のものは左側に穴があり、下段のものは左側に不明瞭ではあるが穴らしきへこみがみられる。

鉄紡錘車 (第62図6) 玄室の床面から出土したもので、直径4.3cm、厚さ2mm程の正円形鉄製品である。中央の穴はつまつたままである。高さ9mm程の傘形の形状となり、重量16.5g。

須恵器杯蓋 (第63図1～5) 1は、前室床面近くの埋土中出土品で、口径11cm、器高3.8cmの完形品である。天井外面は回転ヘラ削りで、内面中央はナデツケている。胎土に細砂粒をいくらか含み、焼成堅緻で内面は暗褐色、外面は海老茶色をなす。7世紀前葉代のもので、当古墳出土品中最古のものであり、初葬時期を示すものであろう。2は、羨道床面出土品で、返り部径8cm、器高1.9cmとなるほぼ完形品である。天井外面は回転ヘラ削り、内面は広くナデツケが施される。胎土に粗砂少量、細砂粒をかなり含む。3は、前室の床面近くの埋土中出土品で、返り部径7.6cm、器高2.3cmとなる。生焼けで黄灰色をなし、胎土に細砂粒をいくらか含む。4は、前室床面直上の埋土出土品で、返り部径10cmに復原できる。胎土に細砂粒をいくらか含み、焼成やや良好で茶褐色をなす。5は、表込め土中出土品で、返り部径9.1cm、器高1.4cm程の扁平な頸となりそうで、天井外面は回転ヘラ削りを施す。内面中央はナデツケ、胎土精良で、白灰色の生焼け品である。以上の2～5は、7世紀中葉のもので、追葬時の副葬品と考えられる。

須恵器杯身 (第63図6・7) 6は、羨道床面出土品で、口径9.8cm、器高3.4cmとなり、底外面



第 63 圖 1号墳出土土器実測図 (1/3)

はヘラ切離しのままである。他面は磨滅している。体部外面に2条の沈線を施し、胎土に粗砂粒をわずかに含む。生焼けで、内面は灰黄～暗灰色、外面は黒～暗黄色をなす。7は、前室床面出土品で、口径9.6cm、器高3.6cmの完形品である。底外面は回転ヘラ削り後にナデており、

底内面にはナデツケがみられる。細砂粒をいくらか含み、焼成軟質で淡灰白色をなす。底外面にV字形のヘラ記号がみられる。以上の杯身は7世紀中葉のもので追葬時期を示す資料である。当時期の副葬須恵器に生焼け品が多いのが気にかかる。

須恵器壺（第63図8） 美道部床面（敷石より5cm浮く）出土のもので、口径5.2cm、器高5.6cm、腹部最大径9.9cmとなる。底外面はきたない切離しのままで、胴部外面下端は回転ヘラ削りを施す。他は内外面ともに回転ナデ仕上げで、細砂粒をいくらか含む。焼成堅敏な完形品である。

土師器杯（第63図9～13・15） 9は、美道部床面出土の完形品で、9～11の3個体は同工のセットである。口径10.5cm、器高3.4cmで、体部外面下半から底外面は手持ちヘラ削りで、外面上半は横ナデ、内面は磨滅している。胎土に赤褐色粒を多く含み、焼成良好で内面は明橙褐色、外面は淡黄～橙褐色をなす。10も、美道部床面（敷石より3cm浮く）出土で、口径10.5cm、器高3.4cmで、底外面は手持ちヘラ削りかと思われる。体部内外面は横ナデ、底内面は一部ナデツケ状となる。胎土に赤褐色粒を多く含み、焼成良好で、内外面ともに橙褐色をなす。11も、美道部床面出土品で、口径10.8cm、器高3.5cmの完形品である。底外面は手持ちヘラ削りの上をナデしており、内面は丁寧なナデと思われる。胎土に粗砂粒をいくらか含み、焼成良好で、内外面ともに橙茶色をなす。以上の3点は、7世紀中葉の、内渦化がとれてきて小型化してきた、7世紀後葉段階への過渡期の状況を良く示しており、追葬時の供獻品と考えられる。12は、前室床面のものと埋土中出土のものが接合した資料で、口径14.6cm、器高は5.8cm程となりそうである。体部外面下半は手持ちヘラ削り、内面は磨滅しているがヘラ磨きかと思われる。胎土精良で、焼成良好、内外面ともに明橙褐色をなす。7世紀中葉の追葬時のものであろう。13は、前室埋土中出土品で、口径16.1cm、器高4.5cmのやや大型品である。体部外面中途に稜線を持ち、9～12の特徴に類似する。外面は磨滅しており、調整不明。内面は丁寧なヘラ磨きを施しており、胎土精良である。焼成良好で明橙茶色をなす。7世紀中葉あるいは若干下がる時期のものであろう。15は、前室寄りの美道部床面出土品で、口径12.3cm、器高3.3cm、底径8.7cmとなる。底外面はヘラ切と思われ、板目圧痕もみられる。粗砂粒をいくらか含み、焼成良好で外面は淡い肌色、内面は淡橙褐色をなす。口径がちょっと小さいが、12世紀中頃前後に考えるのが妥当であろう。

黒色土器（第63図16） 玄室内埋土中出土品で、内外面ともに黒色磨研で、胎土精良、焼成不良品である。口縁内外面だけは横ナデである。平安時代再使用時期のものであろう。

瓦器（第63図17） 前室埋土中出土品で、器高5.7cm程の楕形となる。高台は小さな三角形断面をなし、胎土精良で内外面ともに黒色をなす。内面はヘラ磨きで、外面は磨滅している。

土師器皿（第63図14） 前室埋土中出土品で、復原口径22cm、器高3.4cmとなる。底外面は手持ちヘラ削りで、口縁内外面は横ナデを施す。内底面は磨滅している。胎土精良で、焼成良好、内面は白褐一桃色、外面は灰黒～淡桃色をなす。7世紀中葉～後葉段階のもので、追葬時の供

試品であろう。

土師器小皿（第63図18・19）18は、玄室埋土中出土品で、底面は糸切であろう。口径は出ないが器高1.3cmで、胎土精良で肌色をなす。19も玄室内埋土中出土品で、底面は糸切である。器高0.9cmで、胎土精良、焼成やや不良で内面は肌色、外面は淡褐色をなす。いずれも体部が長めで、12世紀中頃から若干降るまでの間のものであろう。

土鍋（第63図20）前室埋土中出土品で、内面は横位の粗いヘラ磨き風、口縁上面から外面上端は横ナデ、体部外面はナデている。粗砂多く含み、焼成良好で内面は茶色、外面は煤が付着して暗褐色をなす。平安末前後の再使用時のものであろう。

青磁皿（第63図21）玄室床面出土品で、口径10.6cm、器高1.9cm、底径5.1cmの同安窯系皿である。底外面は露胎で、釉は灰緑色、胎土は密で淡灰色をなす。

年代と被葬者

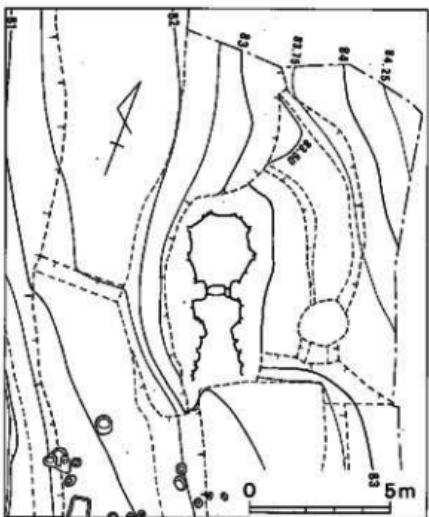
以上述べてきた出土遺物と、石室形態からみて、1号墳の初築は7世紀前葉と考えられる。ただし、まだきちんと複室構造を持ち、円形に近い石室企画が維持されていることから、甘木市周辺においての調査結果による7世紀初葉段階まで上げられそうな気がするが、若干石室形態に両地域間の差があるのかもしれない。更に、7世紀中葉期においての多量の土器がみられ、追葬がこの時期に行われたことは明白である。この時期で、当古墳の使命は終わっており、はるか平安時代末期になって、玄室・前室・羨道部分の再利用がなされている。この時期の利用の仕方は、単に埋葬用だけではなく、生活土器片の出土などからも、別の石室内利用を考えねばならないだろう。被葬者としては、当該時期の石室とすればきちんとした、それなりの規模のものであり、当地域首長の下に従属した有力家族の墓地であったと考えられる。これは当然1～3号墳全体を含めた位置付けとなろう。

(2) 天園2号墳

前述の1号墳の北方に10mほど離れて位置する、複室横穴式石室を主体とする円墳である。全体に1号墳よりやや小規模で、位置的にも谷奥側であるため、両者の年代的・身分的差異の有無には興味深いものがある。占地は、1号墳と同様の急斜面真下であるが、畠の段として1段高い部位にある。

墳丘（第64図）

当古墳の封土は、段々畠の上方にあるため上面を全て削平されてしまつて残存していない。現状では、南端の羨道部ぎりぎりまでが下の畠との段になって、羨道側が全く残っておらず、



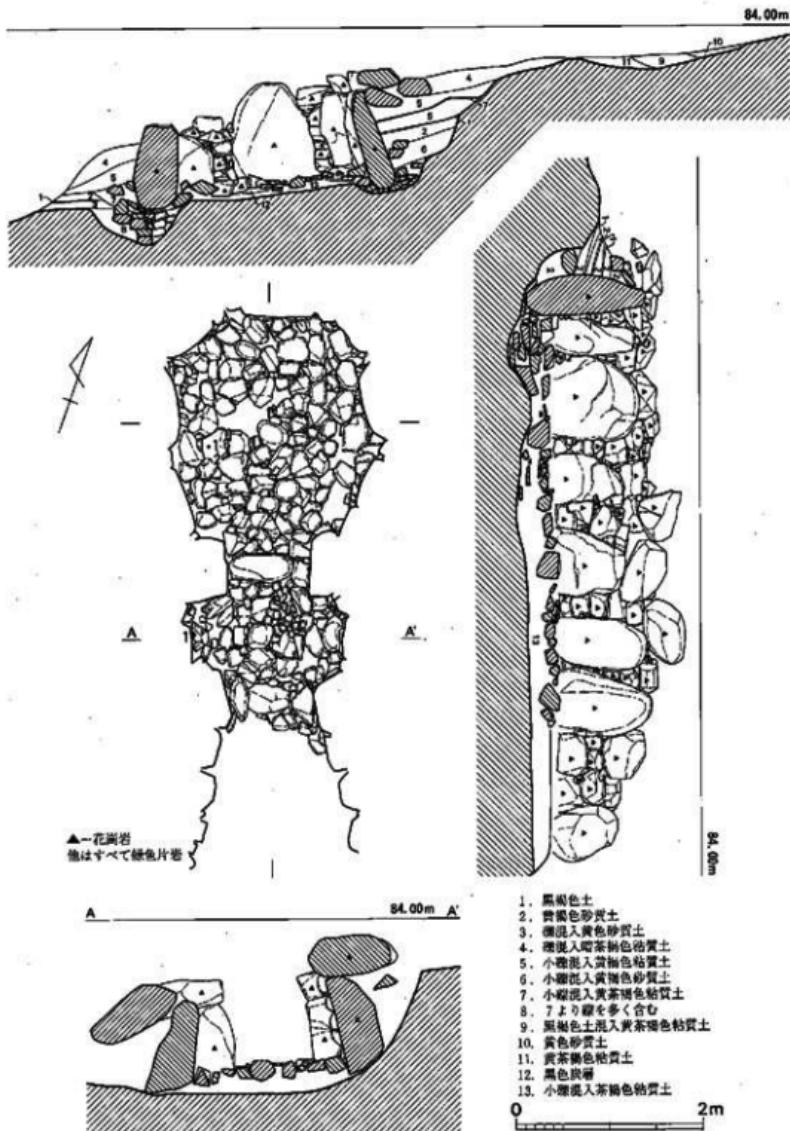
第 64 図 天圖 2 号墳地山整形測量図 (1/200)

に11m程となろう。小規模円墳と言える。

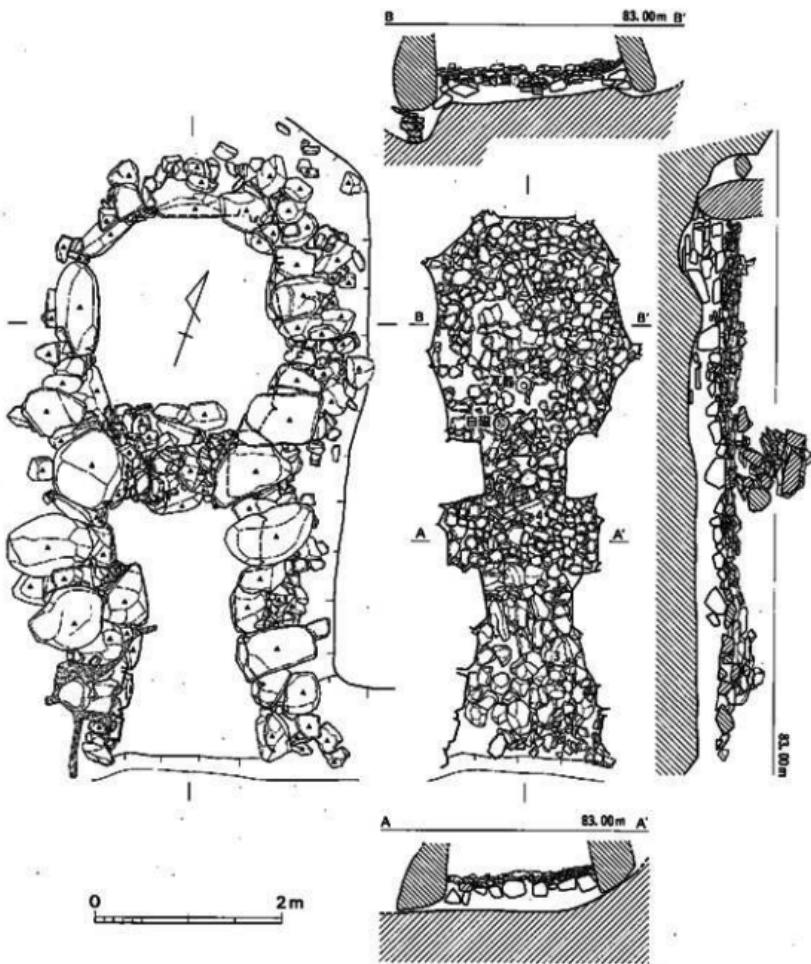
主体部（第65・66図）

主軸をN $19^{\circ}30'W$ にとる両袖式複室横穴式石室である。後部石積南端までの全長が5.88mとなり、南隣の1号墳より小規模である。石室の残存状況は、1号墳よりは良く残っているが、奥壁鏡石の上端付近までしか残っておらず、更に南側では後部石積石のぎりぎりまで、以南の墓道部分は不明である。石室構築は全体に雑で、行きあたりばったり的な作業を行っている。玄室は、長さ2.53m、幅2.1mの不整形胴張りプランをなす。本来1号墳と同様の円形プランを目指したのかもしれないが、小規模な上に、壁に立てた石が大きめのものであるため、多角形になってしまっている。地山の掘り込み作業が計画的でなく、凹凸が多いため、奥壁鏡石の設置でさえ、内側と下面等に多くの小石材で補強して据えている。側壁は、左右とも3個ずつ大きめの石を立て、その間隙を埋めるように小さめの塊石を積んでいる。この立てられた腰石は上面の高さをほぼ揃えており、そのために、西側腰石下では4~5段に小塊石を積み上げてから腰石を据えており、東側壁でも腰石下とその前後にかなりの小石材を含めて補強している。床面は、当初の掘り込みがきちんととしていなかったため、小蝶の混じった茶褐色粘質土や

さらに、西一北側の周溝も西側畠への段落ちですべて無くなっている。従って、残っている東側周溝からしか墳丘規模等は復原できない。周溝は北側の幅広い所で、幅3m、深さ50cm程、周溝底が最も高い玄室東側付近で、幅2.2m、深さ30cm程となる。周溝自体が東側が高くなる傾斜面に掘り込まれているため、当然周溝の東側肩部が高くなっている。周溝底は、玄室中心から北東方向の部位が最も高く、そこから北西へと南の方へと低く下がって行く。現存の周溝部分だけから墳丘直径を復原すると、周溝内側上端の直径で東西に6m、南北に8m程となり、周溝外縁で測ると東西に10.5m、南北



第 65 図 天圓 2 号墳石室実測図① (第 1 床面) (1/60)



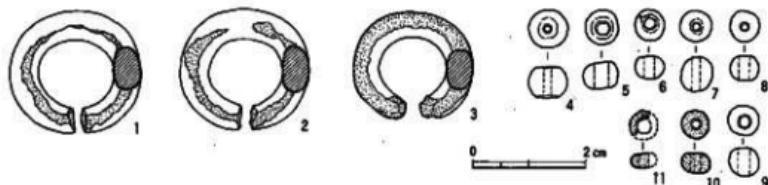
第 66 図 天園 2 号墳石室実測図②（上面観・第 2 床面）(1/60)

角砾を埋め込んでならしている。その上に20~30cm大の大きめの角ばった石を丁寧に敷きつめている。この敷石は、当初のものが前室まで、この面を第1床面と称する。この敷石の上に

更に、今度は狭道部いっぱいまで敷石が施され、これを第2床面と称する。第1と第2床面の間には明確な土等の間層はみられず、上下間の石は接しているが、レベルが明らかに異なること、用いられている敷石の石材が異なること、さらには、第1床面上から多くの出土遺物がみられるうこと等から、追葬時に全面に敷石を重ねたものと断定した。第2床面の敷石は、玄室と前室に10cm強の丸い河原石を敷きつめ、狭道部に20~40cm大の角ばった石をやや雜に敷いている。この上面からも当然出土遺物がみられる。次に、前室は、長さ1.1m、幅1.6mと狭く、形ばかり付けた類となる。横長の胴張りを意図したものであろうが石材の関係で多角形となっている。前室側壁は、玄室の側壁構築と同工で、大きい石を立ててその間隙に小石材を充填している。前門部両袖も長い石を立てている。狭道部側壁積石は、玄室・前室のそれと異り、やや大きめの塊石を重箱積状に積み上げている。また、玄門部の樋石は、細長い石1個だけでは足りずに、もう1個小さめの石を繰り足している。前門部の樋石は、長めの石を中心にして置き、その両脇のすいた部分に各1個の石をつめており、前室の敷石の継ぎのようである。あまり樋石として明確な状況ではない。当石室の使用石材は、壁の石の7割方が花崗岩で、要となる大きい立石等は例外なくそうである。その他の側壁中の小さな石材は殆ど緑色片岩である。以上の石室構築の他に、特異な閉塞について見てみよう。当古墳の閉塞石は、丁度玄門部にて検出された。やや玄室内に張り出して積まれており、大小の石をかなり雜に、中には土もかなり混じっていた。ところが、この閉塞石の下には5cm程の炭層がみられ、その中、つまり明らかに閉塞石の下から白磁碗完形品が出土した。玄室内第2床面より10cm浮いた所から瓦器碗1個も出土しており、この平安末前後に玄室内が何らかに再利用され、その時かそれ以前に玄門部に閉塞が施されたことがわかる。なお、通常の横穴式石室でみられるような前門部や狭道部での閉塞の痕跡はここでは認められなかった。

遺物出土状態（第65・66図）

以上述べたように、石室内は敷石の再施工や後世の明らかな再利用によって、かなり攪乱を受けていた。まず、第1床面上からは、玄室中央西壁寄りで金環2個が対になって出土しており、また、玉類も少量発見された。これは原位置を保っているものと考えられる。第1床面の前室からは、須恵器杯身と鉄鐵3点が出土している。鉄鐵は散乱した破片であり、前室はかなり荒されたものと思われる。上層の第2床面上からは、玄室で7世紀後葉期の須恵器杯蓋、平瓶の破片などが北西隅付近から出土し、床面から5~10cm浮いて既述した如く白磁碗と瓦器碗が出土した。玄門部付近からは須恵器破片がかなり出土し、前室からは鉄鐵片が出土した。また狭道部東壁際第2床面上からは、耳環1点が出土した。また、石室内の埋土中からは打製石鐵や、弥生中期土器片、糸切底の土師器杯、平安期の須恵器蓋片等が出土している。なお、周溝や墳丘作業中の供獻土器等は何ら出土していない。以上をまとめると、第1床面では玄室に



第67図 2号墳出土耳環・玉実測図(実大)

耳環・玉類が、前室に鉄鎌・土器類がみられ、第2床面では玄室に土器類が、前室に鉄鎌がみられ、淡道部には耳環があったということになる。後の平安末期の玄室利用も含めて大きく3時期の使用が認められた。

出土遺物(第67~69図、図版51・52)

耳環(第67図1~3) 1と2は玄室第1床面上で対になって出土したもので、いずれも銅地金張りで、金が良く残っている。1は、直径 $2.3 \times 2.2\text{cm}$ 、断面径 $0.8 \times 0.5\text{cm}$ 、重さ 10.4g となる。2は、直径 $2.3 \times 2.15\text{cm}$ 、断面径 $0.85 \times 0.5\text{cm}$ 、重さ 10.7g となる。良質の小型類である。3は、淡道部第2床面出土品で、銅地金張りの小型類であるが、外側の金がかなり剥げてしまっている。直径 $2.15 \times 1.9\text{cm}$ 、断面径 $0.7 \times 0.45\text{cm}$ 、重さ 7.2g となる。3は、1・2と比べ小ぶりで質も劣り、第2床面後の追葬時のものと考えてよからう。

玉類(第67図4~11) 玉類はすべて玄室内第1床面出土品で、4は、淡い橙色に赤色の小斑点が入る石材で、メノウ製かと思われる。球形で上下に平坦面をつくり、直径 $6.6 \times 5.5\text{mm}$ 、孔径 1.3mm 、重さ 0.4g となる。5は、透明な黄褐色をした琥珀製で、直径 $5.9 \times 4.7\text{mm}$ 、孔径 2.35mm 、重さ 0.2g となる。もろく割れやすい。6は、同じく琥珀製で、直径 $5.1 \times 3.9\text{mm}$ 、孔径 1.7mm 、重さ 0.1g となる。7~11はガラス製で、7は緑色をなし、表面が磨れている。直径 $5.8 \times 5.7\text{mm}$ 、孔径 1.3mm 、重さ 0.4g となる。8は、同じく緑色で、表面が磨れている。直径 $5.15 \times 4.35\text{mm}$ 、孔径 1.35mm 、重さ 0.3g となる。9は、同じく緑色で、表面が磨れている。直径 $5.6 \times 4.4\text{mm}$ 、孔径 1.8mm 、重さ 0.2g となる。10は、本来は緑色かと思われるが白色に銀化しており、もろくなっている。現存直径 $4.8 \times 3.3\text{mm}$ 、孔径 1.5mm 、重さ 0.1g となる。11も本来は緑色で、白色に銀化した断片である。現存直径 $5 \times 2.3\text{mm}$ 、孔径 2mm 、重さ 0.05g となる。

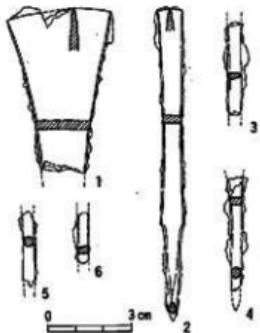
鉄鎌(第68図) 1は、前室第1床面西壁際出土品で、平根斧箭式となる。頭部幅 3.7cm 、厚さ 3mm となる。2は、前室第1床面の玄門寄り中央付近出土品で、全長 11cm 、頭部幅 0.9cm 、箒被部 3.4cm となる。平頭鑿箭式の小型類である。3は、前室第1床面出土品で、現存長 3.2cm 、幅 0.5cm 、厚さ $0.2 \sim 0.3\text{mm}$ で、断面が不定形で、鎌かどうかわからない。4は、前室第2床面

上出土品で、現存長4cm、上端で幅0.5cm、厚さ2mmとなる。尖根部分となろう。5は、前室の第1床面出土品で、現存長2.6cm、直径0.4cmの断面円形となる。尖根部分であろう。6は、玄室の第1床面出土品で、現存長1.8cm、断面は長方形で、 0.4×0.25 cmとなる。

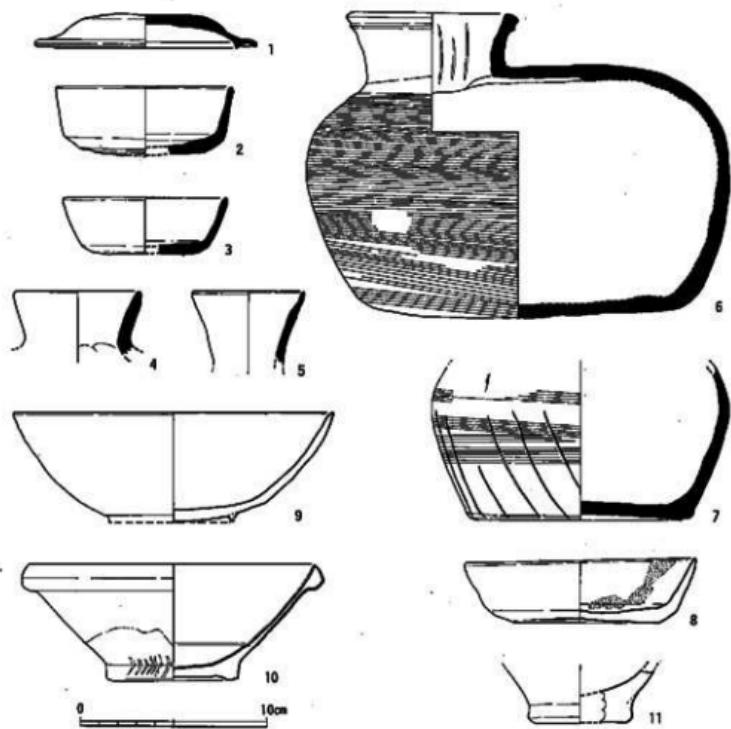
須恵器杯蓋（第69図1）玄室内北側の第2床面出土品で、形ばかりの小さな返りを付ける類である。返り部径9.8cm、器高1.8cmで、天井外面は削りの後にナデている。内面中央部はナデツケしている。7世紀後葉に近いもので、追葬時のものであろう。

須恵器杯身（第69図2・3）2は、前室の第1床面と第2床面から出土したものが接合したもので、復原口径9.5cm、器高3.7cmとなる。底外面は回転切り離しのままで、底内面はナデツケを施す。胎土に細砂粒をいくらか含み、焼成堅緻で青灰色をなす。3は、前室埋土中出土品で、口径8.8cm、器高3cmとなる。底外面は切り離しのままで、底内面にはナデツケがみられる。細砂粒をいくらか含み、焼成堅緻で内面は淡青灰色、外面は青灰色をなす。いずれも7世紀中葉設置のものであるが、3は小ぶりで体部もやや開いており、短頸壺の蓋になつてもいいかもしれない。当古墳初築の時期を示すものであろう。

須恵器壺類（第69図4～7）4は、前室埋土中出土品で、平瓶の口頸部であろう。口径6.8cmで、胎土は大旨精良で、内面下端は指オサエナデを施している。5は、前室埋土中出土品で、口径6cmの薄手品である。小ぶりの長頸壺となろう。焼成堅緻で、内外面ともに灰かぶりしている。6は、玄室北西隅附近の第2床面上出土破片を主として、前室埋土中、玄門下第2床面上の出土品が接合したものである。口径9.2cm、器高16.4cm、胴部最大径22.6cmとなり、胴部外面にはカキ目が密に施されている。口頸部内外面は回転ナデで、内面に縦3本平行直線のヘラ記号が施されている。底外面はナデている。胎土に粗砂少量、細砂多く含み、焼成堅緻で、下半部外面は黒色、他は淡灰色をなす。以上の4～6は7世紀代のもので、追葬時までの副葬品であろう。7は、前室と玄室の埋土中のものが接合したもので、底径12cm、胴部最大径16cmとなる。5のような口頸部が付く安定感のある壺であろう。胴部外面上半はカキ目、下半は回転ナデ、底外面は雜な指ナデで指紋が多く残っている。胴部内面は回転ナデ、底内面はナデツケしている。胴部外頂下半に、全周の1/4部分のみに細い6本の沈線が斜位に施されている。窓印にしては大きすぎるし、文様にしては中途半端であり、意味不明である。胎土精良で焼成やや甘く、瓦質風の部分もある。内面は淡灰色、外面は白灰～黒灰色をなす。この壺は、器形、調整技法等から、古墳時代のものではないのは明らかで、おそらく平安時代後半以降のもの



第69図 2号墳出土鉄器実測図(1/2)



第69図 2号墳出土土器実測図 (1/3)

と考えられる。

土師器杯 (第69図8) 玄室内埋土中出土品で、口径12.4cm、器高3.2~3.5cm、底径7.8cmとなる。底部糸切で、内面には油煙がこびりついている。外面も若干二次火熱を受けて赤変部がある。13世紀中一後半代と思われ、当古墳の再利用時期を示すものである。

瓦器 (第69図9) 玄室内第2床面から10cm程浮いて出土した完形品で、口径17.2cm、器高5.9cm、高台径6.6cmとなる。内面はヘラ磨きしているが焼滅して詳細は不明。外面も磨滅して調査不明。胎土精良で焼成甘く、内面は白褐色、内外面上端付近は灰黒色、以下外面は白褐色をなす。13世紀代のもので、10とともに供獻品となるのかもしれない。

白磁 (第69図10) 玄室内第2床面より5cmほど浮いて出土した。というよりも、玄門部の閉塞

石直下の炭層よりの出土と言うべきもので、閉塞作業の上限を示す好資料である。口径15.3cm、器高6.4cm、高台径7cmとなる玉縁口縁類である。釉は内面白灰緑色、外面は白灰色をなす。体部外面下半から底外面は露胎となる。鎌倉前半期のもので、9とともに玄室再利用時に供献されたものであろう。

弥生土器（第69図11）玄室内埋土出土品で、混入品であろう。底径5.6cmの壺底部片で、胎土に細砂粒を多く含む。焼成良好で内外面ともに淡黄褐色をなす。器表は全面磨滅している。弥生中期初葉のもので、本遺跡出土品としては稀少例である。

年代と被葬者

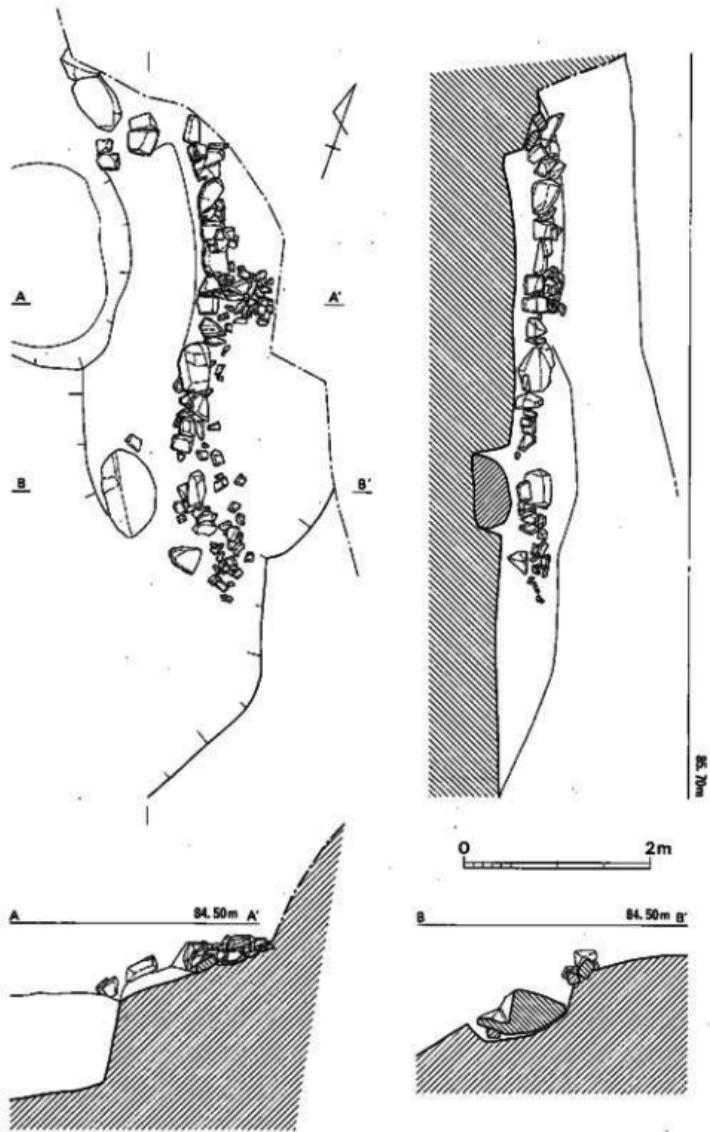
この2号墳は、位置的に1号墳の北隣に築造され、より小規模で、石室構造も明らかに退化しており、年代的に一段階下降することは明らかである。出土遺物をも組み合わせると、当古墳初築は7世紀中葉で、7世紀後葉に床面敷石の全面敷設の上で追葬が行われている。この間には狭道部に耳環が出土している事から、狭道部への追葬も可能性を残す。更に面白いのは、玄室部の13世紀代の再利用であり、炭層の存在、瓦器・白磁碗の供献、玄門部への閉塞行為を総合して考えると、埋葬そのもの、或いは玄室内を火葬所として利用した、等が考えられる。火葬所だったとしても、共同火葬所的に何度も使用されたのではなく、せめて数回程度であろう。これは、石室壁が焼けていないこと、灰・炭層の堆積が顕著でない事、焼骨片の出土に気付かなかつた程度である事等の理由による。被葬者は、当然1号墳の被葬家族の系列の者で、年代的に下降することから、直系の後代の家族であろう。ただ、時期的には1号墳の追葬の時期に2号墳が初築されたと考えるので、両者は本家・分家の関係になるのか、或いは1号墳への追葬だけでは容量が足りなくなつて、新たに2号墳を築造したものか、等が考えられる。

(3) 天園3号墳

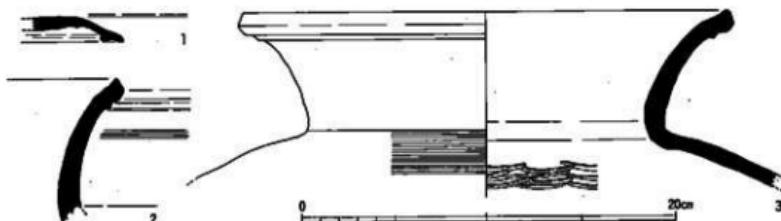
本古墳は、遺跡の最北端にて発見されたもので、大半が斜面崩壊により全容が把握できなかったものである。2号墳周溝から10m程北に位置しており、1~3号墳の並びとしては良好な関係の占地をなしている。周溝が発見されていないので、墳丘の規模は判からない。

主体部（第70図）

主軸をおそらくN19°Wぐらいにとり、南へ開口する横穴式石室となろう。東側壁と思われる石列が検出されたのみで、床面部分のすべてが斜面となって落ちてしまっている。玄室かと思われる東側壁長が2.1m、南端の狭道端部付近と思われる石までの全長4.6mとなる。これが石室の正確な寸法だとすると、南隣の2号墳よりも更に小規模化していることになる。玄室部



第 70 図 天國3号墳実測図 (1/60)



第 71 図 3号墳付近出土土器実測図 (1/3)

側壁が殆ど胴張りをなしていないことから、恐らく正方形に近い玄室プランのタイプになると推定できる。そうすると、当地域では最終末期の石室形態となり、1~3号墳の石室構造の変遷がうまくたどれることになる。側壁の石積は、ほぼ1段目だけで、2段目以上は殆ど残っていない。腰石にあたると思われるこれらの石列は、不揃いで、20~40cm大の塊石を用いている。下から小さめの石だけで積み上げる、当地方終末段階石室の例にもられない状況を示している。石列の状況からみて、複室にはならず、1m強の短い狭い葬道が付く頗と考えられる。なお、出土遺物は原位置を示すものは皆無で、西側下段にも若干落ちていた。

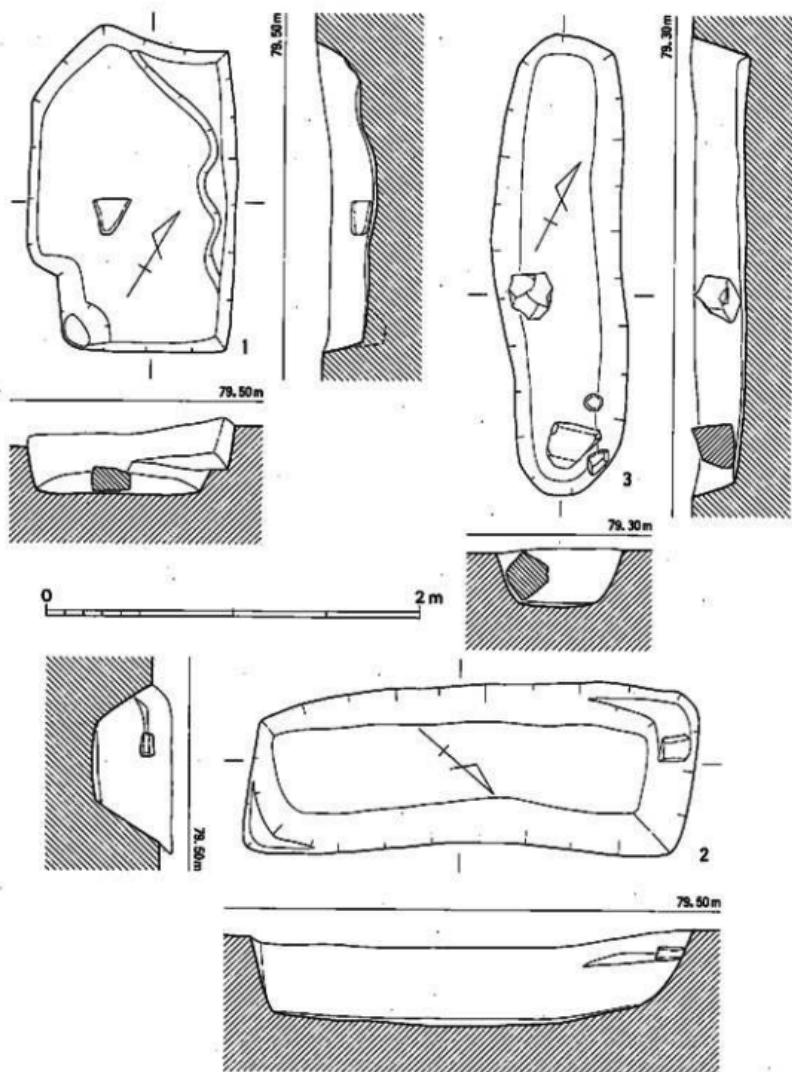
出土遺物（第71図）

須恵器杯蓋（1）石室付近出土品で、退化して完全に丸くなつた短い返り部を持つ、扁平なタイプである。天井外面は回転ヘラ削りの上を回転ナデしており、他は内面まで回転ナデ調整である。7世紀後葉のもの。

須恵器壺（2・3）2は石室下段出土品で、内面下端付近は静止ナデ、他は内外面ともに回転ナデで、外面の一部にカキ目が残っている。3は、石室付近出土遺物で、復原口径26.6cm、頸部径19.2cmとなる。胴部内面には青海波のあて具痕、外面は浅いカキ目、口頸部の内外面は回転ナデを施している。胎土に細砂粒を若干含み、焼成堅緻で内面は黒色、外面は黒灰色をなす。7世紀中葉以降のものであろう。

年代と被葬者

出土遺物と推定した石室構造からみて、当3号墳は、7世紀後葉の築造と想定できる。その後の、追葬或いは歴史時代の再利用については定かでない。被葬者は、当然1・2号墳の直系家族であろう。当古墳群の至近に、今のところ後期～終末期古墳が見当らないところを見ると、有力家族のひとつがこの狭い谷の一帯を奥津城と定めていたことが考えられる。



第 72 図 1-3 号土壤実測図 (1/30)

5 歴史時代の遺構と遺物

(1) 土 墓

1号土壙 (第72図、図版19)

遺跡の中央やや南寄りで、1号墳の西側下段に位置する。主軸を N32°W にとる、略長方形の土壙で、長さ1.75m、幅1.11m、深さ0.4mとなる。上端の掘り込み線はやや乱れているが、底面はわりと安定しており、底面中央に20cm大の塊石が置かれていた。遺構の性格は不明であるが、主軸方位や規模等からみて、他の2~4号土壙と群をなす歴史時代の土壙墓と考えられる。出土遺物は無い。

2号土壙 (第72図、図版19)

遺跡の中央やや南寄りに位置する。1号土壙の1m北隣であり、ほぼ縦並びの関係にある。主軸を N42°W にとり、長さ2.37m、幅0.93~0.75m、深さ0.38~0.52mとなる。しっかりした長方形プランをなし、北側の方がやや広い。壁はかなりゆるやかな傾斜を持っており、底面は北端側が、頭位を意識したかのように高くなっている。出土遺物は土師器細片と、凹石 (第55図3)、磨石 (第55図11) があり、凹石・磨石については縄文前期のものの混入品と考え、縄文包含層出土石器の項で既に報告した。

出土遺物 (第73図)

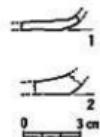
土師器小皿 (1) 体部がいくらか長くなりそうな小皿細片である。底外面は糸切で、胎土精良で焼成良好、内面は黄褐色、外面は淡黄褐色をなす。小片のため時期決定は困難であるが、12~13世紀の中でおさまる類であろう。

3号土壙 (第72図、図版20)

遺跡の中央南寄りの、1号土壙の1m強西側、2号土壙の1m西南隣に位置する。主軸を N27°W にとる長梢円形土壙である。長さ2.47m、幅0.7~0.52m、深さ0.32~0.22mとなる。底面はほぼ平坦であるが、北端がわずかに低くなっている。土壙内南端と、中央西寄りに30cm大の塊石が検出されたが、意味は不明。出土遺物は、土師器細片と打製石器1点 (第51図25) であるが、石器については縄文期のものの混入品と考え、既に報告した。

出土遺物 (第73図)

土師器杯 (2) 底部糸切の細片である。胎土に細砂粒をいくらか含み、焼成良



第73図 2・3号土壙
出土土器表面(1/3)

好で、内面は黒褐色、外面は黒灰色をなす。細片であり、年代決定は困難であるが、厚手であり、鎌倉期あたりのものかと思われる。

4号土壙（第9図、図版20）

遺跡の南寄りの南西端包含層の落込みの北側に位置する。3号土壙の4m南側で、同一線上に並ぶ関係にある。主軸を N27°W にとり、長さ2.39m、幅は0.63~0.43m、深さ0.22~0.12mとなる。東側で縄文前期の「土器3」の掘り込みを切っている。北端の幅の方が明らかに広く、北に頭位を置く土壙墓と考えられる。出土遺物は無い。

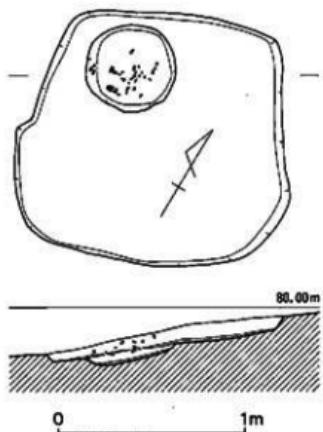
以上の4基の土壙は、いずれも主軸が略同方向となり、1ヶ所にかたまっていること等から、頭位を北にとった鎌倉時代の土壙墓群と考えたい。副葬品が無いことや、南隣の南西端包含層中から生活臭のするかなりの土器が出土していることなどから、いまだに若干疑問が残るのではあるが、或は屋敷内墓地となるか。

(2) 火葬墓

1号火葬墓（第74図、図版21）

遺跡の南端中央にて検出された。東西1.47m、南北1.38mの略方形の穴を掘り、その中の北西寄りに焼骨を集中して納めたものである。最大2cm大の細焼骨片が僅かに出土したのみであ

り、他所で火葬した骨の残りを灰ごとかき集めて持ってきて、ここに埋め供養したものと思われる。焼骨の集中部分は丁度直径47cmの円形の穴になつておらず、おそらく円筒形の桶状の容器に入れて埋納したものと考えられる。他の出土遺物は無く、時期は決定できない。

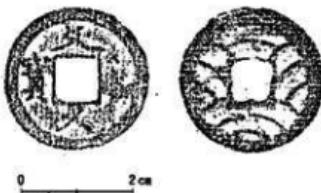


第74図 1号火葬墓実測図 (1/30)

(3) 溝状遺構

本遺跡上層では、南北に走る溝を3条検出した。上層1号溝は、遺跡南端中央に位置する。北北西から南南東へ直線状に走っており、長さ6m分が調査範囲内にあり、最大幅は南端で80cm程となる。丁度、1号墳南側下段の縄の西側直下にあたり、その段と平行しているところから、縄の段下の排

水溝と考えられる。この1号溝から銅錢1点が出土した。第75図に示した文久通寶がそれで、直径2.5cm、孔径0.8cm、重量2.9gとなる。裏面波文類で、この溝の上限を示すものであろう。上層2号溝は、遺跡の中央にて検出したもので、南南東から北北西へ走る。長さ24m分を検出したが、幅0.5~1.4mで浅く幅広いものである。この溝の東隣に平行して走る溝がもう1条あり、規模・形状は2号溝と同類である。この2条の溝は、埋土も新しく、すぐ東側の段々畑の段と平行しており、やはり、畑の段直下の排水溝と考えられる。



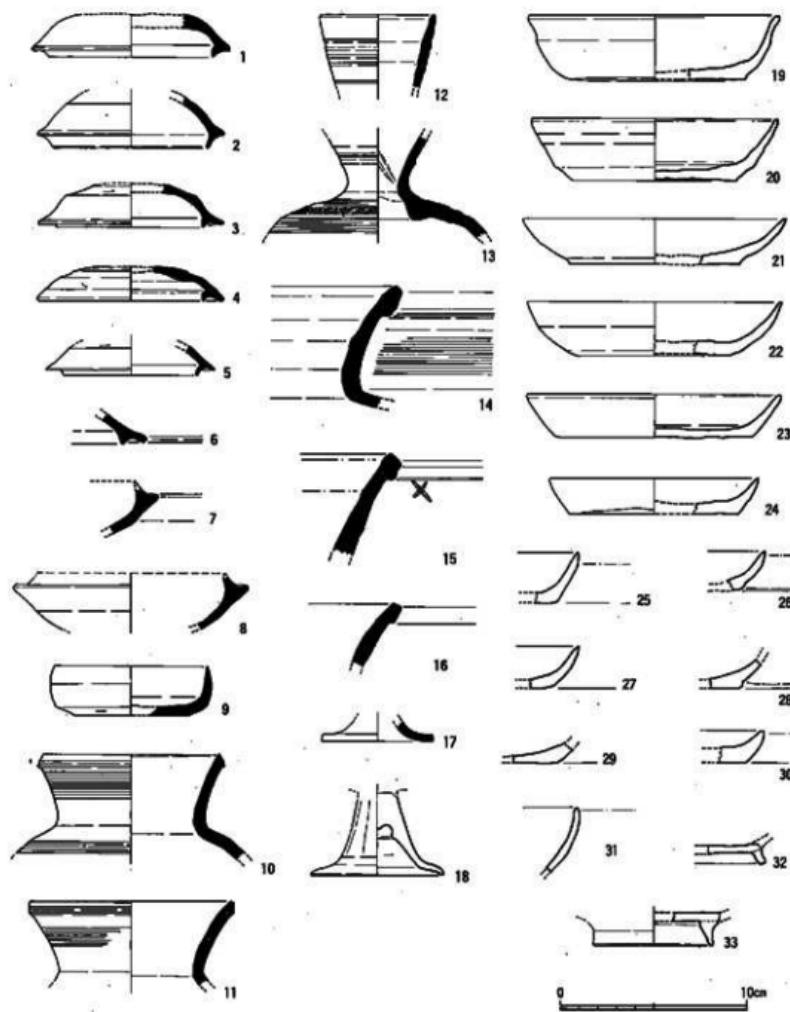
第75図 1号溝出土銅錢拓影（実大）

(4) 包含層他出土遺物（第76~78図）

ここでは、南西端包含層から出土したものを主に、各小ピット、遺跡内各部の包含層等から出土した、古墳~歴史時代の遺物についてまとめて報告しておきたい。

須恵器杯蓋（1~6）1は、遺構検出時の採集品で、復原返り部径8.8cm、器高2.3cm程となる。天井外面は回転ヘラ削りの上をナデている。胎土精良で、焼成いくらか軟質で淡灰色をなす。2は、南西端包含層II-3層出土品で、返り部径8.2cmとなり、天井外面は回転ヘラ削りの上をナデしている。3は、南端トレンチ出土品で、返り部径7.8cm、器高2.4cm程となる。天井外面は回転ヘラ削り、内面中央にはナデツケがみられる。胎土精良で、焼成堅緻。内面は暗青灰色、外面は灰かぶりしており淡灰~黄灰色をなす。4は、No. 319で、返り部径7.8cm、器高1.8cmとなる。天井外面は回転ヘラ削り、内面中央はナデツケが施されている。胎土に微砂粒をいくらか含み、焼成堅緻で、内面は青灰色、外面は暗灰色をなす。5は、1号墳の南側下段黒色包含層出土品で、天井外面は回転ヘラ削りを施す。胎土に細砂粒をわずかに含み、焼成堅緻で淡青灰色をなす。返り部径7.1cmに復原できる小型品である。6は、南西端包含層II-1層出土品で、短く断面三角形となった返りを付ける。以上の蓋のうち、1・2は、7世紀の中葉に近い前葉、3~5は7世紀中葉、6は7世紀後葉~末のものであり、1~3号墳の初築~追葬の時期にそれぞれ符合しており、各古墳の周溝や墓道等のものが下段に流れ込んで包含層を形成したものと考えられる。

須恵器杯身（7~9）7は、南西端包含層II-2層出土品で、内面下半はナデツケを施している。細砂粒を僅かに含み、焼成堅緻で内外面ともに灰色をなす。8は、No. 406で、復原口径10cm程となる。内外面ともに回転ナデで、胎土に微細砂粒をいくらか含み、焼成堅緻で内面は淡灰色、外面は灰色をす。9は、口径8.2cm、器高2.7cmとなる小型品で、南端トレンチ出土品



第 76 圖 包含帶他出土古墳時代以降土器実測圖① (1/3)

である。底外面はナデ、体部外面下端はヘラ削り、内底面は広くナデツケている。胎土に細砂粒をいくらか含み、焼成堅緻で内外面ともに海老茶色をなす。器形からして、煙頭壺の蓋としてもよい。以上のうち、7・8は7世紀前葉代のもので、古墳群に伴うものであろう。

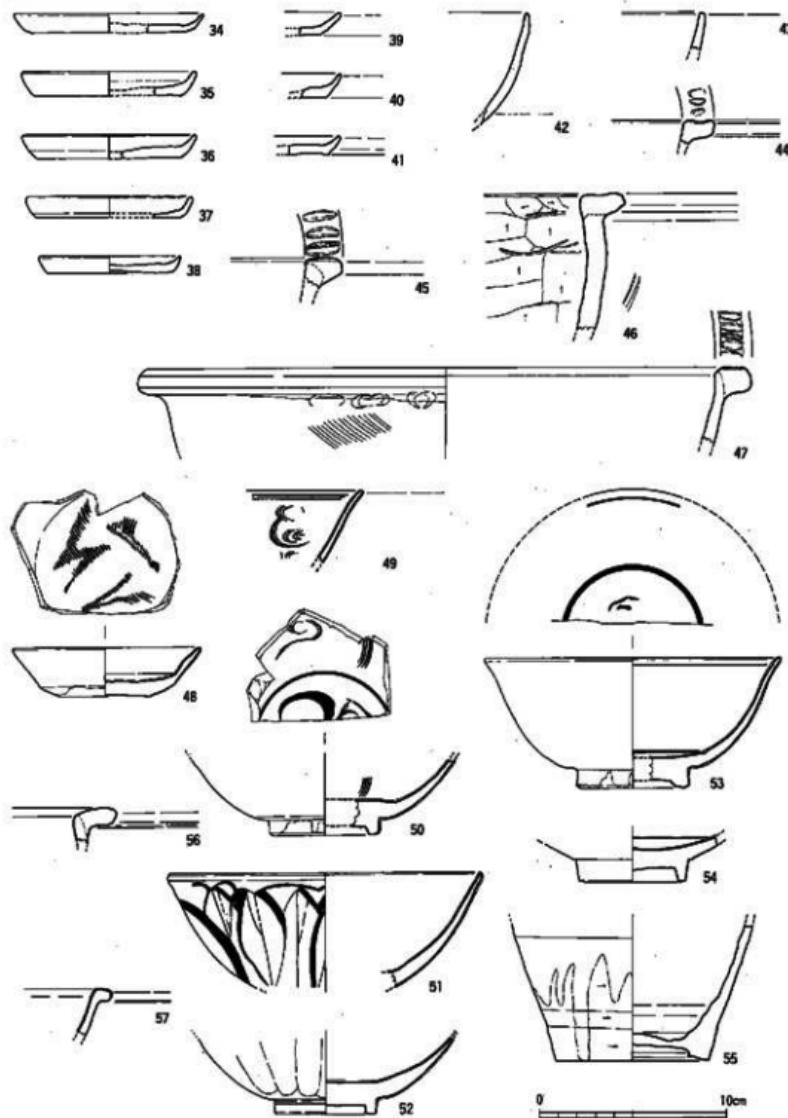
須恵器壺類（10～13）10は、南西端包含層II-1層出土品で、口径9.4cm、頸部径8cmとなる。シャープな口縁外面には沈線を入れ、頸部上半と胴部外面にはカキ目を施す。焼成堅緻で、内外面ともに灰かぶりがひどい。11は、南西端包含層II-1層出土品で、復原口径10.6cmとなる。口縁外面には沈線を施し、頸部外面にはカキ目がみられる。焼成堅緻で外面は灰かぶりしている。12は、南西端包含層II-1層出土品で、口径6.2cmの薄手小ぶりの壺である。頸外面に3条の浅い沈線を施す。13は、南端トレンチ出土品で、頸部外面に沈線を入れ、胴部外面にはカキ目を施し、柳目刺突文を巡らせていている。内面は横ナデで、胎土に粗砂粒をわずかに含む。焼成堅緻で、内面は暗紫青灰色、外面は黒～灰色をなす。

須恵器壺（14～16）14は、南西端包含層II-1層出土品で、だらけた口縁につくり出している。頸部外面にはカキ目を施し、焼成堅緻である。15は、No.218で、内外面ともに灰かぶりしている。外面にX印のヘラ記号がみられる。細砂粒を多く含み、焼成堅緻で内面は黒色、外面は黒～灰褐色をなす。16は、南西端包含層II-2層出土品で、中型壺となろう。内外面回転ナデで、粗砂粒をいくらか含み、焼成堅緻で内外面とも灰かぶりしており、灰黄褐色をなす。

須恵器高杯（17）南西端包含層II-1層出土品で、脚端径6cmとなる小型品で、内外面ともに回転ナデを施す。焼成堅緻で灰かぶりしている。

土師器高杯（18）南西端包含層II-1層出土品で、脚柱径7.2cmの小型品である。脚柱外面は縦位ヘラ削りにより面取り状となり、内面は横方向へのヘラ削りを施している。胎土精良、焼成良好で、明白黄色をなす。7世紀前半代のものであろう。

土師器杯（19～29）19は、南西端包含層出土品で、口径13.5cm、器高3.5cm、底径9.5cmとなる。底部糸切で体部に丸味を持つ。20は、P.72出土品で、口径13.2cm、器高3.3cm、底径8.8cmとなる。底部糸切で、体部外面下端は横ナデ、底内面はナデツケを施している。21は、南西端包含層II-2層出土品で、口径14cm、器高2.4cm、底径9.1cmとなる。胎土精良で、焼成やや良好で内外面ともに淡灰褐色をなす。底外面は糸切。22は、南端包含層II-1層出土品で、口径13.6cm、器高2.9cm、底径8.2cmとなる。底部糸切で、体部が内湾気味に開く。23は、南端包含層II-2層出土品で、口径13.6cm、器高2.3cm、底径10.6cmとなる。底部糸切で、底内面にはナデツケが施されている。24は、南西端包含層II-2層出土品で、口径11.2cm、器高1.9cm、底径9cmとなる。底部糸切で内底部はナデツケが施されている。胎土精良、焼成やや良好で、内面は肌色、外面は黒褐色～肌色をなす。25は、南端トレンチ出土品で、底面は糸切、高さ2.7cmとなる。26は、1号墳南包含層出土品で、底面は糸切であろう。胎土精良で高さ2.1cmとなる。27は、南西端包含層II-2層出土品で、底面は糸切りかと思われる。器高2.3cmで、胎



第 77 圖 包含層他出土古墳時代以降土器実測図② (1/3)

土精良で淡茶褐色をなす。28は、1号墳南包含層出土品で、底面は糸切であろう。胎土に粗砂粒をわずかに、細砂粒をいくらか含み、焼成良好で内面は淡褐色、外面は褐色をなす。29は、南端トレンチ出土品で、底面は糸切であろう。やや大ぶりな杯となろう。以上のうち、19~23は口径が13.2~14cmで、13世紀前半代かと思われるが、器高が高い19・20はもう少し古い12世紀段階まで上がるかもしれない。大宰府の平均値とはうまく合わず、当地域では22のように内湾的な古い様相を残す傾向があるのかもしれない。19・20も深い様相だけが13世紀代まで残ったものかもしれない。

土師器椀(31~33) 31は、南端トレンチ出土品で、内外面ともにナデている薄手品である。胎土精良で、焼成良好で淡茶色をなす。32は、1号墳の南側下段黒色包含層出土品で、外方へ踏んばつた高台となる。胎土精良、焼成良好で、淡黄褐色となる。33は、南端トレンチ出土品で、径6.5cmの高い高台を付ける頬である。胎土に粗・細砂粒をわずかに含み、焼成良好で内面は淡茶色、外面は淡灰茶色をなす。以上のうち1は口縁付近で内湾気味に曲がるくせがあり、9・10世紀の高台椀のものとは異り、12~13世紀の別の器種となるのかもしれない。32・33は10~11世紀の間のものであろう。本遺跡歴史時代のものとしては古い稀少例である。

土師器小皿(30・34~41) 30は、南端トレンチ出土品で、底部は糸切であろう。部厚い異頬で、高さ1.7cmとなる。胎土精良で、焼成やや良好で、外面は灰褐色、内面は淡黄茶色をなす。34は、南西端包含層II-1層出土品で、口径10.2cm、器高1.0cm、底径8.2cmとなる。底面は糸切であろう。胎土に細砂粒をいくらか含み、焼成良好で内外面とも褐色をなす。35は、南西端包含層II-1層出土品で、口径9.4cm、器高1.3cm、底径7.9cmとなる。底面は糸切で、胎土精良、焼成良好で内面は肌色、外面は明褐色をなす。36は、南西端包含層II-1層出土品で、口径9.4cm、器高1.3cm、底径7.7cmとなる。底面は糸切で、胎土精良、焼成良好で淡褐色をなす。底内面はナデツケている。37は、南西端包含層II-1層出土品で、口径9cm、器高1.1cm、底径7.6cmとなる。底面は糸切で、胎土精良、焼成やや良好で、外面は淡黄褐色、内面は肌色をなす。38は、南端トレンチ出土品で、口径7.6cm、器高0.9cm、底径6.7cmとなる。底面は磨滅しているが、糸切であろう。胎土精良で、焼成良好、明るい肌色をなす。39は、南西端包含層II-2層出土品で、底面は糸切、器高1.2cmとなる。胎土精良で焼成良好、肌色をなす。40は、1号墳包含層南出土品で、底面は糸切、器高1.3cmとなる。粗砂粒をわずかに含み、焼成良好で明褐色をなす。41は、南西端包含層II-1層出土品で、底面は糸切で、器高1cmとなる。胎土に細砂粒をいくらか含み、焼成良好で内面は肌色、外面は暗茶褐色をなす。以上の中皿は、34~36が法量が似かよっているが、口径だけ見ると11世紀代でもよいが、底部がすべて糸切であり、大宰府のものと器形が異り、やはり12世紀後半以降のものと考えた方がよかろう。38は法量でみる限り、14世紀中頃前後となろう。土師器杯も含めて、大宰府のものとの型式編年上のずれが認められた。この筑後平野東端地域での縄年の必要性が緊急課題であろう。

瓦器 (42・43) 42は、南西端包含層Ⅱ-2層出土品で、内面はヘラ磨きしているが詳細は不明。外面はナデしており、胎土精良で焼成瓦質、口縁内外は黒色、外面下半は淡褐色、その他は灰黒色をなす。43は、西南端包含層Ⅱ-1層出土品で、内外面ともにヘラ磨きしている。

土鍋 (44-47) 44は、P17出土品で、口縁上面に短線状押圧文を施す。外面には煤がこびりつく。細砂粒をかなり含み、焼成良好で内面は橙褐色をなす。45は、南西端包含層Ⅱ-3層出土品で、内外面ともにナデしている。細砂粒を多く含み、焼成良好で、淡茶褐色をなす。46は、南西端包含層Ⅱ-2層出土品で、口縁上面は他と違って粗い斜めハケを施している。内面はヘラ削り、外面はハケをナデ消している。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成やや良好で、内面は暗褐色、外面は煤が付着して黒茶褐色をなす。47は、南端トレンチ出土品で、復原口径32.8cmとなる。口縁上面に短線状押圧文を施し、内面はナデ、口縁外面は横ナデ、体部外面は粗い斜めハケを施している。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で内面は茶-暗黄褐色、外面は煤が付着して暗灰褐色をなす。以上の土鍋は、口縁上面の押圧文の有無、器面調整等で2種に分けられる。44・45・47は13世紀代と思われるが、46は若干時期が前後するのかもしれない。

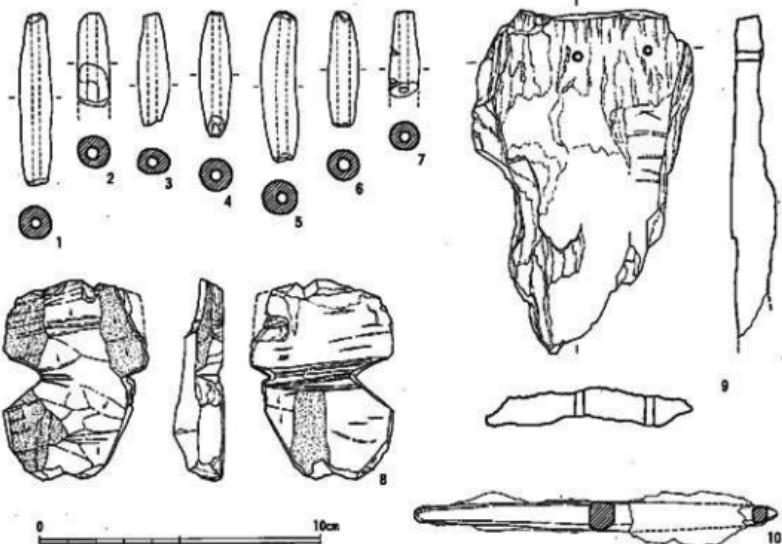
青磁 (48-53) 48は、南西端包含層Ⅱ-3層出土品で、口径10.2cm、器高2.6cm、底径4.9cmとなる。釉は淡緑灰色をなし、体部外面下端から底外面は露胎となる。49は、南西端包含層Ⅱ-2層出土品で、釉は緑色で、胎土は灰色でやや密である。50は、南西端包含層Ⅱ-1層出土品で、高台径6cmで、暗緑色の釉調をなす。51は、遺構検出時の採集品で、口径17cmとなる。淡青緑色をなし、胎は灰色でやや密である。52は、遺構検出時の採集品で、綠灰褐色の釉調をなす。鏡蓮弁の龍泉窯系青磁で、高台疊付面と底外面は露胎となる。53は、南西端包含層Ⅱ-1層出土品で、口径16cm、器高7cm、高台径6.2cmとなる。内底面見込みに花文のスタンプがみられる。綠黃色の釉で、高台疊付から内側は露胎となっている。以上の青磁碗・皿類は、12-13世紀のもので、土師器等とともに、この場所が古墳石室の再利用だけでなく、生活の場でもあったことを示している。

白磁 (54) 南西端包含層Ⅱ-1層出土品で、高台径5.7cmとなる。残存部外面は露胎で、内面の釉は白色をなす。

褐釉壺 (55) 南西端包含層Ⅱ-1層出土品で、底径8.2cmとなる。外面は上端を除き底外面まで回転ヘラ削り、内面は回転ナデ仕上げである。外面に釉かけはみられるが、黄灰緑褐色で発色していない。胎土はさっくりとして、粗砂が目立つ。焼成は内面が甘く、淡灰茶褐色をなし、外面露胎部は灰色をなす。

弥生土器 (56) 全面磨滅しているが、弥生中期初葉の甕口縁部片である。粗砂少量、細砂を多く含み、焼成良好で内外面ともに白黄褐色をなす。本遺跡出土例としては、この時期のものは全体で2点しか発見されておらず、稀少例である。No. 400である。

陶器 (57) 1号墳南包含層出土品で、口縁の外面下端以下の外面はこげ茶色、口縁内外面は綠



第 78 図 包含層他出土土錐等実測図 (1/2)

がかった白色、内面は灰乳白色の釉をそれぞれかけている。胎は濃灰色でやや密である。近世の陶器であろう。

土錐（78図1～7）いずれも細身の纺錘形タイプである。1は、南西端包含層II-1層出土品で、長さ6.2cm、最大径1.1cm、重量7gとなる。胎土精良で、焼成不良で灰褐色をなす。2は、南西端包含層II-1層出土品で、現存の長さ3.4cm、最大径1.1cm、重さ4gとなる。胎土精良で焼成良好、肌色をなす。3は、南端トレーナー上層出土品で、長さ4cm、最大径1.1cm、重さ4gとなる。胎土に細砂粒をわずかに含み、焼成不良で茶～灰褐色をなす。4は、南西端包含層II-2層出土品で、長さ4.5cm、最大径1.2cm、重さ5gとなる。胎土に細砂粒をわずかに含み、焼成不良で灰褐色をなす。5は、南西端包含層II-2層出土品で、長さ5.4cm、最大径1.2cm、重さ6.2gとなる。胎土精良で、焼成やや不良で淡灰黄色をなす。表面に凹凸があり、全体に曲がっている。6は、南西端包含層II-2層出土品で、長さ4.1cm、最大径1.1cm、重さ3.4gの小型品となる。胎土精良、焼成良好で淡茶褐色をなす。7は、南西端包含層II-2層出土品で、現存長3.1cm、最大径1.1cm、重さ2.7gとなる。胎土精良で、焼成やや不良。暗茶～灰褐色をなす。以上の土錐は、いずれも細身小型品であり、こんな山の場所で何に使ったも

のなかが見当がつかない。現在では、魚網を使うような谷川は見当らない。他の用途を考えてもよかろう。時期は、平安末乃至鎌倉期のものと考えられる。

滑石製品（第78図8・9）8は、南西端包含層II-1層出土品で、滑石製石鍋の破片を再加工したものである。図の左面が石鍋本来の外面で、ドットを打った部分が煤で真黒になっている。その中央の削られた部分が鏽の位置である。長さ7.2cm、幅5.1cm、重さ76gとなる。中央の両側縁から抉りを入れ、裏面には両抉り間に溝が掘り込まれている。抉り部を紐でしばり、錘にしたものであろう。9は、南西端包含層II-1層出土品で、石鍋底部を再利用したものである。図上下半面が当初の石鍋内面で、上半は割れた面である。裏面はオリジナルな石鍋外面は部分的で、殆ど凹凸著しい状態であるが、全面に煤がこびりついている。側面は、上辺がノミで削った再加工面だが、他はすべて割れたままの面である。上辺寄りに直径2.5mmの小孔を2個穿ち、紐を通して使用したものであろう。長さ12.3cm、幅7.7cm、厚さ1.6cm、重さ150gとなる。再加工・再利用した時期は、他の出土遺物からみて、鎌倉期までのものであろう。

鉄製品（第78図10）南端トレンチ出土品で、現存長13cm、最大幅1cm、厚さ0.9cmとなる不明棒状製品である。両端とも尖っているようで、小型細身のタガネとなるものか。時期不明。

6 まとめ

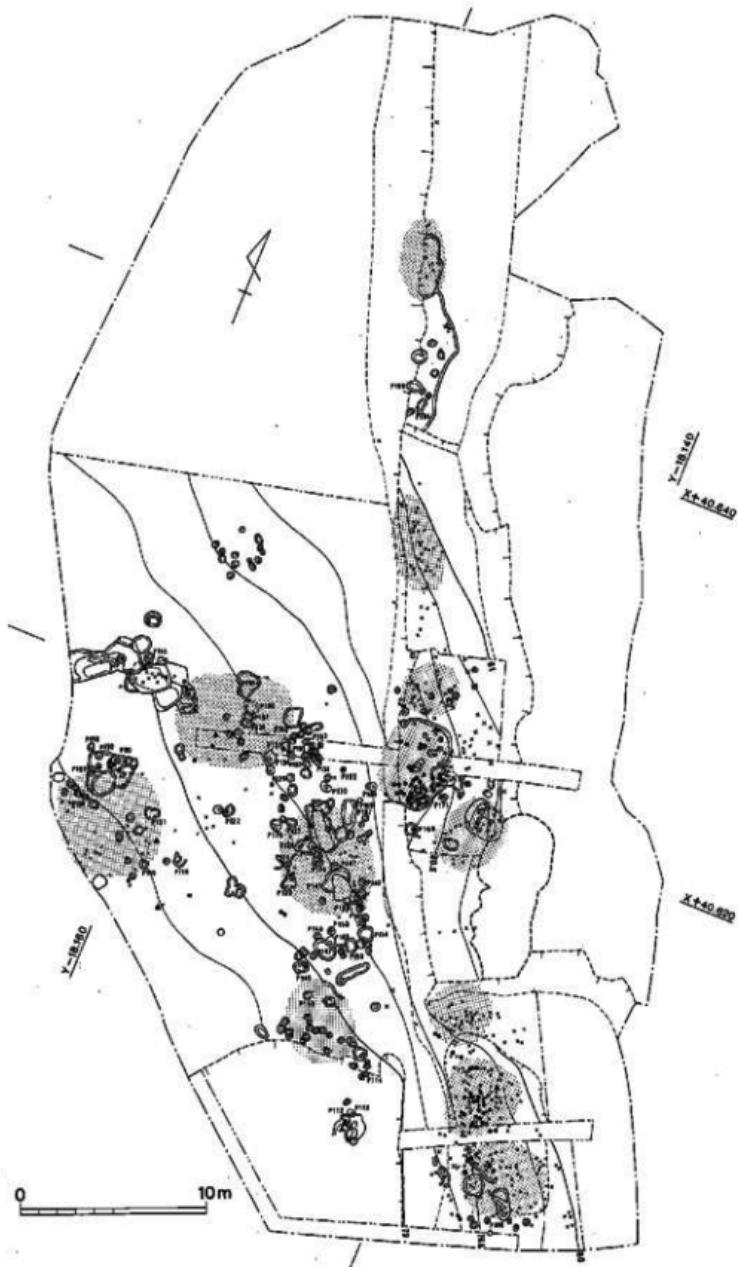
(1) 天園遺跡の変遷

本遺跡は、2,000m²ほどの範囲内だけの調査であったが、多時期、多種の遺構・遺物に恵まれた。ここでは、時代別に順を追って簡単に概要と、残された問題点について記録するに止め、今後の地域研究に俟つことにする。

縄文早期　これ以前の旧石器時代の様相については、本遺跡では確認できなかった。ただし、遺跡の立地が高位段丘上であり、周辺の低丘陵がすべて同じ地形状況をなしておらず、朝倉町原の東遺跡、金場遺跡、上ノ宿遺跡等のように、AT層の堆積を伴った旧石器時代遺跡の存在が充分近辺に推定できる。ただ、尾根自体がかなり浸蝕を受けやせ尾根となっており、なかなかオリジナルな層位を得る事はむつかしいかもしれない。縄文早期は、粗大な梢円形・山形押型文土器を主体に、少量ながら、一応の足跡を見出すことができる。横位穀粒文押型文土器片が1点出土しているので、押型文土器期前半には一時的にキャンプ地となつたことがあったと考えられよう。その後、早期後半期まで；特に長さ1cm以上の粗大な梢円形の押型文の時期には、季節的なちゃんとしたキャンプ地となつたようである。確實な遺構は確認できなかったが、東

側尾根上面の夕月遺跡からも極少量押型文土器が出土していることから、風当りのよい尾根上面よりも西側斜面中途のテラス面が宿营地として選地されたものと思われる。撲糸文土器片や縄文片、定型的押型文末期と伴う横位条線文土器等も出土しており、細々とではあるが当地が利用されていたことが判かった。

縄文前期 当時期が遺跡の主利用時期のひとつである。隅丸長方形氣味の竪穴住居跡1軒と、大小の土壙・包含層が検出された。全体としては、森B式が最多であり、曾畠式が1/4程の割合となる。これらの土器そのものの評価については後項で別に扱うので詳述しないが、出土量としては目を見張るものがある。森B式は、極細の隆線を密に施す類と、断面三角形の細身の隆線をわずかに間隔をあけて多条施すものが大半を占め、太身で断面カマボコ形で間隔をぐっとあける数条のものは極少数である。曾畠式土器においては、滑石を含むものが大半であるが、滑石を含まない類も曾畠式土器全体の1/4強を占めており、文様構成も両者に差異が認められる。森B式土器と曾畠式土器とは、本遺跡内の住居や各土壙中で、細タイプ毎に各々共伴している事が確認された。両型式土器はかなりの部分で時期的に重複している事が想定できる。以上のような前期土器出土状況から、この遺跡が単なる偶発的キャンプ地としてではなく、より企画的な宿营地乃至は一定期間の定住地とされていたと考えた方がよかろう。それは、土器の口縁部片だけでも図示したように数多く出土し、石器も大中小の磨製石斧、打製石錐、石錐、横型の石匙、中小のスクレイバー類、石核、縦長剥片を含む多量の黒曜石・安山岩の剥片、多数の磨石・凹石等が出土しており、往時の生活に必要な道具が一概に見られることからも言及できる。特に、磨製石斧の組合せや打製石錐の形態、石錐の特異形状、石匙と安山岩製スクレイバーの近似性等の諸点に、縄文前期石器群の特性と資料としての重要性を見出すことができる。定住的性格の遺跡かどうかについては、遺構・遺物の集中部位の検討も必要であろう。集中部位は大きく分けて6ヶ所、小さく分けて12ヶ所がみられる。小さく分けた部位は、1号住居、1号住居の北側、さらにその北側の2号墳西側下段のあたり、またさらに北方の2号墳北北西の中段周辺、1号住居南東側の13号土壙周辺、1号墳南側下段包含層の東西トレンチの北隣遺物集中部位、同トレンチの南側の8・12号土壙周辺、1号墳東部南端直下の南側下段包含層集中部位、西側下段包含層のうち南端の7号土壙から「土器3」のあたり、2号土壙周辺の磨製石斧等が多く出土した小ビット群や包含層のあたり、遺跡西端の6・11号土壙から南側5m範囲の集中部、5号土壙から西側の東西トレンチ西半部分までの間、の各部位である。第79図にその概略を示したが、出土量の多かった南西端包含層は完全に二次堆積と判断したのでここからははずしている。もちろん、これらの12ヶ所を即生活痕跡の単位として、住居単位のように見なすことはしないが、出土現状からの手がかりとしてユニット的な考え方を示す方法は可能であろう。各集中部位には各々遺物集中状況や遺構の状況、遺物間のセット状況等差異があり、全部を同質と見る訳にはいかない。しかし、竪穴住居が1軒だけでこれ程の遺



第 79 図 純文前期の遺構・遺物集中部位 (1/300)

構・遺物を説明できる訳もなく、少くとも各々を「生活痕跡単位」として把握しないと、本遺跡の生活空間・社会分析は前に進まないだろう。この12ヶ所が同時に営まれたものとは考え難く、2~3の「生活痕跡単位」がある期間に企画的定住をなしたと考えたい。土器型式の幅が狭いので、100~数100年の間に、少くとも6回以上の生活痕跡が刻まれたことになる。となると概略1~2世代でひとつの生活痕跡を残したことになる。季節的生活痕跡であるとすると、冬場の、風当りを避けた場所の基地的生活地であり、狩猟の基地集落として機能していたと考えられる。磨石・凹石類が多く出土していることから、堅果等の採取・加工も行われ、ある程度要素を据えた生活地であったと考えられる。検出した土壤の中で、わりとしっかり掘り込まれた6・12号土壤などは確証はつかめなかったが、これらを貯蔵庫的性格と考えることも可能である。不整形土壤については未だに確たる私案を持ち得ていない。

縄文後期 若干、時期区分の説明が必要である。以前、縄文晩期黒川式期を中心とした縄年案作成の課程で、所謂典型的「御領式」土器段階を晩期に編入した。(「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 37」柿原I 縄文遺跡 福岡県教育委員会 1995) 本書はすべてこの私案に基いて記述を行っている。よって、御領式系土器については晩期の項で記す。縄文中期は全く痕跡無く、後期北久根・三万田段階で僅かに土器の出土がみられた。10号土壤もこの期のものとみられ、遺跡西端付近にて各々ごく一時的なキャンプがなされたと考えられる。本遺跡全体からみると特筆すべき時期ではない。ただ、1号埋甕は後期のものであり、埋葬構だとすると、10号土壤近辺の粗製深鉢片の出土などから生活臭を感じるので、居住地至近における土器埋葬があったという意味で、非常に興味深いものがある。

縄文晩期 遺跡西端にて検出された「土器1」「土器2」、9・11号土壤が当該期であり、各部位包含層からも、生活痕跡として認められる程度の量の土器が出土した。「土器1」「土器2」は本文中に詳述した如く、横位埋置の貴重な資料であり、晩期初~前葉期の小規模化の可能性を一層強めてくれる。出土土器のうち、初~前葉のものが最も多く、次いで後葉、中葉、末葉のものの順になる。初~前葉期には小規模な生活とともに埋甕2基を生活地の近隣に残しているが、以後は細々とした小宿営地となってしまったようだ。なお、晩期土器については、後年度に東隣のクリナラ遺跡発掘調査報告書刊行予定であるので、天園遺跡資料も合わせて検討したい。

弥生時代 とりたてて項目を立てる必要も無いが、2片だけ弥生中期初葉の甕片が出土しているのみである。2片とも極めて磨滅しており、どういう行為によるものなのか見当がつかない。弥生時代にはこのような地は見向きもされなかつたという所に重要な意義があるのかもしれない。

古墳時代 7世紀前葉に1号墳が始めて築造され、同中葉に1号墳への追葬と2号墳の築造が行われている。同後葉になると、2号墳の石室床面の敷石をやり直して追葬が行われ、さらに

3号墳の築造がなされている。絵に描いたような見事な展開であるが、古墳自体の小規模化、石室形態の変化、占地の奥方向への連続という意味で確實に押さえられるものである。この古墳群の被葬者の集落は、当丘陵先端直下付近の平地或は扇状地であろうが、調査は進んでいない。また、この前段階の古墳については、西側谷向かいの桿張遺跡で竪穴式石室系の小石室が発見されており、この谷奥一帯が連續して葬地に充てられていた事が充分推測できる。この谷筋面に占地する古墳群は、谷奥部にあっては、すぐ上の尾根上面には作られていないという事実にも注目すべきであろう。東隣尾根上面の夕月遺跡は、平野方向への見晴しもきき、良好な地のようであるが、古墳そのものの痕跡は見当らない。東方尾根上の西ノ追1号墳のように、最終末横長玄室の小規模石室段階になると、ぽつんと高位尾根上に葬地を求めるようになるのかもしれない。出土遺物、古墳の規模等からは、そう有力な家族のものとも考えられないが、杷木町域全体の古墳群の検討の中で、被葬者の評価がなされなければならないだろう。現段階では、小地域首長の下に属するクラスの中で、古墳を作り得る中程度の一族によるものと考えておきたい。

平安～鎌倉時代 この間で中心となるのは、1号墳、2号墳の石室を再利用した12～13世紀段階である。古墳の石室を再利用した例は県内でもかなりみられ、主に奈良～平安初頭期の火葬器骨器の埋納場所とするものと、平安後半～鎌倉期にかけて何らかの使用が行われ土器類が発見される例と、2大別できる。また、時には太宰府市君ヶ畠遺跡例のように玄室自体を共同火葬所として使用した例もあり、各々、絶好の石組空間としてうまく利用したというのが実情であろう。本遺跡では、特に2号墳玄室内が確實に火を使って、完形瓦器・白磁碗を供獻し、さらに玄門部に閉塞まで新たに設けるというしっかりした使い方をしている。本文中でも検討したように、やはり火葬的な使用としか考えられないようである。これらの古墳の再利用とは別に、火葬墓1基、土壙墓4基が検出されており、葬地として確實に押さえられる。これらには副葬品が無いので時期的変遷等の詳考ができないが、少くとも土壙墓4基はまとまりをみせた配置をなしており、一連の時期のものと考えられる。火葬墓は位置も違い、おそらく時期も異なるものであろう。この平安～鎌倉の時代のものと思われる小ピットや不明土壙は、西側下段を中心として夥しいものがあり、柱穴として建物を復原し得るものは無かったものの、生活遺構があったことは確かであろう。出土遺物からしても、土鍋や土錘、滑石製石鍋片など、生活裏そのものが認められ、きちんとした居住地であったことは間違いない。土壙墓群と居住建物が同時存在の時期を持ったとすれば、屋敷内隅の葬例として興味深い。居住地の性格は判然としない。青・白磁等も結構出土しており、単なる谷奥の気まぐれな開墾農家とも思えない。山莊的な特殊な性格のものであったのかもしれない。これ以降は、段々畠の開削まで人跡が途絶えてしまって現在に至ったようである。

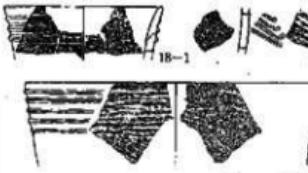
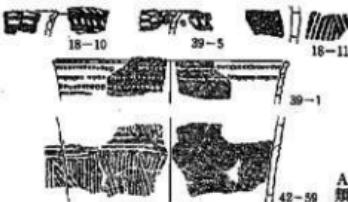
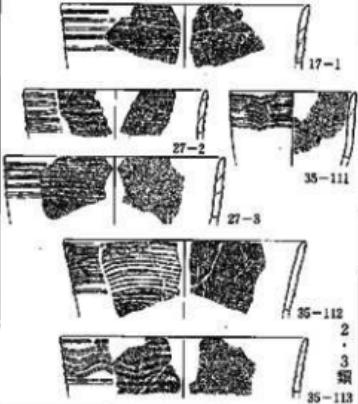
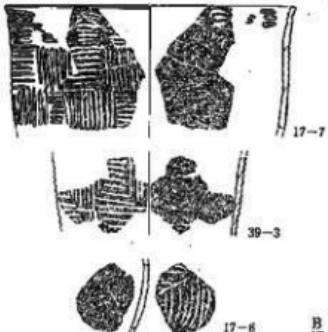
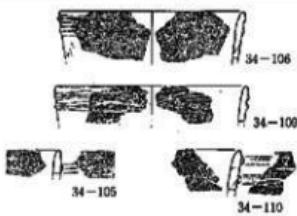
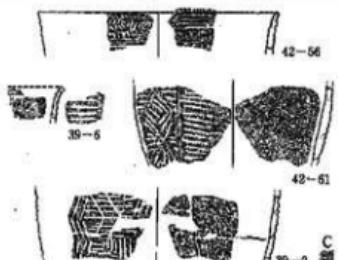
(2) 藤B式・曾畠式土器

天園遺跡の注目すべき成果として、縄文前期藤B式・曾畠式のまとまった資料の出土がある。これらは、出土量の多さだけでなく、整穴住居や各土壤内である程度まとまった形で出土しており、今まで不充分であった両型式土器の関係の検討資料として価値があると思われる。今回は、諸制約上から、当地域における事実関係の再確認に止めておきたい。

藤B式土器 本文中で隆線の形状・大小・文様構成等によって1~7類に分類した。詳細な分類基準、検討については本文中に記述したので参照されたい。うち1類については、指でつまみ出し、縦位の隆線も付ける類で、熊本県藤貝塚出土品や鹿児島県上焼田遺跡の中心となるタイプである。佐賀県葉畠遺跡では層位的に出土したものからみて、古い様相であることが知られている。本遺跡出土品は極少量であり、出土した藤B式の中では最古段階に位置付けられよう。2~3類は隆線が小さくシャープなものであるが、本遺跡出土品の中では4類とともに主流を占めるものである。この中には、7類とした曲線文類のうちの多くが含まれる。3類の中には、口唇上面が平坦になり、極めてシャープに低く小さい隆線を付けるものも含まれ、藤B式の精華を見る段階である。4類はやや大きめの断面三角隆線を多条付ける類で、第33図87のように部分的につまみ出し隆線を持つものもあり、1類との関係が直接的であることが判かる。4類は概して隆線も高く、隆線が途中で切れたり、断面形が上向きであったりしており、古相を残すものが多い。また1号住居跡出土藤B式土器の中でも2例認められるのみで、他はすべて2~3類であることを見ると、この4類は分離できるタイプと考えてよい。また、7類とした曲線文類の中にも、この4類隆線文が少量含まれている。次に、5類とした細身断面カマボコ形隆線のものは、全体量からすると少い。わりと丁寧に細い隆線を貼り付けており、その丁寧さからみると、3類に共通するものがある。隆線の形態からは明らかに他類と区別できる類ではあるが、時期的には位置付けが困難な状況にある。隆線間隔をはっきりとあけているものが多く、或いは古い段階のものなのかもしれない。次の6類は太いカマボコ形断面の隆線を2~3条施す類で、出土量としては極少量である。第34図10などは典型例で、内面に縦位に近い斜位条痕を施すことも特徴である。隆線の仕上げ自体も雑で、藤B式最新段階と考える。次の7類は、重弧状曲線文となる類であるが、既述してきたように、隆線による分類1~6類のうち、2~5類のものがこの中に含まれている。うち2類と3類が多く、4~5類は少量である。文様構成としては、文様帶の上下に水平隆線による区画を設けるものが基本となっており、大多数を占める。明らかに上下に区画を持たない第35図111のような例もあるが、小径の小型品であることによる例外と思われる。以上のような各類に対する検討から、本遺跡出土藤B式土器の変遷は、1類→4類→2~3類→6類の順序が考えられる。

曾畠式土器 本遺跡出土の曾畠式土器は、藤B式の約1/4の量であり、遺跡の主体を占める

という程ではない。しかし、竪穴住居や各土壤において、曾畠式土器だけ単独で出土したということではなく、すべて森B式土器と混在して出土している状況がある。この意味で、両者の共伴状況を確認し、当地域における同様の状況を押さえておくことが肝要と考える。本文中では、滑石を多量に含む曾畠式と、滑石を含まない曾畠式土器という形でしか分けていなかったが、ここでは文様構成等も加味して細分類しておきたい。まずA類として、口縁内外に刺突或は凹点状の列点文を施し、胴部上半外面に三角形に区画した中を平行沈線で埋めた複合鋸歯文的な文様構成を施すもので、出土量からみると少い方である。この中には、第39図1のように貝殻腹縁の刺突による横位列点文も含まれるが、胴部文様の様子が見えないので、この類に置けるかどうか未だ不確実である。また、第42図59のように滑石を含まないが、文様構成上しっかりとしているため、この類に入れたものもある。次にB類は、口縁内面に短線状の連続文を施し、外側には綫と横の平行沈線で方形区画を連続させた文様を施している。外面上端には山形に沈線が加えられており、新しい様相が入ってきているものと思われる。図中第17図6は、14号土壙における第17図7との共伴関係で、とりあえずB類に置いてみた。このB類が本遺跡曾畠式土器の中では出土量が最も多い。次に、C類は、口縁内外に横位平行沈線を施し、胴部には横位平行沈線を地文としながらも、縦方向の斜線で菱形区画等をつくり出している類である。第42図56は滑石無しの類で、外面には「ハ」の字状連続刺突文を持つ。第42図61も滑石無し類で、横位平行沈線文は左から右へ条痕風に施したもので他の曾畠式土器沈線とは全く趣が異っている。第80図には示さなかったが、第10図9の口縁部内外に横位平行沈線を入れ、口縁に刻目を持たないものもこの類であろう。また、第10図13-15はすべて滑石無しで、横位平行沈線の上に曲線を加えたり、有軸羽状文を施したりしているものも、このC類に含まれる。このC類は、本遺跡出土の曾畠式土器の中では、B類に次いでやや多く、滑石無しの類のうち半数以上がこの類となる。以上の曾畠式土器の検討から、C類自体はまだ多様性があり細分可能で、完全にひとつの類型としては把えきれないのだが、一応A類→B類→C類の変遷がたゞそれである。曾畠式土器については以上のようなが、本遺跡からは、それと関連する土器（第81図19-24）が出土しており、若干付け加えておきたい。これらはすべて第25図に収めたもので、19は内面に横位平行沈線、外面に文様帶的に横位条痕を施すもの、20は内面に横位平行沈線、外面には密な刺突列点文の下に綫維の雜な沈線文を施す。21は内外に横位の平行沈線文、22は爪形文、23は小さな刺突連点文の下に横位平行沈線文、24は刺突連点文2段の下に斜位の沈線で文様を施している。これらはいずれも滑石を含まず、19-21・23・24は森D式1類と関連の強いものである。22はどうしても瀬戸内との関連に求めざるを得ないだろう。九州では大分県羽田遺跡（I地区）のZⅢ式と関連するが、羽島下層（III）式や畿内の北白川下層類とは、施文法・器形からみてやや隔たりを感じる。外にやや開いた器形はやはりプロト曾畠的な段階の中に爪形文だけがとり込まれたものと考えたい。以上の曾畠系土器は、C類に後続するもの

	轟B式土器	曾畠式土器
I段階	 27-1 1類	
II段階(土器3)	 18-1 18-6 18-3 18-4 類	 18-10 39-5 18-11 39-1 42-59 A類
III段階(14号土壤)	 27-2 27-3 35-111 35-112 35-113 類	 17-1 17-7 39-3 17-6 17-8 B類
IV段階	 34-106 34-109 34-105 34-110 類	 42-56 35-6 42-61 39-2 C類

第 80 圖 天國遺跡出土前期土器共伴關係圖 (1/6)



第 81 図 柿原野田遺跡 (1~18), 天園遺跡 (19~24) 出土関連資料 (1/6)

として、轟D式や各地の影響を受けて成立した過渡的な類と理解される。

共伴状況 轟B式土器の各類と曾畠式土器各類との組み合わせを、とりあえず出土現状の確認ということで検討しておきたい。まず、轟B式1類は出土状況からみてこれに伴う曾畠式土器は確認できない。次に、轟B式における4類の段階であるが、「土器3」のセットが良好である。この一括品のうち、轟B式土器では1点だけ3類の曲線文が含まれるが、他は4類である。曾畠式土器は、B類が1点混じるが他はA類であり、轟B式土器4類と曾畠式土器A類が共伴する事が押さえられる。これをⅡ段階(第80図)としておこう。次の第Ⅲ段階では、14号土壙で轟B式土器3類と曾畠式土器B類が混在して出土した。他に混りは無い。また1号住居跡からは、轟B式土器では1点だけ4類かと思われる小型品があるが、他はすべて2・3類であり、これに対して曾畠式土器はB類が出土している。このように、轟B式土器2・3類と曾畠式土器B類が共伴するすることが押さえられた。次のⅣ段階目としては、良好なセットを示すものはないが、7号土壙出土土器のうち、轟B式土器は2・3・5・6類がみられ、曾畠式土器は滑石無しのものの方が多い、文様構成からはB類が1点みられるが他はC類のものである。ここでは、轟B式6類の太身凸帯状類との確実な共伴状況は知り得ないが、両型式とともに新しい傾向のものどうしが組み合わさっており、矛盾は無い。以上のような組み合わせ状況の中で、Ⅳ段階としたものは、轟B式6類と曾畠式C類とが共伴するという意味ではなく、両型式土器のそれぞれの継の流れの中で、偶々両者が横に置かれてしまったということなので御理解願いたい。次に、本遺跡と同じ地域に含まれる甘木市柿原野田遺跡〔柿原野田遺跡〕柿原野田遺跡調査団 1976)の例について見てみたい。同遺跡D地区1号円形整穴状造構からは、曾畠式土器と轟B式土器が混在して出土した。第81図1~18がそれであるが、天園遺跡で分類した曾畠式土器A類と、轟B式土器4類が共伴している。この轟B式土器は、高い障壁の上端をナデ

て押さえているため、結果として断面梯形状になっている。天闕遺跡出土品の中にはこのような例は皆無であり、柿原野田遺跡でのくせなのであろうか。この遺跡での両型式の共伴関係は、天闕遺跡での状況と一致する。

おわりに 以上のような分類と共伴状況から本遺跡出土縄文前期土器の変遷を追ってきたが、残された問題も極めて多い。本遺跡出土轟B式土器については4段階に並べられたが、出土量としてはⅢ段階の2・3類が半数以上の最大量をなし、Ⅱ段階の4類が少量、IとⅣ段階の1・6類に至っては、1点と数点のみ、というのが実情である。従って本遺跡利用状況としては、轟B式の2・3類を主とする極めて限られた時間であったということ。轟B式土器自体についても、すべてを網羅しているという訳では全く無く、1類や6類における各バラエティー、沈線文と組み合わさった類、隆線上に刻目に入る類など、多くが欠けている。曾畠式土器については、出土品の中に構成文様自体のバラエティーが少なすぎて、実のところ分類に無理が生じており、全く不完全なものであることは否めない。曾畠式土器の前後を結ぶ型式の出土が少なすぎて、具体的な当地域における各地との関連が検討できなかった。同じ条痕文系土器の中で、滑石の有無と文様構成の違いによる極めて異質な土器どうしが同一遺構から出土するという事は、轟B式土器の前半が先行するとしても、両者のかなりの時間幅の間、相容れないままに共存したという不思議な現象である。当時の人々は余程の度量を持ち合わせていたのであろう。以上の諸点に対して今回も解決に向かう私案を持つことなく丁ってしまった。今後、小地域毎の詳細な検討の積み重ねが必要であろう。

図 版



(1) 天國遺跡遠景（西の大谷遺跡から、煙の出ている煙突の左側）



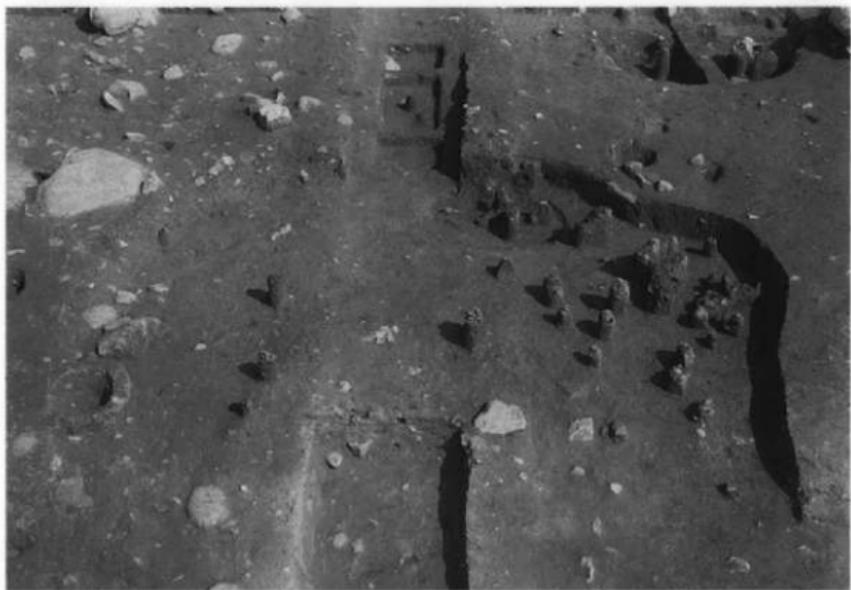
(2) 天國遺跡全景（空中写真、西から、上方は夕月遺跡、左下は笹原遺跡）



(1) 天國遺跡全景（空中写真、ほぼ完掘時）



(2) 1号住居跡（縄文前期、西から）



(1) 1号住居跡土器出土状態（西から）



(2) 1号住居跡内南半土器出土状態（西から）



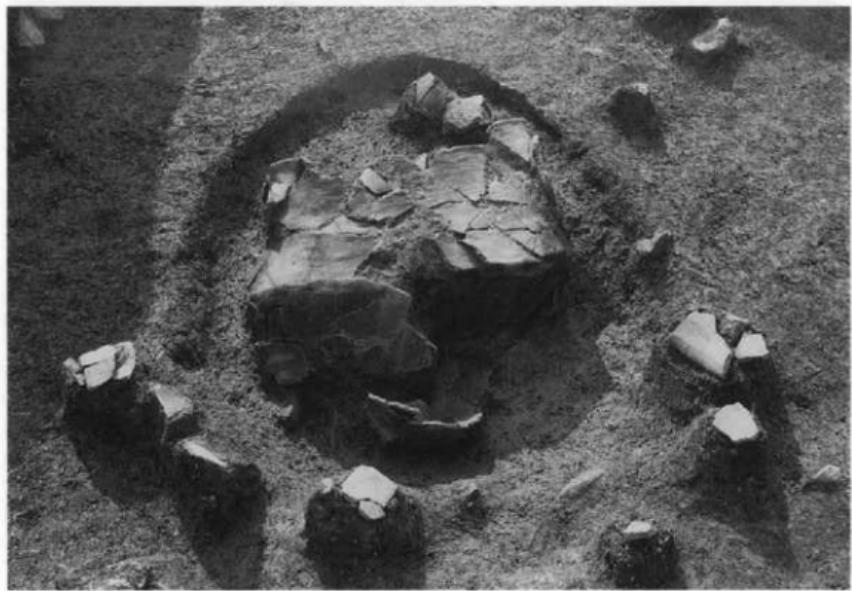
(1) 1号埋甕出土状態（上から）



(2) 「土器1」出土状態（西から）



(1) 「土器 1」出土状態（上から）



(2) 「土器 2」出土状態（北から）



(1) 「土器 2」出土状態（西から）



(2) 5・9号土壤（東から）



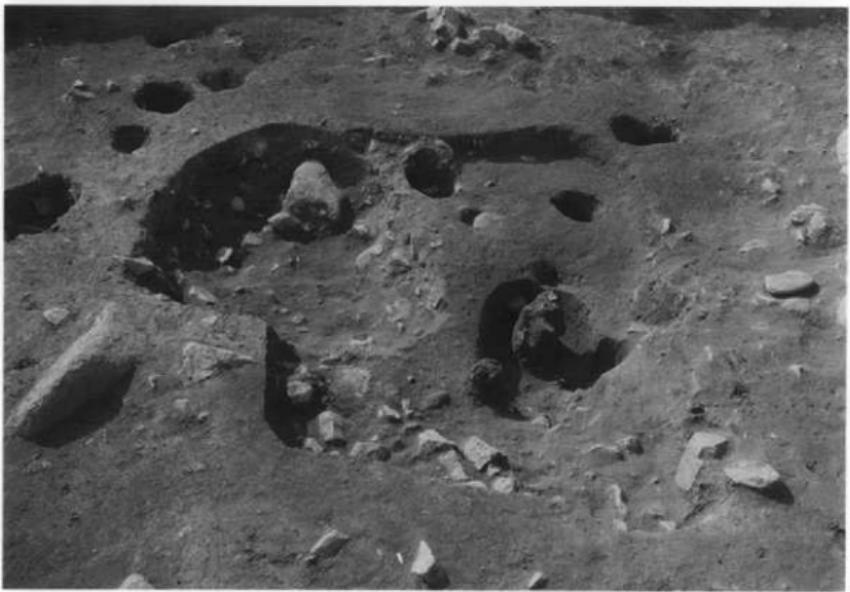
(1) 5・9号土壤 (北から)



(2) 5・9・10号土壤 (東から)



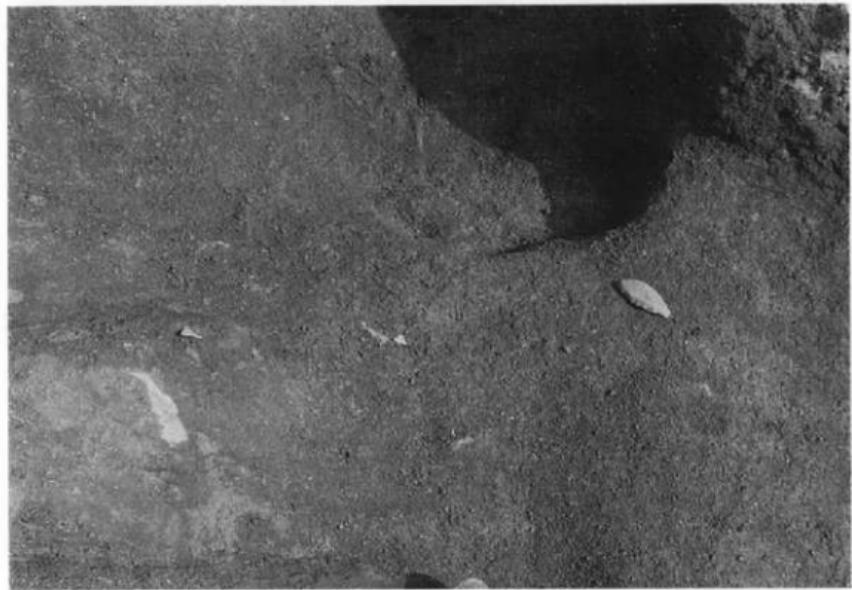
(1) 6号土壤（南から）



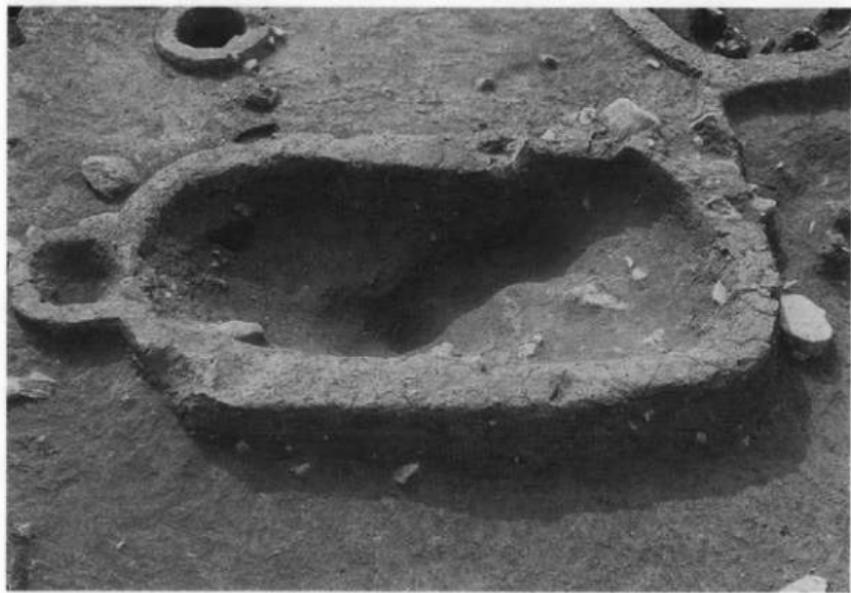
(2) 6・11号土壤（東から）



(1) 7号土壤（西から）



(2) 7号土壤内打製石器・スクレイパー出土状態（西から）



(1) 8号土壤（東から）



(2) 12号土壤（西から）



(1) 「土器 3」土器出土状態（東から）



(2) 「土器 3」東端部土器出土状態（北から）



(1) 下層 1号溝（東から）



(2) 1号墳南下段縄文包含層遺物出土状態（北から）



(1) 1号墳南下段埴輪包含層遺物集中部分出土状態（北から）



(2) 1号墳全景（南から）



(1) 1号墳全景（西から）



(2) 1号墳石室と東側周溝（南から）



(1) 1号墳石室（西から）



(2) 1号墳石室東壁（西から）



(1) 1号墳羨道部土器出土状態（西から）



(2) 2号墳全景（南から）



(1) 2号墳主体部（南から、閉塞除去前）



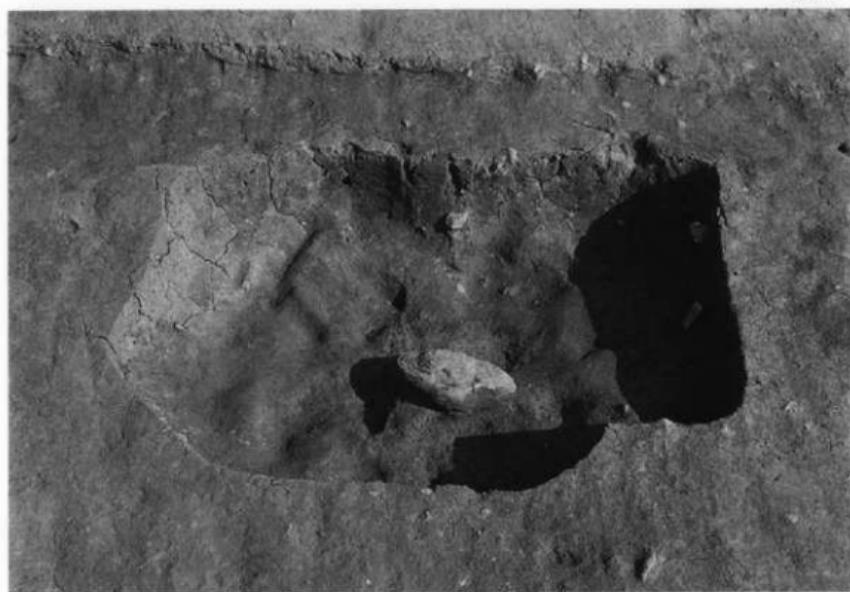
(2) 2号墳主体部（南から、閉塞除去後）



(1) 2号墳玄室遺物出土状態（西から）



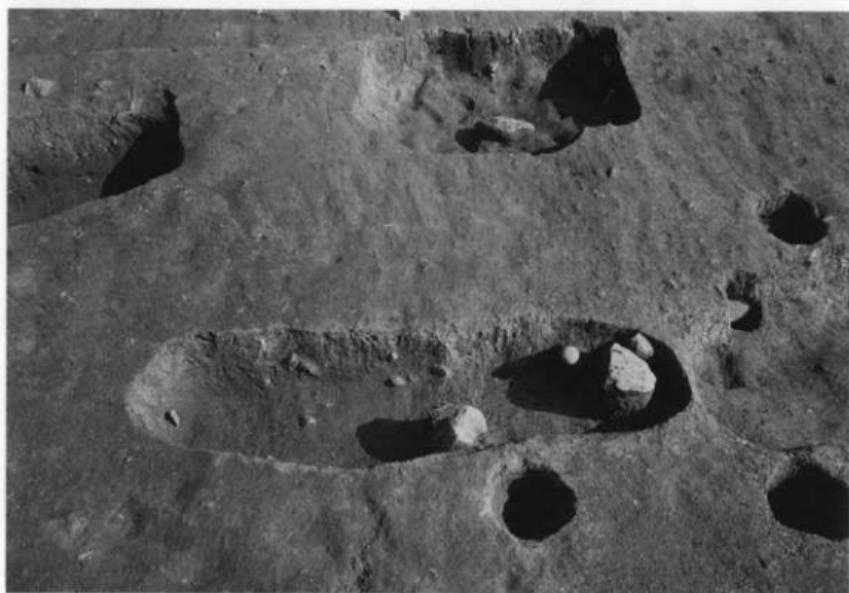
(2) 3号墳石室全景（西から）



(1) 1号土壙（西から）



(2) 2号土壙（西から）



(1) 3号土壤（西から、向こうは1号土壤）



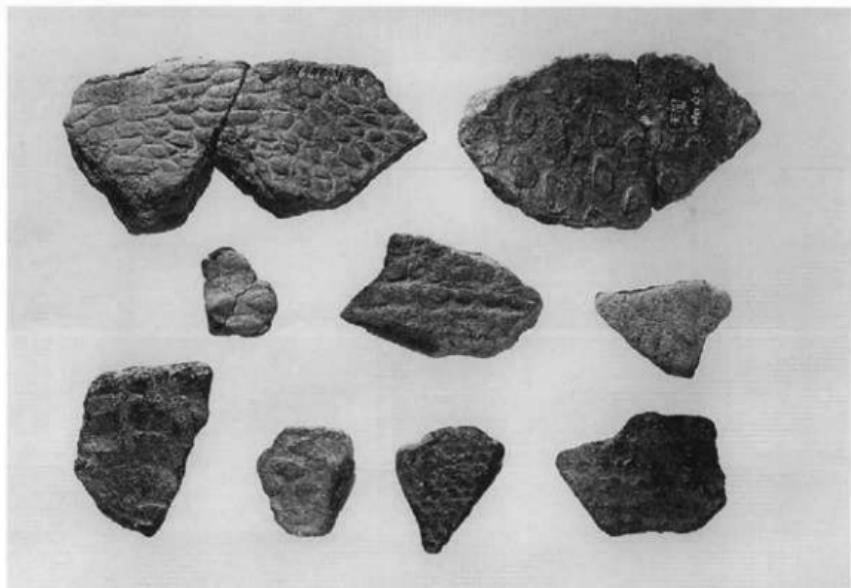
(2) 4号土壤とその周辺（西から）



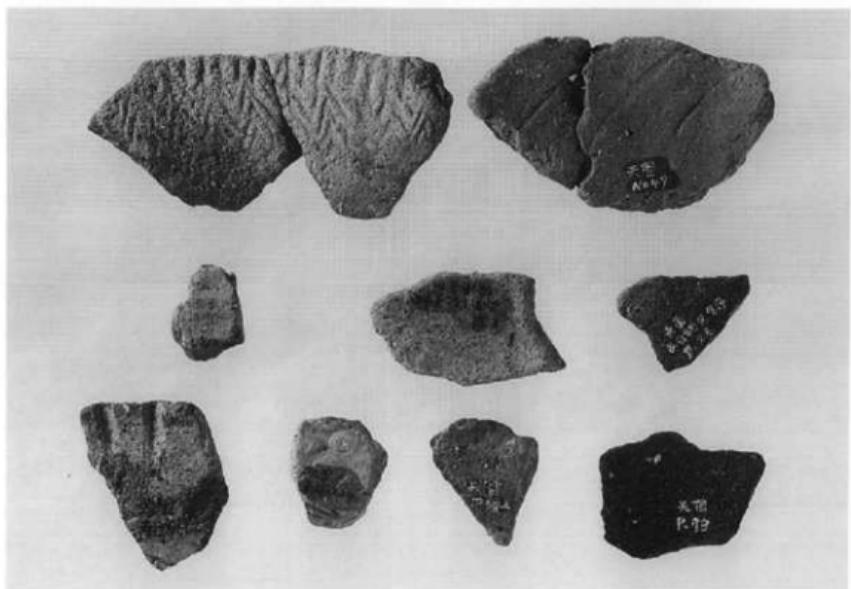
(1) 1号火葬墓 (西から)



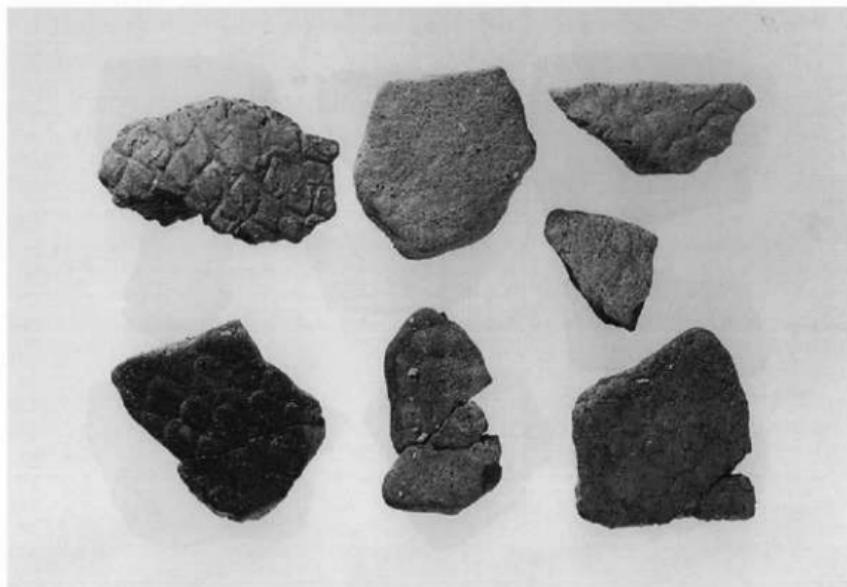
(2) 1号火葬墓焼骨集中部 (西から)



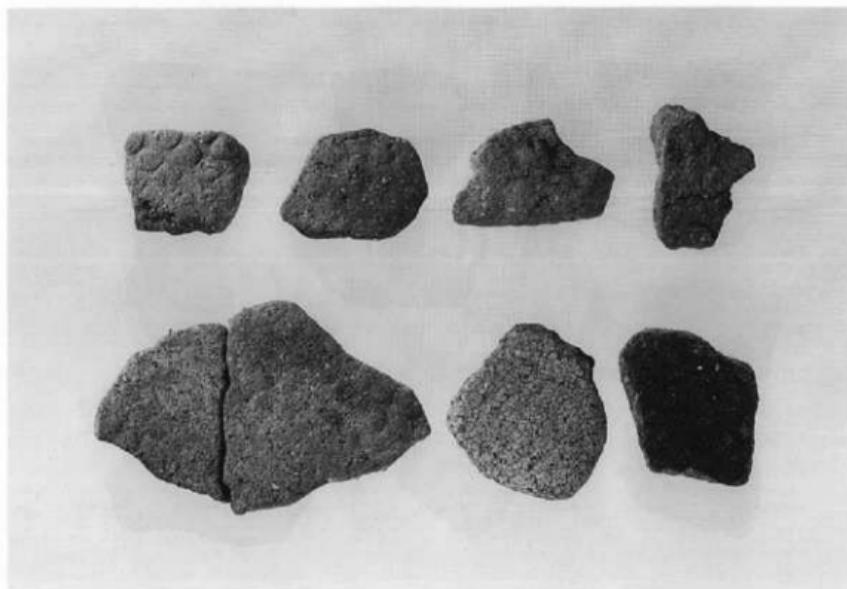
(1) 押型文土器 ①



(2) 同上里面



(1) 抑型文土器 ②



(2) 抑型文土器 ③



(1) その他の早・前期土器 ①



(2) 同上裏面



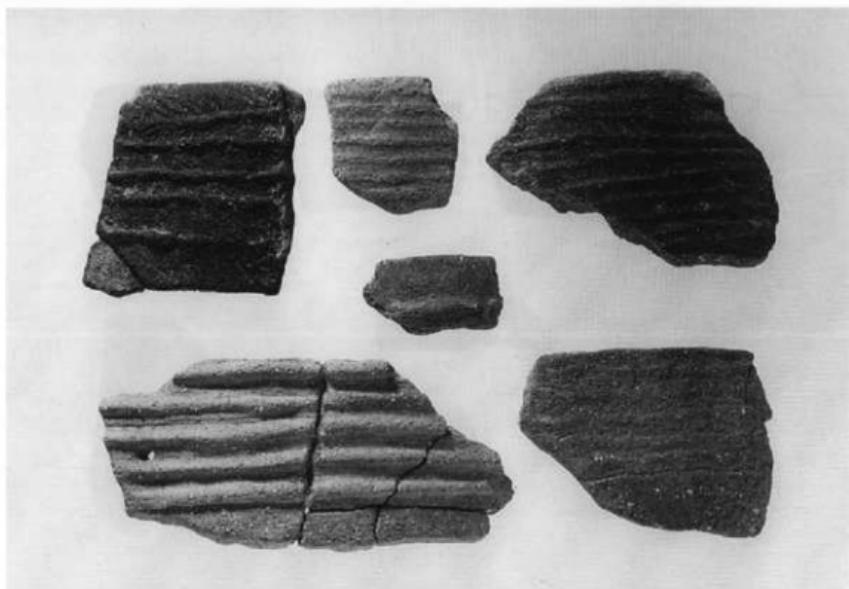
(1) その他の早・前期土器②

（1） 葵形瓦と筒瓦

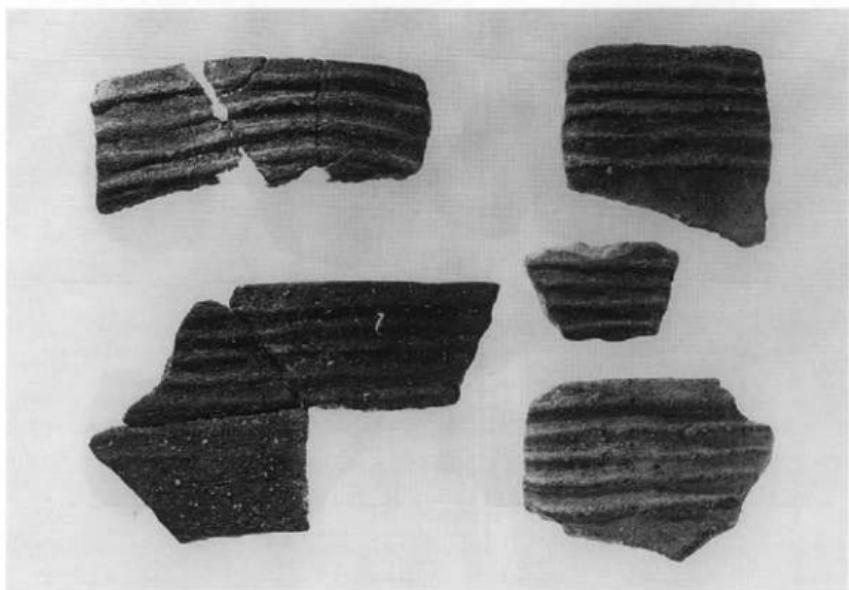


(2) その他の早・前期土器 ③

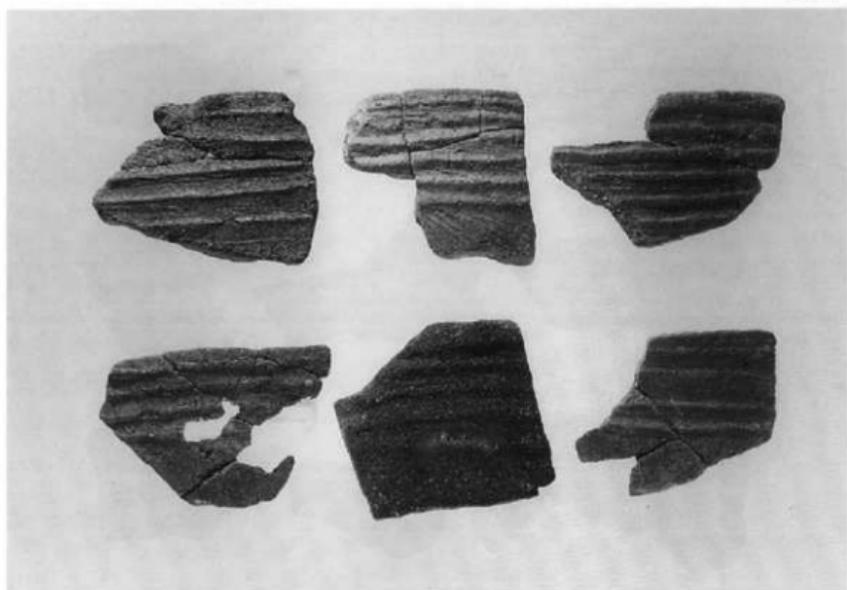
（2） 葵形瓦と筒瓦



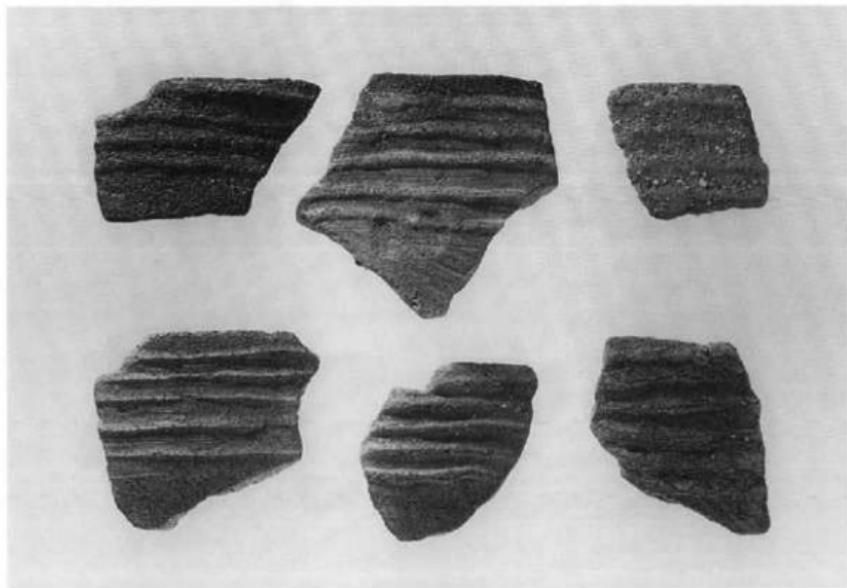
(1) 森B式土器 ①



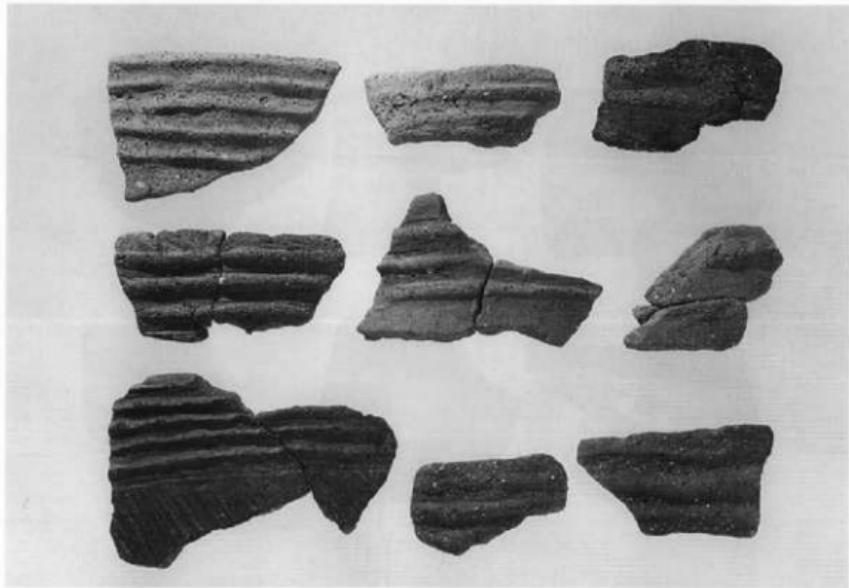
(2) 森B式土器 ②



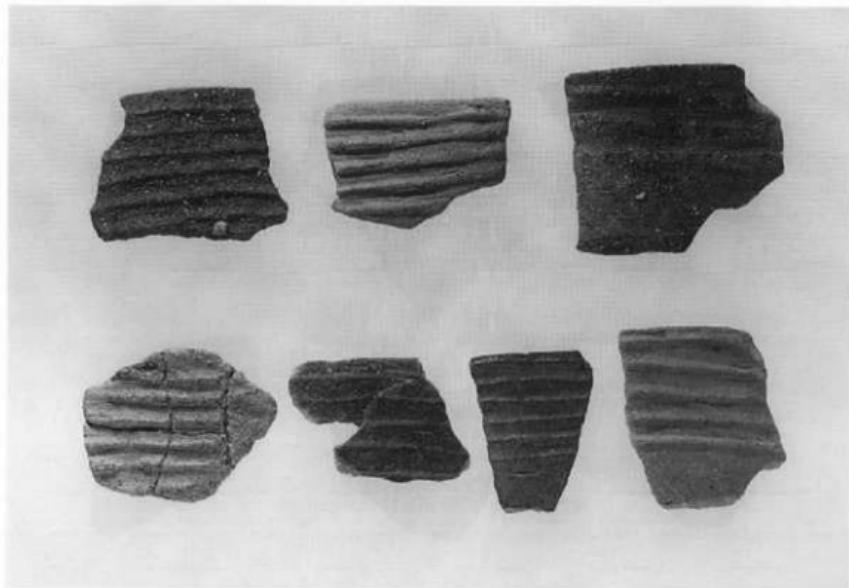
(1) 棘B式土器 ③



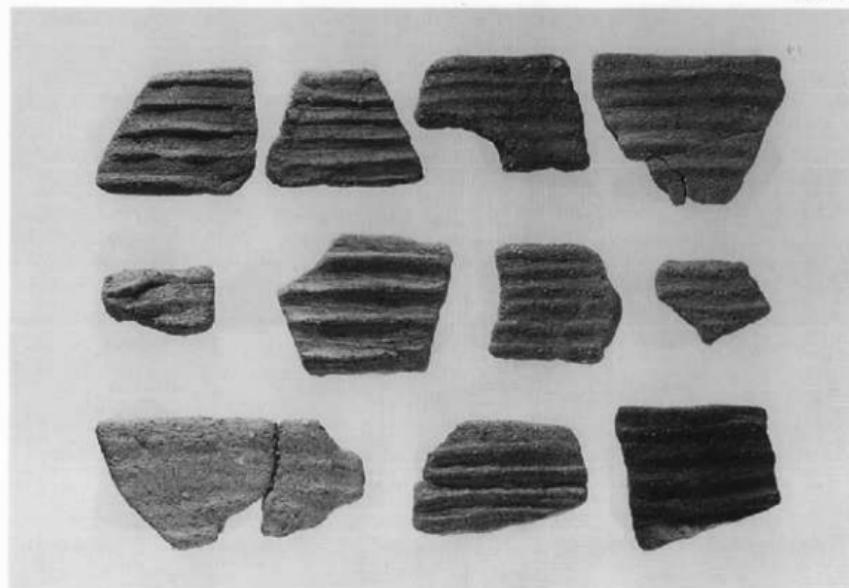
(2) 棘B式土器 ④



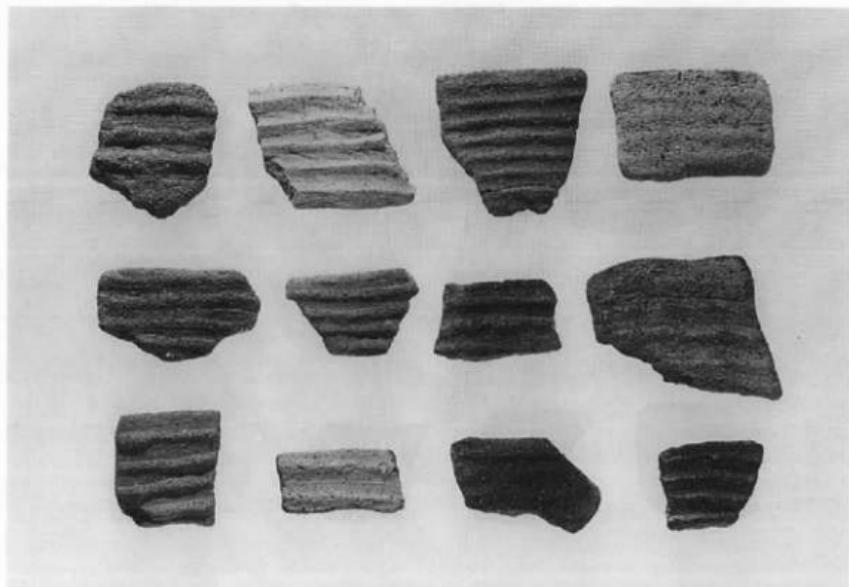
(1) 薄B式土器 ⑤



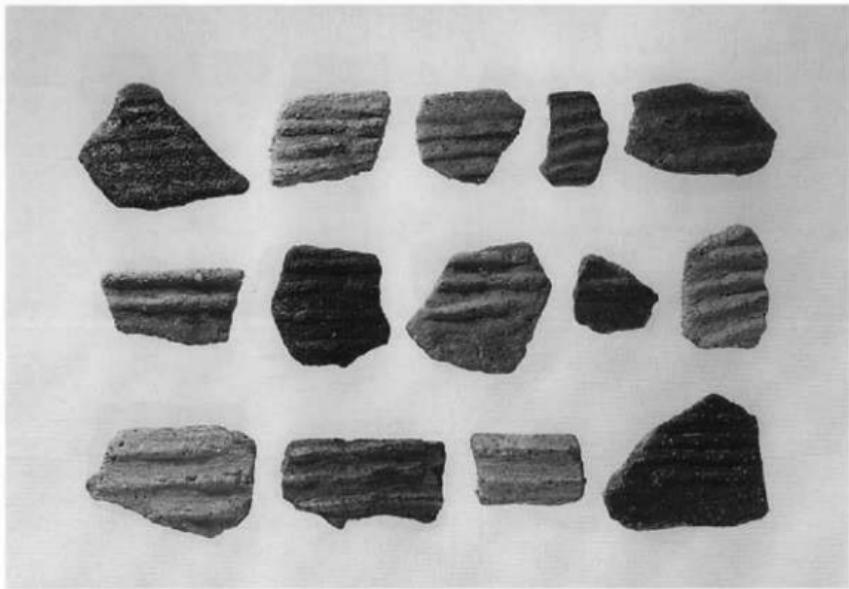
(2) 薄B式土器 ⑥



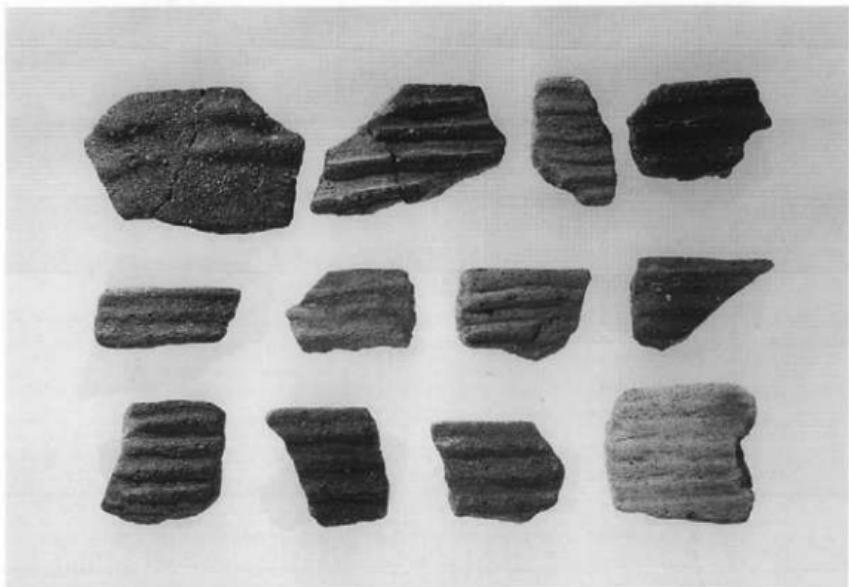
(1) 罗B式土器 ⑦



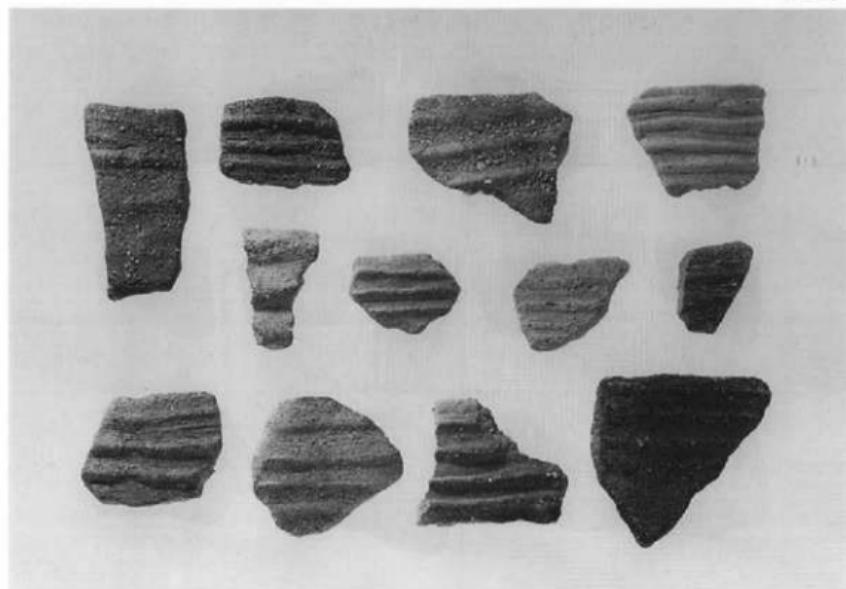
(2) 罗B式土器 ⑧



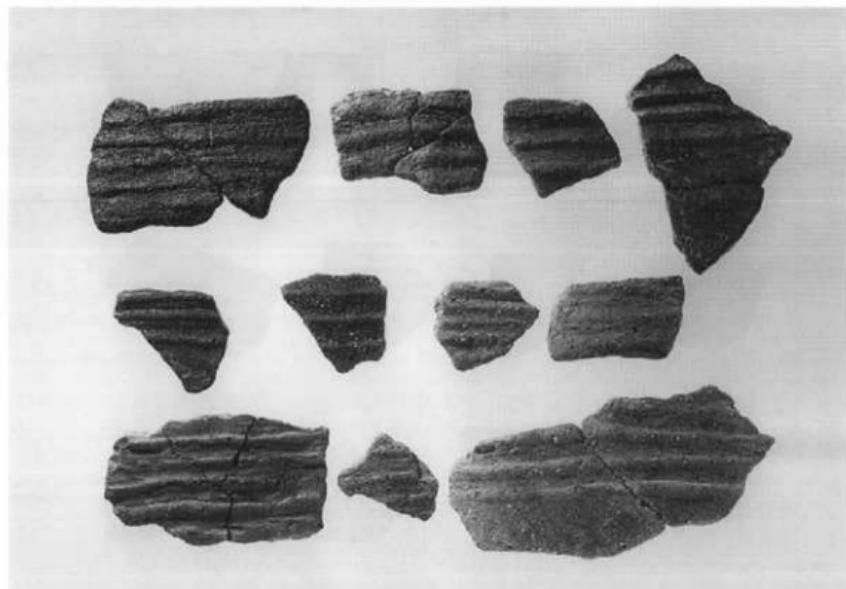
(1) 森B式土器 ①



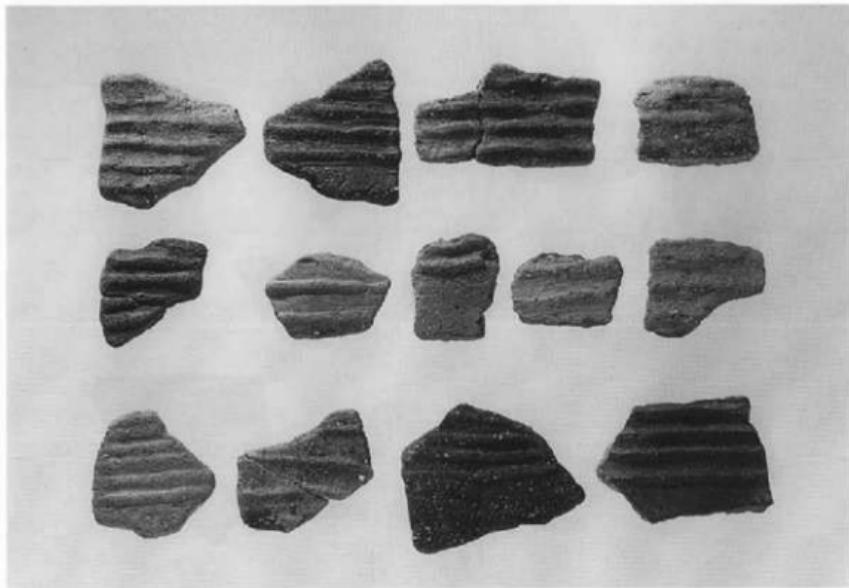
(2) 森B式土器 ②



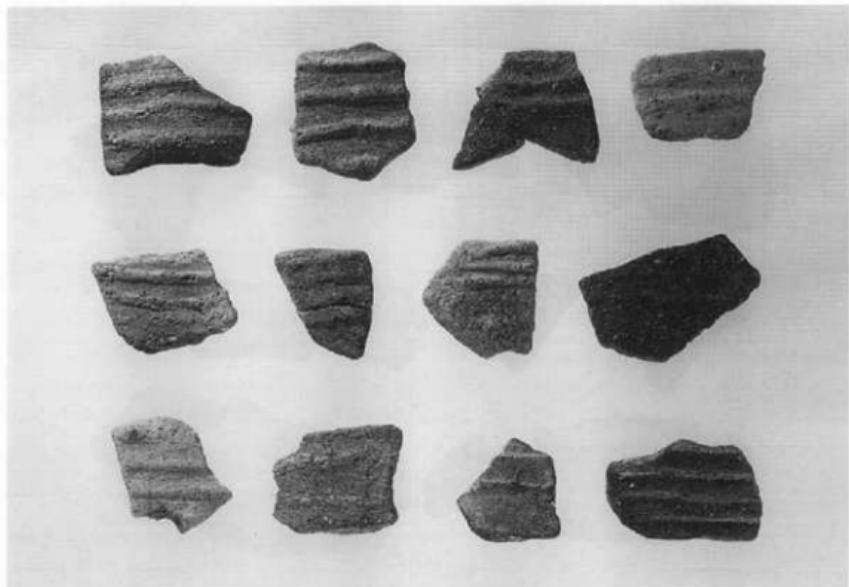
(1) 森B式土器 ⑪



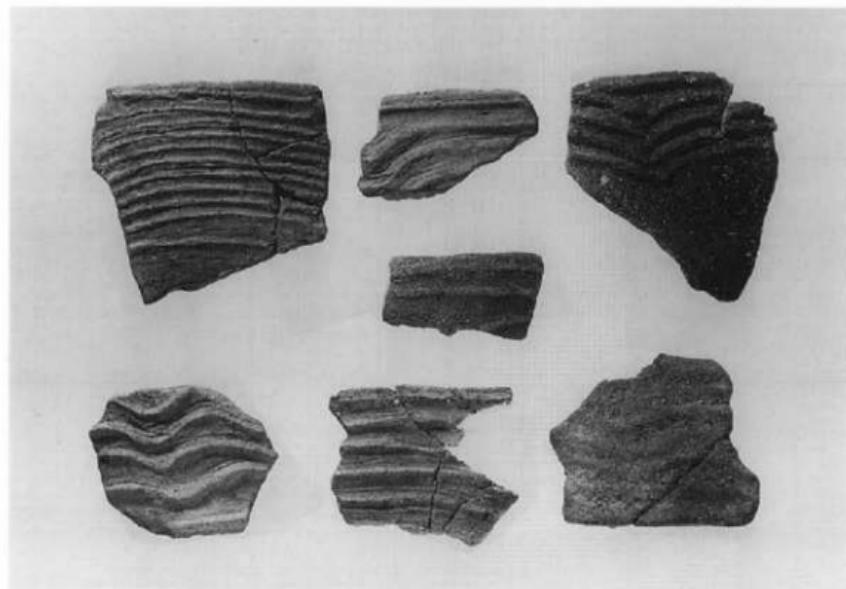
(2) 森B式土器 ⑫



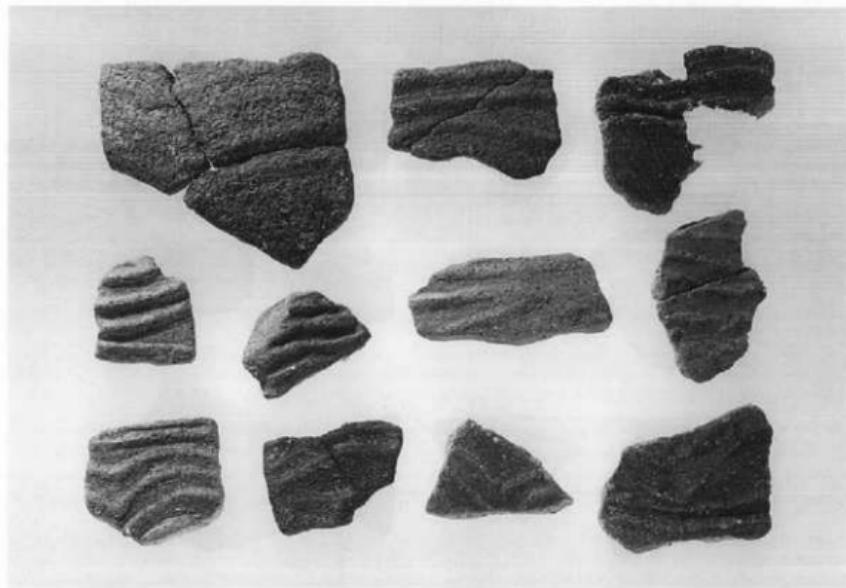
(1) 蕴B式土器 ⑬



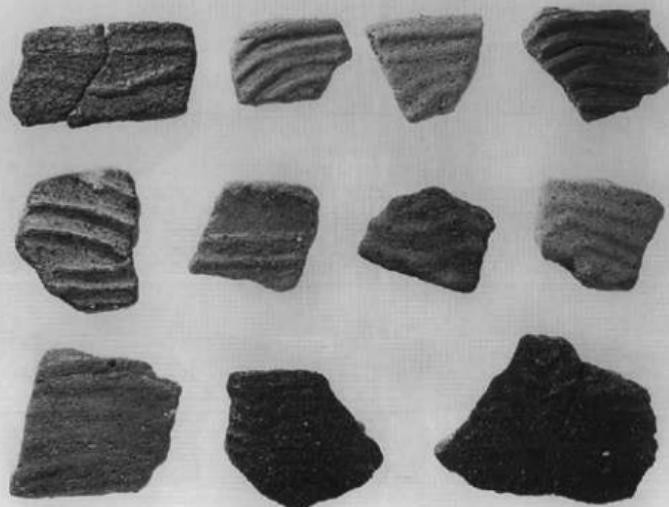
(2) 蕴B式土器 ⑭



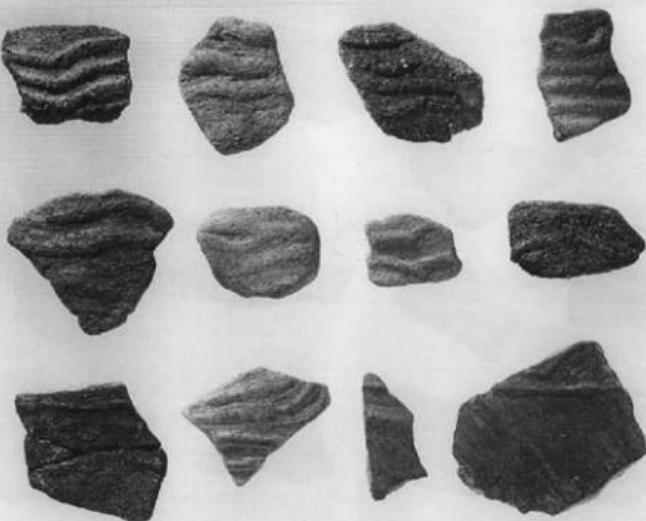
(1) 森B式土器（曲線文）①



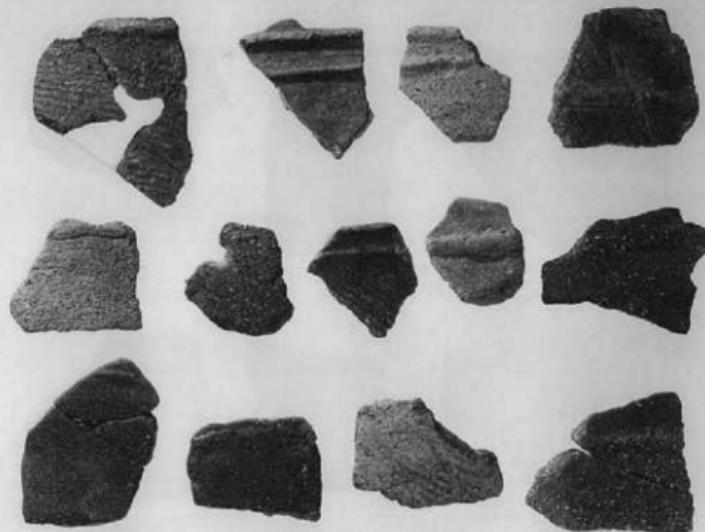
(2) 森B式土器（曲線文）②



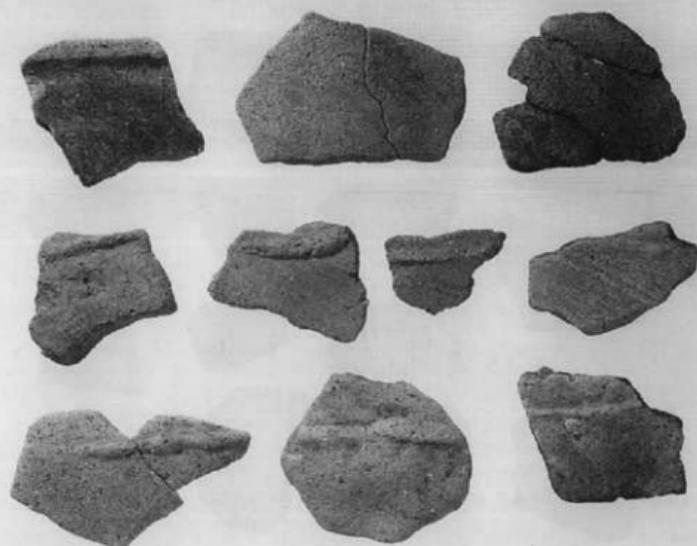
(1) 藤B式土器（曲線文）③



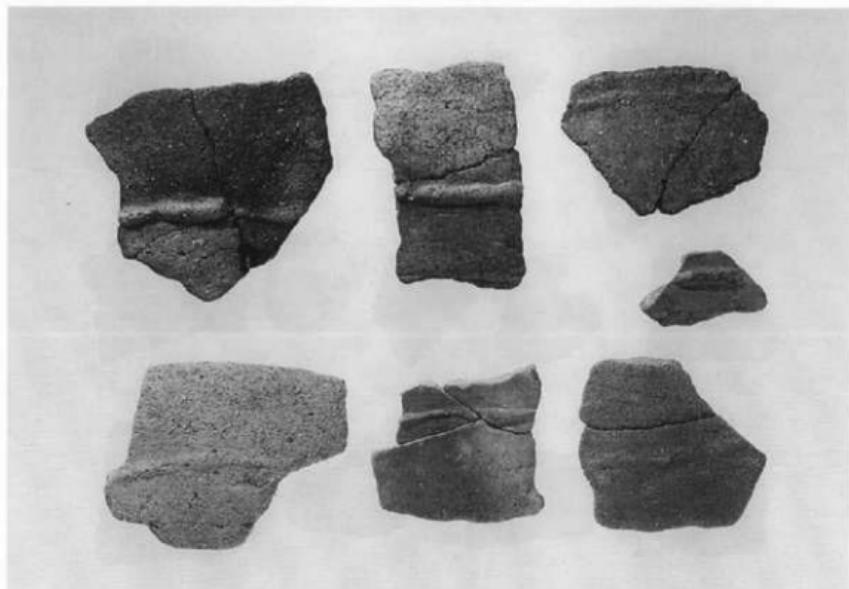
(2) 藤B式土器（曲線文）④



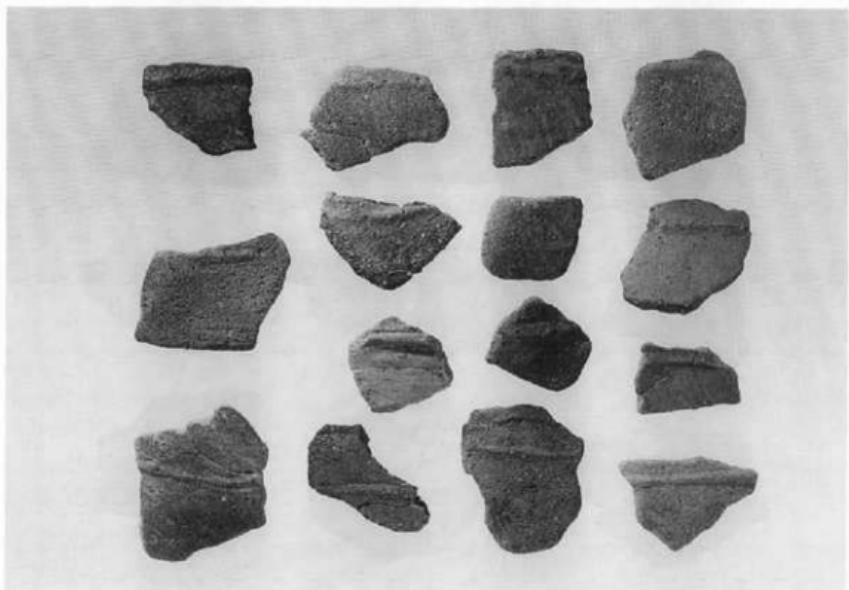
(1) 青B式土器(胴部)①



(2) 青B式土器(胴部)②



(1) 轩B式土器(颈部) ③



(2) 轩B式土器(颈部) ④



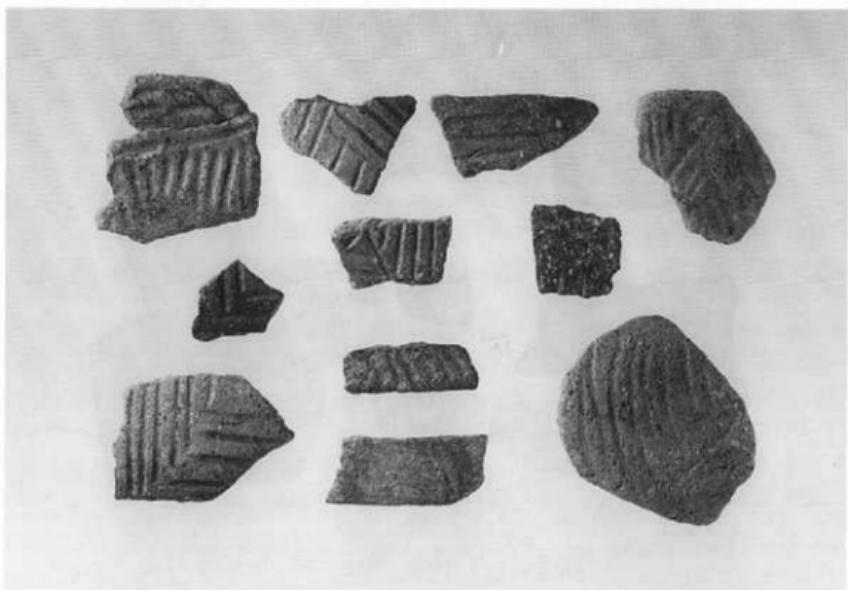
(1) 曾姬式土器 ①



(2) 同上裏面



(1) 曾窑式土器 ②



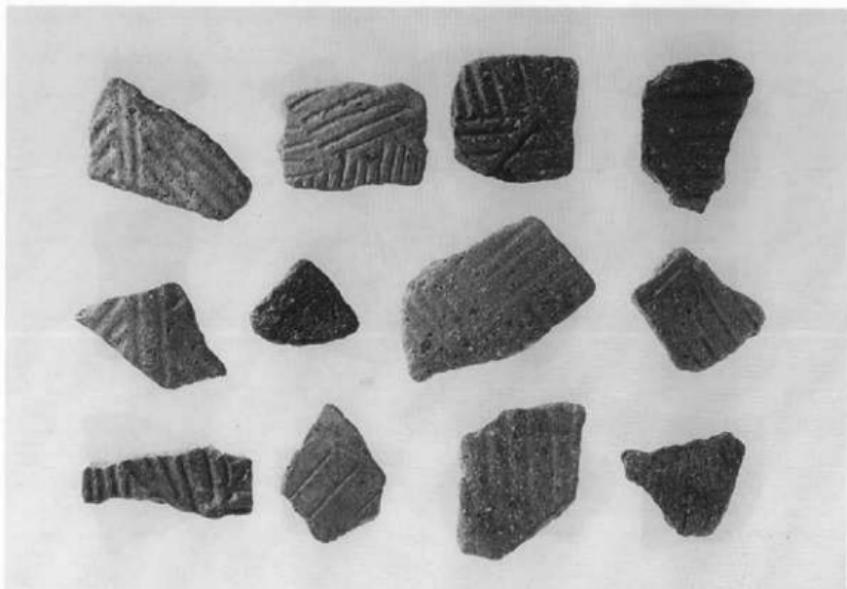
(2) 曾窑式土器 ③



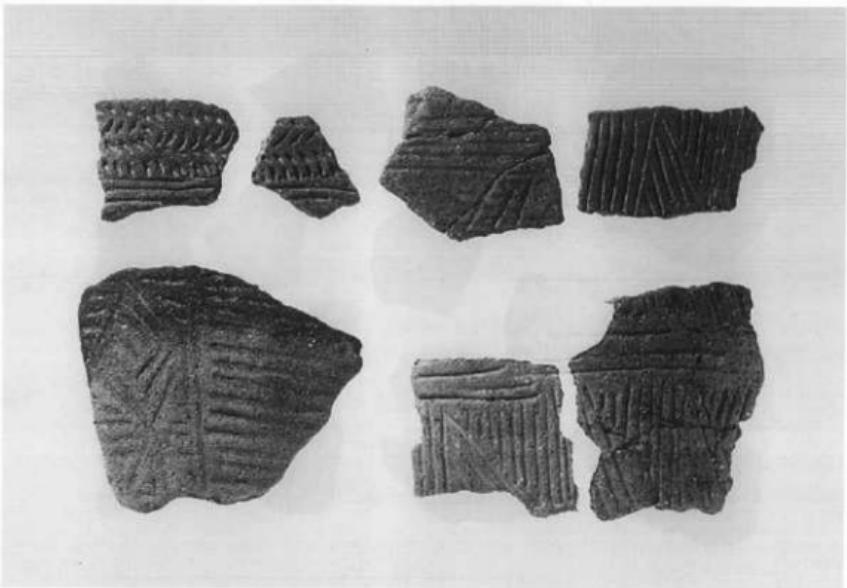
(1) 曾窑式土器 ④



(2) 曾窑式土器 ⑤



(1) 曾畠式土器 ⑥



(2) 曽畠式土器 (滑石無し) ①



(1) 曾畠式土器 (滑石無し) ②



(2) 曽畠式土器 (滑石無し) ③



(1) 1号埋甕



(3) 「土器 2」



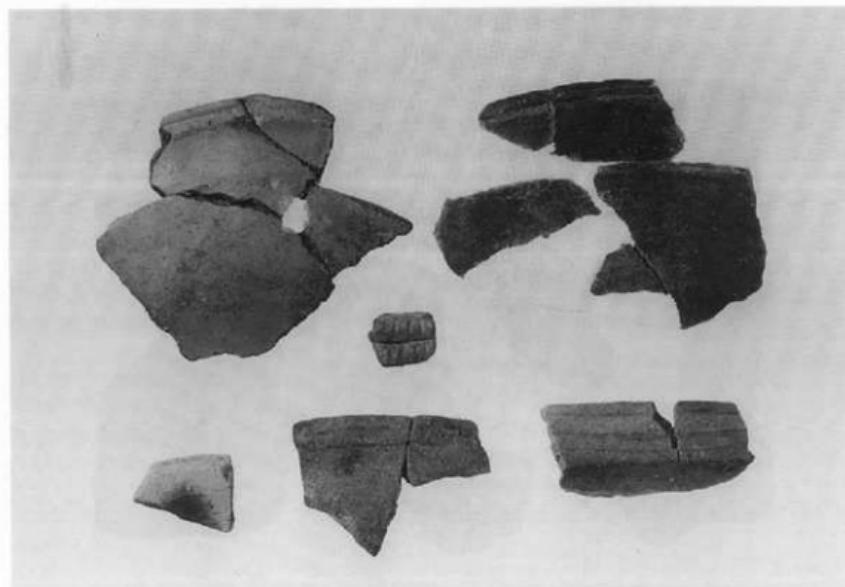
(2) 「土器 1」



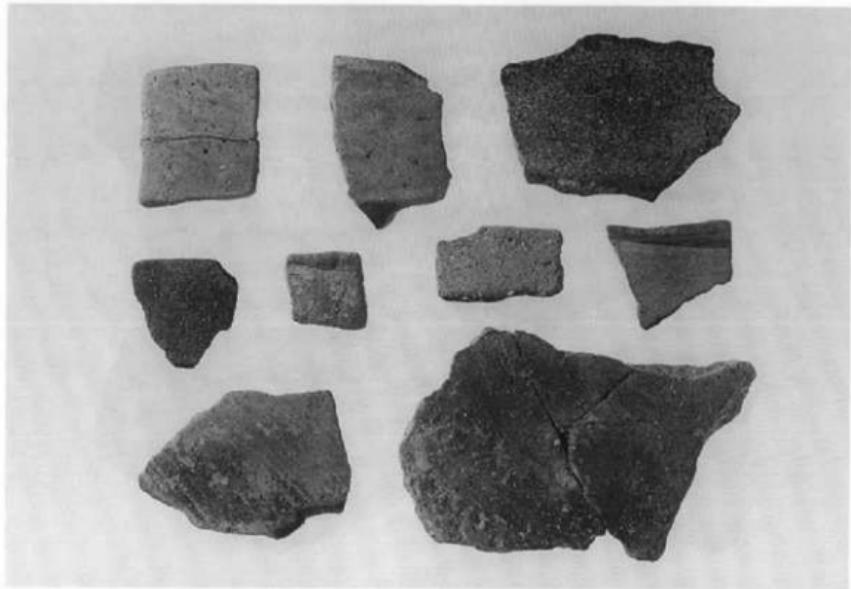
(4) 包含層出土浅钵



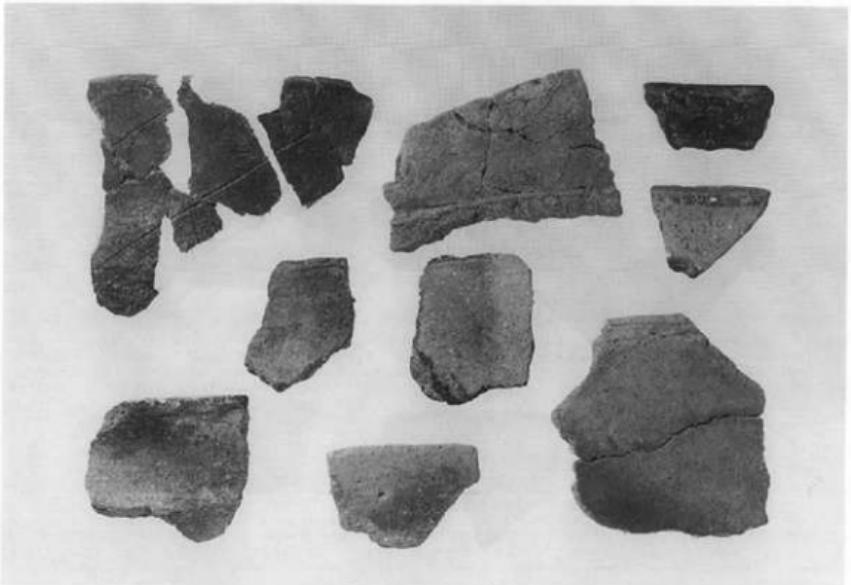
(1) 繩文後期土器



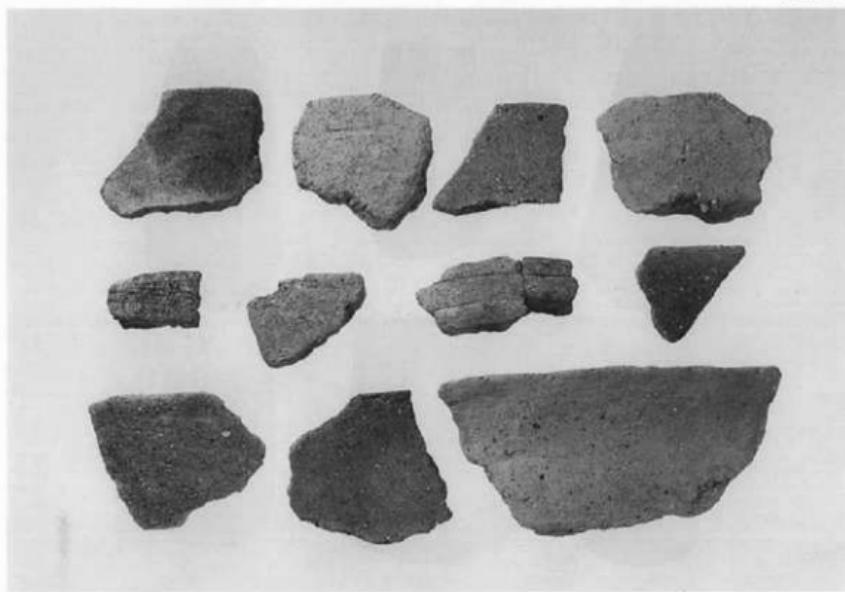
(2) 繩文晚期浅鉢、精製深鉢



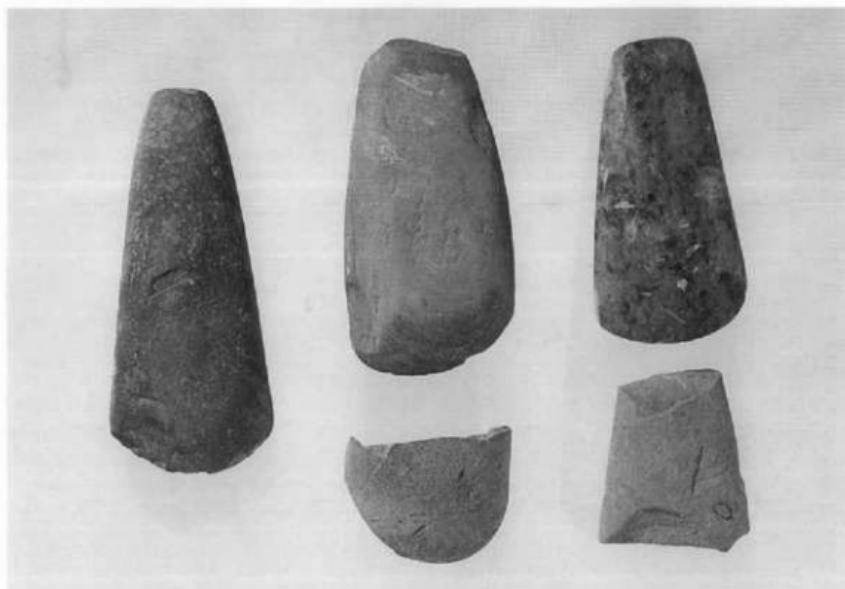
(1) 晚期浅鉢



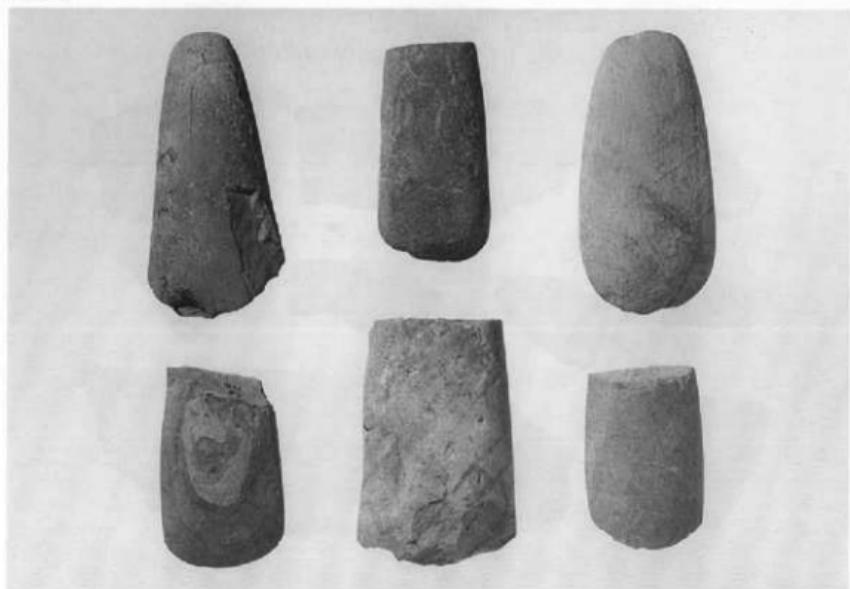
(2) 晚期精製深鉢・鉢等



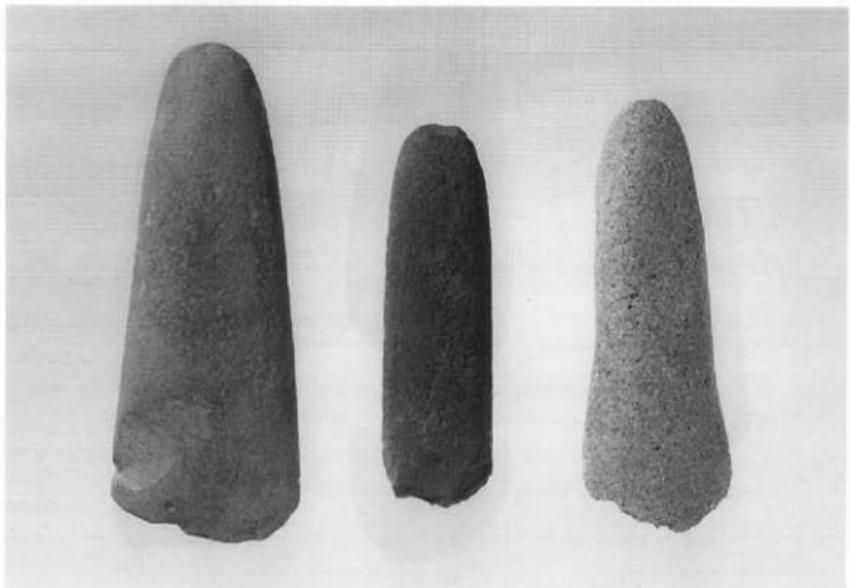
(1) 晚期深鉢類



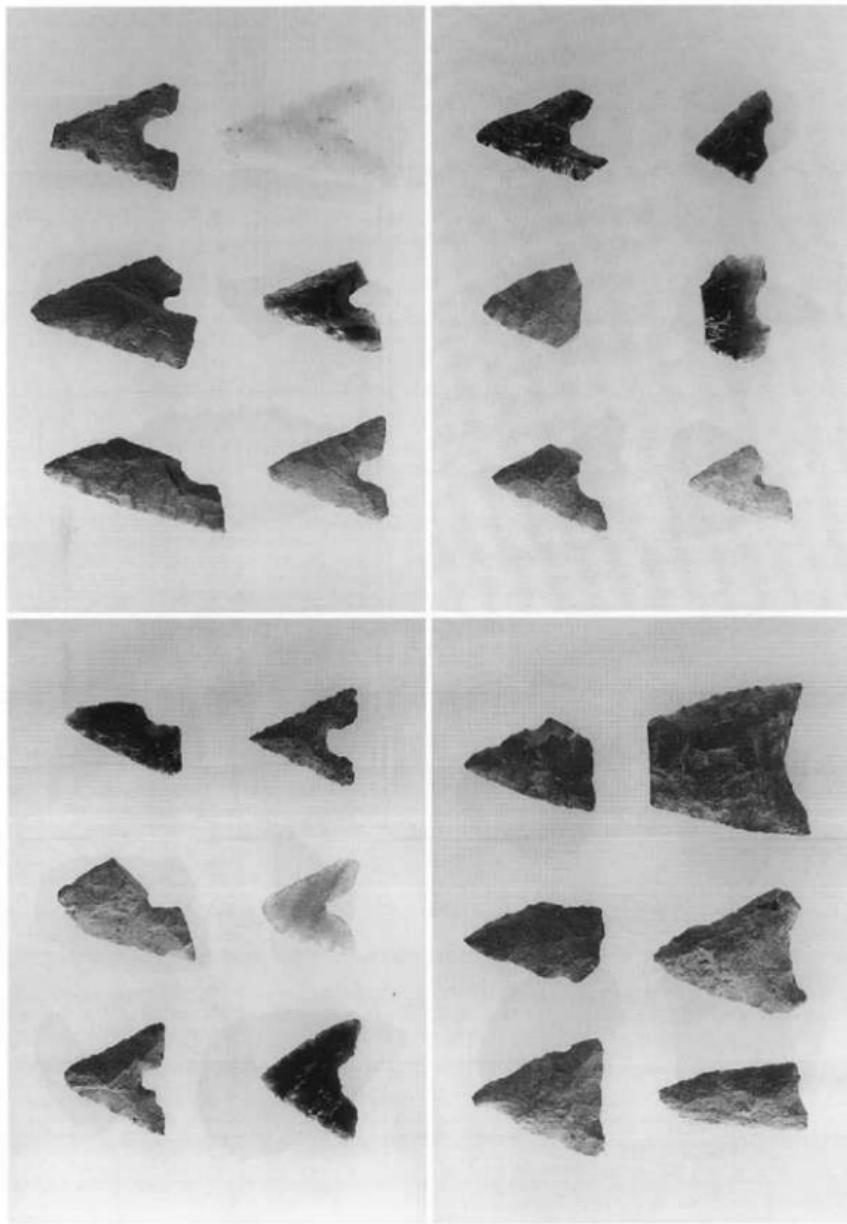
(2) 磨製石斧 ①

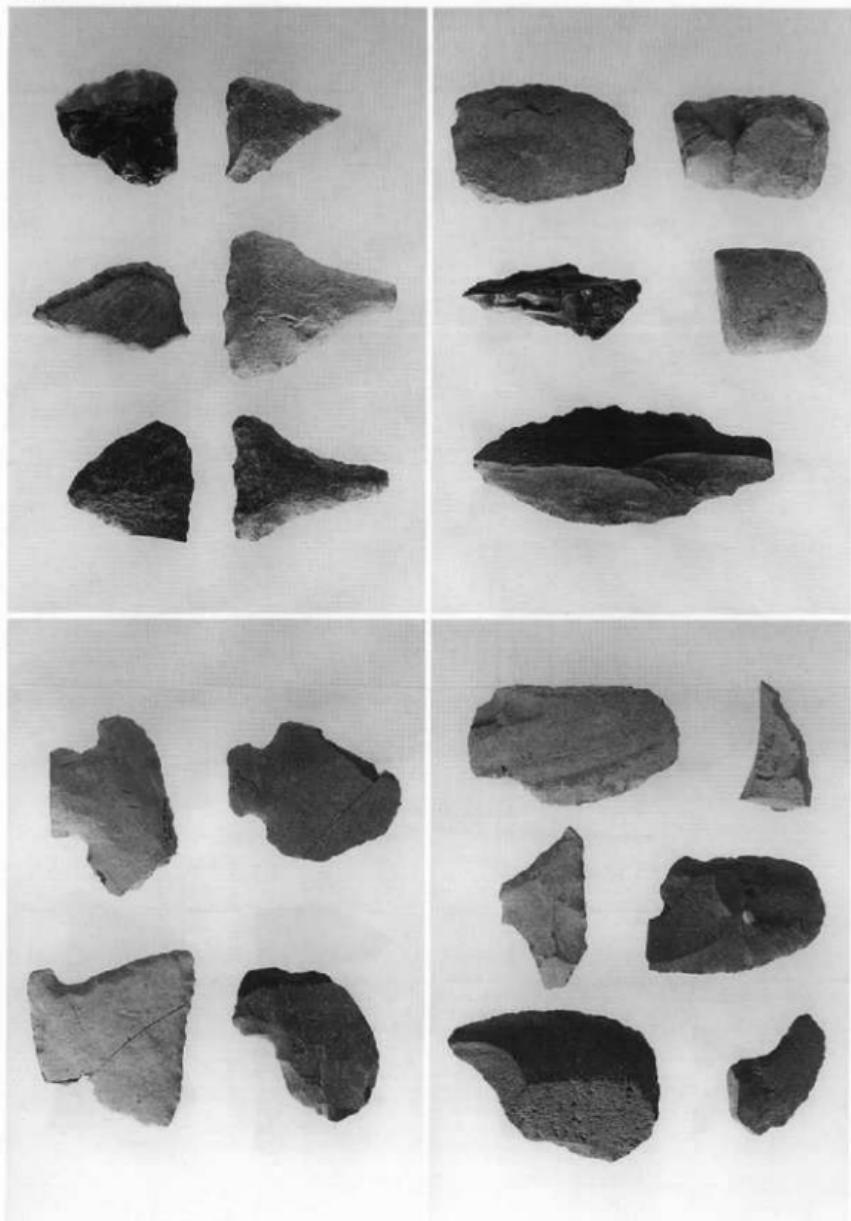


(1) 磨製石斧 (2)

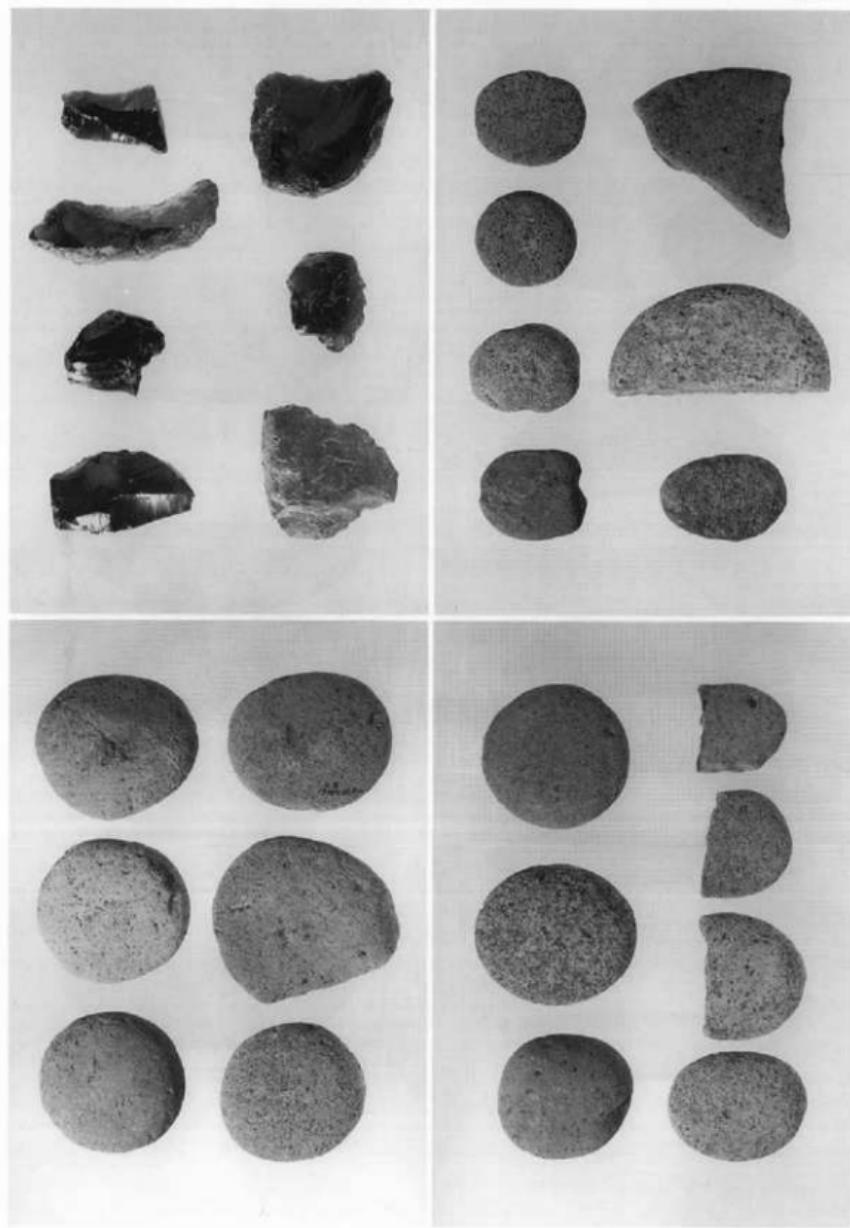


(2) 磨製石斧 (3)

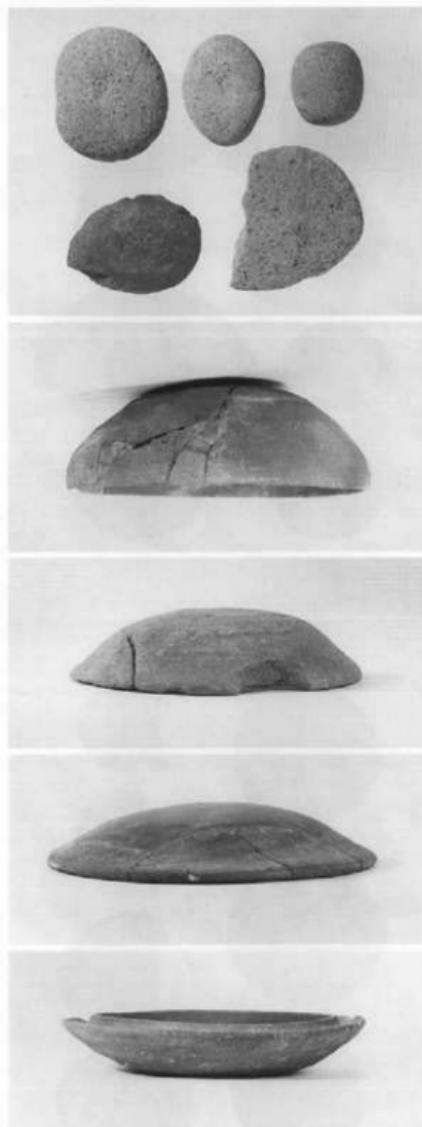




打製石器・石核・小型石斧・尖頭器狀石器・石匙・スクレイバー



石核，使用剥片，石锤，凹石，磨石



磨石·臼石，1号墳出土土器

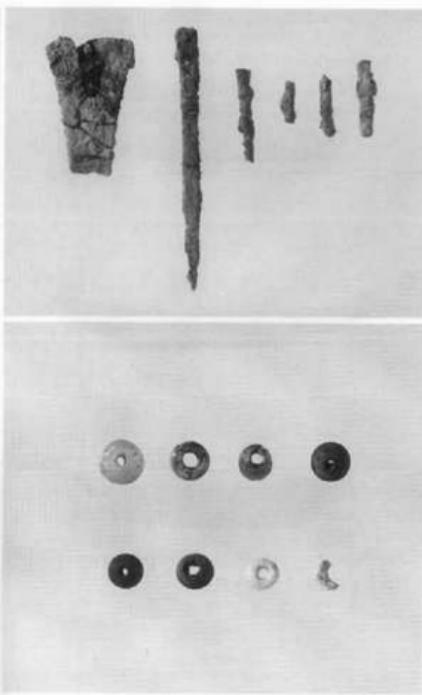
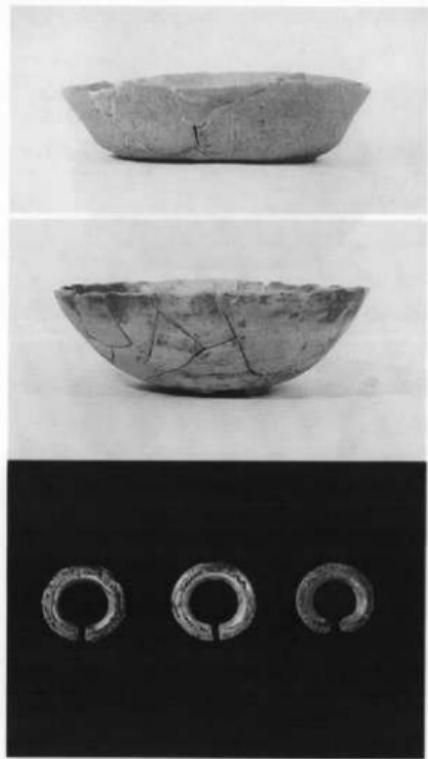


(1) 1号墳出土土器・鉄器



(2) 2号墳出土土器

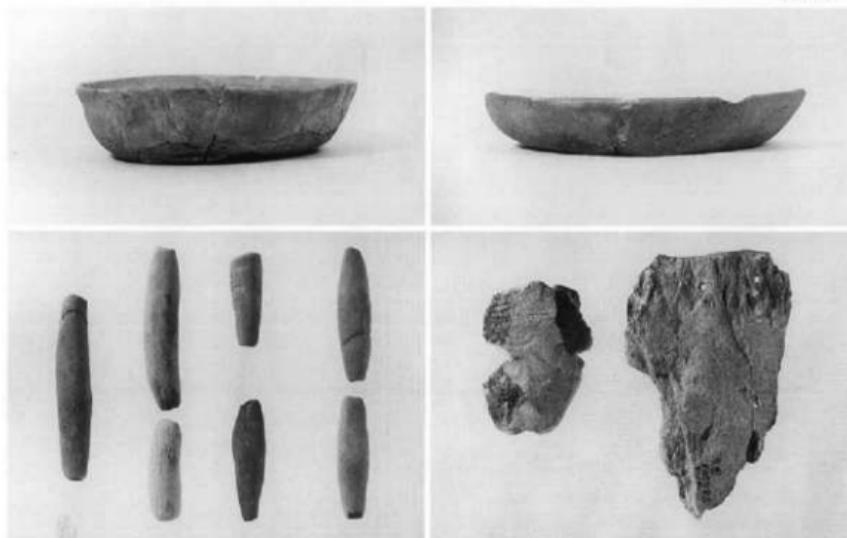




(1) 2号墳出土土器・鉄器・玉類



(2) 包含層等出土土器



(1) 包含層出土土器・土鍤・滑石製品



(2) 発掘調査現場のオールスタッフ

II 夕月遺跡の調査

1 調査の経過

夕月遺跡は、九州横断自動車道関係の第46地点（STA 267+50～268+20）として登録されていた地点で、西側の斜面地区を天園遺跡、夕月神社から延びる丘陵上を夕月遺跡と呼んでいる。

調査は、未買収地との関係で昭和63年2月と昭和63年7月の二次にわたって実施したが、三週間程度の短期間で終了した。

遺跡は、朝倉山塊の一つ米山から八手状に派生する丘陵の先端部付近の標高95～96mの尾根上に位置している。

調査の結果は、全体に削平されていることもあって遺構は希薄で、土壙4基と溝2条、他にピット多数が検出されただけである。時期は不明なものが多いが、1号溝状遺構内には列石が見られ、4号土壙からは縄文時代早期の押型文土器や石鏃が、2号土壙からは古墳時代のものと思われる土錐片などが出土している。

また、遺物としては遺構に伴わなかったものの、多数の黒曜石剣片や石鏃、スクレイバー、磨石、古墳時代後期の須恵器杯身片なども出土している。

二次にわたる調査関係者は次のとおりである。

日本道路公团福岡建設局

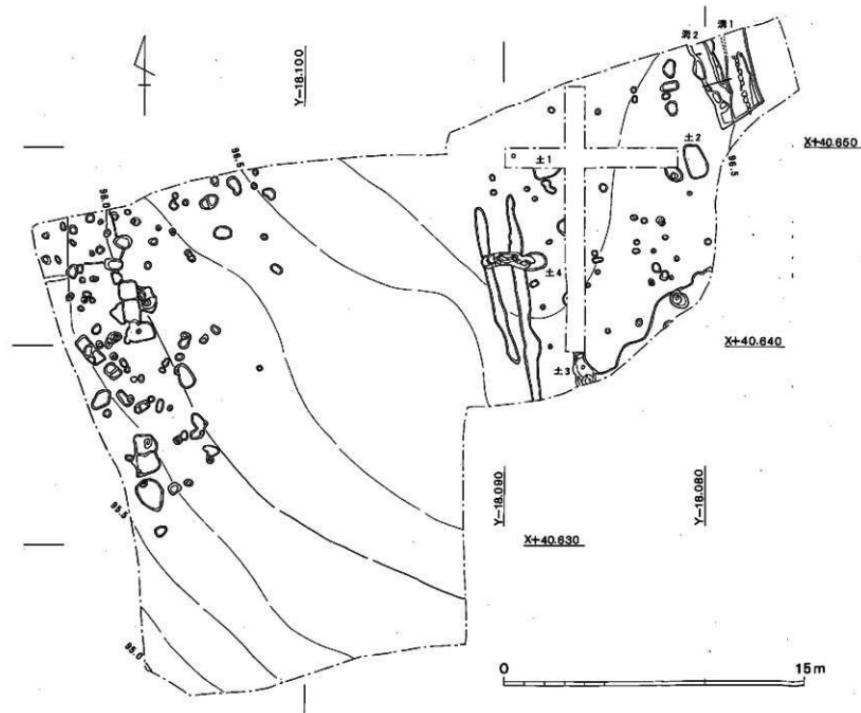
	昭和62年度	昭和63年度
局長	杉田 美昭	同
次長	吉岡 康行	同
総務部長	安元 富次	同
管理課長	森 宏之	副島 紀昭
管理課長代理	三野 徳博	同

日本道路公团甘木工事事務所

所長	風間 徹	同
副所長	西田 功	同
副所長（技術担当）	友田 義則	同
庶務課長	大河 尋光	同
用地課長	松尾 伸男	同
工務課長	豊里 栄吉	同
朝倉工事区工事長	上野 満	同
杷木工事区工事長	小沢 公共	同

福岡県教育委員会

総括	昭和62年度	昭和63年度
教育長	竹井 宏	同
教育次長	大鶴 英雄	同
指導第二部長	大平 岩男	同
文化課長	窪田 康徳	葉石 黙
文化課長補佐	平 聖峰	同
文化課長技術補佐	宮小路賀宏	同
庶務・管理		
文化課庶務係長	加藤 俊一	池原 篤二
文化課事務主査	竹内 洋征	
文化課主任主事		沢田 俊夫
調査		
文化課調査班総括	柳田 康雄	同
同 技術主査	井上 裕弘	同 (調査担当)
同 技術主査	木下 修	同
同 主任技師	中間 研志	同 (技術主査)
同 主任技師	佐々木謙彦	
同 主任技師	伊崎 俊秋	同
同 技師	小田 和利	同
同 文化財専門員	木村幾多郎	同
同 臨時職員	日高 正幸	同
同 調査補助員	高田 一弘	武田 光正 佐土原逸男 向田 雅彦
	田中 康信	
同 整理指導員	岩瀬 正信	
発掘作業員		
石橋 丸子	日野智恵子	梶原トミエ
山本チサヨ	島居アイ子	因間美枝子
青柳 美雪	日野マツ子	武藤ヒデ子
		谷口 晶子 渡辺 輝子
杷木発掘調査事務所		
山下 瑞恵		



第82図 造構配置図 (1/200)

2 遺構と遺物

遺跡全体がかなり削平されていることもあって遺構は極めて希薄であった。従って、検出された遺構は、土壙4基と溝2条、他に多数のピットだけである。時期は不明なものが多いが、4号土壙からは縄文時代早期の押型文土器や石錐が、2号土壙からは古墳時代のものと思われる土錐片などが出土している。時期は不明だが、発掘区東端から検出された1号溝状遺構内からは性格は判らないが列石が発見されている。

また、遺構には伴わないが、多数の黒曜石剥片や石錐、スクリイバー、磨石、古墳時代後期の須恵器杯身片なども出土している。

(1) 土 壙

1号土壙 (図版55、第83図) 北半部を欠失した不整楕円形プランの土壙で、現存部での規模は東西135cm、南北57cm、深さ10cmを測る。埋土からは少量の炭化物が検出されただけである。

2号土壙 (図版56、第83図) 1号土壙の東側から検出された楕円形プランの土壙で、埋土中からは少量の炭化物と黒曜石の剥片が若干と土錐片1点が出土している。規模は東西100cm、南北172cm、深さ8cmを測る。

出土遺物 (図版59、第84図)

土錐 (9) 管状土錐の小破片で、現存長12mm、径9mmを測る。

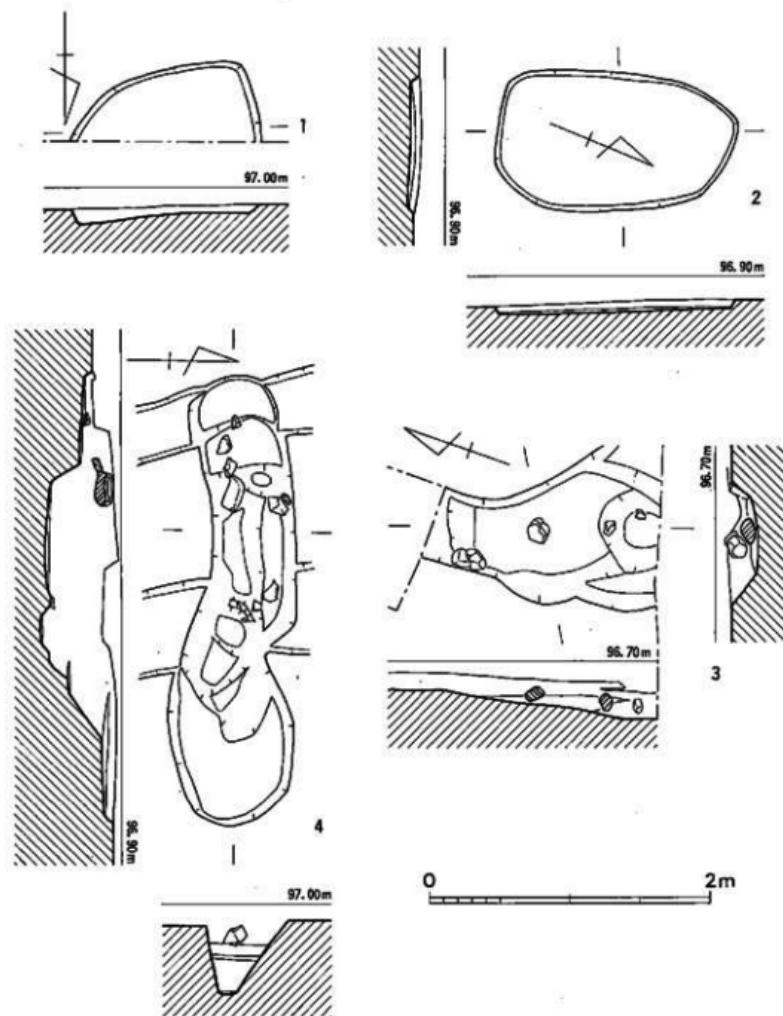
3号土壙 (図版56、第83図) 1号土壙の南側から検出された不整楕円形プランの土壙で、底面は南側に傾斜しており、南小口部は未発掘である。埋土からは他の土壙と同様に少量の炭化物と黒曜石の剥片が若干出土している。規模は東西最大部で100cm、南北現存部で167cm、深さ南端部で18cmを測る。

4号土壙 (図版57、第83図) 1号土壙の南側から検出された不整長楕円形プランの土壙で、底面は三段掘状をなし、中央部が深くなっている。埋土からは少量の炭化物、角礫などとともに少量の押型文土器片と石錐1点が出土した。規模は東西319cm、南北最大部で90cm、深さ中央部で50cmを測る。

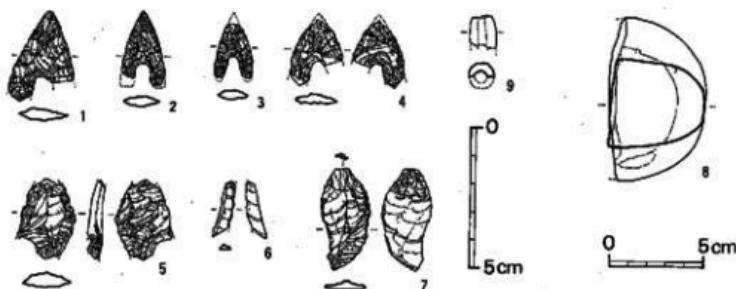
出土遺物 (図版59、第85図)

縄文土器 (1~3) いずれも楕円押型文土器である。1が長径10mm、短径5mmの楕円押型文に対し、2は大きめの楕円文である。色調は茶褐色を呈し、焼成も良好である。

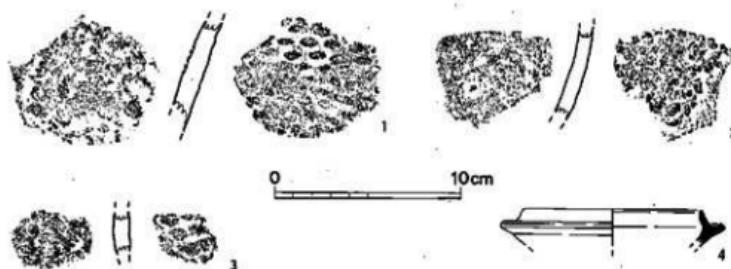
石錐 (1) 黒曜石製の凹基式の打製石錐で、現存長32.5mm、幅23.8mm、重さ2.3gを測る。



第 83 図 土 壤 実 測 図 (1/40)



第 84 図 石器・土製品実測図 (1/2・1/3)



第 85 図 繩文土器・須恵器実測図 (1/3)

(2) 溝状遺構

1号溝 (図版58, 第86図) 発掘区東端部から検出された南北に走る溝で、2号溝の一部を切って作られている。溝内からは角礫を並べた列石が検出された。溝幅は広いところで175cm、深さ約15cm、長さは確認部分で410cmを測る。埋土からは時期を決めるような遺物は何ら出土しなかった。

2号溝 (図版58, 第86図) 1号溝に切られた状態で検出された南北に走る溝で、断面は逆台形状をなしている。溝の幅は最大部で140cm、深さは35~45cm、長さは確認部分で455cmを測る。埋土からは黒曜石の剥片多数と少量の炭化物が検出されただけで、1号溝と同様に時期を決める遺物は何等出土しなかった。

(3) 包含層出土の遺物 (図版59, 第84・85図)

石器 (2~8) 2~4は打製の

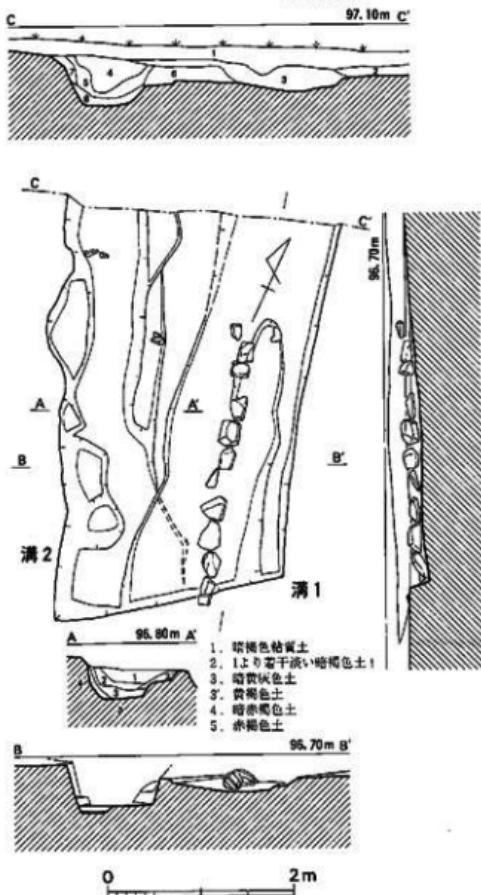
石鎚で、2がサスカイト製の他は黒曜石製である。4は縦長剣片の石鎚で、一部に自然面を残している。現存部での長さは2が26mm, 3が20mm, 4が23.5mm, 幅は2が16mm, 3が14mm, 4が20mm, 重さは2が1g, 3が0.9g, 4が1.1gを測る。

5~7は黒曜石製のスクレイバーで、6は小破片である。5~7には自然面を残している。現存部での長さは5が28.5mm, 6が20mm, 7が36.5mm, 幅は5が19mm, 7が18mmを測る。

8は磨石の半欠品で、現存部での大きさは径88mm, 厚さ45mmを測る。玄武岩製である。

須恵器 (4) 蓋受け部を有す杯身の破片資料で、復原口径は9.6cmを測る。調整は体部内外ともロクロヨコナデ仕上げである。色調は淡灰黄色を呈し、焼成も良好・堅緻である。

1. 黒褐色土 (耕作土)
2. 黄褐色土
3. 暗黄褐色土
4. 暗褐色粘質土
5. Iより若干淡い暗褐色土
6. 暗灰褐色土
7. 6に近く炭化物を含む
8. 暗赤褐色土



第86図 1・2号清状遺構実測図 (1/60)

3 ま と め

遺跡は著しい削平を受けていたためか、遺構として確認されたのは土壙4基と溝2条が検出されただけである。多数のピットも発見されてはいるものの、建物などとしてのまとまりを持たない。

しかし、遺構は検出されないが多くの黒曜石の剝片が出上していることからすれば、本来はもう少し縄文時代の遺構が存在した可能性は高いと言えるだろう。従って、天園遺跡との関わりの中でこの夕月遺跡も存在したものと思われる。

古墳時代の遺物も2点と少なくいかなる遺構が存在したかは判らないが、須恵器杯身が示す6世紀末の時期は天園遺跡に古墳が築造されていた時期でもあり、この土器が古墳との係りの中で夕月遺跡にもたらされたものと解釈するのが最も穩当であろう。



第 87 図 発掘風景

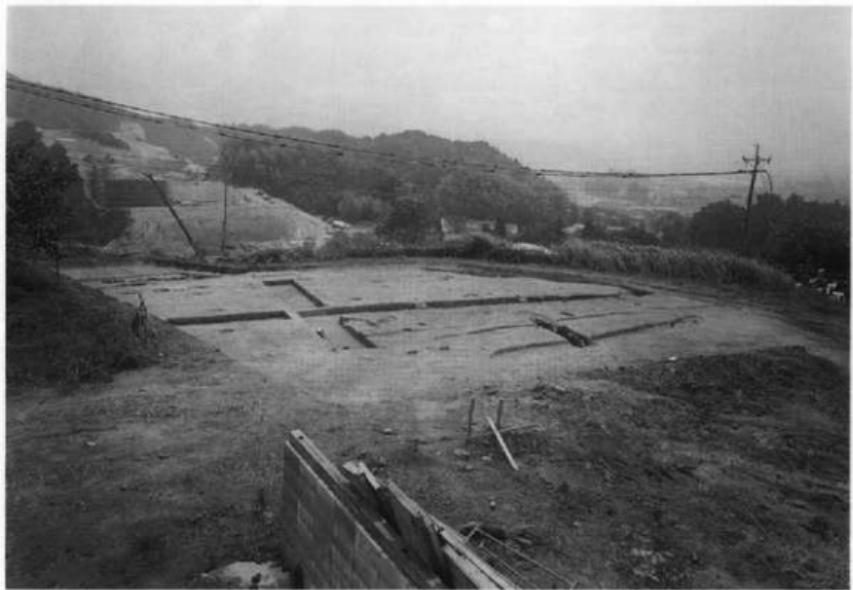
図 版



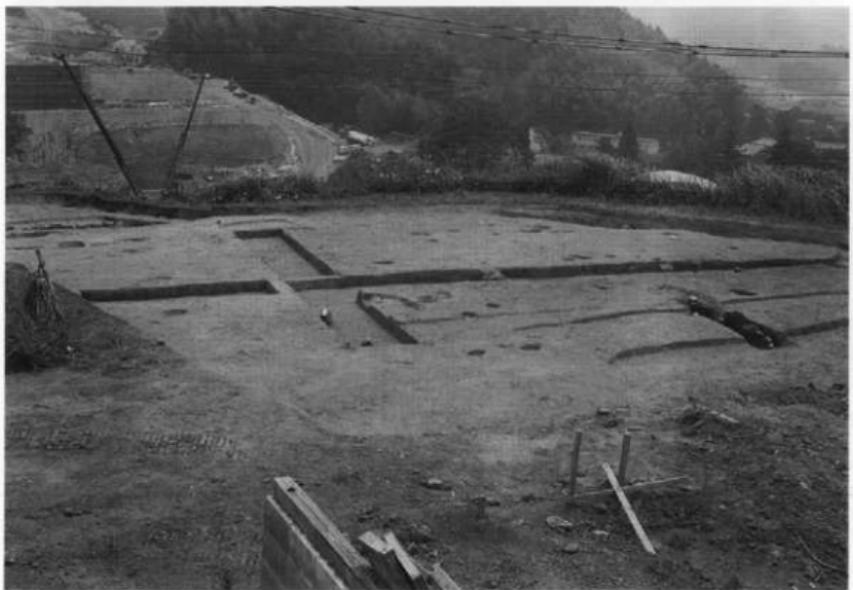
(1) 夕月遺跡・天園遺跡周辺空中写真



(2) 夕月遺跡（発掘区西半部）・天園遺跡全景空中写真



(1) 発掘区東半部全景（西から）



(2) 発掘区東半部近景（西から）



(1) 2号土壤(西から)



(2) 3号土壤(西から)



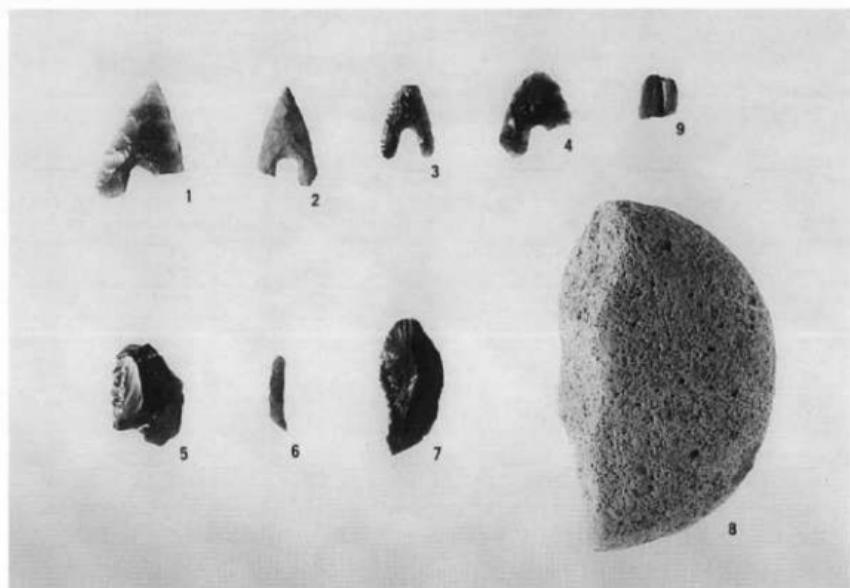
(2) 4号土壤内縄文土器出土状態



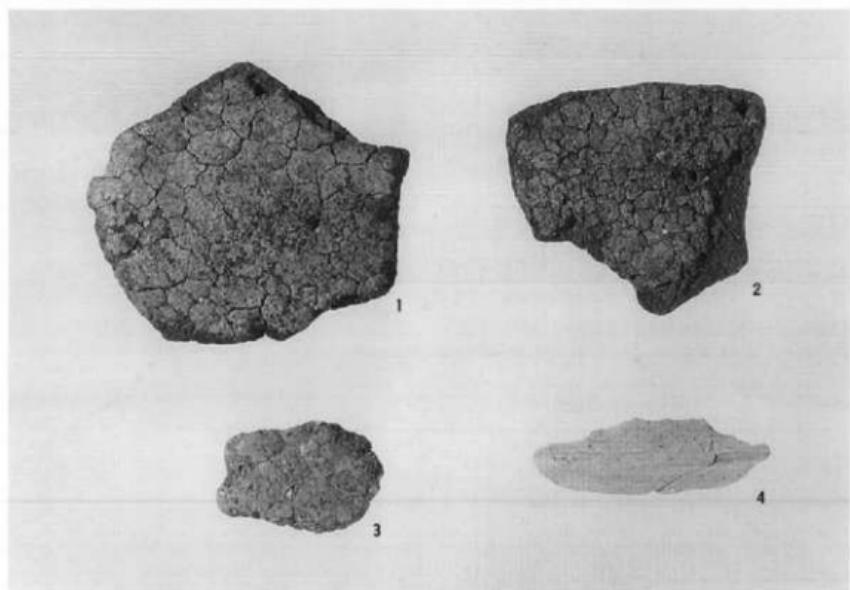
(1) 1・2号溝全景（南から）



(2) 1号溝の列石（西から）



(1) 石器・土製品



(2) 繩文土器・須恵器

III 上池田遺跡の調査

1 調査の経過

上池田遺跡は、九州横断自動車道関係の第47地点（S T A 282+20～283+40）として登録されていた地点で、杷木インターチェンジの東側に位置している。

調査は、昭和61年12月2日から開始し、厳寒期の調査となつたが、終了したのは年度末の3月9日であった。まだ、工事発注前ということもあって工事用道路もなく、調査地点への進入路の確保に苦労した調査となつた。

遺跡は、朝倉山塊の一つ米山から南に派生する尾根の裾部にあたる白木谷川右岸の標高71mの丘陵上に位置している。

調査の結果は、全体に削平されているためか遺構は希薄であったが、縄文時代晚期から弥生時代前期のものと思われる竪穴住居跡6軒をはじめ、同時期のものと思われる土壙49基、さらには中世のものと思われる土壙墓4基と墓前祭祀を行つたとも思われる竪穴遺構4基が検出された。特に、2軒と少ないものの、発見例の少ない縄文時代晚期の竪穴住居跡や貯蔵穴とも思われる土壙が多数発見されたことは大きな成果であった。



第 88 図 上池田遺跡周辺地形図 (1/1,000)

また、遺構としては検出されなかったが縄文時代早期や中期・後期の土器・石器が多数出土したことでも大きな成果といえるだろう。

なお、発掘調査にあたっては、杷木町教育委員会、町建設課並びに調査に参加された地元の方々には多大なご援助、ご協力を頂いた。記して謝意を表します。

昭和61年度の調査関係者と平成7年度の整理関係者は下記のとおりである。

日本道路公団福岡建設局

	昭和61年度	平成7年度
局長	今村 浩三（前任）	杉田 美昭
次長	菱刈 庄二	飛田 孝
総務部長	安元 富次	佐野 博志
管理課長	森 宏之	三根 敬正
管理課長代理	佐伯 豊	前田 正信

日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所

所長	乗松 紀三（前任）	風間 徹
副所長	西田 功	
副所長（技術担当）	中村 義治	
庶務課長	徳永 登	
用地課長	岩下 剛（前任）	松尾 伸男
工務課長	後藤二郎彦	
小郡工事区工事長	友田 義則	
甘木工事区工事長	猪狩 宗雄	
朝倉工事区工事長	小手川良和（前任）	上野 満
杷木工事区工事長	山中 茂（前任）	小沢 公共

福岡県教育委員会

	昭和61年度	平成7年度
総括		
教育長	友野 隆	光安 常喜
教育次長	竹井 宏	松枝 功
指導第二部長	瀬上 雄幸	丸林 茂夫
文化課長	窪田 康徳	松尾 正俊
文化課参事		柳田 康雄
文化課長補佐	平 圭峰	元永 浩士
文化課技術補佐	宮小路賀宏	
文化課参事補佐	栗原 和彦・柳田康徳	井上 裕弘・橋口 達也

木下 修・中間 研志
小池 史哲

庶務・管理

文化課庶務係長 平 勝峰（兼任） 柴田 恭郎
文化課主任主事 川村喜一郎 高田 裕康

調査

文化課調査班総括 柳田 康雄（兼任）
同 技術主査 井上 裕弘（調査担当）
同 主任技師 高橋 章（現北九州教育事務所参事補佐）
同 主任技師 中間 研志
同 主任技師 佐々木除彦（現九州歴史資料館参事補佐）
同 主任技師 小池 史哲
同 主任技師 伊崎 俊秋（現甘木歴史資料館副館長）
同 技師 小田 和利（現九州歴史資料館主任技師）
同 文化財専門員 木村幾多郎（現大分市歴史資料館長）（調査担当）
同 臨時職員 日高 正幸（現小石原村教育委員会）
同 調査補助員 高田 一弘
武田 光正（現遠賀町教育委員会）
佐土原逸男
平嶋 文博（現三輪町教育委員会）
向田 雅彦（現鳥栖市教育委員会）
田中 康信（現瀬高町教育委員会）
同 整理指導員 岩瀬 正信

発掘作業員

友納 浩 田中 静夫 高瀬 岩男 原野 昌伸 日野智恵子
石橋 丸子 梶原トミエ 梶原マツエ 足立イツエ 山本チサヨ
鳥居アイ子 因間美枝子 山本フミ子 梶原ハヤ子 青柳 美雪
日野マツ子 武藤ヒデ子 谷口 晶子 田中サツキ 野田 ミエ
井上 武雄 小川 人巳 矢野 正子 坂本ヨリ子 藤本 和子
塚本 潔子 時川千代子 河津 時枝 岩下 幸子 吉田 春子
石井 末子 伊藤千代香 佐藤扶美子 小関 初代 田中伊津子
井手 弘子 伊藤ミネヨ 秋吉 初代

実測班

高瀬セツ子 本石セツ子 中村 光恵 欠野 静子 後藤カミヨ
牟田サエ子 渡辺 輝子

杷木発掘調査事務所

山下 瑞恵

甘木発掘調査事務所（遺物整理作業員）

中塩屋リツ子 小島佐枝子 石井紀美子 藤井カオル 塩見 里美
高瀬 照美 渡辺 輝子 大野 愛里 宮田 ゆみ 西田美代子
岡 泰子 秋吉 邦子 辻 啓子 原 富子 寺山 類子
矢野賀寿子



第 89 圖 発 掘 風 景

2 位置と環境

上池田遺跡は、福岡県朝倉郡杷木町大字池田字上池田にあり、今回、発掘調査した地点は字上池田の117番地他にあたる。

遺跡は、馬見山・祇延ヶ岳といった山塊から南にのびる朝倉低山地の一つ、米山（標高890.9m）から派生した尾根の裾部にあたる白木谷川右岸の標高71mの丘陵上に形成されている。この八つ手状に延びた丘陵上には縄文・弥生・古墳時代の各時期の集落跡や墓地群などが多数分布している（第90図）。とりわけ、縄文時代の遺跡の存在は九州横断自動車道建設に伴う発掘調査で発見されたもので、杷木町内だけでも11ヶ所で確認されている。

西から志波桑ノ本遺跡、志波岡本遺跡、大谷遺跡、笠限遺跡、天園遺跡、夕月遺跡、クリナラ遺跡、上池田遺跡、畠田遺跡、楠田遺跡、小覚原遺跡、二十谷遺跡などが発見されている。時期的には早期から晩期までの遺跡があるが、特に、晩期の遺跡が集中しているのが注目される。中でも30軒を超す竪穴住居跡が検出されている笠限遺跡や二十谷遺跡の発見は、大きな成果となった。また、縄文時代晩期から弥生時代前期にわたる80数軒にも及ぶ住居跡群や、この地域では珍しい支石墓4基が検出された畠田遺跡は、特に、内陸部における稻作農耕開始期の大集落の発見として注目された遺跡である。



第90図 上池田遺跡と周辺の縄文・弥生時代遺跡分布図 (1/25,000)

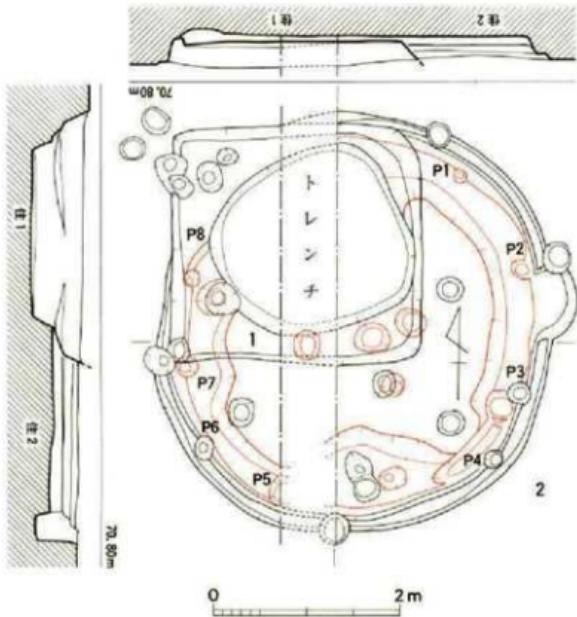
3 遺構と遺物

検出された遺構は、縄文時代後・晩期のものと思われる堅穴住居跡3軒をはじめ、縄文時代晩期と弥生時代前期のものと思われる土壙47基、弥生時代前期の堅穴住居跡2軒、中世の堅穴遺構4基と土壙墓4基、土壙3基である。遺物としては、縄文時代早期の土器・石器をはじめ、中期の土器、量的には後期・晩期の土器・石器が最も多い。遺構の依存状態からして全体的に遺跡の上面がかなり削平されているといえる。

(1) 縄文・弥生時代の遺構と遺物

1) 堅穴住居跡

1号住居跡（図版62、第91図） 発掘区中央南半にあり、2号住居跡を切った状態で検出された隅丸方形プランの小型の堅穴住居跡である。主柱穴や炉跡と思われるものは不明で、床面



第 91 図 1・2号住居跡実測図 (1/60)

もさほど叩き締められていない。規模は、長辺・短辺とも253cm、深さ18cmを測る。遺物としては、壺・壺などの弥生土器、剝片鐵片1点などである。時期は弥生時代前期末である。

出土遺物（図版87、第92図）

縄文土器（1～3） 1は小型壺の口縁部付近の小破片で、内外とも丁寧にヘラ磨きして仕上げた作りの良い土器である。2・3とも壺の口縁部付近の破片で、3の口縁端部には刻目凸帯が施されている。内外とも条痕整形である。いずれも晩期末葉のものと思われる。

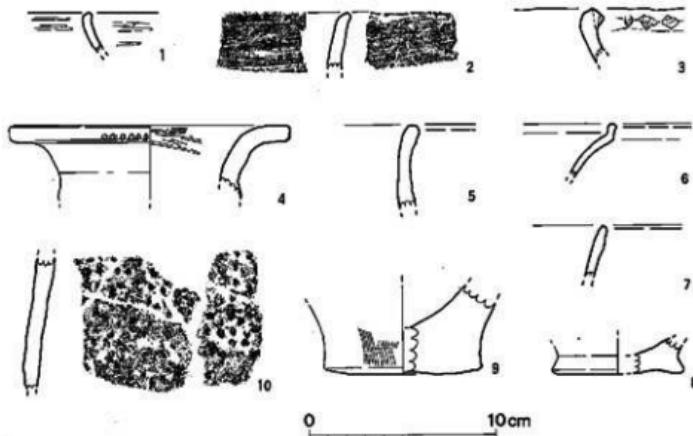
弥生土器（4・5） 4は口縁端部外面に刻目を持つ壺の口縁部付近の破片で、復原口径13.4cmを測る。口縁部内面ヘラ磨き、外面はヨコナデで仕上げている。色調は内面橙色、外面茶褐色で、焼成も良好である。5は緩やかな如意形口縁の壺の口縁部付近の小破片で、内外ともヨコナデで仕上げている。弥生前期末のものと思われる。

石器（第93図6） 先端と基部両端を欠失した黒曜石製の剝片鐵で、現存長2cmを測る。

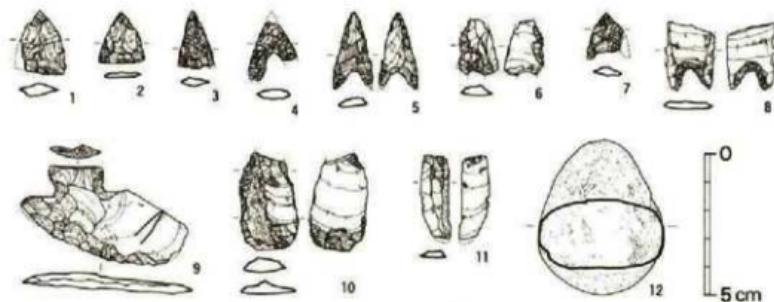
2号住居跡（図版62、第91図） 1号住居跡に切られた状態で検出された円形プランの豊穴住居跡である。主柱穴は、周壁に沿ったP1～P8で北壁側は1号住居に切られ欠失しており、炉跡の存在も不明である。床面の叩き締めはしっかりしている。規模は、長辺457cm、短辺418cm、深さ23cmを測る。埋土中からは少量の縄文土器片とサヌカイト製の石礫片、黒曜石製石核などが出土した。時期は晩期後半と思われる。

出土遺物（図版87、第92図）

縄文土器（6～8） 6は精製の浅鉢形土器の口縁部付近の小破片で、端部をつまみ出して

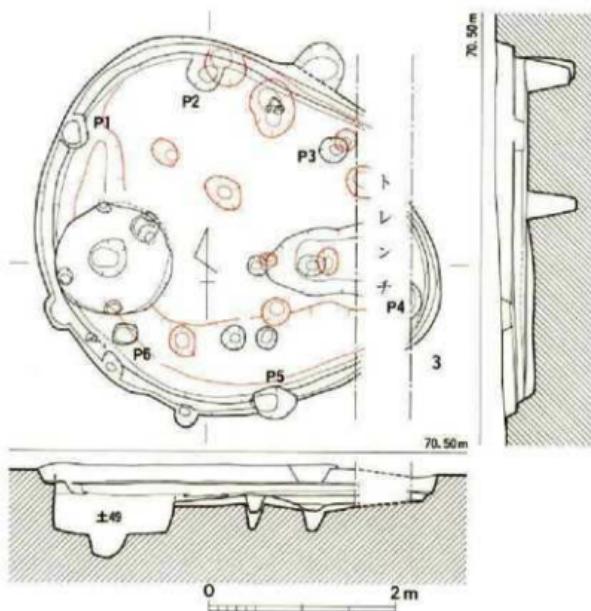


第92図 住居跡出土土器実測図1 (1/3)



第 93 図 住居跡・土壤出土石器実測図 1 (1/2)

仕上げている。7は粗製の深鉢形土器である。8は外側に強く張り出した底部の資料で、内外ともナデて仕上げている。床面直上から出土した。いずれも晩期後半頃のものと思われる。



第 94 図 3号住居跡実測図 (1/60)

弥生土器（9） 壺の底部の
破片資料で、外面刷毛、内面ナ
デて仕上げている。1号住居跡
の混入品である。

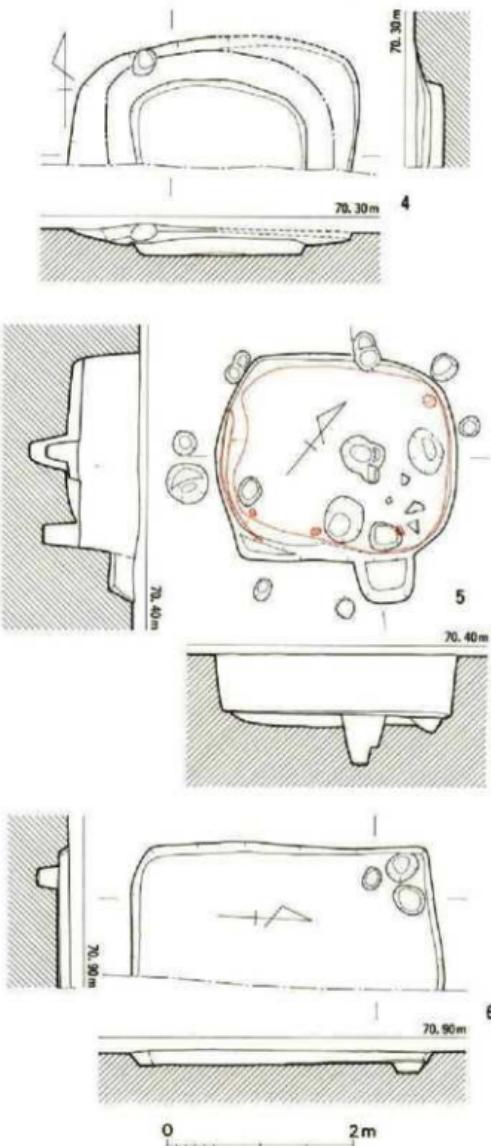
石器（第93図1・12） 1
は平基式の黒曜石製の石鏃で、
全長2.2cmを測る。12は黒曜石
の円礫の原石である。長さ
5.4cm、幅4.6cm、厚さ3.1cm、
重さ76gを測る。

**3号住居跡（図版62・63、第
94図）** 2号住居跡の南側から
検出された不整規円形プランの
竪穴住居跡で、2号住居跡と同
様、周壁に10cm前後のテラスを
設けている。主柱穴はP1-P
6で、西壁の一部は49号土壤で
切られ、欠失している。床面は
かなり叩き締められているが、
炉跡は存在しない。規模は、長
辺450cm、短辺383cm、深さは残
りの良い北壁側で34cmを測る。
埋土中からは押型文土器破片が
出土しただけである。

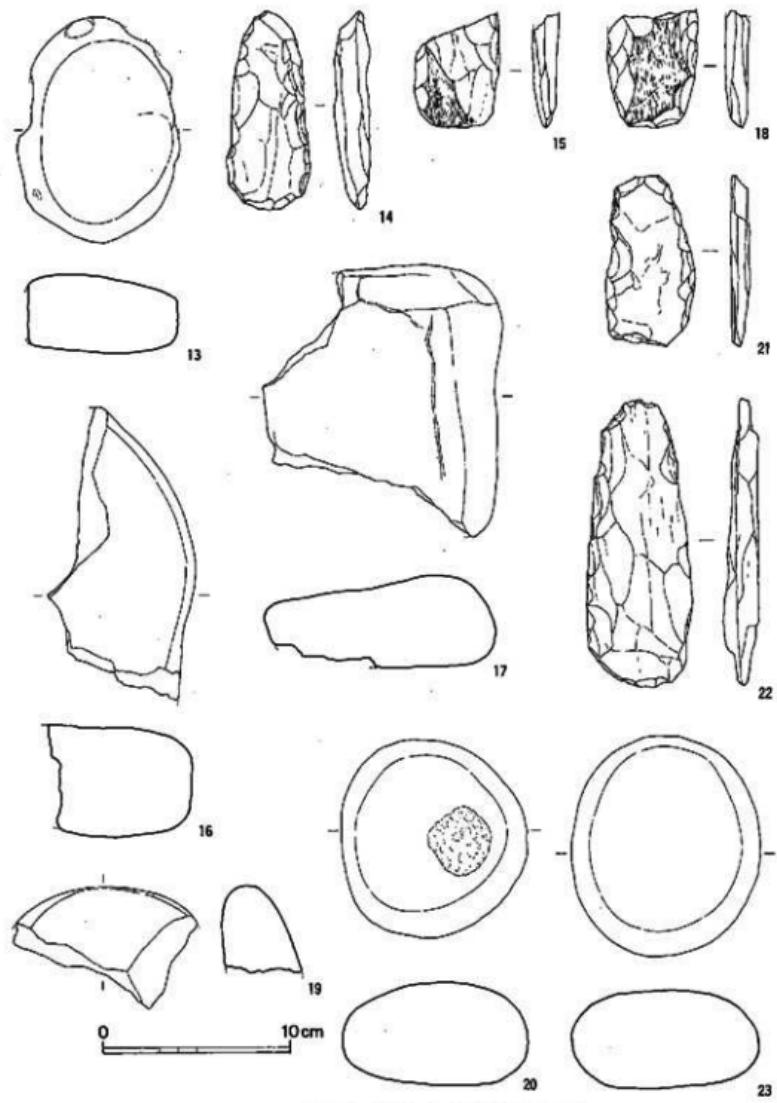
出土遺物（図版87、第92図）

縄文土器（10） 縄文早期の
楕円押型文土器の胴部破片であ
る。

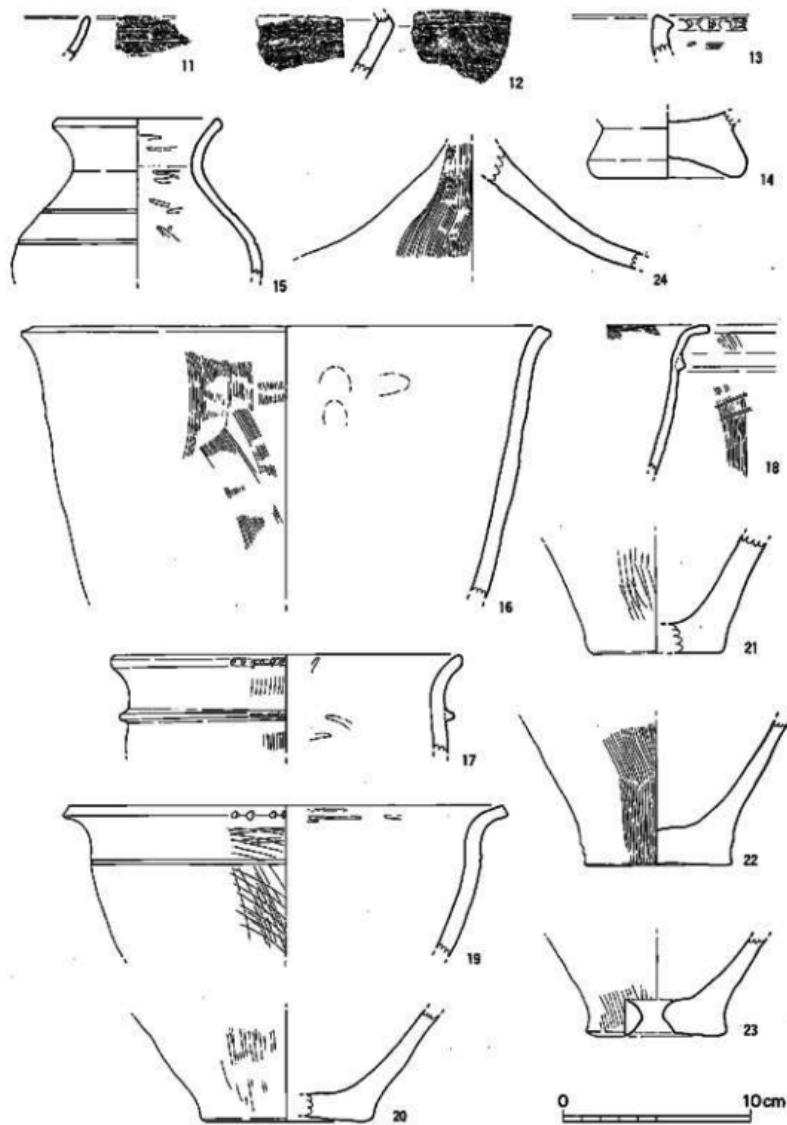
**4号住居跡（図版64、第95
図）** 3号住居跡の南西側から
検出された隅丸方形プランの竪
穴住居跡で、北壁の一部は2号
土壤で切られており、南側の大



第95図 4-6号住居跡実測図 (1/60)



第 96 図 住居跡・土壤出土石器実測図 2 (1/3)



第 97 図 住居跡出土土器実測図 2 (1/3)

半は区域外のため未掘である。2・3号住居跡と同様、周壁に22cm前後のテラスを設けている。規模は現存部で東西304cm、南北140cm、深さ北壁側で21cmを測る。柱穴・炉跡などは不明である。遺物は何等出土しなかった。

5号住居跡（図版64、第95図） 3号住居跡の西側から検出された隅丸長方形プランの小型の竪穴住居跡で、柱穴・炉跡は不明である。床面もあまり叩き締められていない。規模は長辺259cm、短辺220cm、深さ北壁で60cmを測る。埋土中からは縄文土器片数点と弥生土器破片が多数、石錐、磨石などが出土した。時期は弥生前期後半である。

出土遺物（図版87、第97図）

縄文土器（11～14） 11は浅鉢の小破片で、口縁部外面には3条の沈線がめぐり、その間に縄文を施している。1条目と2条目の間にはすり消している。12は胴部が屈折する粗製の深鉢の小破片で、整形は粗い条痕である。13は口縁端部外面に刻目凸帯を施した深鉢の小破片である。14は外側に強く張り出した上げ底の底部資料で、内外ともナデ調整している。

弥生土器（15～24） 15は肩部外面に2条の沈線を施した小型の壺で、復原口径9.2cm、胴部最大径13.5cm、残存器高8.8cmを測る。胴部外面と口頸部内面はヘラ磨き、胴部内面はナデで仕上げている。色調は茶褐色で、焼成良好である。16～19は壺の胴部上半、20～22は底部付近の資料である。16は如意形口縁、17・18は如意形口縁下に1条の三角凸帯を付したもので、17の口縁部と凸帯には刻目が施されている。18は如意形口縁下に沈線がめぐる壺で、口縁端部に刻目が施されている。調整は胴部外面刷毛で、17・19は粗い刷毛を使用し、内面は基本的にナデで仕上げているが、17・19のようにヘラ磨きしているものもある。色調は16が灰橙色、17が内面淡橙色、外面茶色、18が内面橙灰色、内面茶色、19は内面茶褐色、外面茶色である。焼成はいずれも良好である。復原口径は16が28.6cm、17が14cm、19が24cmを測る。20～22は平底の資料で、調整は外面刷毛、内面ナデで仕上げている。20と22の内面には煤の付着が見られる。底径は20が9.2cm、21が7.2cm、22が7.85cmを測る。23は壺の底部付近の資料で、底部は焼成後の穿孔である。調整は外面刷毛のあとナデ、内面ナデで仕上げている。24は傘蓋の破片資料で、調整は外面細かい刷毛、内面ナデで仕上げた作りの良い土器である。色調は茶褐色を呈し、焼成も良好である。

石器（第93図3・7） 3は平基式、7は凹基式の石錐で、黒曜石製である。3は全長2cm、7は全長1.65cm、重さは3が0.7g、7は0.55gである。

6号住居跡（図版65、第95図） 西側発掘区南半から検出された方形プランの竪穴住居跡で、東側は道路との関係で未発掘である。床面北西隅には3個のピットが存在するが、柱穴とは考えられない。床面はあまり叩き締められておらず、炉跡の存在も不明である。埋土からは少量の縄文土器小片が出土ただけで、時期は必ずしも明確ではないが縄文時代後期後半の可能性がある。規模は東西現存部で155cm、南北335cm、深さ13cmを測る。

2) 土 壤

1号土壙 (図版66, 第98図) 2号竪穴住居跡の西側から検出された不整橢円形プランの土壙である。底面は二段掘りで、北側両側面にテラスを設けているが、土層の堆積状態から見て西側テラスは古い時期のものであることが判る。規模は東西167cm, 南北226cm, 深さは南側で53cmを測る。埋土中からは弥生土器小片が数点出土しただけである。時期は前期後半から末の時期である。

出土遺物 (第99図)

弥生土器 (25~28) 25は如意形口縁の壺の小破片で、口縁端部に刻目を施している。調整は外面刷毛、内面ヘラ磨きで仕上げている。26・27は口縁端部外面に三角凸帯を貼り付けた壺の口縁部付近の小破片である。27の外面には煤の付着が見られる。調整は26・27とも胴部外面刷毛、胴部内面ナデで、口縁部内外は26が刷毛、27はヨコナデで仕上げている。28は上げ底気味の壺の底部で、復原底径8.2cmを測る。胴部外面に煤の付着が一部見られる。調整は胴部外面刷毛のあとナデ、内面と底部外面はナデている。

3号土壙 (図版67, 第98図) 3号竪穴住居跡の東側から検出された不整橢円形プランの土壙で、規模は東西266cm, 南北110cm, 深さ34cmを測る。埋土中からは縄文土器と弥生土器の小破片が若干出土しただけである。時期は弥生前期である。

出土遺物 (第99図)

縄文土器 (29) 深鉢形の凸帶文土器の胴部破片で、屈折部の外面に凸帯が付され、刻み目が施されている。内外とも条痕調整している。晩期後業の頃のものと思われる。

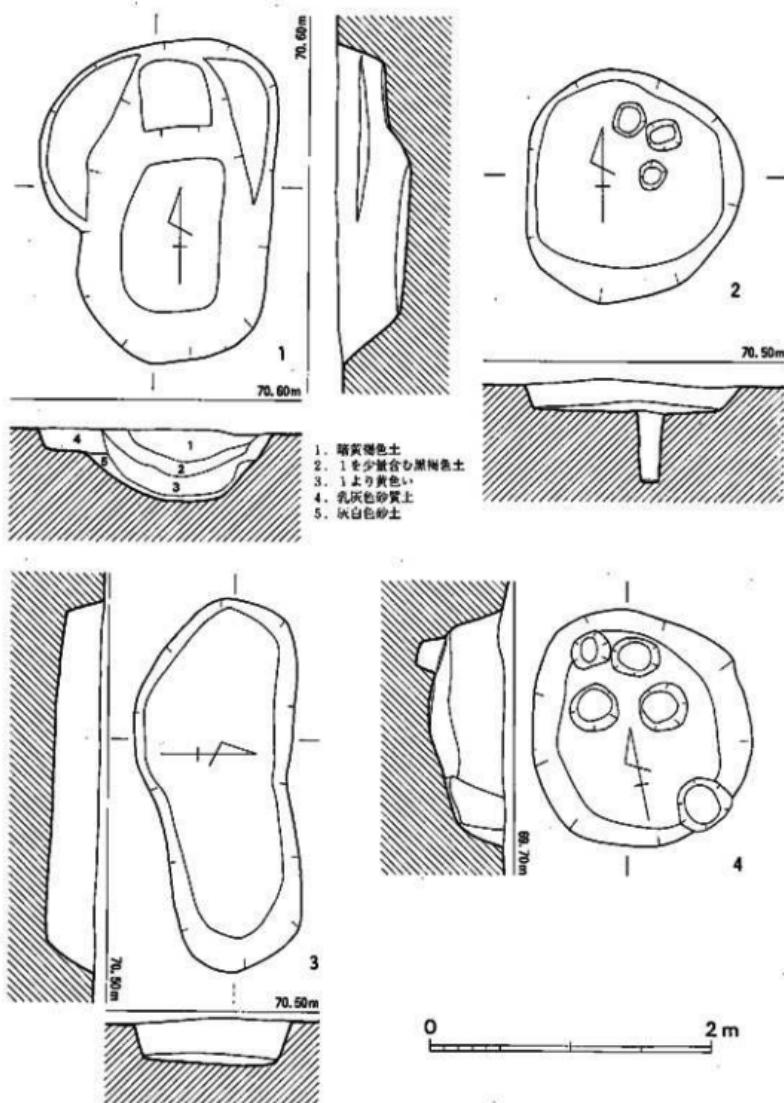
弥生土器 (30) 壺の底部破片で、復原底径8.6cmを測る。調整は胴部外面刷毛、内面ナデで仕上げている。内外の一部に煤の付着が見られる。

4号土壙 (図版67, 第98図) 3号土壙の南西から検出された不整円形プランの土壙で、底面には4個のピットが穿たれている。規模は東西155cm, 南北168cm, 深さ52cmを測る。埋土中からは何等出土しなかった。

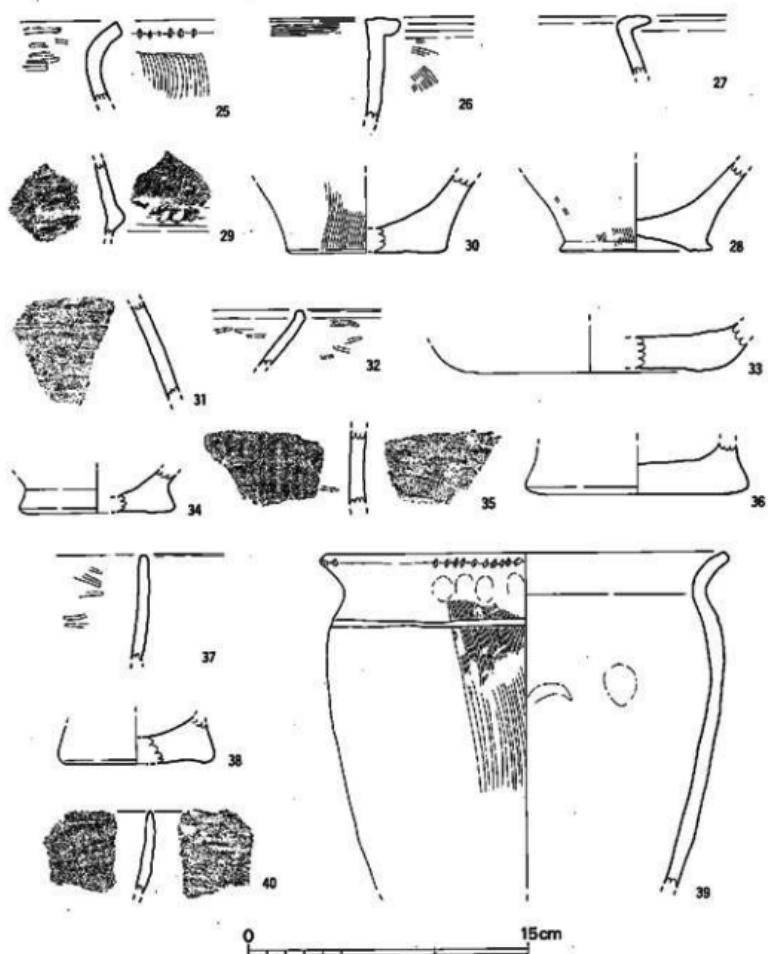
5号土壙 (図版61, 第100図) 4号土壙の北東から検出された橢円形プランの土壙で、南壁の一部はピットと重複している。規模は東西322cm, 南北246cm, 深さは14cmと浅い。埋土中からは少量の炭化物が検出されただけである。

6号土壙 (図版61, 第100図) 5号土壙の東側から検出された長方形プランの土壙で、規模は東西155cm, 南北234cmを測り、深さは18cmと浅い。埋土中からは何等出土しなかった。

7号土壙 (図版68, 第100図) 5号竪穴住居跡を切った状態で検出された長方形プランの小型の土壙で、底面は中央にピット1個が穿たれている。規模は東西74cm, 南北194cm, 深さ18cmを測る。埋土中からは少量の炭化物が出土した他は何等出土しなかった。

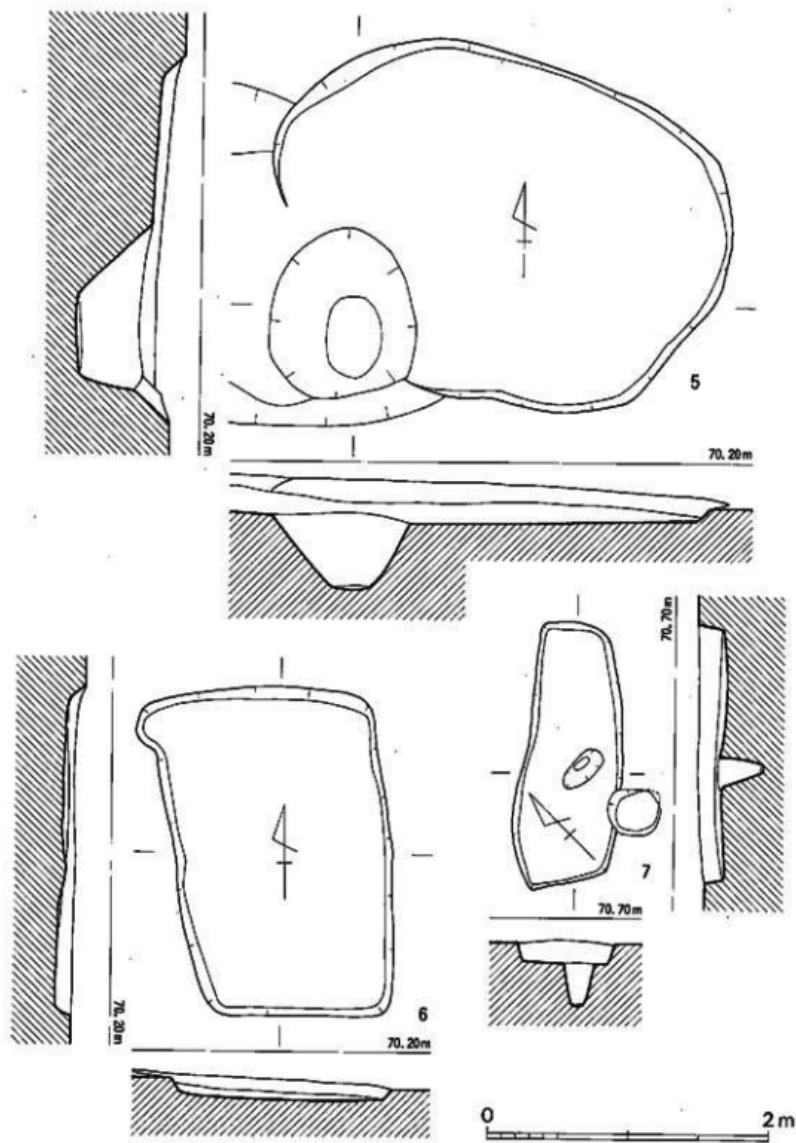


第 98 圖 1 ~ 4 号土壤実測図 (1/40)



第 99 図 土壌出土土器実測図 1 (1/3)

8号土壌(図版68、第101図) 1号竪穴住居跡の北側から検出された不整円形プランの土壌で、西側は9号土壌と切り合っている。規模は現存部で東西140cm、南北148cm、深さは



第100圖 5～7号土塚実測図 (1/40)

227cmを測る。7号土壙と同様、少量の炭化物が検出された他は何等出土しなかった。

9号土壙（図版68、第101図） 8号土壙と切り合った状態で検出された不整精円形プランの土壙で、規模は現存部で東西114cm、南北131cm、深さは30cmを測る。埋土中からは何等出土しなかった。

10号土壙（図版69、第101図） 9号土壙の北西側から検出された隅丸長方形プランの土壙で、東側小口部の両隣には小規模なテラスを設けている。底面も西から東に傾斜している。埋土中からは少量の縄文土器破片が出土している。規模は東西222cm、南北106cm、深さ44cmを測る。時期は縄文時代晚期後葉頃と思われる。

出土遺物（図版89、第99図）

縄文土器（31～34） 31は壺の胴部破片である。外面は丹塗り磨研し、内面は条痕調整している。32は精製の浅鉢の口縁部付近の小破片である。内外ともヘラ磨きした作りの良い土器である。33は大型壺の底部と思われ、復原底径14.8cmを測る。調整は内外とも条痕のあとナデで仕上げている。34は外底部が外側に張り出した平底の底部で、復原底径8.4cmを測る。内外とも条痕のあとナデで仕上げている。

11号土壙（図版69、第101図） 10号土壙の北側から検出された不整精円形プランの土壙で、底面には4個のビットが穿たれている。埋土中からは少量の炭化物と縄文土器が若干出土しただけである。規模は東西214cm、南北139cm、深さ43cmを測る。時期は縄文時代晚期と思われる。

出土遺物（図版89、第99図）

縄文土器（35・36） 35は深鉢の胴部、36は平底の底部破片である。調整は35が内外とも条痕のあと内面をヘラ磨き、36は内外ともナデで仕上げている。36の復原底径は12cmを測る。

12号土壙（図版70、第101図） 10号土壙の東側から検出された隅丸長方形プランの土壙で、西壁側は新しい溝で接されている。埋土中からは縄文土器と弥生土器破片が少量、打製石斧1点が出土した。時期は弥生時代前期後半である。

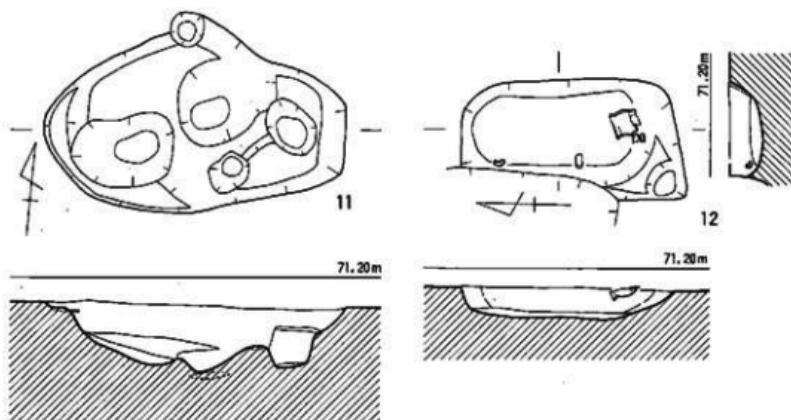
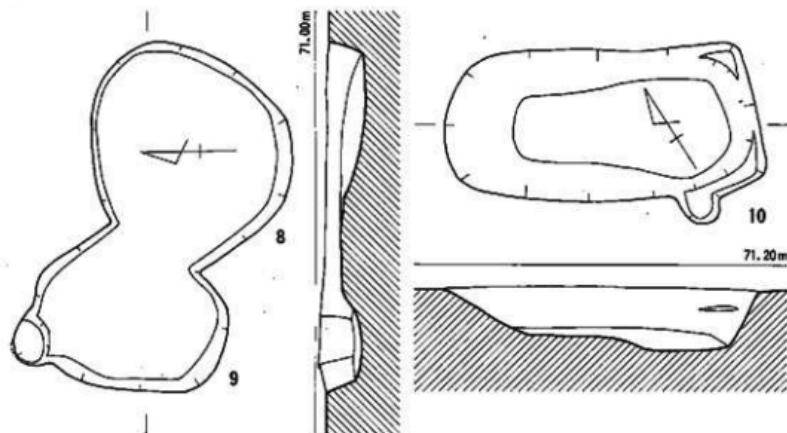
出土遺物（図版89、第99図）

縄文土器（37・38） 37は精製の鉢の口縁部付近の小破片と思われる。外面ナデ、内面ヘラ磨きで仕上げている。38は外底部が張り出す平底の底部資料で、復原底径8.4cmを測る。内外ともナデで仕上げている。

弥生土器（39） 如意形口縁の壺の胴部上半の資料で、肩部に1条の沈線が巡り、口縁端部には刻目が施されている。調整は胴部外面が刷毛、内面ナデ、口縁部内外はヨコナデしており、口縁部外面には指頭圧痕が残っている。胴部外面上半には煤の付着が見られる。復原口径22cmを測る。

石 器（第96図14） 緑泥片岩製の打製石斧で、全長10.6cm、幅4.5cm、重さ130gを測る。

13号土壙（図版61、第102図） 11号土壙の北西側から検出された土壙で、西側は未掘のた



0 2 m

第 101 圖 8 - 12 号 土 墓 実 測 図 (1/40)

め明確ではないが楕円形プランを呈すものと思われる。現存部での規模は、東西81cm、南北175cm、深さ26cmを測る。埋土からは何等出土していない。

15号土壙（図版70、第102図） 12号土壙の北側から検出された楕円形プランの小型の土壙で、中央部は新しい溝で切られている。規模は東西88cm、南北99cm、深さ41cmを測る。埋土中からは縄文土器小片が若干と磨石1点が出土しただけである。

出土遺物（図版89、第99図）

縄文土器（40） 粗製深鉢の口縁部付近の小破片で、内外とも粗い条痕調整している。

石器（第96図16） 磨石の半欠品で、上下両面を使用している。玄武岩製と思われる。

17号土壙（図版61、第102図） 発掘区北西部から検出された小型の不整方形プランの土壙で、底面には2個のピットが穿たれている。埋土中には少量の炭化物が含まれていたものの遺物は何等出土しなかった。規模は東西89cm、南北96cm、深さ32cmを測る。

18号土壙（図版71、第103図） 6号土壙の南側から検出された不整楕円形プランの土壙で、底面は二段掘り状をなし、壁面は一部袋状を呈している。埋土中からは床面より浮いた状態で弥生土器が数点と磨石1点が出土した。時期は弥生時代前期後葉である。

出土遺物（図版90、第104図）

縄文土器（41） 精製の浅鉢形土器で、内外ともヘラ磨きで仕上げている作りの良い縄文晩期の土器である。

弥生土器（42・43） 42は肩部に肩折稜を有し、球形の胴部にしっかりとした平底の底部が付く壺である。胴部最大径24.1cm、底径8.6cmを測る。調整は胴部下半をヘラ削り状のナデで、他は内外ともヘラ磨きで仕上げている。43は如意形口縁の壺の破片資料で、口縁端部には刻目を施し、口縁下には1条の沈線が巡っている。調整は外面刷毛、ナデのあとヘラ磨きしている。

石器（第96図17） 扇平な磨石の破片で上下両面を使用している。

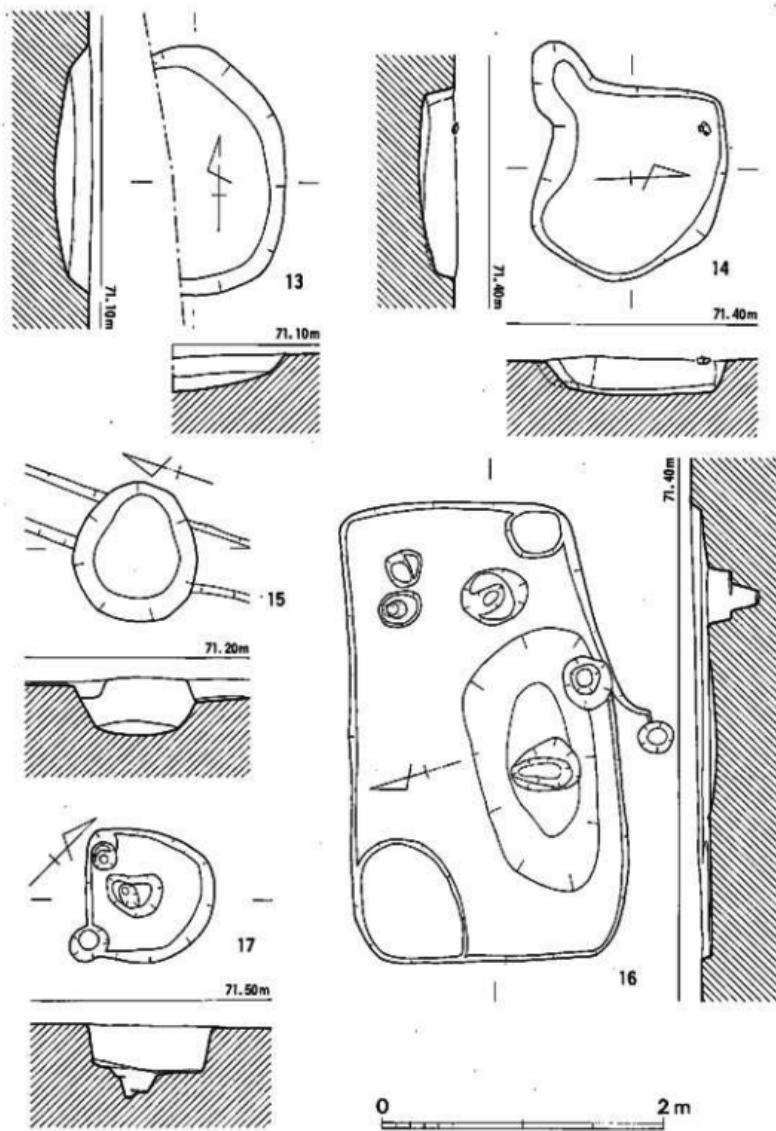
19号土壙（図版71、第103図） 17号土壙の東側から検出された円形プランの小型土壙で、断面は緩やかな袋状をなす。埋土中からは少量の炭化物と少量の縄文土器・弥生土器破片が出土した。時期は弥生時代前期後葉である。

出土遺物（図版89・90、第104図）

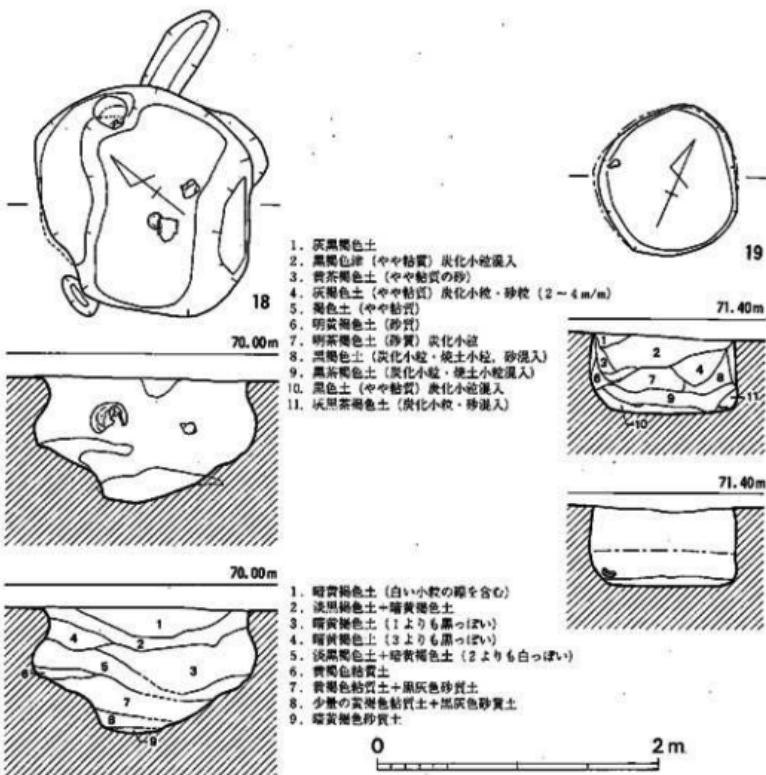
縄文土器（44～49） 44は精製の深鉢の口縁部破片で、調整は外面条痕のあとナデ、内面はナデで仕上げている。45～48は粗製の深鉢形土器の口縁部付近の小破片で、46～48は口縁部外側に刻目凸帯を付している。調整はいずれも条痕調整の後ナデで仕上げている。49は外底部が張り出した上げ底気味の底部である。

弥生土器（50） 肩部に1条の沈線が巡る壺の胴部破片である。調整は内外ともヘラ磨きで仕上げた作りの良い土器である。色調は暗茶褐色を呈し、焼成も良好である。

石器（第93図9） 基部先端を欠失したサヌカイト製の石匙で、刃部長3.5cmを測る。



第 102 図 13 ~ 17 号 土 壤 実 测 図 (1/40)

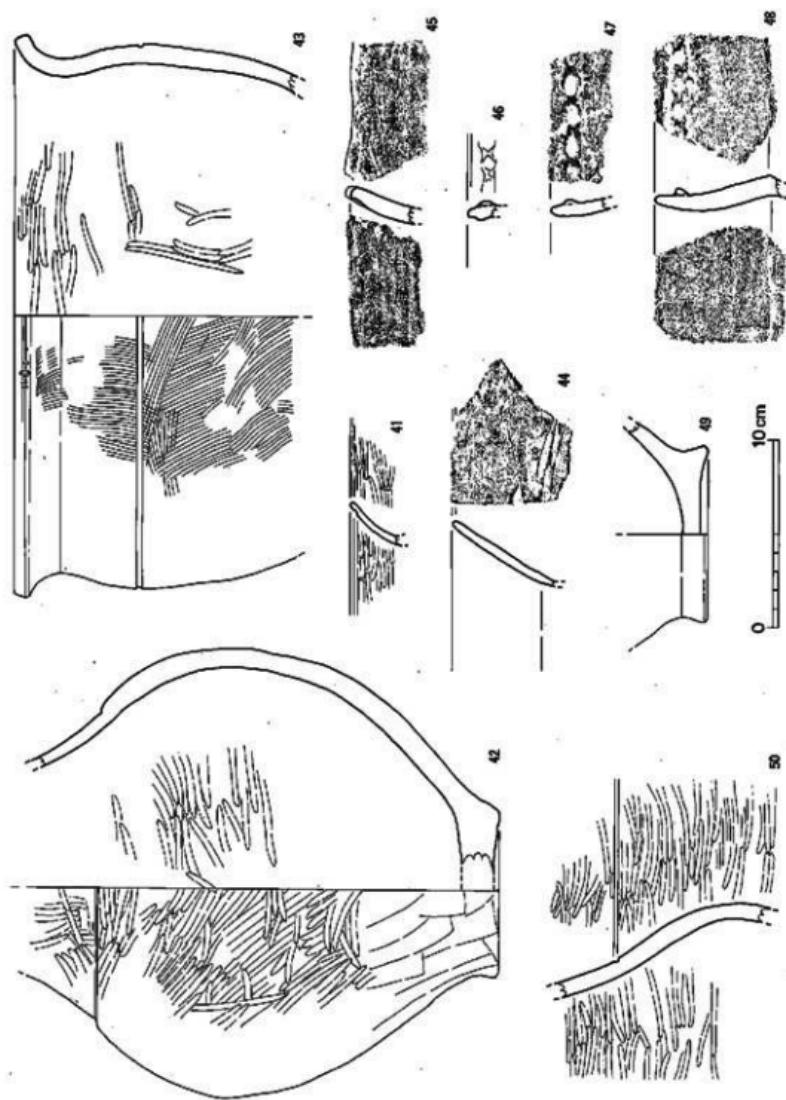


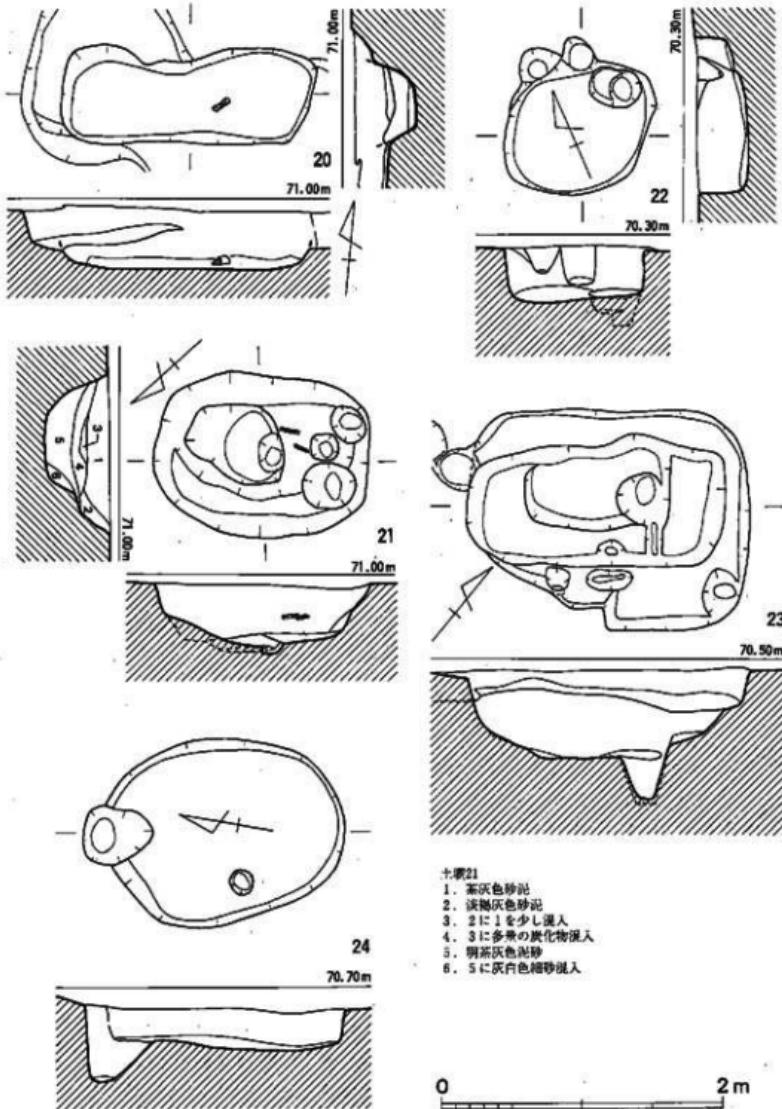
第103図 18・19号土壤実測図(1/40)

20号土壤 (図版61, 第105図) 8号土壤に切られた状態で検出された不整長方形プランの土壤で、埋土中からは少量の炭化物が検出されたものの、遺物は何等出土しなかった。規模は東西178cm, 南北69cm, 深さ43cmを測る。

21号土壤 (図版72, 第105図) 1号竪穴住居跡の北側から検出された橢円形プランの土壤で、北壁側には狭いテラスを設けて、底面には3個のピットが穿たれている。規模は東西116cm, 南北154cm, 深さ42cmを測る。埋土中からは少量の炭化物とともに縄文土器破片が少量と打製石斧片1点が出土した。時期は晩期後葉である。

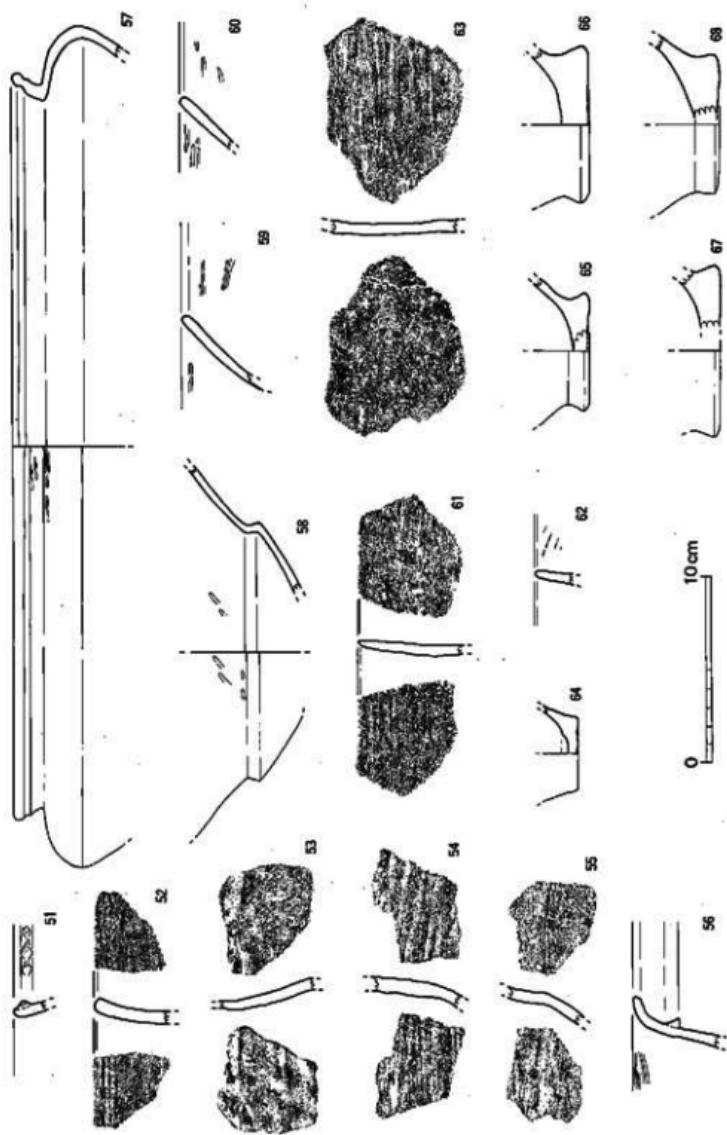
第104圖 土壞出土土器實測圖 2 (1/3)





第 105 図 20~24 号 土 壤 実 測 図 (1/40)

第 106 圖 土壞出土器實測圖 3 (1/3)



出土遺物（図版90、第106図）

縄文土器（51～54） いずれも粗製の深鉢形土器の小破片資料で、51の口縁部外面には刻目凸帯が付されている。調整手法は内外とも条痕調整で、53はさらにナデで仕上げている。

石器（第96図18） 打製石斧の破片で、片面を局部磨製している。緑泥片岩製である。

22号土壙（図版72、第105図） 3号土壙の南側から検出された梢円形プランの小型土壙で、底面には1個のビットが穿たれている。埋土中からは少量の炭化物が検出されたが、遺物は何等出土しなかった。規模は東西95cm、南北99cm、深さ38cmを測る。

23号土壙（図版73、第105図） 2号整穴住居跡の南側から検出された不整長方形プランの土壙で、階段状のテラスを設け、底面には1個のビットが穿たれている。規模は東西154cm、南北201cm、深さ61cmを測る。埋土中からは縄文土器と弥生土器小片が数点、石鐵片1点が出土した。時期は弥生時代前期である。

出土遺物（図版90、第106図）

縄文土器（55） 粗製の深鉢形土器の小破片で、条痕調整のあと外面はナデで仕上げている。

弥生土器（56） 如意形口縁下に1条の三角凸帯が巡る甕の小破片である。外面には煤の付着が見られる。調整は口唇部内面刷毛、下半はナデ、外面はヨコナデで仕上げている。

石器（第93図4） 先端と基部の一部を欠失した黒曜石製の凹基式の石鐵である。

24号土壙（図版73、第105図） 1号整穴住居跡の東側から検出された不整梢円形プランの土壙で、埋土中からは少量の炭化物が検出された他は何等出土しなかった。規模は東西135cm、南北186cm、深さ28cmを測る。

25号土壙（図版61、第107図） 24号土壙の東側から検出された不整梢円形プランの土壙で、北壁側にはテラスを設けている。埋土からは遺物などは何等出土しなかった。規模は東西124cm、南北148cm、深さ34cmを測る。

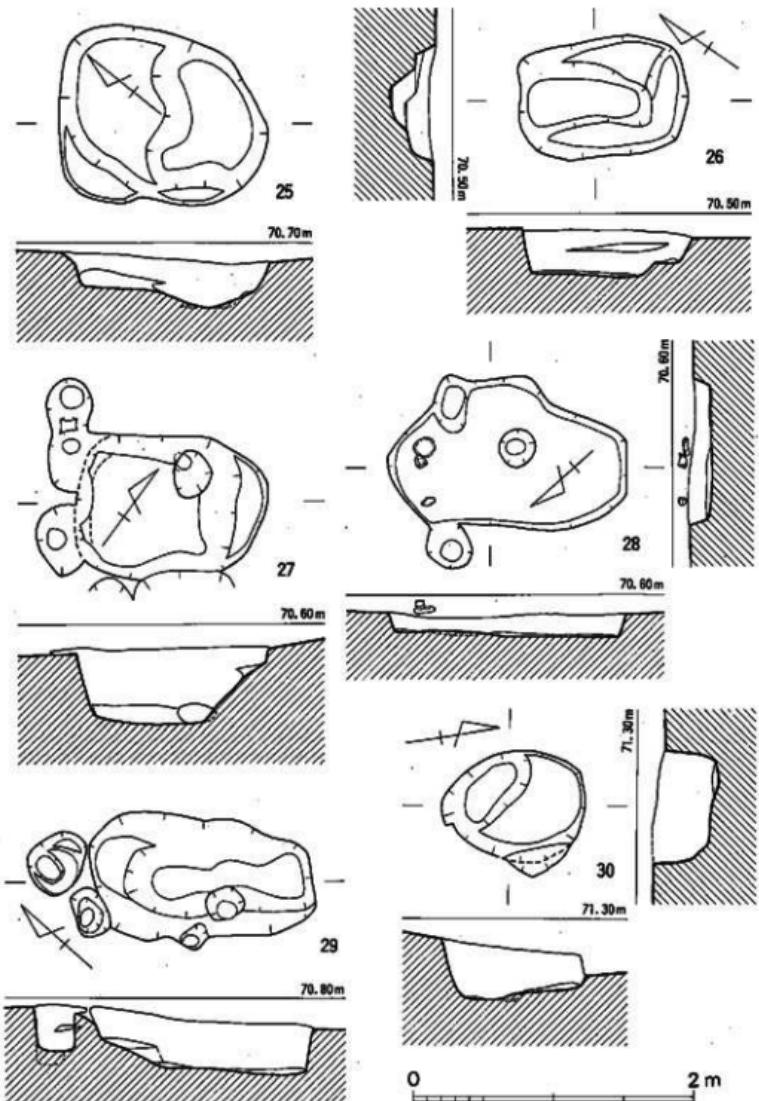
26号土壙（図版74、第107図） 23号土壙の東側にあり27号土壙を切った状態で検出された。西壁を除く三壁側にテラスが設けられた隅丸長方形プランの土壙で、埋土からは少量の炭化物が検出されたものの遺物などは何等出土していない。規模は東西83cm、南北120cm、深さ32cmを測る。

27号土壙（図版61、第107図） 南壁を26号土壙に、西壁側をビットで壊された梢円形プランの土壙で、東壁側にテラスを設けている。埋土中からは磨石片1点が出土している。規模は現存部で東西136cm、南北101cm、深さ54cmを測る。

出土遺物（図版98、第93図）

石器（第96図19） 磨石の破片で、上下両面を使用している。

28号土壙（図版74、第107図） 5号整穴住居跡の北側から検出された不整梢円形プランの土壙で、底面中央にはビットが穿たれている。規模は東西168cm、南北106cm、深さ15cmを測る。



第 107 図 25~30 号 土 壤 灰 测 圖 (1/40)

29号土壤 (図版75, 第107図) 28号土壤の北側から検出された不整椭円形プランの土壤で、西壁側にテラスを設けている。埋土には炭化物が少量含まれていたものの遺物などは何等出土しなかった。規模は155cm, 南北91cm, 深さ35cmを測る。

30号土壤 (図版75, 第107図) 19号土壤の北側から検出された椭円形プランの小型の土壤で、北壁側にテラスを設けている。埋土からは多數の縄文土器破片が出土した。規模は東西81cm, 南北105cm, 深さ45cmを測る。時期は縄文時代晚期後葉である。

出土遺物 (図版90, 第106図)

縄文土器 (58~66) 57~60は精製の浅鉢形土器である。57は扁球形の胴部に強く外反する短い口部が付く大型の浅鉢で、復原口径40cmを測る。58~60は大きく外反する浅鉢のタイプである。調整はいずれもヘラ磨きで仕上げた作りの良い土器である。61~63は粗製の深鉢形土器で、内外とも条痕調整で仕上げている。64は小型の鉢の底部と思われる。内外ともナデ仕上げである。65・66は外底部が張り出した平底の資料である。復原底径は65が6.4cm, 66が8.4cmを測る。調整は内外ともナデ仕上げである。

31号土壤 (図版76, 第108図) 発掘区南西部から検出された椭円形プランの土壤で、規模は東西86cm, 南北101cm, 深さ66cmを測る。埋土からは少量の縄文土器破片と石錐1点が出土しただけである。時期は縄文時代晚期である。

出土遺物 (図版90, 第106図)

縄文土器 (67・68) 外底部が張り出すタイプの平底の資料で、復原底径は67が7.4cm, 68が9.2cmを測る。調整はいずれもナデ仕上げで、67の内面には炭化物が付着している。

石 器 (第93図 5・10・11) 5は黒曜石製の凹基式の石鋸、サヌカイト製のスクレイパー、11は石刃である。5は全長2.7cm, 10は現存長3.5cm, 11は3cmを測る。

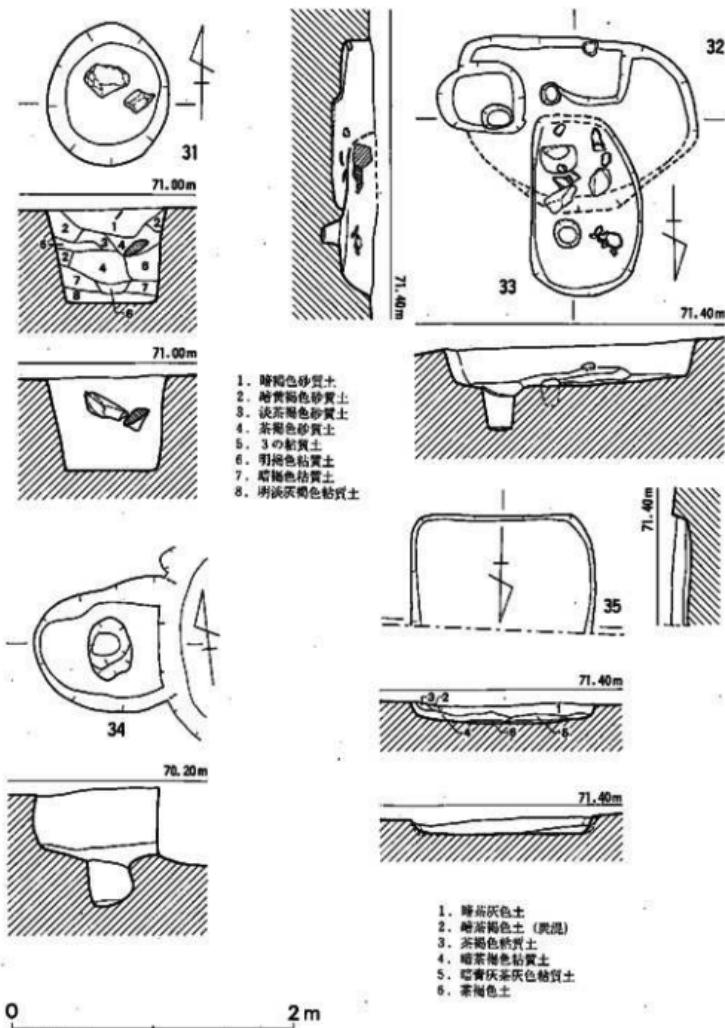
32号土壤 (図版76, 第108図) 31号土壤の北西側から検出された不整椭円形プランの土壤で、北壁側は33号土壤で切られており、南壁側にはテラスを設けている。埋土中からは縄文土器破片が少量と磨石1点が出土した。規模は現存部で東西163cm, 南北122cm, 深さ30cmを測る。時期は縄文時代晚期後葉と思われる。

出土遺物 (図版91, 第109図)

縄文土器 (69~73) 69は浅鉢、70は鉢でいずれも精製の土器である。調整はナデ仕上げで70の内面一部はヘラ磨きをしている。71~73は粗製の深鉢形土器で、調整は条痕調整である。

石 器 (第96図20) 玄武岩製の磨石で、上下両面を使用している。上面には蔽き痕が見られる。長径10.6cm, 短径9.9cm, 厚さ5.5cmを測る。

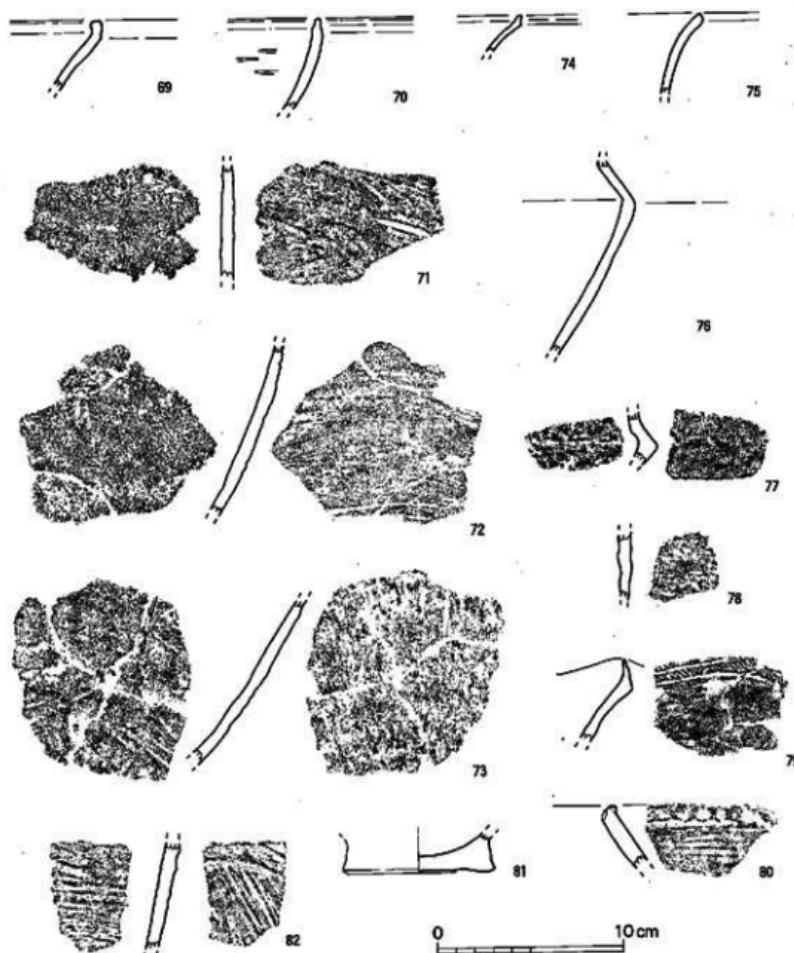
33号土壤 (図版77, 第108図) 32号土壤に切られた状態で検出された不整長方形プランの土壤で、埋土からは少量の炭化物や礫が数個、縄文土器小片が若干出土しただけである。規模は東西79cm, 南北現存部で129cm, 深さ25cmを測る。



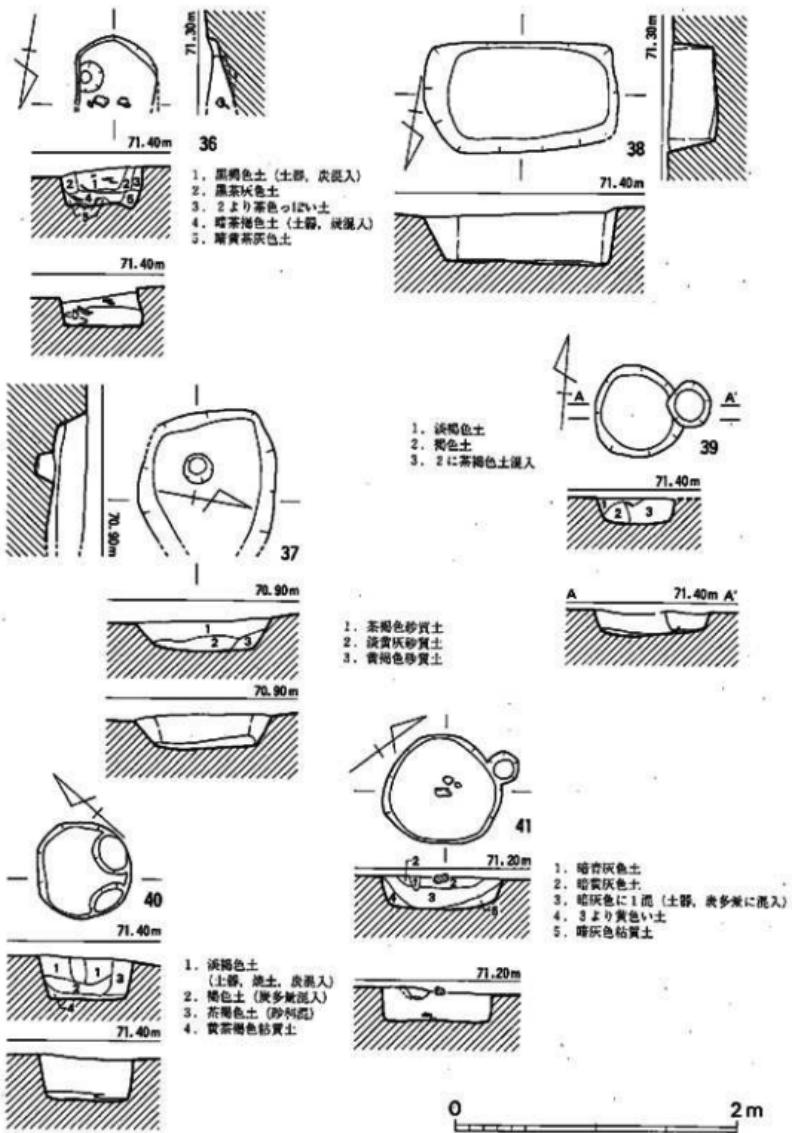
第 108 図 31~35 号 土 壤 実 測 図 (1/40)

出土遺物 (図版91、第109図)

縄文土器 (74・75) いずれも精製の浅鉢形土器の小破片で、内外ともナテ調整で仕上げて
いる。



第109図 土器出土土器実測図4 (1/3)



第 110 図 36-41 号 土 壤 実 測 図 (1/40)

34号土壙 (図版61, 第108図) 4号土壙に東壁側を切られた状態で検出された梢円形プランの土壙で、床面中央にはピット1個が穿たれている。埋土からは遺物などは何等出土しなかった。規模は現存部で東西88cm, 南北96cm, 深さ50cmを測る。

35号土壙 (図版61, 第108図) 33号土壙の北側から検出された方形プランの土壙で、北壁側は新しい擾乱で壊されている。埋土からは少量の炭化物が検出されたものの、遺物は何等出土しなかった。規模は東西132cm, 南北96cm, 深さ11cmを測る。

36号土壙 (図版77, 第110図) 35号土壙の北側から検出され、北壁側は38号土壙に切られて欠失している。埋土からは少量の炭化物と縄文土器破片が若干出土した。規模は現存部で東西56cm, 南北50cm, 深さ25cmを測る。時期は縄文晩期である。

出土遺物 (図版91, 第109図)

縄文土器 (76) 粗製の深鉢形土器の胴部破片である。調整は風化が著しく不明である。

37号土壙 (図版78, 第110図) 31号土壙の南東側から検出された不整長方形プランの土壙で、東壁は未発掘である。埋土には少量の炭化物が含まれているものの、遺物は何等出土していない。規模は現存部で東西100cm, 南北97cm, 深さ23cmを測る。

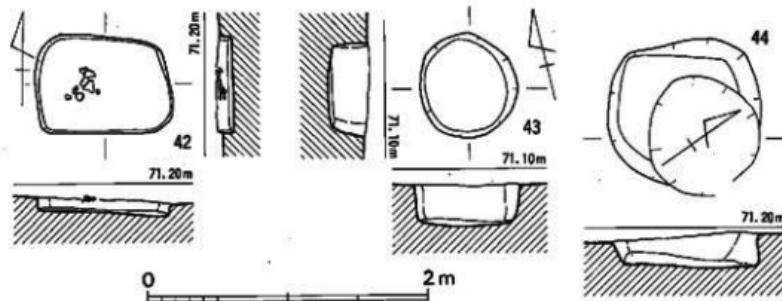
38号土壙 (図版78, 第110図) 36号土壙を切った状態で検出された長方形プランの土壙で、規模は東西138cm, 南北77cm, 深さ35cmを測る。埋土から遺物は何等出土していない。

39号土壙 (図版61, 第110図) 33号土壙の西側から検出された円形プランの小型の土壙である。埋土には少量の炭化物が含まれるとともに、石錐1点が出土している。規模は東西61cm, 南北64cm, 深さ17cmを測る。

出土遺物 (図版98, 第93図)

石 器 (第93図2) サヌカイト製の平基式の石錐で、全長1.7cm, 重さ0.65gを測る。

40号土壙 (図版79, 第110図) 32号土壙の南側から検出された不整円形プランの小型の土



第111図 42~44号土壙実測図 (1/40)

壇で、底面には東壁側に2個のピットが穿たれている。埋土には少量の炭化物が含まれていた他は遺物などは出土しなかった。規模は東西・南北とも67cm、深さ31cmである。

41号土壙 (図版79、第110図) 35号土壙の東側から検出された不整円形プランの土壙で、44号土壙を切って造られている。埋土にはかなりの炭化物が含まれており、縄文土器が少量と石器1点が出土している。規模は東西78cm、南北85cm、深さ24cmを測る。

出土遺物 (図版91、第109図)

縄文土器 (77・78) 77・78とも粗製の深鉢形土器で、調整は内外とも条痕調整である。

石 器 (第93図8) 黒曜石製の剥片鐵の先端部を欠く資料で、現存長24mm、幅16mmを測る。

42号土壙 (図版80、第111図) 41号土壙の東側から検出された隅丸長方形プランの土壙で、埋土からは底面より若干浮いた状態で少量の縄文土器破片が出土した。規模は東西96cm、南北71cm、深さ10cmを測る。時期は縄文時代晩期後半と思われる。

出土遺物 (図版91、第109図)

縄文土器 (79・80) 79は精製の深鉢形土器で、口縁部は波状をなし、外面には2条の沈線が巡り、その間は縄文を施している。いわゆる西平式系の土器である。80は粗製の深鉢形土器で、口縁端部には刻目凸帯が付されている。調整は79が内外ともナデ、80は条痕調整である。

43号土壙 (図版61、第111図) 42号土壙の南東側から検出された不整円形プランの土壙で、埋土からは遺物は何等出土しなかった。規模は東西68cm、南北75cm、深さ28cmを測る。

44号土壙 (図版61、第111図) 41号土壙に切られた状態で検出された腰張り方形プランの土壙で、東壁側の大半は欠失している。埋土中には少量の炭化物が含まれていたものの、遺物は何等出土しなかった。規模は現存部で東西105cm、南北108cm、深さ24cmを測る。

45号土壙 (図版80、第112図) 25号土壙の北側から検出された梢円形プランの残りの良い土壙で、断面は緩やかな袋状をなしている。埋土からは縄文土器片が若干と打製石斧1点が出土した。規模は上面で東西123cm、南北146cm、深さ130cmを測る。

出土遺物 (図版91、第109図)

縄文土器 (81) 外底部が張り出すタイプの平底の資料で、底径8.2cmを測る。

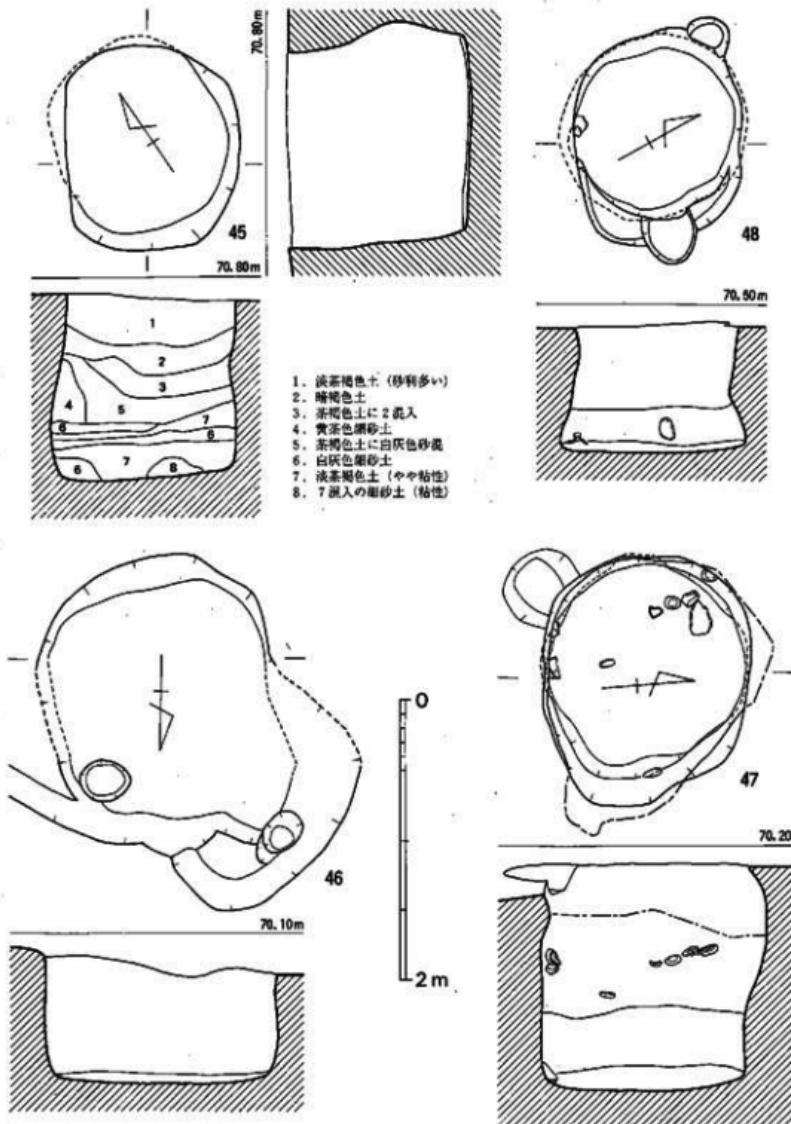
石 器 (第96図21) 刃部を欠失した片岩製の打製石斧で、現存長9.1cm、幅4.8cm、厚さ1cmを測る。

46号土壙 (図版81、第112図) 5号土壙の西側から検出された不整梢円形プランの土壙で、断面は45号土壙と同様、緩やかな袋状をなしている。埋土からは若干の縄文土器片が出土しただけである。規模は東西165cm、南北210cm、深さ90cmを測る。

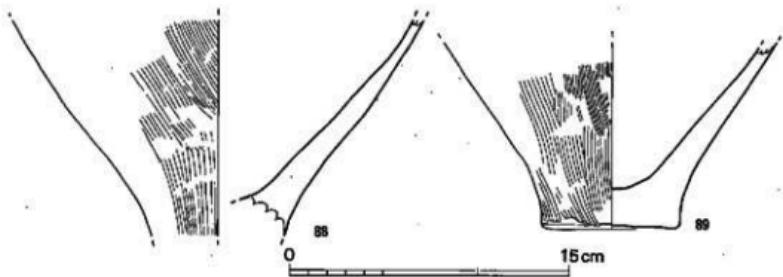
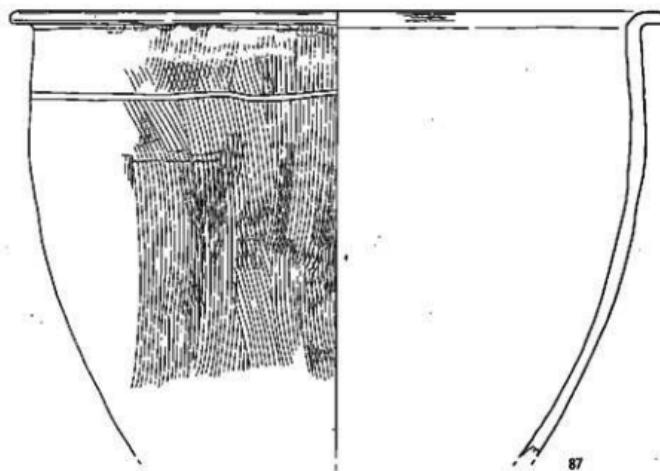
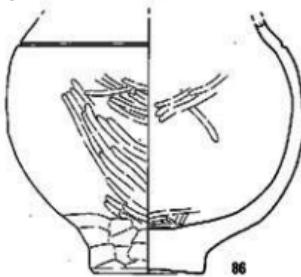
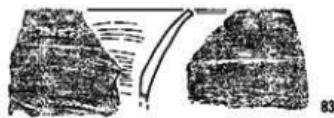
出土遺物 (図版91、第109図)

縄文土器 (82) 粗製の深鉢形土器の小破片で、内外とも粗い条痕調整で仕上げている。

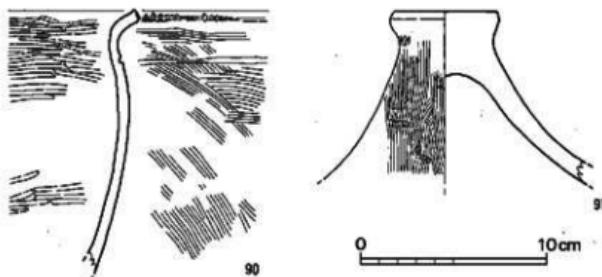
47号土壙 (図版81、第112図) 46号土壙の南から検出された梢円形プランの残りの良い土



第 112 図 45-48 号 土 壤 実 測 図 (1/40)



第113図 土壌出土土器実測図5 (1/3)

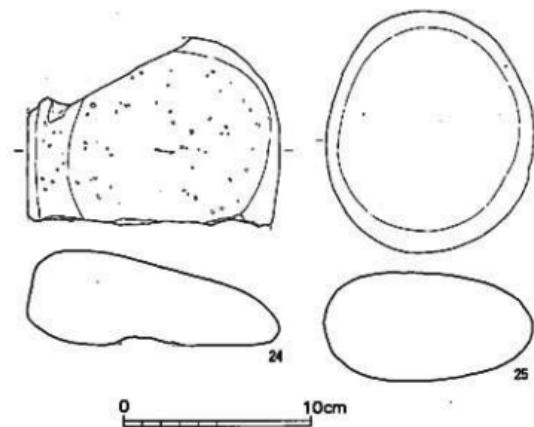


第114図 土壌出土土器実測図6(1/3)

壙である。壙土中からは縄文土器小片が若干と弥生土器が多数、打製石斧・磨石各1点が出土している。規模は東西176cm、南北147cm、深さ162cmと深い。時期は弥生時代前期後半である。出土遺物(図版91、第113・114図)

縄文土器(83・84) 83・84とも粗製の深鉢形土器の破片資料で、84の口縁部外面に刻目凸帯が巡っている。調整は内外とも条痕調整し、外面はさらにナデで仕上げている。

弥生土器(85~90) 86は小型壺の胴部の資料で、肩部には1条のヘラ描き沈線が巡る。底



第115図 土壌出土石器実測図(1/3)

部は器肉の厚い平底である。調整は内外ともヘラ磨きで仕上げている。胴部最大径15.9cmを測る。87・90は如意形口縁の壺で、口縁下に1条の沈線が巡り、90の口縁端部には刻目が施されている。87は復原口径35.2cmを測る。調整は外面刷毛、内面は87がナデ、90はヘラ磨きとナデで仕上げている。88・89は壺の胴部下半の資料である。調整は外面刷毛、内面ナデで仕上げている。85は高杯のミニニアである。

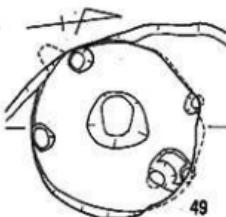
石 器 (図版96・115図22~25) 22は緑泥片岩製の打製石斧で、全長15.3cm、幅5.6cm、厚さ1.9cm、重さ220gを測る。23は玄武岩製の磨石で上下両面を使用している。長径11.8cm、短径10cm、厚さ5.2cmを測る。24・25は磨石で、24は玄武岩、25は砂岩製である。25は長径25cm、短径11cm、厚さ5.8cmを測る。

48号土壙 (図版82、第112図) 3号土壙の西側から検出された梢円形プランの残りの良い土壙で、東壁側にテラスを設けていて、断面は下半で袋状をなしている。埋土からは弥生土器破片が少量出土しただけである。規模は東西143cm、南北120cm、深さ90cmを測る。時期は弥生時代前期である。

出土遺物 (図版91、第114図)

弥生土器 (91) 壺形の蓋の資料である。調整は外面刷毛、内面ナデで仕上げている。

49号土壙 (図版82、第116図) 3号竪穴住居跡を切った状態で検出された円形プランの土壙で、断面は袋状をなし、底面には4個のピットが穿たれている。埋土には少量の炭化物が含まれていたが、遺物は出土しなかった。規模は底面で東西127cm、南北120cm、深さ47cmを測る。

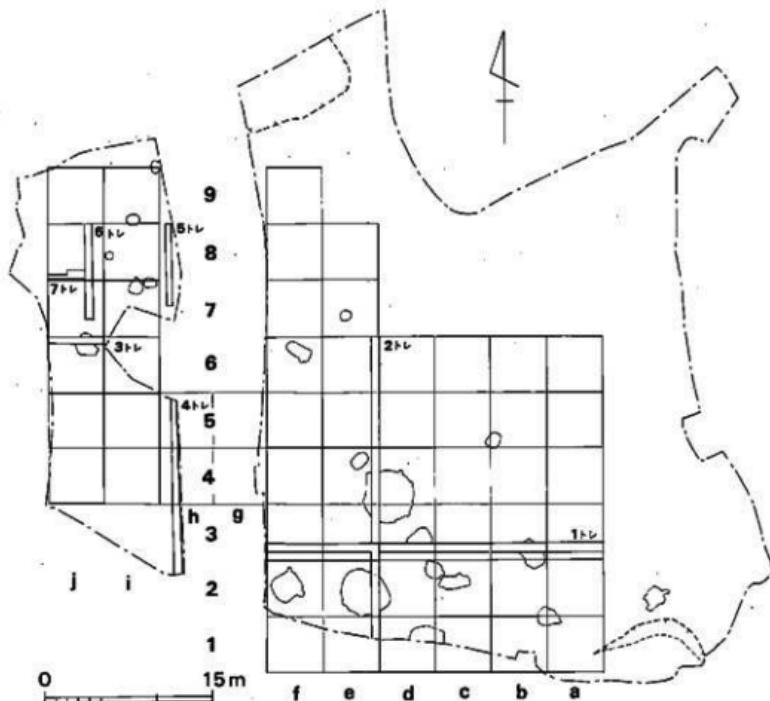


0 1m

第116図 49号土壙実測図 (1/40)

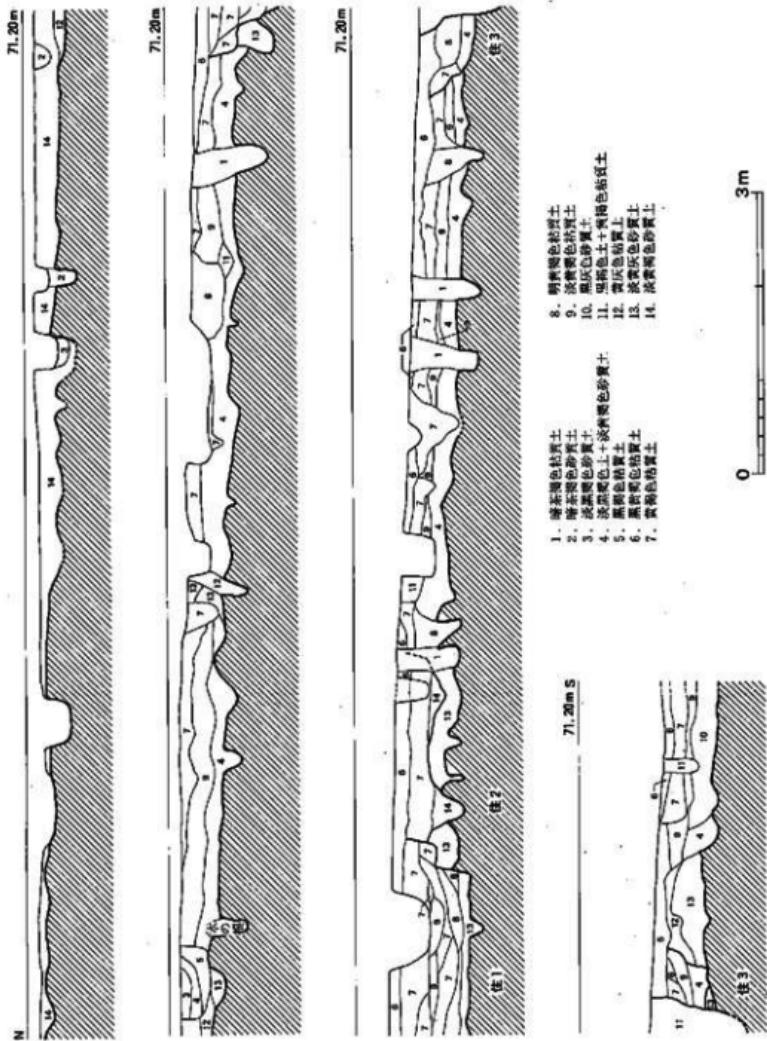
3) 包含層出土の遺物

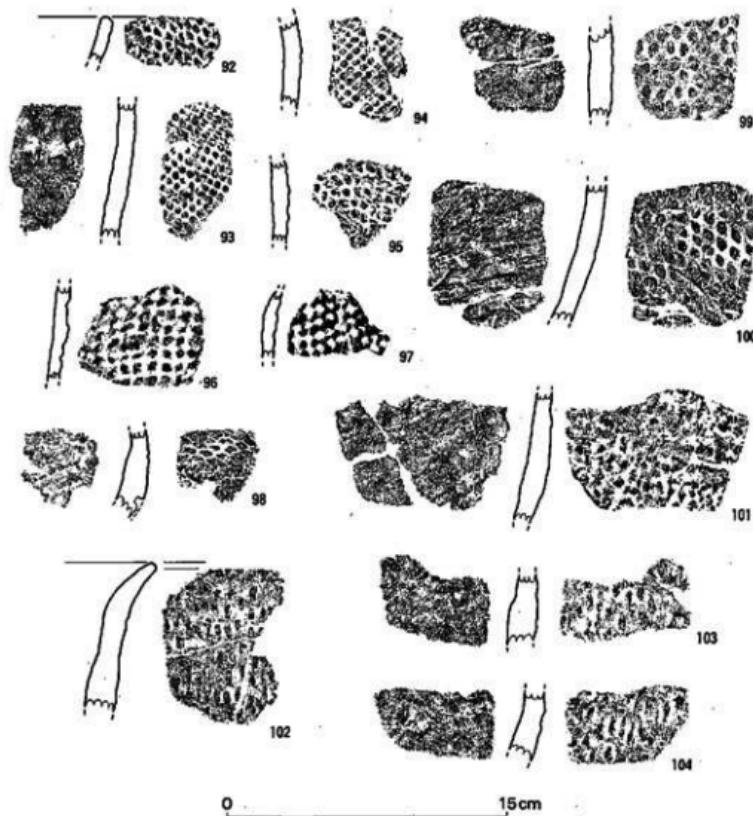
縄文時代の包含層の存在が予想されたため、5m方眼のグリッドと土層観察のためにトレンチを5ヶ所設定して調査を実施した(第117図)。その結果は、全体に包含層の堆積状況は薄く場所によって違いはあるが大きくは二層である。それは基本的に暗黄褐色粘質土(6層)と黄褐色粘質土(7層)であるが、弥生時代や歴史時代の遺構などの搅乱で堆積状態はプライマリーではなく遺物も混在していた。遺物の取上げは層位的に実施したもの、混在しているためここでは時期ごとに整理して報告する。遺物の出土状況を見ると、縄文時代の遺物は調査地区の南西部から西側に集中し、特に、後期・晩期の遺物が多量に分布している。土器が最も集中しているところは、e 2区、i 3・4区、i 7区で、石器の残渣であるフレイクがj 7・8区



第117図 縄文・弥生時代遺構配置図及びグリッド設定図(1/500)

第118図 第2トレンチ土層図 (1/60)



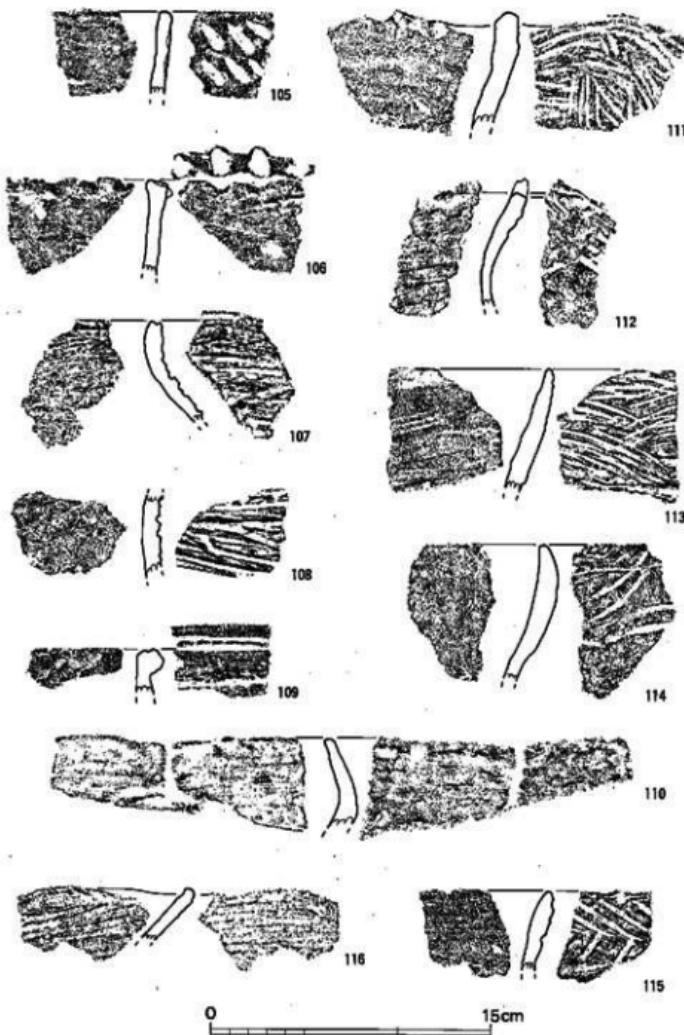


第119図 包含層出土縄文早期土器実測図(1/3)

に集中して出土していることも注目される。遺構は検出されていないが、近くで石器製作を行っていた地区かもしれない。

縄文時代早期の土器(図版92、第119図)

92~104は押型文土器である。いずれも梢円の押型文で、粒の細かいもの(92~98)と少し大粒のもの(99~104)の2種類に分けることが出来る。92と102が口縁部付近の破片資料の他は、全て胴部破片で、103・104は器肉も厚く胴部下半の資料と思われる。内面の調整は、100が条痕調整の他は全てナデ仕上げである。



第 120 図 包含層出土縄文中・後期土器実測図 (1/3)

縄文時代中期の土器（図版92、第120図）

105・106は阿高系の土器である。105は外面に刺突文、106は口唇部に刻目を施している。調整は105が内外ナデ、106が条痕調整している。色調はいずれも茶褐色を呈し、焼成も良好である。胎土には阿高系土器の特色である石英や雲母片が多く含んでいる。

縄文時代後期の土器（図版92・93、第120～122図）

107～110はいわゆる鏡ヶ崎式の土器である。107・108は外面を粗い条痕調整で、109は口縁部外面に凸帯を貼付け、上面に1条の沈線を巡らしている。110は内湾気味の口縁部で、内外とも条痕調整している。

111～125は北久根山式の粗製の深鉢形土器である。外面は粗い条痕調整をしており、111・112は波状の口縁をなしている。120・121のように波状口縁の端部外面にヘラ描きの斜状沈線文が施されているものもある。調整は内外とも条痕調整である。いずれも胎土には石英・雲母・角閃石などを含み、色調は茶褐色ないしは暗茶褐色を呈している。126～128は口縁部外面に2～4条の平行沈線が巡り、その間を疑似縄文で埋めている。130～132は平行沈線間を縄文で埋めた作りの良い精製の土器で、130のような縱列の沈線間を縄文で埋めた珍しい土器もある。いずれも北久根山式の土器である。調整は126～128の内面が条痕調整の他は、内外ともナデないしはヘラ磨きで仕上げている。

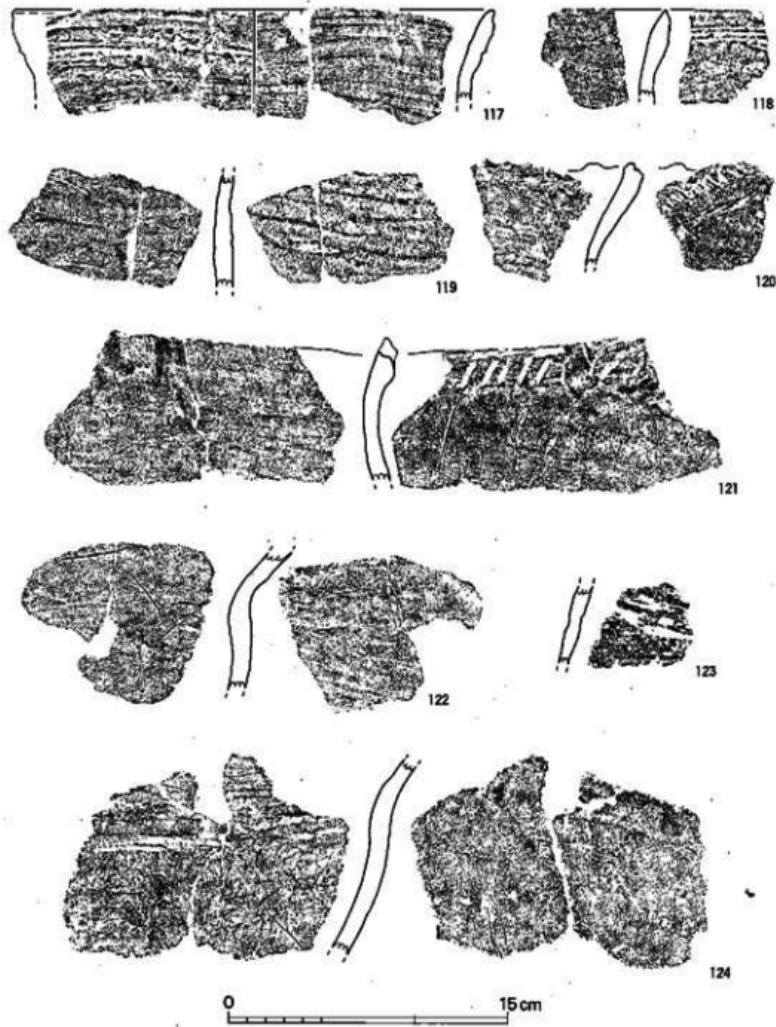
133～142は西平式の精製の土器で、133～138は沈線間を縄文で埋めた作りの良い土器である。139～142は口縁部を肥厚した端部に平行沈線を施した土器である。調整は134・138・140が内面をヘラ磨きないしはナデ調整である他は、条痕調整で仕上げている。

143は口縁部外面に凹線状の平行沈線が巡る土器で、縄文時代後期末の三万田式に属するものと思われる。

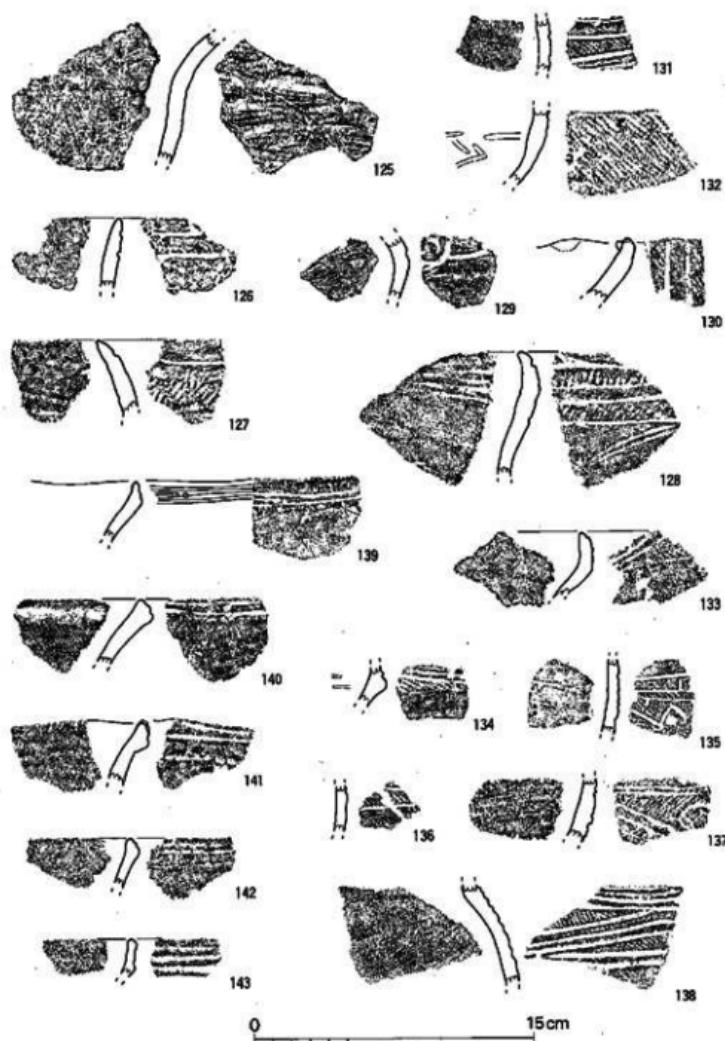
縄文時代晩期の土器（図版94・95、第123～126図）

144～162は精製の浅鉢形土器で、口縁部の形状により四つのタイプに分けることが出来る。145～149のような口縁端部を肥厚したもの、150～153のような口縁端部をつまみ出し氣味に仕上げたもの、156・157のように口縁部が断面「く」の字状をなすもの、158～161のような單口縁のものの四タイプである。144は浅鉢の波状隆起部の小破片である。いずれも全体として晩期後半の黒川式にほぼ相当する土器と言えるようである。163は浅鉢の体部下半の破片資料と思われるが、外面は丹塗り磨研している。155は浅鉢の体部資料で、体部最大径が37.6cmと大きいタイプである。調整はいずれもナデないしはヘラ磨きで仕上げているものであるが、163のような条痕調整したものもある。

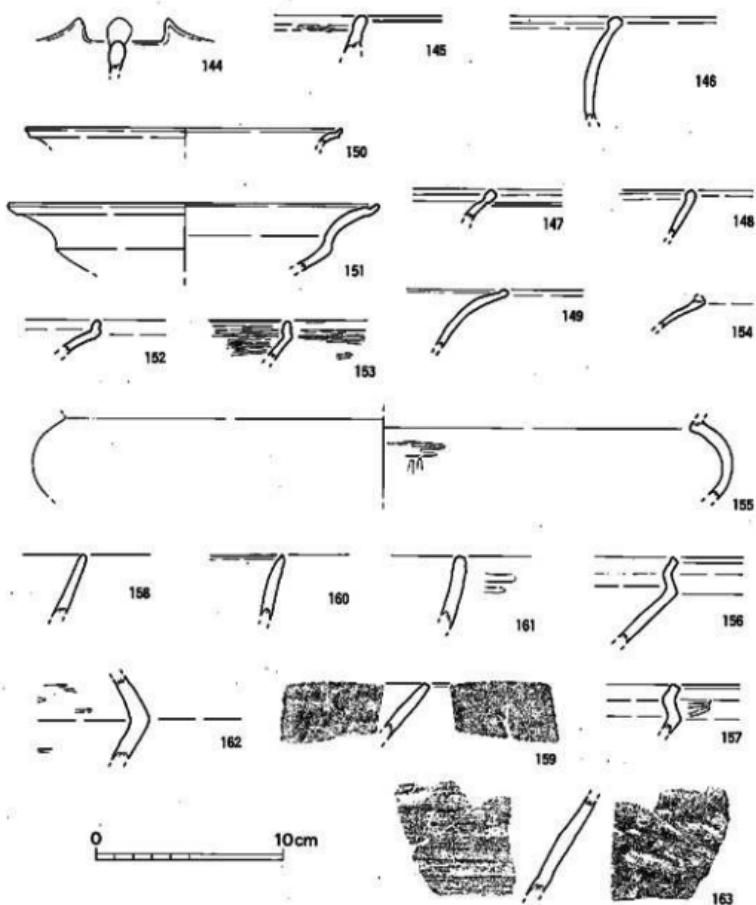
164～196は粗製の深鉢形土器で、口縁部の形状により大きく二つのタイプに分けられる。また、凸帯文を持つものと持たないものとにも細別される。164・165、167～179のように外反する口縁部を有するもの、166、180～185のように内傾する口縁部を有するもの、186～195のように



第 121 図 包含層出土繩文後期土器実測図 1 (1/3)

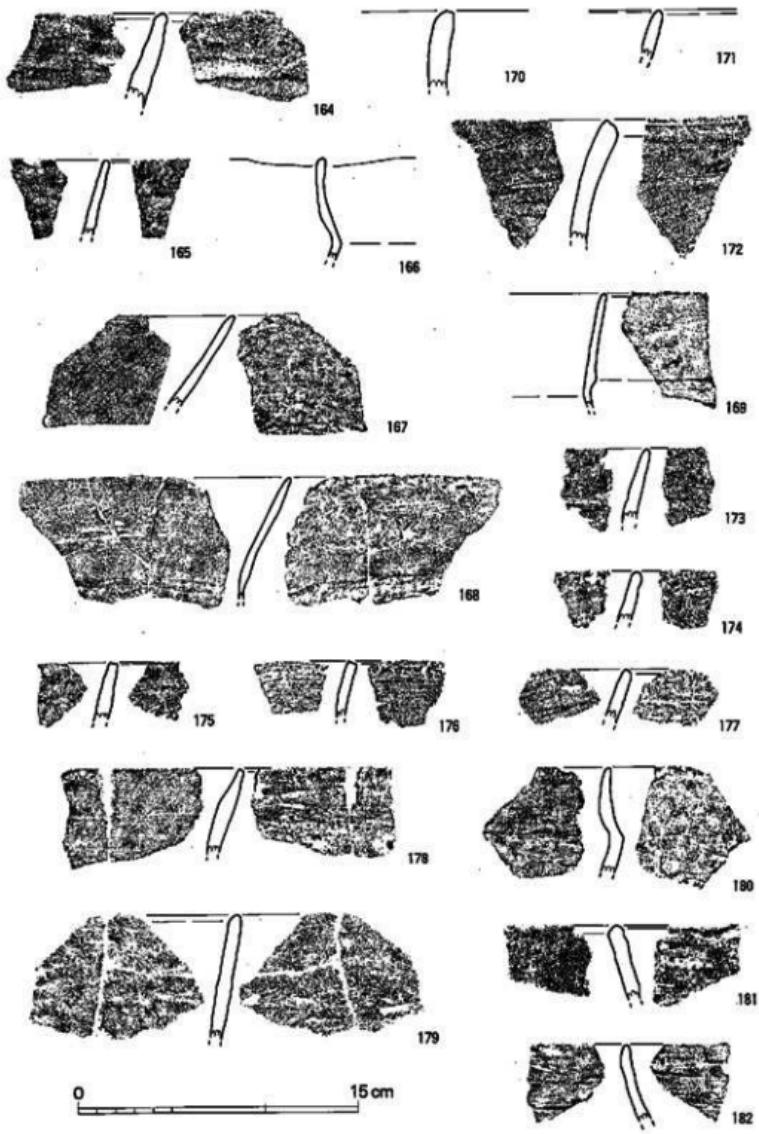


第 122 図 包含層出土縄文後期土器実測図 2 (1/3)

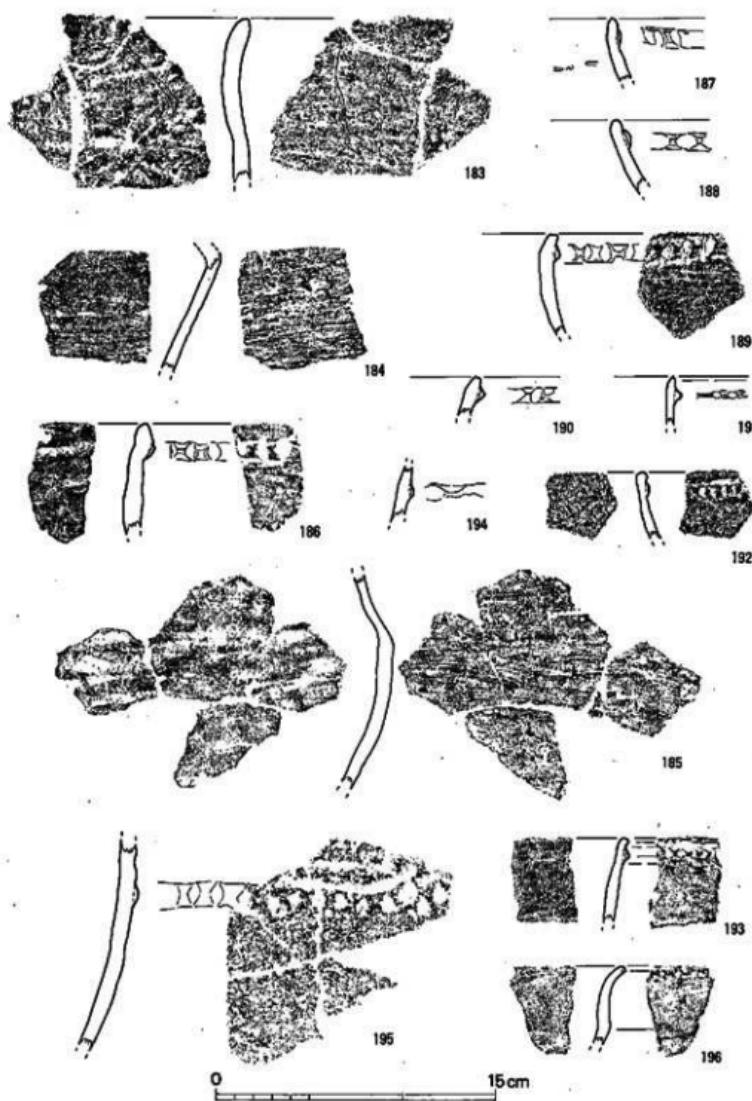


第 123 図 包含焼出土縄文晩期土器実測図 1 (1/3)

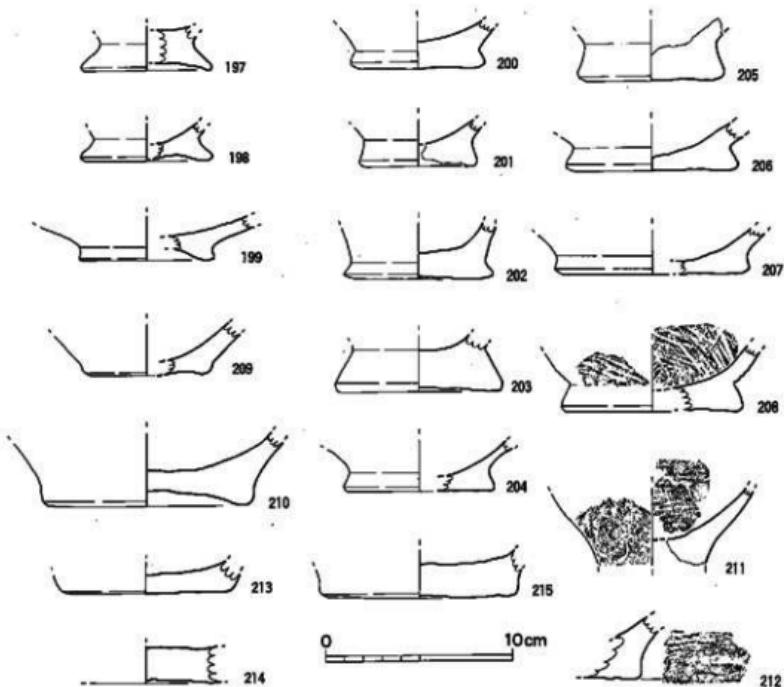
内傾する口縁部外面や腹部に刻目凸帯文を付するものである。調整は基本的に内外を条痕調整であり、中にはさらにナデ調整で仕上げた半精製とも言える土器もある (167~170, 172)。粗製土器の時期は必ずしも明確ではないが、刻目凸帯文の形状などからして、'晩期後葉頃のものと言ってよいだろう。



第 124 図 包含層出土縄文晩期土器実測図 2 (1/3)



第 125 圖 包含層出土純文晚期土器實測圖 3 (1/3)

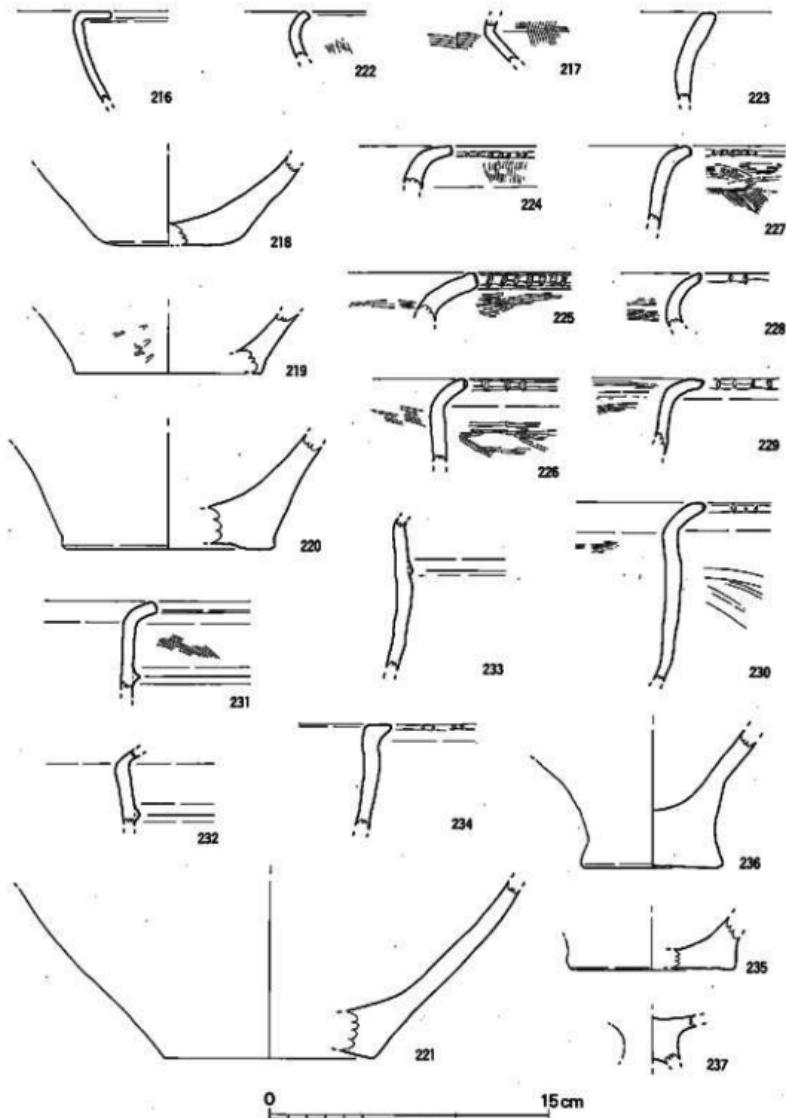


第 126 図 包含層出土縄文晩期土器実測図 4 (1/3)

197-215は底部の資料で、底部の形状で四タイプに分類できる。197-199のように外底部が張り出して上げ底のもの、外底部が張り出して平底のもの(200-208)、外底部が張り出さない上げ底のもの(209-210)、外底部が張り出さない平底のもの(211-215)である。調整は208・211が内外とも条痕、212は外側条痕の他は全て内外ともナデ調整である。底部径は197・198・200が 7 cm 、199が 7.2 cm 、201が 6.4 cm 、202・205が 8 cm 、203が 9 cm 、204が 8.1 cm 、206が 9.3 cm 、207・215が 10.4 cm 、208が 9.8 cm 、209が 6.6 cm 、210が 11.4 cm 、211が 4 cm 、213が 9.2 cm を測る。

弥生時代前期の土器 (図版96, 第127・128図)

216は蓋の口縁部の小破片、218-221は壺の底部資料である。調整は内外ともナデ仕上げで、219の外面はさらにヘラ磨きしている。222-233・239は如意形口縁の壺で、224-230の口縁端部には刻目が、231-233は口縁下に1条の三角凸帯が巡るタイプである。234は口縁端部に三



第 127 圖 包含層出土彌生土器實測圖 1 (1/3)

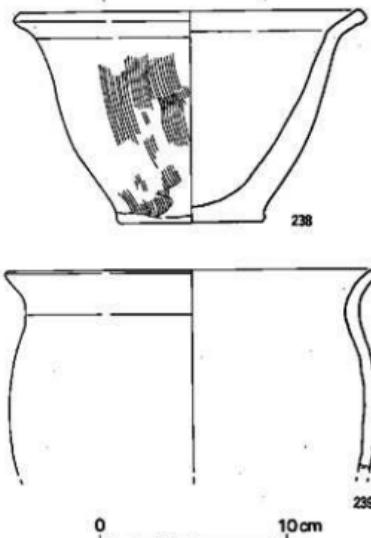
角凸帯が付された壺で、端部には刻目が施されている。調整は内外ともナデのもの(223・234)の他は刷毛とナデ調整を併用しているのが一般的である。226のようにヘラ磨きで仕上げているものもある。236は傘形の蓋の鉢付近の資料である。237は高杯の柱状部の資料で、内外ともナデで仕上げている。238は鉢で、復原口径19cm、器高11.3cm、底径8cmを測る。調整は胴部外面刷毛、内面ナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。

石 器(図版99-103、第129-133図)

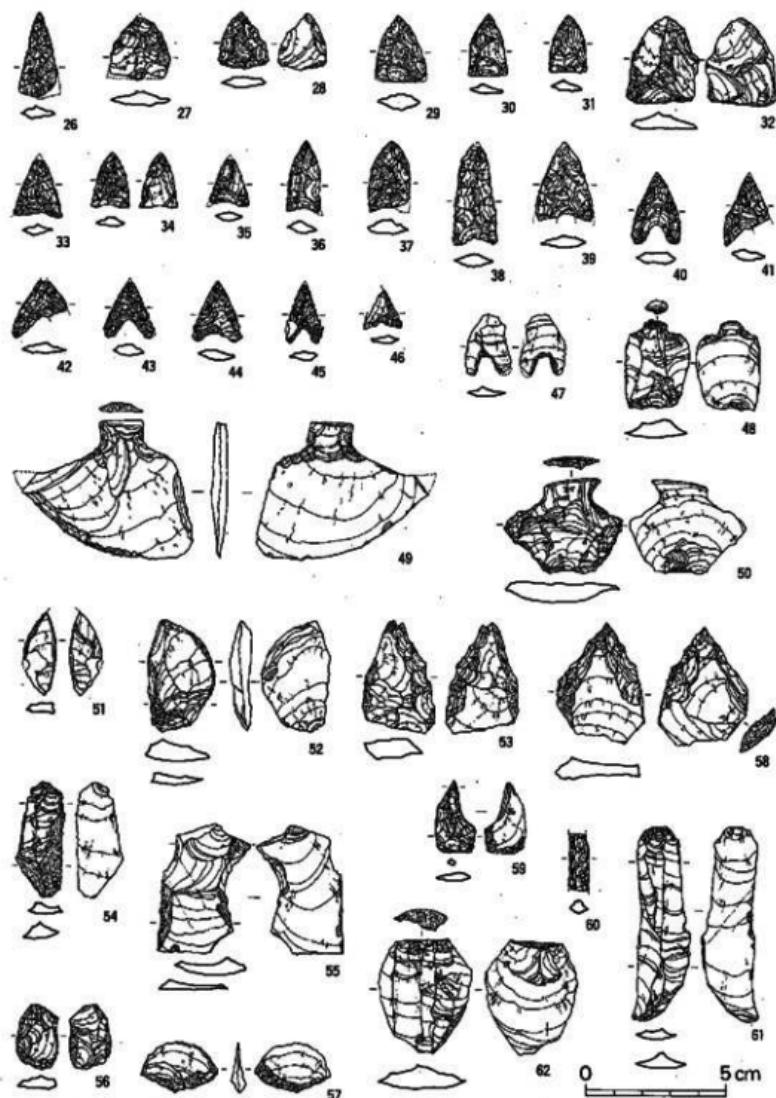
26-47は打製石器の資料で、大きく三つのタイプがある。26は凸基式、28-32は平基式、33-47は凹基式の石器で、27・28は平基式でも凸基式に近いタイプである。47は剥片器である。28・30・31・32が完形品の他は、一部欠損品である。石質は26・29-31・33・36・38・39・41・46がサヌカイト、34・35が安山岩、他はすべて黒曜石製である。計測値は、全長、現存部で26が30mm、27が22mm、28が20.5mm、29が23.5mm、30が22mm、31・33が21mm、32が31mm、34が19.5mm、35が15.5mm、36が25.5mm、37が25mm、38が36mm、39が28mm、40が26mm、41が24.5mm、42・43・45が2mm、46が13.5mm、44・47が21.5mm、最大幅は現存部で26が15mm、27が22.5mm、28・43・44が18mm、29が19mm、30・35が14mm、31・34・46が13.5mm、32が25.5mm、33が17.5mm、36が13mm、37が15.5mm、38・40・41が17mm、39が20.5mm、42が20mm、45が20mm。重さは現存部で26が1.6g、27が2.15g、28が1.05g、29が2.39g、30が1.05g、31が1.2g、32が4.3g、33が1.19g、34が0.75g、35が0.5g、36が1.1g、37が2.05g、38が2.725g、39が2.45g、40が1.15g、41が0.9g、42が0.8g、43・44が0.95g、45が0.55g、46が0.425g、47が1.3gを測る。

48は黒曜石製のつまみ様石器である。49・50は横形の石匙で、49はサヌカイト、50は黒曜石製である。51-57はスクレイバーで、52・57がサヌカイト、53が安山岩、他は黒曜石製である。58-60はドリルで黒曜石製、59は姫島産の黒曜石である。61は黒曜石製の石刃で、全長79mm、幅19.5mm、厚さ6mmを測る。62は黒曜石の剥片で、上面に自然面を残している。

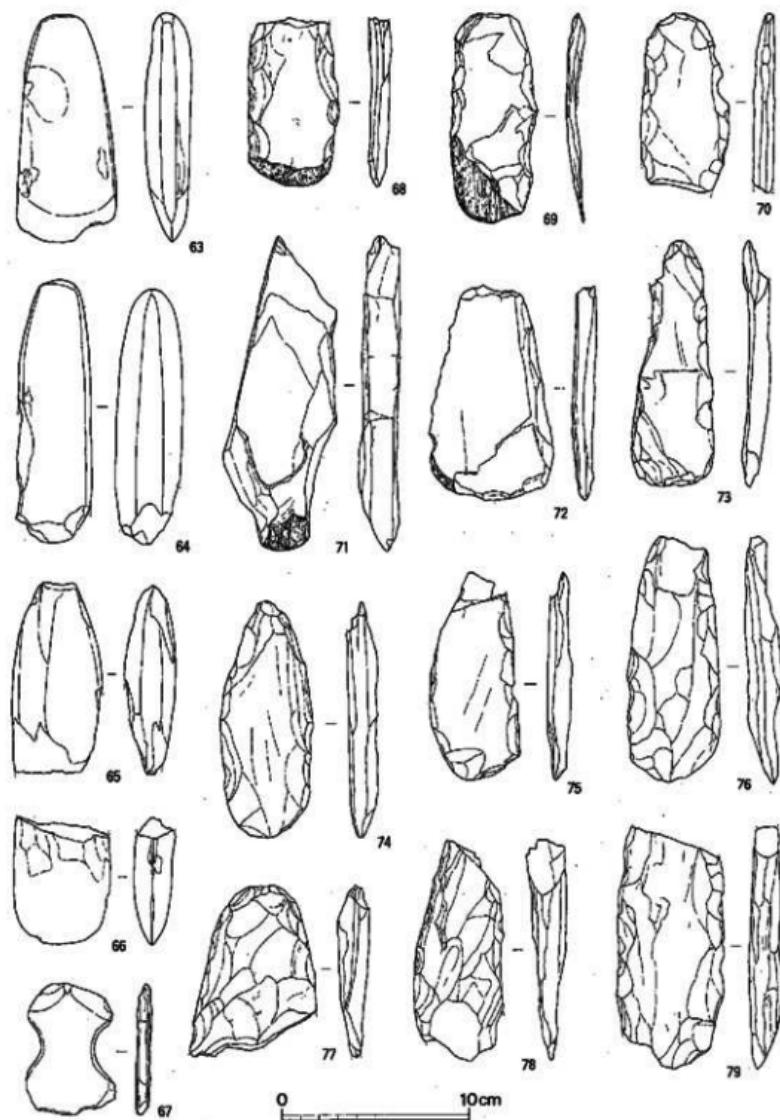
63-66は磨製石斧で、刃部ないしは基部を欠損している。石質は63が粘板岩、64が砂岩、65



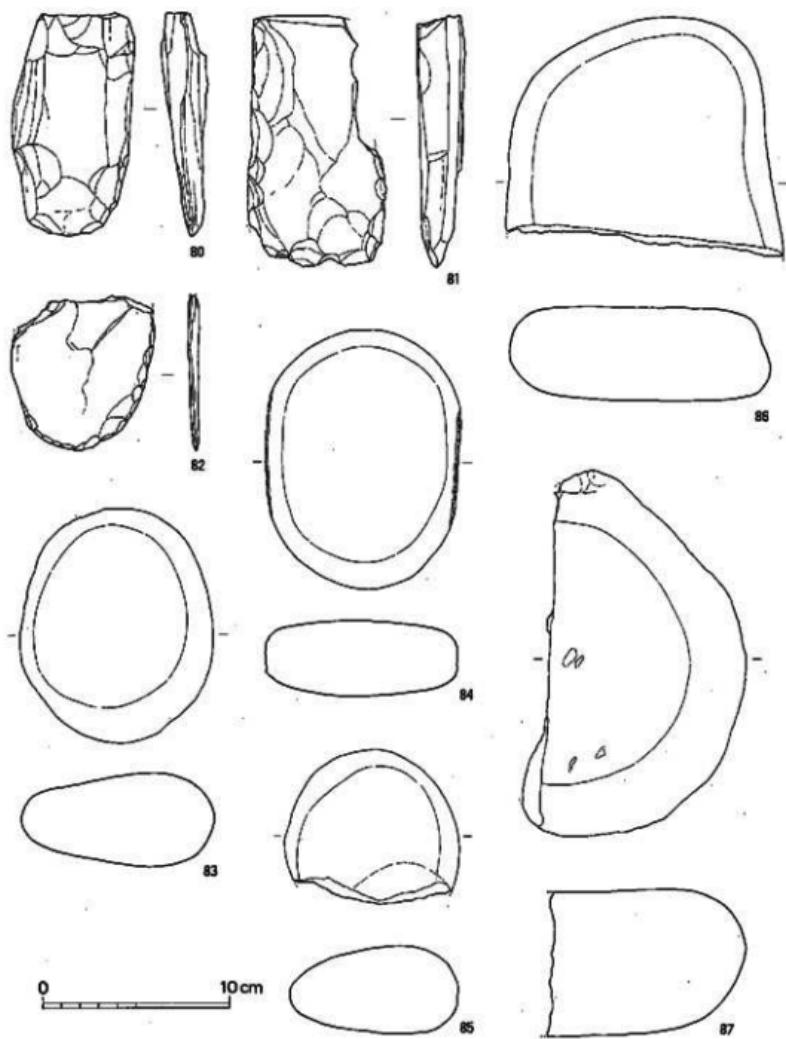
第128図 包含層出土歯生土器実測図2 (1/3)



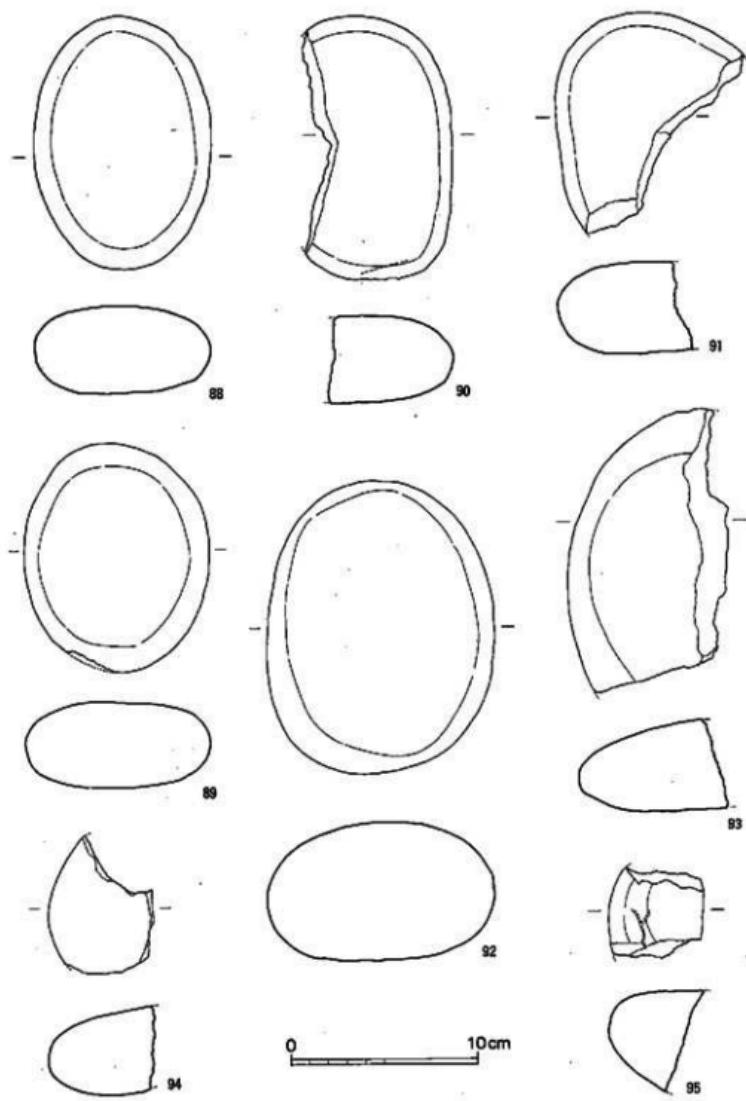
第 129 図 包含層出土石器実測図 1 (1/2)



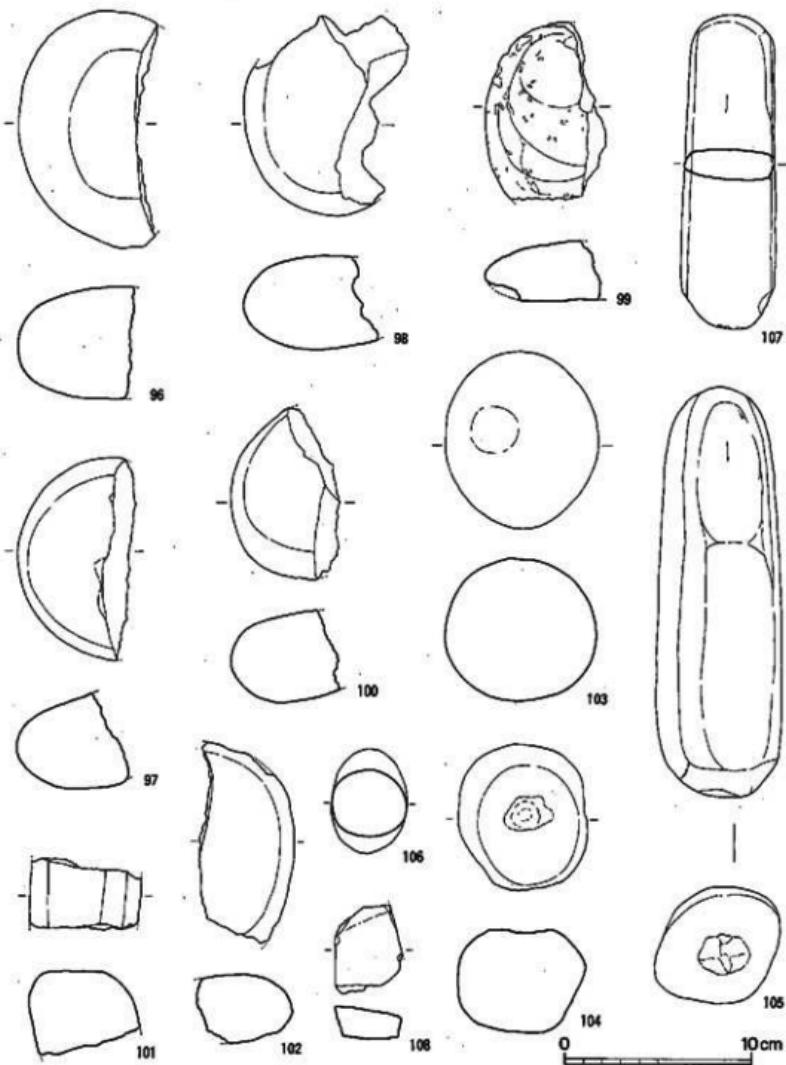
第 130 図 包含層出土石器実測図 2 (1/3)



第 131 圖 包含層出土石器尖測圖 3 (1/3)



第 132 図 包含層出土石器実測図 4 (1/3)



第 133 圖 包含層出土石器実測図 5 (1/3)

が蛇紋岩、66が緑泥片岩である。残りの良い63は全長12.1cm、刃部幅5.3cm、厚さ2.5cm、重さ225gを測る。68~82は打製石斧で、68・69・71・72の刃部は局部磨製している。いずれも石質は緑泥片岩製である。完形品と言えるものはほとんどなく、刃部や基部を欠損しているものが多い。大きさにも大・小があり、全長11~13cm前後のものと15cm以上のものとに分かれる。

83~103は磨石で、上下両面を使用しており、大きさにも大・小がある。また、103のような全面を使用した丸い磨石や84のように側面を叩き石に使用したものもある。石質は85・89・101・102が緑色凝灰岩、92・94・95が硬質砂岩、その他は玄武岩製である。

104は凹石、105は叩き石、107・108は砥石、106は投弾石と思われる。石質は105・108が硬質砂岩、107が片岩製である。

(2) 歴史時代の遺構と遺物

1) 堅穴遺構

1号堅穴（図版83、第134図） 45号土壙の北側から検出された隅丸方形プランの堅穴で、2号・4号堅穴を切って造られている。床面にはビットが1個穿たれているだけで、住居跡のような床面の叩き締めは見られない。埋土中には炭化物がかなり含まれ、他に土師器皿、摺鉢、手捏小型椀、土鉢などが多数出土した。規模は東西304cm、南北327cm、深さ21cmを測る。時期は15世紀後半である。

出土遺物（図版104・105、第135・136図）

土師器（第136図1~8） 1~6は皿で、1は口径5.8cmと最も小型の皿である。底部の切り離しはいずれも糸切りである。底径は1が3.4cm、3が4cm、4が4.9cm、5が5.3cm、6が6cmを測る。7・8は摺鉢で、7は口縁部付近、8は底部付近の破片資料である。内面には4~5条の櫛描き沈線が施されている。内外ともナデ仕上げしており、7の外面には指頭圧痕、8の外面下半には刷毛の痕跡を残している。復原口径は7が29.8cm、復原底径8が11cmを測る。

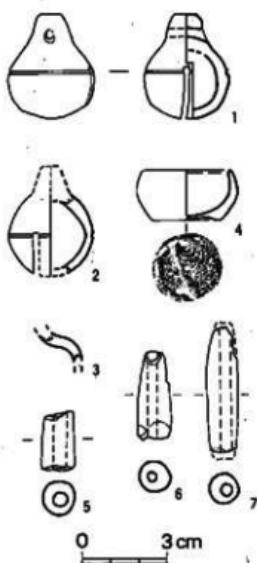
手捏土器（第135図4） 手捏椀のミニチアで、口径3.2cm、底径2.4cm、器高1.8cmを測る。体部内外はヨコナデ、底部の切り離しは糸切り手法である。

土鉢（第135図1） 体部の開孔部はペラ状のもので「コ」の字形に切り取っており、体部外面中央にはペラ描きの沈線が巡っている。体部内外の調整はナデ仕上げで、体部底より紐孔頸までの器高は3.7cm、体部最大径3cmを測る。

2号堅穴（図版84、第134図） 1号堅穴に切られた状態で検出された長方形プランの堅穴である。埋土からは少量の炭化物と角砾が数個、土師器皿、土師質の火舎、瓦質の火舎・湯釜、白磁椀など多数が出土した。規模は確認部分で東西196cm、南北297cm、深さ55cmを測る。

出土遺物（図版104・105、第136・137図）

土師器（9~16） いずれも土師器の皿で、大小がある。9・10は小型で、口径10.8cm、底



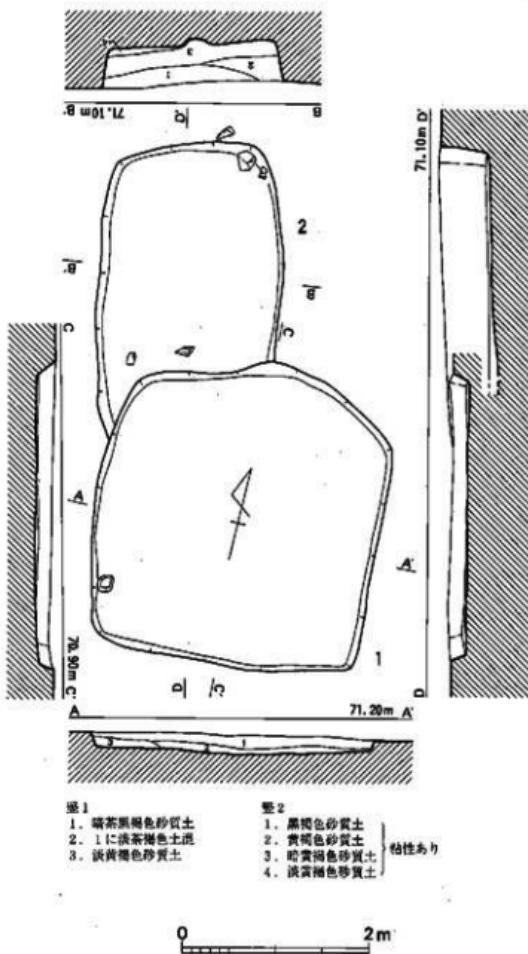
第135図 竪穴・包含層出土土製品実測図(1/2)

径は9が5.2cm, 10が5.9cmを測る。10の底部には焼成前の穿孔が見られる。調整はいずれも体部内外ヨコナデとナデ仕上げで、底部の切り離しは糸切り手法である。底径は11が4.2cm, 12が6cm, 13・14が6.2cm, 15・16が6.7cmを測る。

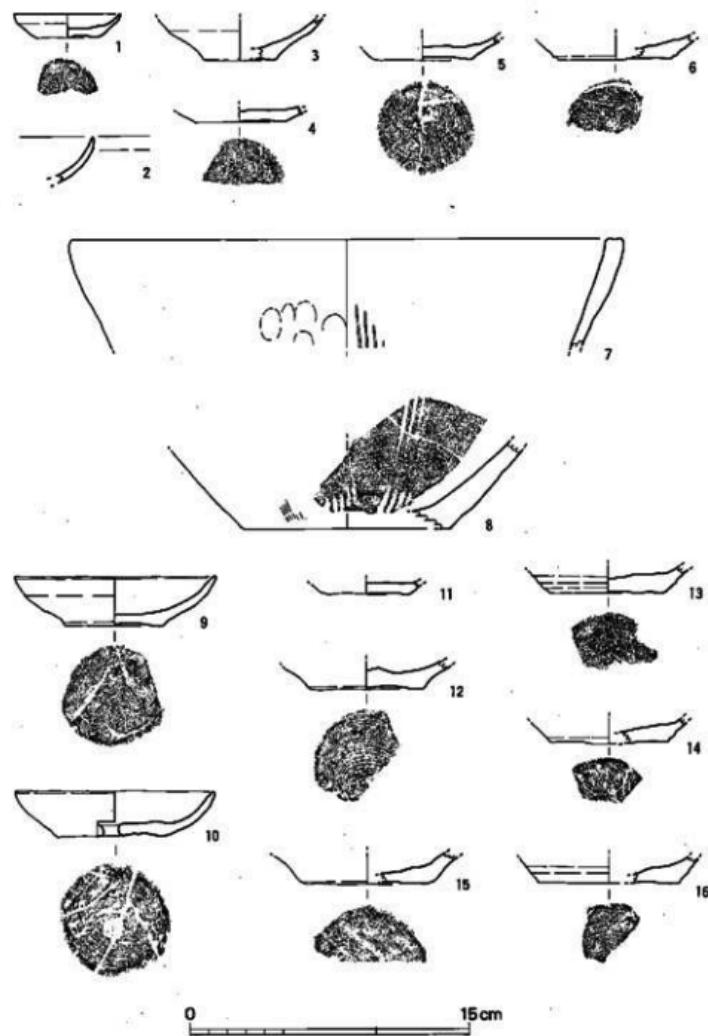
土師質土器 (17・18) 17

は火舎の体部上半の破片資料

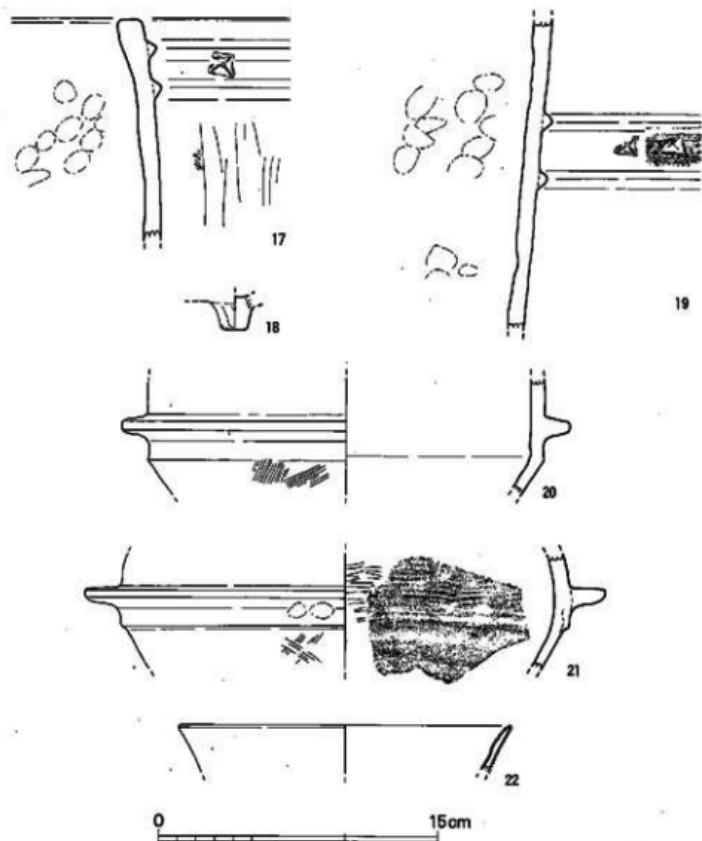
で、口縁部外面には2条の三角凸帯が巡り、その凸帯間に星形の刻印が刻まれている。調整は口縁部内外はヨコナデ、体部内外はナデで仕上げており、内面には指頭圧痕が残されている。18は火舎の脚部の資料である。



第134図 1・2号竪穴実測図(1/60)



第 136 図 坑穴出土土器実測図 1 (1/3)



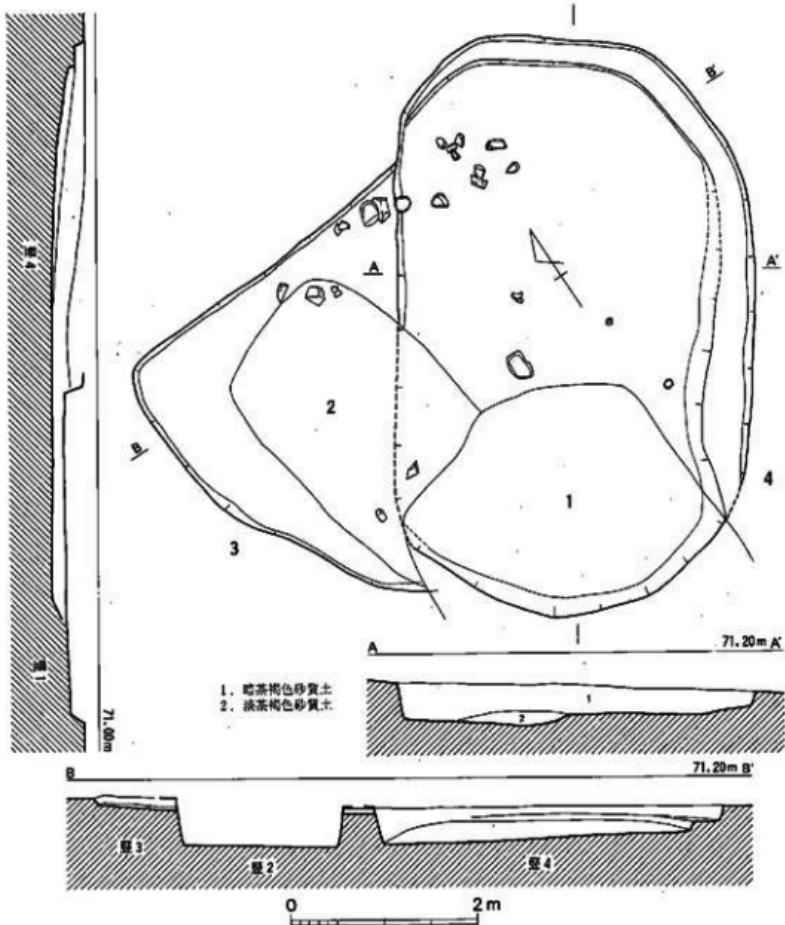
第137図 窪穴出土土器実測図2 (1/3)

瓦質土器 (19~21) 19は火舎の体部破片で、体部には2条の凸帯が巡り、凸帯間には17と同様な星形の刻印が付されている。調整は体部外面ナデのあとヘラ磨き、内面はナデ仕上げていて、指頭圧痕が残されている。20・21は湯釜の胴部資料で、鋸がソロバン玉形の胴部中位を巡る。調整は胴部下半刷毛、上半はヨコナデで、内面はナデ仕上げで21の内面には粗い刷毛の痕跡が残されている。21の外面下半には著しい煤の付着が見られる。復原胴部最大径は20が24.2cm、21が28cmを測る。

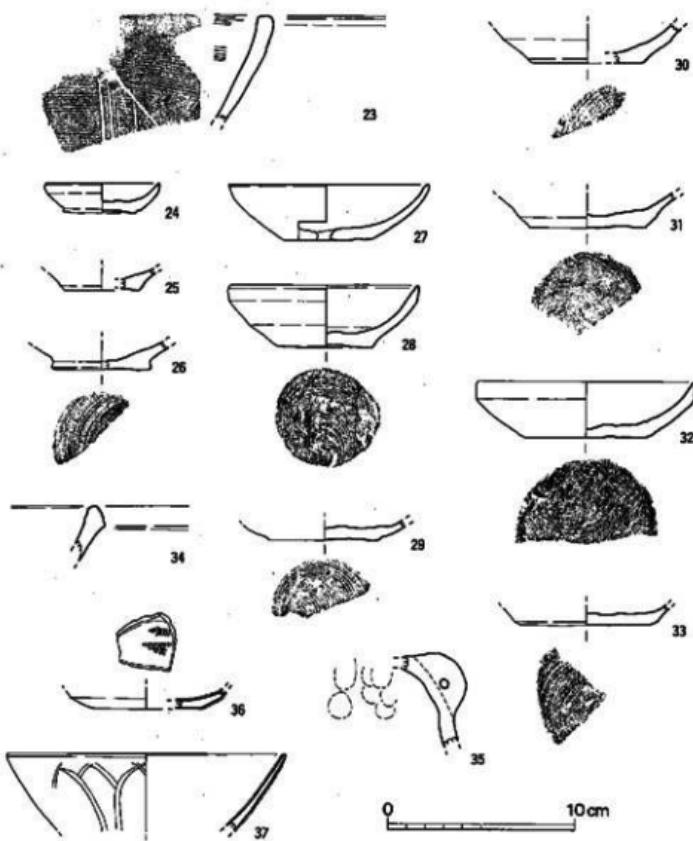
磁器(22) 白磁の碗で、復原口径13cmを測る。釉色は白灰色で、焼成も良好である。

土鉢(第135図2・3) 2は形状・大きさとともに1号竪穴出土資料と同様のタイプで、体部中央に沈線が巡る。3は体部の破片資料である。

3号竪穴(図版84、第138図) 2号・4号竪穴に切られた状態で検出された最も古い時期



第138図 3・4号竪穴実測図(1/60)



第139図 穴出土土器実測図3 (1/3)

の方形プランの竪穴である。埋土には他の竪穴と同様に少量の炭化物が含まれていて、遺物は土師器片が少量出土しただけである。規模は現存部で東西397cm、南北357cm、深さ12cmを測る。

出土遺物 (図版104、第139図)

土師質土器 (23) 摺鉢の破片資料で、体部内面には5条の横書き沈線が刻まれている。調整は内面刷毛、外面は風化のため不明である。

4号竪穴 (図版84、第138図) 3号竪穴を切り、1・2号竪穴に切られた状態で検出され

た梢円形プランの堅穴である。埋土には他の堅穴と同様に少量の炭化物が含まれていて、遺物としては土師器皿、須恵器鉢、瓦質湯釜片、磁器破片などが多数出土した。堅穴の規模は東西381cm、南北612cm、深さ37cmを測る。

出土遺物（図版104、第139図）

土師器（24～33） いずれも皿の資料で、大小がある。24・25は小型のタイプで、24は口径6.2cm、底径は24が3.85cm、25が4.1cmを測る。26～33は大きいタイプである。復原口径は27が10.7cm、28が10.3cm、32は少し大きく11.8cm、底径は27が4.75cm、28が5.25cm、29・30が6cm、31が6.3cm、32・33が6.8cmを測る。体部の調整はいずれもナデ、ヨコナデで仕上げていて、底部の切り離しは糸切り手法である。

須恵器（34） 鉢形の土器の口縁部付近の小破片で、口縁部は肥厚している。内外ともヨコナデで仕上げている。

瓦質土器（35） 湯釜の把手の資料で、内外ともナデで仕上げている。

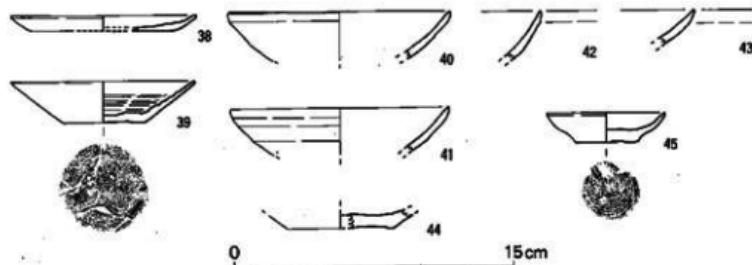
磁器（36・37） 36は青磁の皿、37は青磁の椀の破片資料である。36の内底部には横描文があり、37の外面には輪廻弁文が施されている。釉色は36が淡緑灰色、37が淡緑色を呈し、焼成も堅緻である。

2) 土 壤

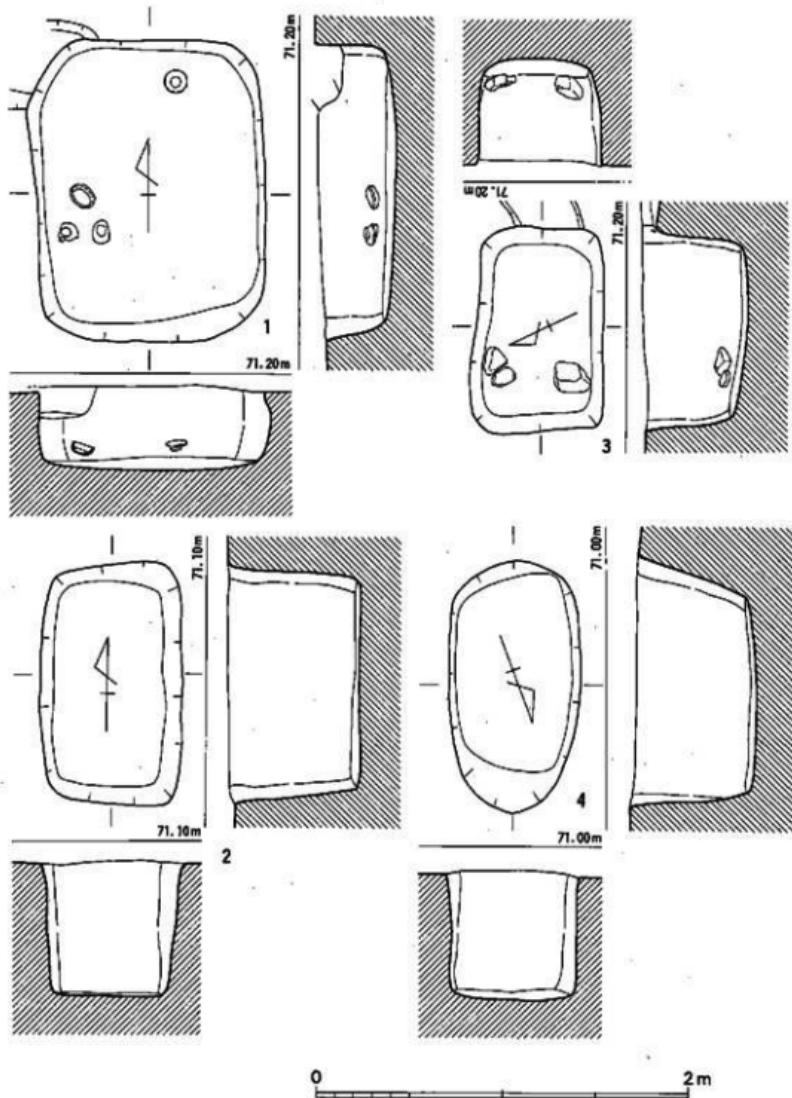
2号土壤（図版66、第98図） 4号堅穴住居跡を切った状態で検出された不整円形プランの土壤で、埋土からは少量の炭化物と土師器片が若干出土しただけである。規模は東西152cm、南北164cm、深さ23cmを測る。

出土遺物（図版106、第140図）

土師器（38） 土師器の皿で、復原口径10cm、器高0.85cm、底径7.8cmを測る。調整は体部内外ヨコナデ、底部の切り離しは糸切り手法である。



第140図 土壤出土土師器実測図 (1/3)



第 141 図 土 壤 墓 実 測 図 (1/30)

14号土壙 (図版61、第102図) 1号土壙墓の北側から検出された不整梢円形プランの土壙で、埋土中から土師器杯1個と打製石斧片が出土した。規模は東西139cm、南北81cm、深さ24cmを測る。

出土遺物 (図版106、第140・142図)

土師器 (39) 土師器の杯で、復原口径10cm、器高2.25cm、底径4.4cmを測る。調整は体部内外ロクロヨコナデ仕上げで、底部の切り離しは糸切り手法である。

石 器 (第96図15) 緑泥片岩製の打製石斧の破片資料で、一部局部磨製している。

16号土壙 (図版61、第102図) 19号土壙の北側から検出された隅丸長方形プランの大型の土壙で、埋土からは少量の炭化物とともに、土師器破片がかなり出土した。規模は東西197cm、南北327cm、深さ10cmを測る。

出土遺物 (図版106、第140図)

土師器 (40~45) 40~43は小型の杯の体部、44は底部の資料である。復原口径40は12cm、41は11.8cm、底径は44が5.8cmを測る。調整は体部内外ロクロヨコナデ、底部の切り離しは糸切り手法である。45は小型の皿で、復原口径3.2cm、器高1.6cm、底径3.4cmを測る。調整手法は杯と同様である。

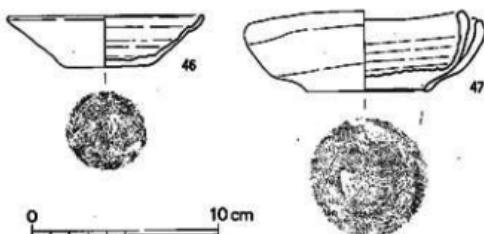
3) 土 壙 墓

1号土壙墓 (図版85、第141図) 14号土壙の南側から検出された隅丸長方形プランの土壙墓で、底面より若干浮いた状態で北側小口と西側壁側から土師器皿4個が副葬されていた。規模は東西125cm、南北160cm、深さ中央部で42cmを測る。

出土遺物 (図版106、第142図)

土師器 (46・47) いずれも杯の資料で、46は小型で口径10.6cm、器高4.4cm、底径4.4cm、47は少し大型で口径12.95cm、器高4.3cm、底径6.6cmを測る。調整は体部内外ロクロヨコナデ、底部の切り離しは糸切り手法である。

2号土壙墓 (図版86、第141図) 3号竪穴の北側から検出された隅丸長方形プランの残りの良い土壙墓で、1号土壙墓と同様、主軸を南北にとっている。副葬品などは何等出土しなかった。規模は東西76cm、南北129cm、深さ71cmを測る。



第142図 土壙墓出土土師器実測図 (1/3)

3号土壙墓（図版86、第141図） 13号土壙の北側から検出された隅丸長方形プランの土壙墓で、西側小口部付近から底面より少し浮いた状態で角礫3個が出土したが、副葬品などは何等検出されなかった。規模は東西92cm、南北112cm、深さ56cmを測る。

4号土壙墓（図版61、第141図） 1号堅穴の西側に近接して検出された梢円形プランの残りの良い土壙墓で、副葬品などは何等出土しなかった。規模は東西71cm、南北125cm、深さ65cmを測る。

4) 包含層出土の遺物

土師器（図版106・107、第143・144図）

48~59は皿の資料で、48~51は口径6.2~7cm前後の特に小さい皿である。58~59は口径に対して器高が浅い皿で、復原口径は58が9.7cm、59は10.4cm、器高は58が1cm、59が1.6cmを測る。調整はいずれもロクロヨコナデで、底部の切り離しは55が板目の他は全て糸切り手法である。

60~87は杯の資料で、大・中・小がある。60~61は小型品で口径8cm前後、62~70は中型品で10cm前後、78~79、83~87は大型品で13cm以上である。調整はいずれもロクロヨコナデで、底部の切り離しは76が板目の他は全て糸切りである。

88~89は高台付の椀の破片資料で、89の復原高台径は7.4cmを測る。90は土師質の湯釜の把手とも思われるが吊り下げるための孔がないので器種は不明である。

須恵器（図版107、第144図）

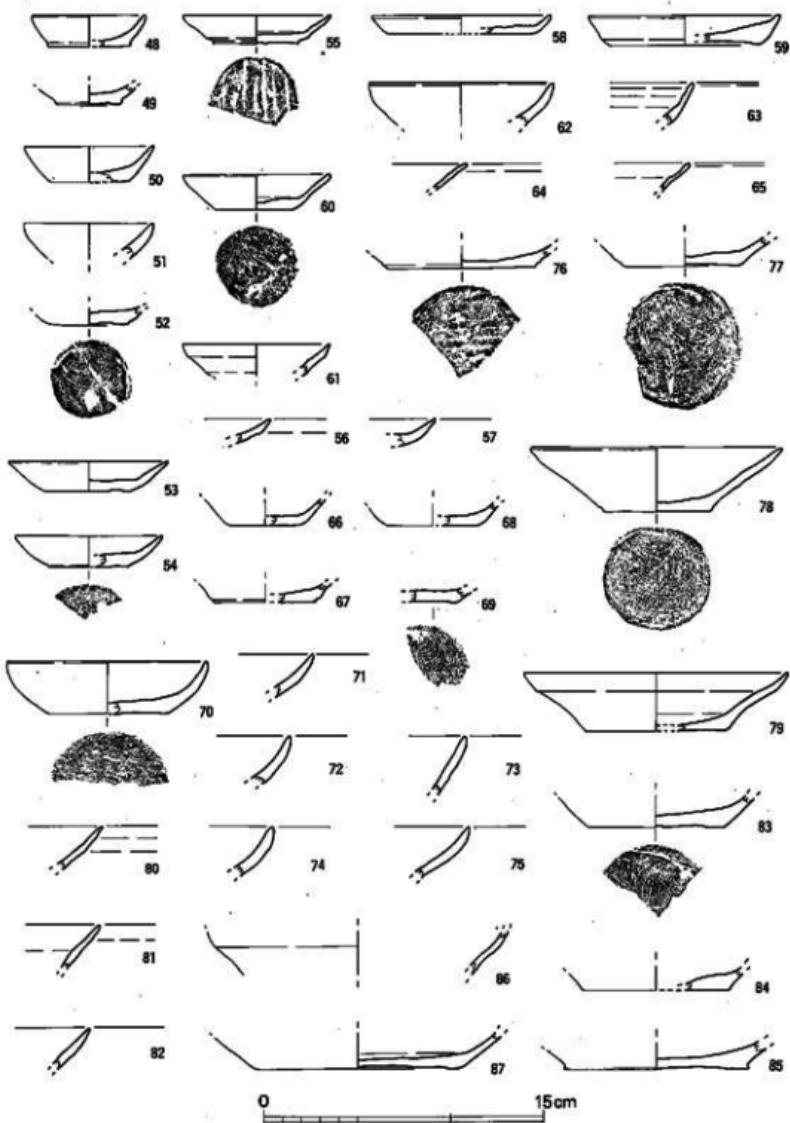
91は椀の体部資料である。92~93は短頸壺の口頸部付近破片資料で、94は直口の口縁を有する壺である。95は壺の口縁部、96は壺の口頸部の資料で、調整はいずれもロクロヨコナデで、94の口縁外面には刷毛調整の痕跡を残している。復原口径は92が10.2cm、93が10.6cm、94が15cm、95が11.4cm、96が12cmを測る。97は練鉢の口縁付近の小破片で、内外ともロクロヨコナデで仕上げている。

瓦器・瓦質土器・瓦（図版107、第144図）

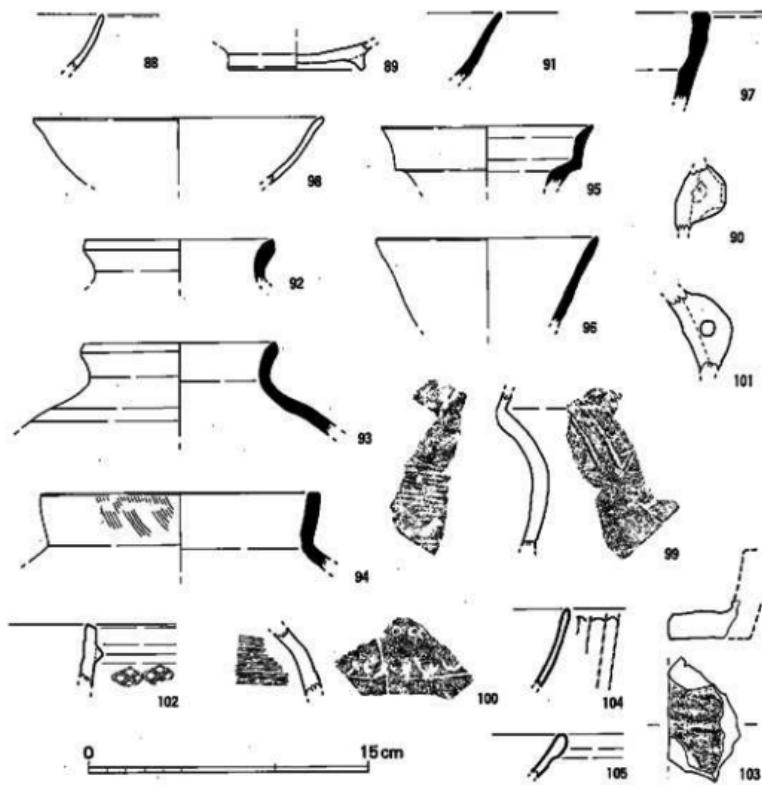
98は瓦器柄の体部資料で、内外ともナデで仕上げている。復原口径は15.6cmである。99~100は壺の肩部資料で、99の肩部には櫛引き、100の肩部には沈線文と竹管文が施されている。いずれも作りの良い土器で、調整は外側ナデ、内面は99が工具ナデ、100が刷毛調整である。101は湯釜の把手、102は火鉢の口縁部付近の破片で、口縁下に1条の凸帯が巡り、その下には四菱の刻印がある。103は丸瓦の玉縁部の破片で、内面には布目压痕が残されている。

磁器（図版107、第144図）

104は青磁の椀の破片資料で、体部外面にはヘラ書きの蓮弁文が描かれている。105は白磁の碗で、口縁部は玉縁状をなしている。



第 143 図 包含層出土土師器実測図 (1/3)



第 144 図 包含層出土土錐器・須恵器・瓦・磁器実測図 (1/3)

土 錐 (図版105, 第135図)

5～7は管状の土錐で、いずれも欠損している。残りの良い7は全長現存部で4.5cm、最大径1.1cmを測る。色調は黄褐色で、焼成も良好である。

4 ま と め

今回、検出された遺構は、必ずしも多くないが縄文時代後・晚期のものと思われる竪穴住居跡3軒をはじめ、縄文時代晚期と弥生時代前期のものと思われる土壙47基、弥生時代前期の竪穴住居跡2軒、中世の竪穴遺構4基と土壙墓4基、土壙3基である。ここでは、その成果について、二・三触れてまとめとしたい。

遺構は検出されていないが、遺物としては、縄文時代早期の押型文土器をはじめ、量的には少ないと中期の阿高系土器も出土している。調査範囲が丘陵のはんの一部であることと、遺跡全体がかなり削平されていることからすれば、本来はもっと多くの遺構が存在した可能性は高い。また、量的にも多くの土器や石器が出土している後・晚期の遺構は、さらに南に拡大する可能性がある。

縄文時代後期の住居跡としては、6号住居跡1軒で方形プランを呈すのに対して、晚期後葉の住居跡と思われる2号・3号住居跡は、円形プランへと変化している。

47基と多く検出された土壙は、明らかに弥生前期に属する8基を除いても39基もあり、その大半が縄文晚期後葉から末の時期のもので、その機能が貯蔵穴とすれば、2軒の住居跡に対して数が多くすぎると思われる。従って、集落は南側にさらに拡大すると考えた方が理解しやすいであろう。また、66点と多い石器類も貴重な資料であり、特に、遺構は検出されていないが石器の残渣であるフレイクやチップが集中して出土しているJ7・8区付近には、石器製作遺構が存在した可能性も考えられる。縄文晚期の集落構成を考える上では、貴重な発見といえる。

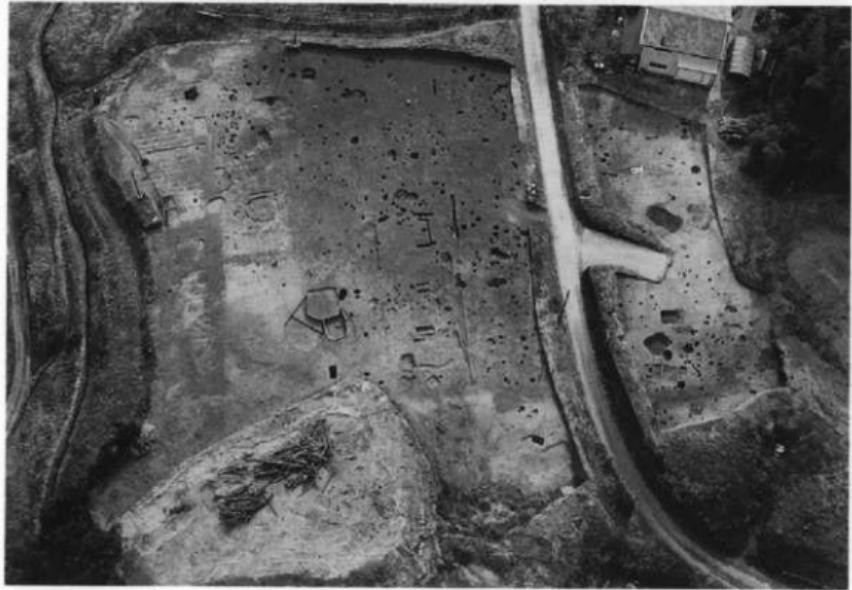
弥生時代の遺構としては、前期後葉の住居跡2軒と土壙8基と少なく、時期的にも短期間に形成された小規模な集落であったと思われる。土壙の中には一般に袋状竪穴と呼ばれている貯蔵穴は6基(18・19・45・47・48・49号)で、いずれも残りの良い土壙であり、縄文時代の遺構ほど削平されておらず、もともと小規模な集落であったことを裏づけるものかもしれない。

中世の遺構としては、数は少ないが竪穴遺構4基と土壙墓4基、土壙3基が検出されている。時期としては2号土壙が12世紀後半と古い他は、全て15世紀後半から末の時期のものである。この時期の遺構は、北半部に分布していて、特に竪穴遺構周辺に集中していることが判る。竪穴遺構の性格については、埋土中にかなりの炭化物が含まれていること、底部穿孔の土器や手捏土器の存在、土鈴の出土などからすれば、埋葬に伴う祭祀を行った遺構と考えた方が良いだろう。その意味では竪穴遺構が同じ場所で重複していることも同一の性格を物語るものとも言えるだろう。また、切り合い関係から少なくとも4回の祭祀が行われたと言える。土壙とした14・15号土壙はその位置・時期からしても土壙墓とするのが最も妥当かもしれない。それにしても小規模な墓地ではあるが、墓と祭祀遺構がセットで発見されたことは大きな成果である。

図 版



(1) 上池田遺跡周辺全景空中写真



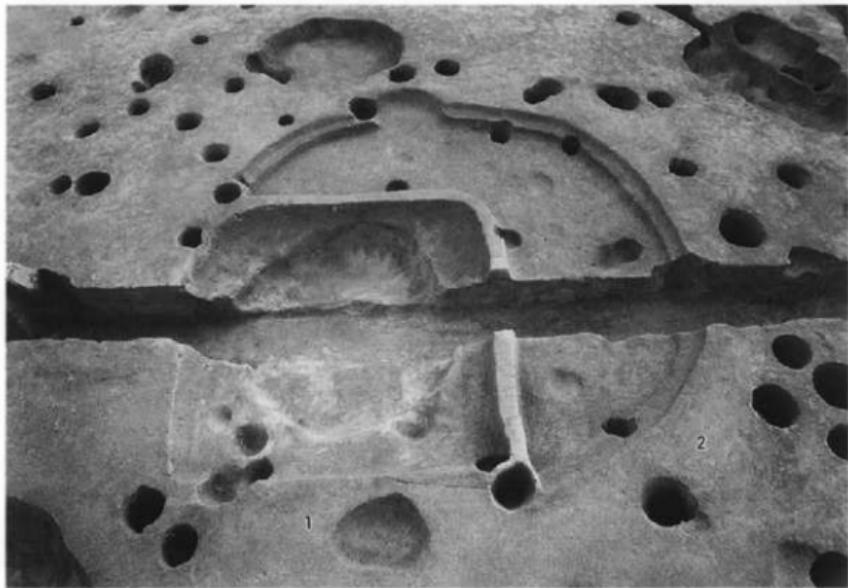
(2) 上池田遺跡全景空中写真



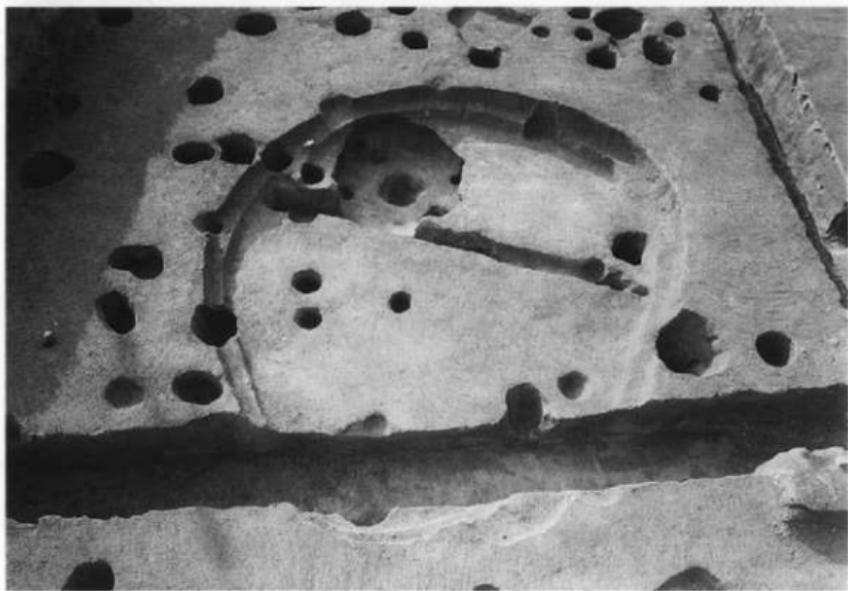
(1) 発掘区東半部全景



(2) 発掘区西半部全景



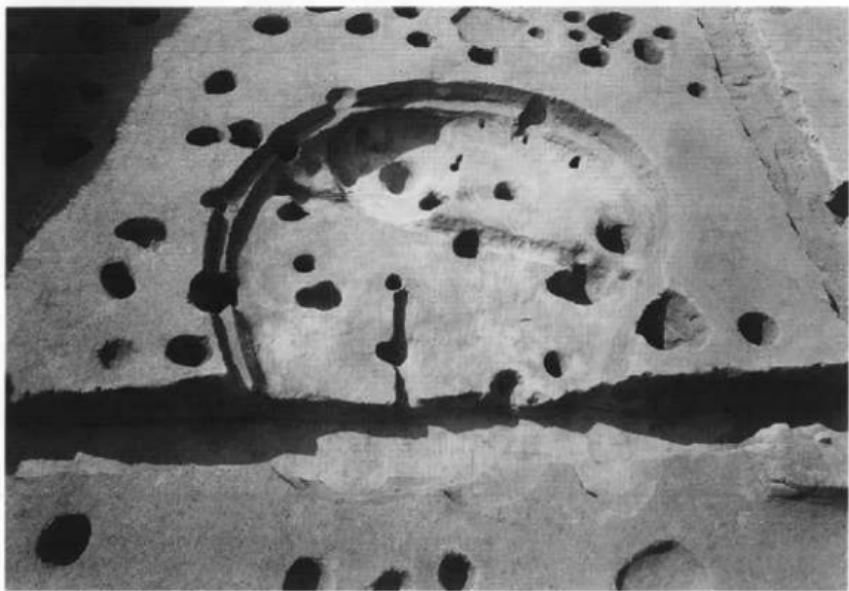
(1) 1・2号住居跡（西から）



(2) 3号住居跡（東から）



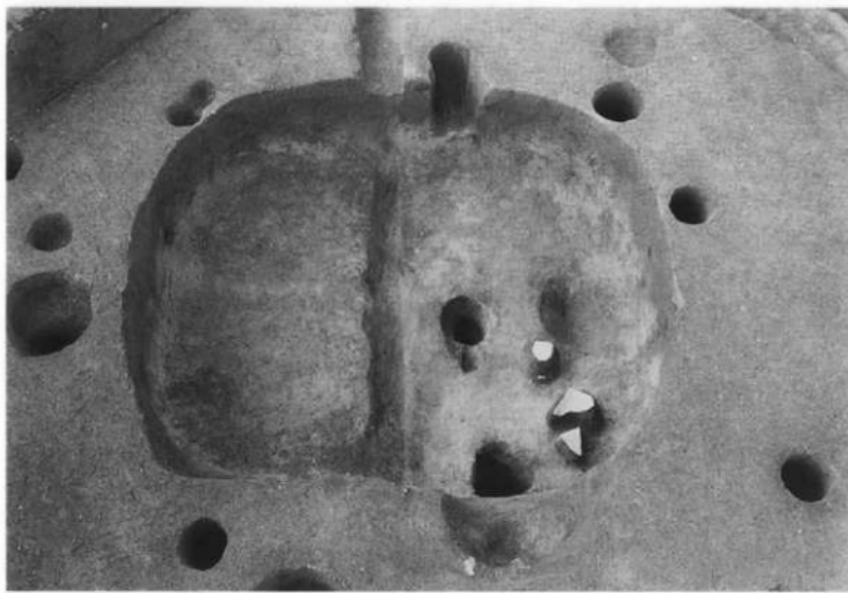
(1) 3号住居跡内堆積土層断面（西から）



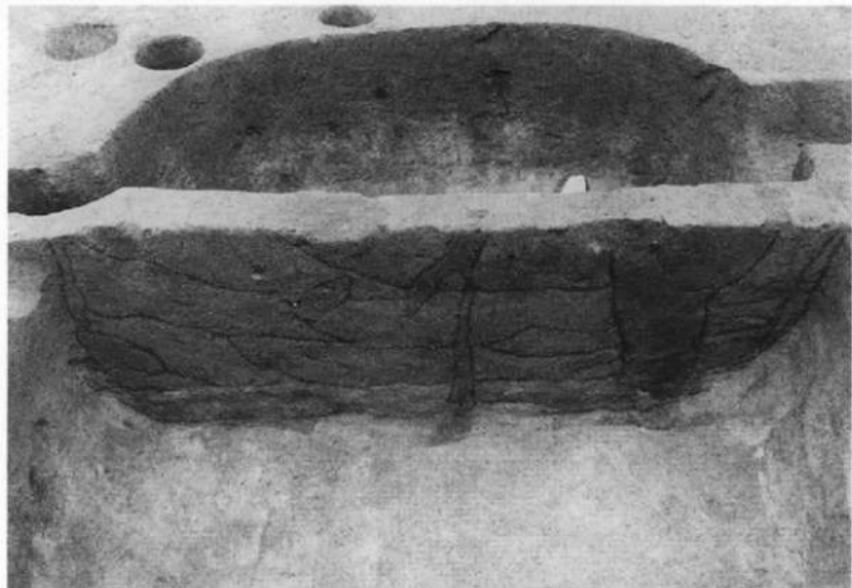
(2) 3号住居跡下層（東から）



(1) 4号住居跡（北から）



(2) 5号住居跡（南から）



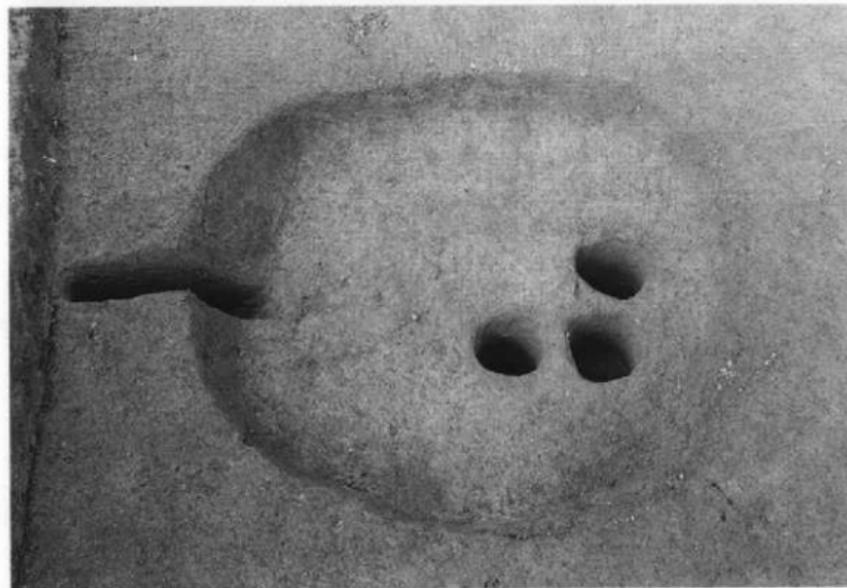
(1) 5号住居跡内堆積土層断面（東から）



(2) 6号住居跡（西から）



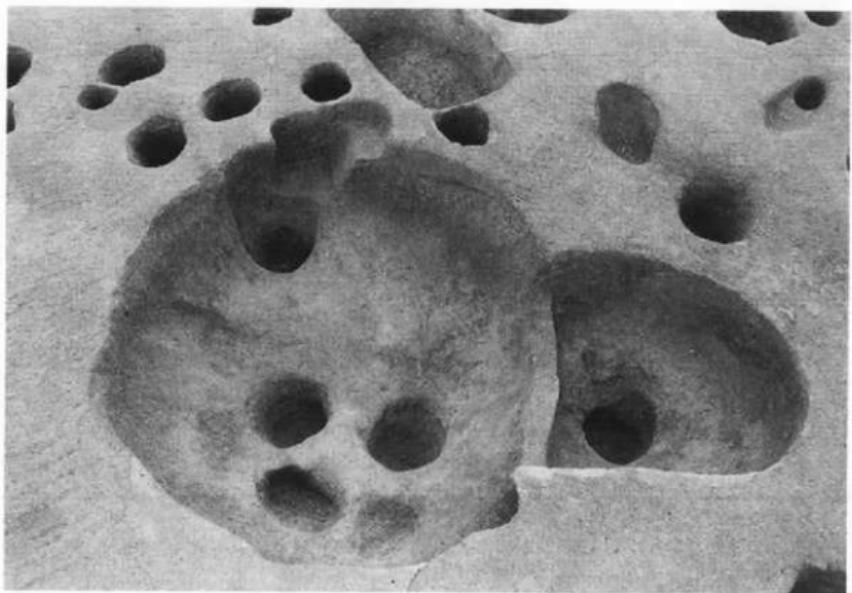
(1) 1号土壤 (東から)



(2) 2号土壤 (東から)



(1) 3号土壤 (東から)



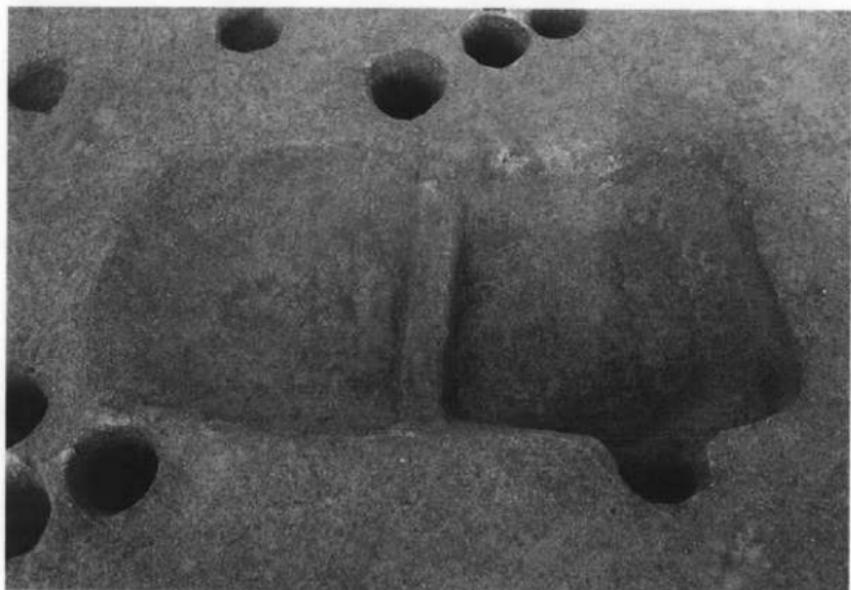
(2) 4号土壤 (北から)



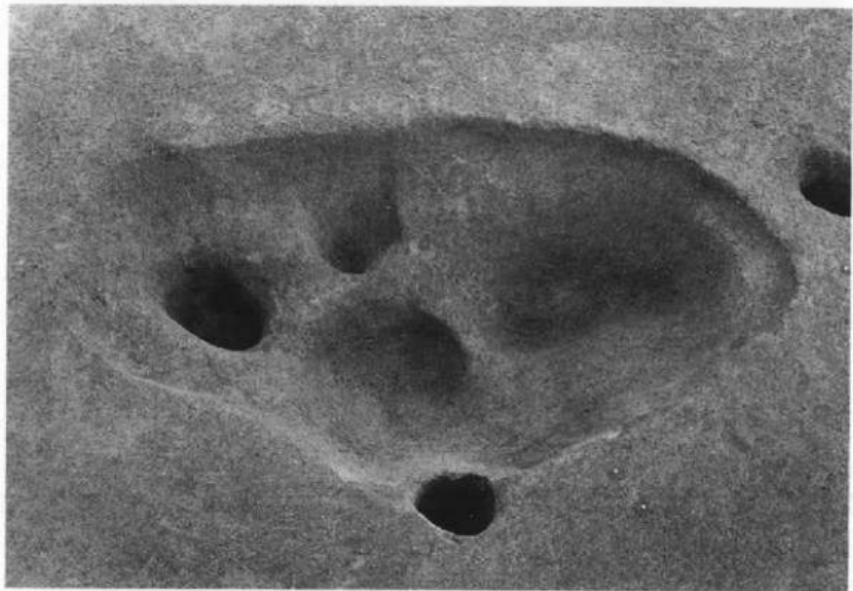
(1) 7号土壤(南から)



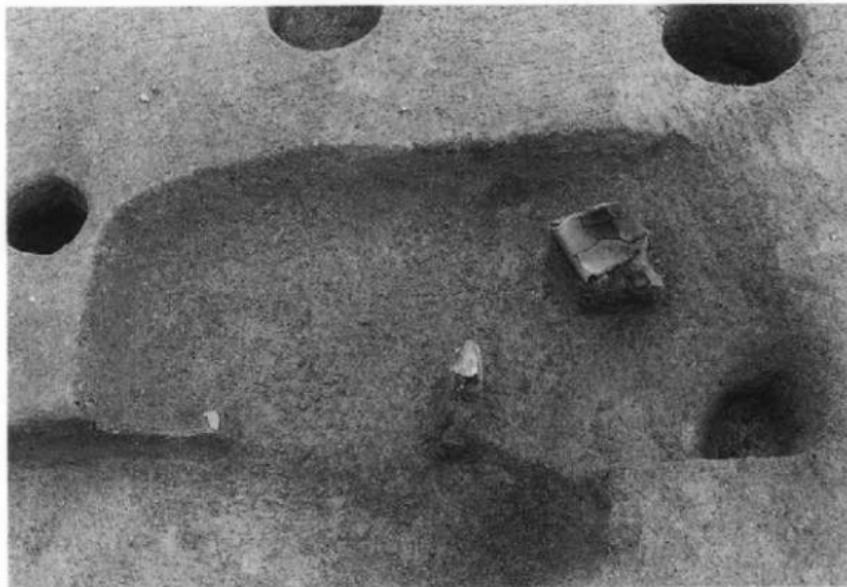
(2) 8・9・20号土壤(南から)



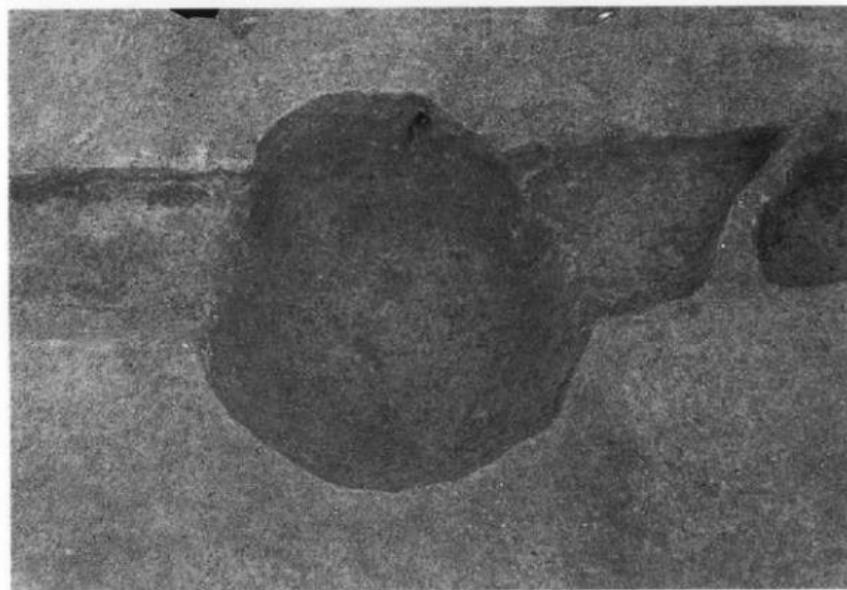
(1) 10号土壤（南から）



(2) 11号土壤（北から）



(1) 12号土壤（西から）



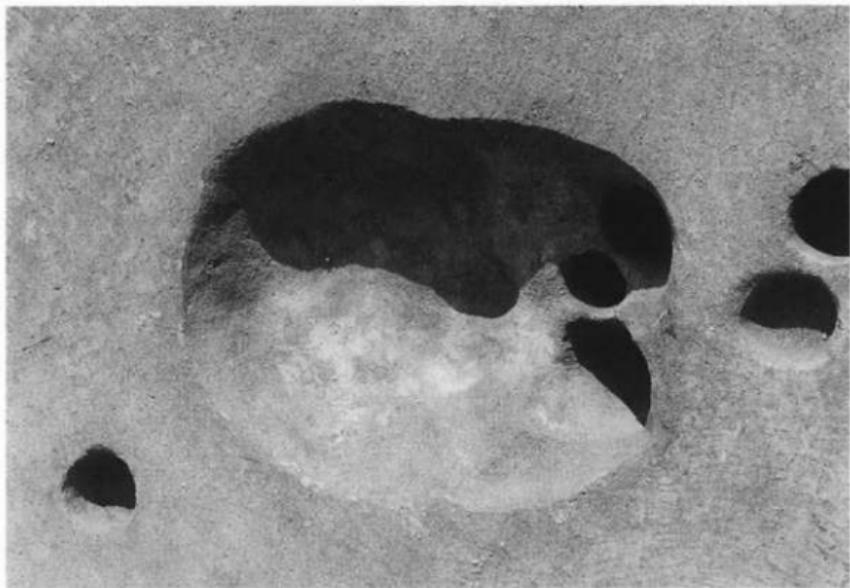
(2) 15号土壤（西から）



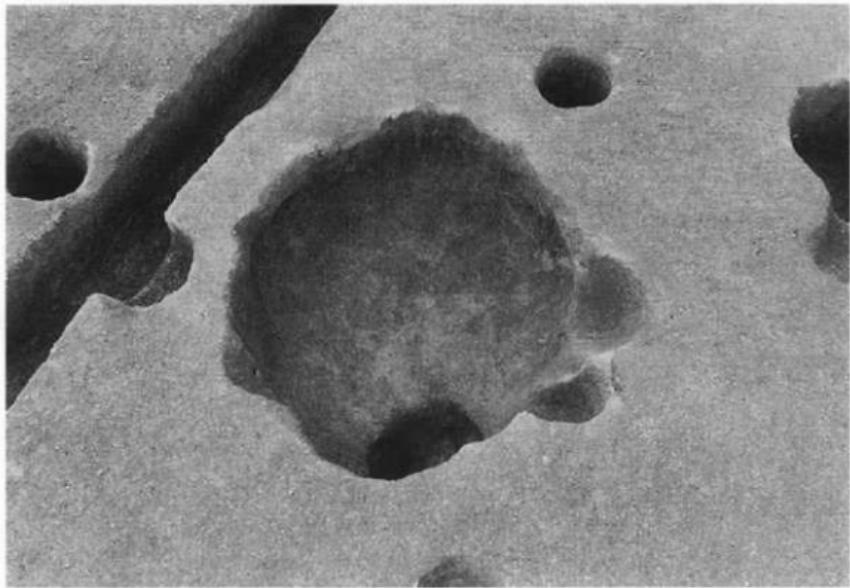
(1) 18号土壤 (北から)



(2) 19号土壤 (南から)



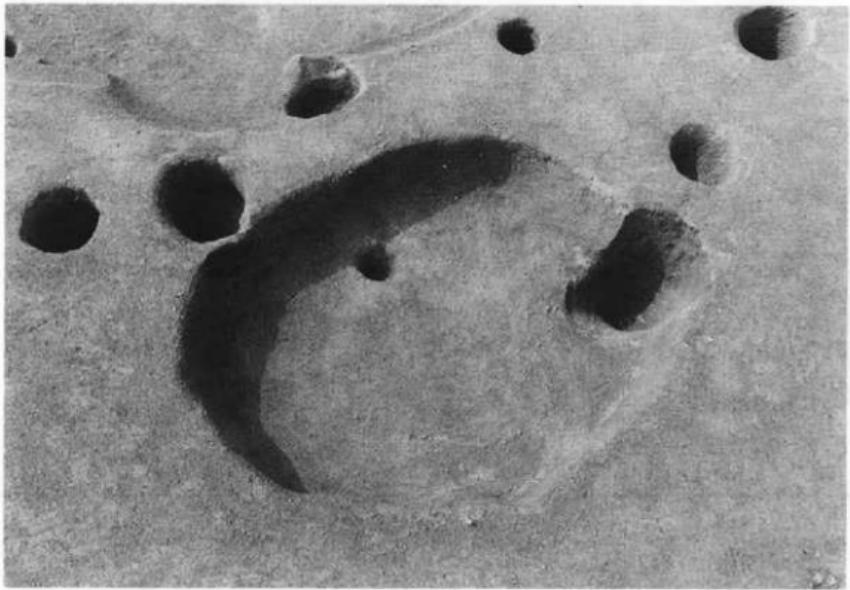
(1) 21号土壤 (北西から)



(2) 22号土壤 (東から)



(1) 23号土壤（東から）



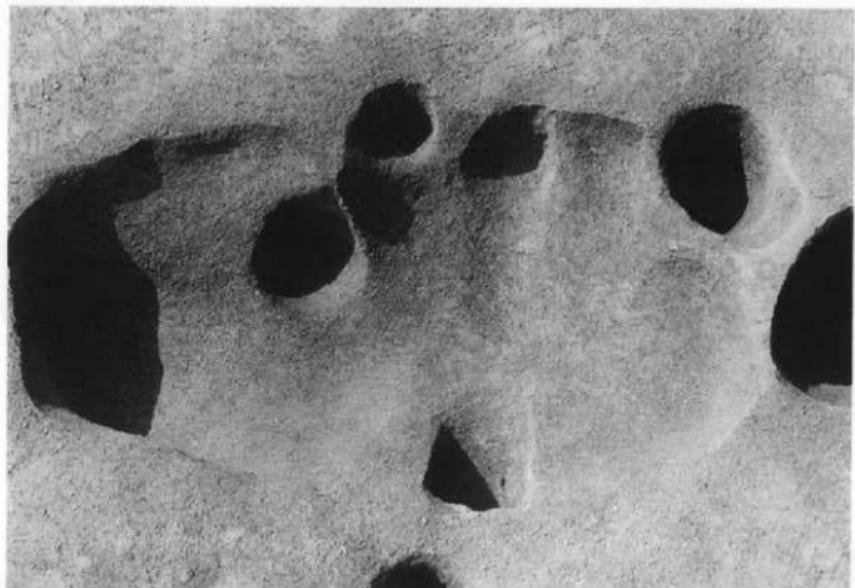
(2) 24号土壤（東から）



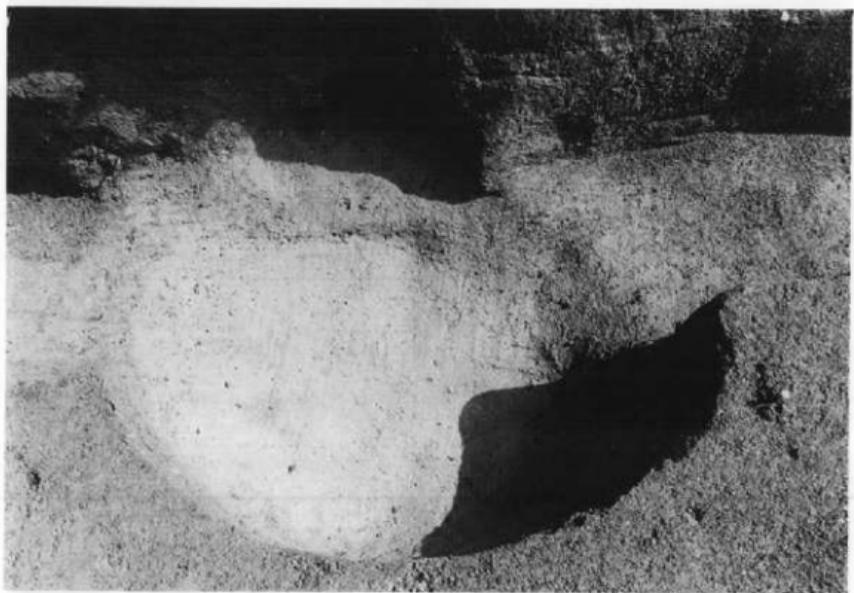
(1) 26・27号土壤(西から)



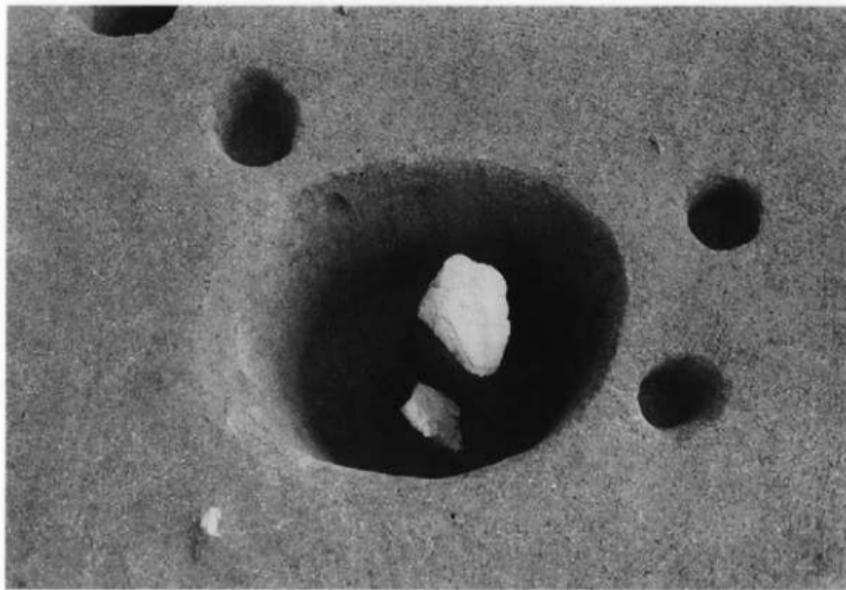
(2) 28号土壤(南西から)



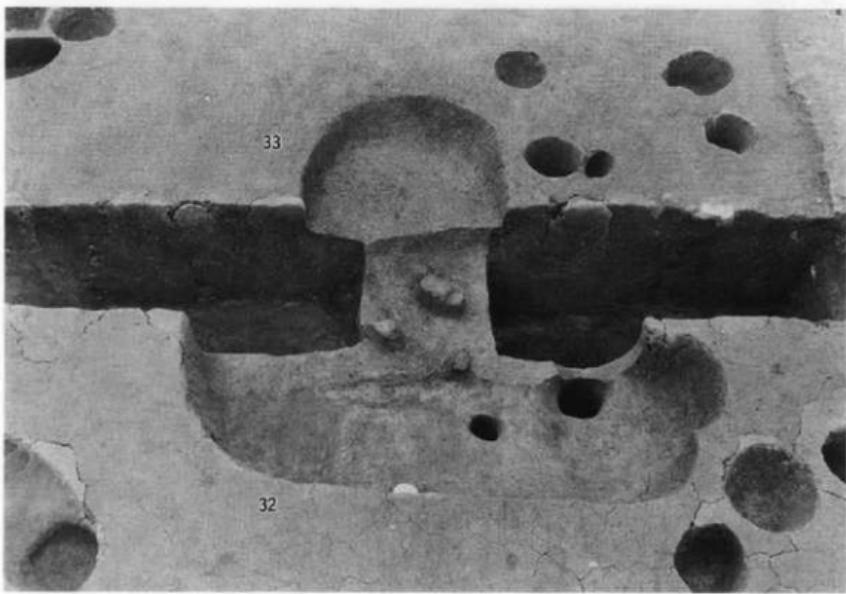
(1) 29号土壤（北東から）



(2) 30号土壤（西から）

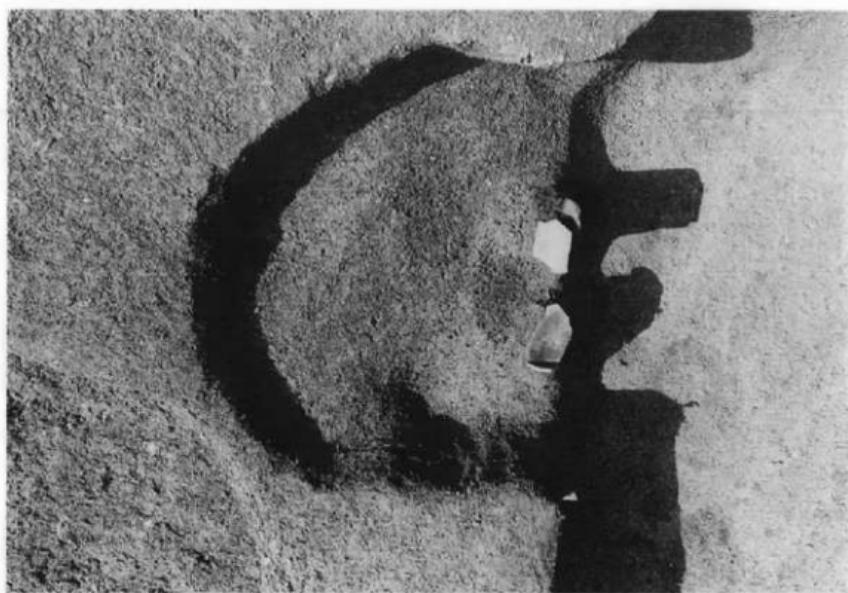


(1) 31号土壤 (東から)

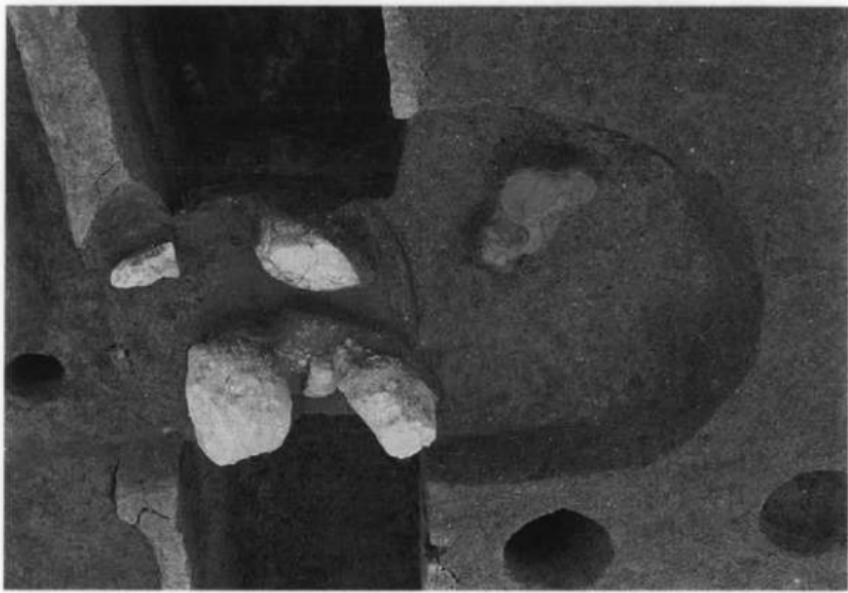


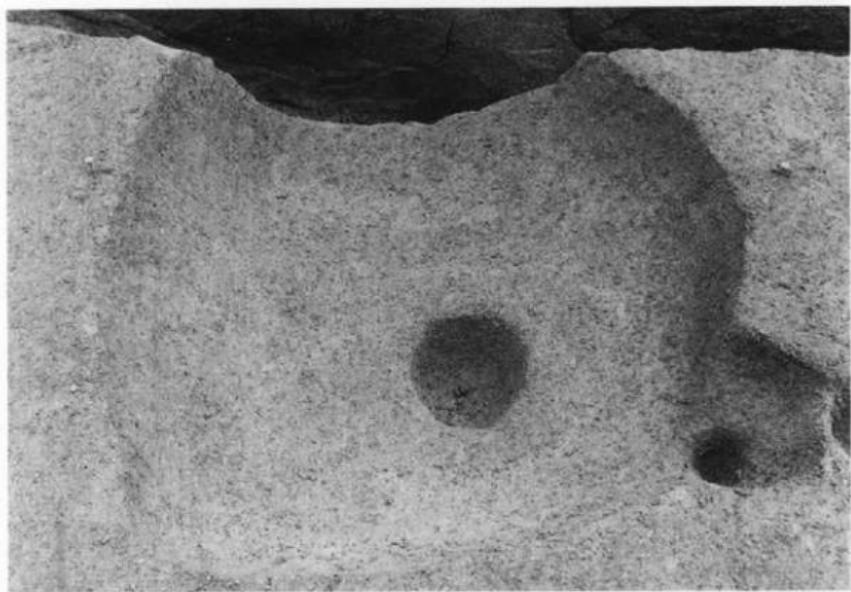
(2) 32・33号土壤 (南から)

(2) 36号土器(馬印文)



(3) 33号土器(馬印文)(1)





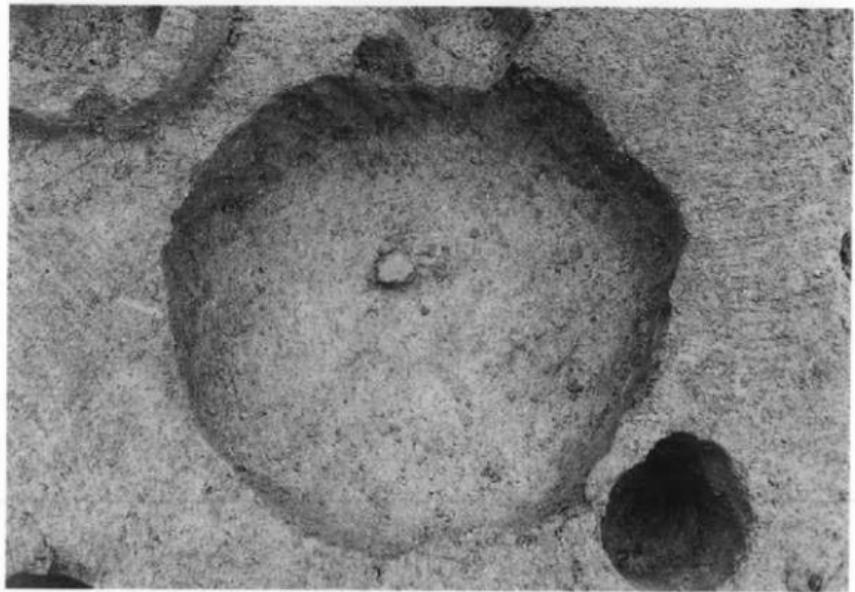
(1) 37号土壤 (西から)



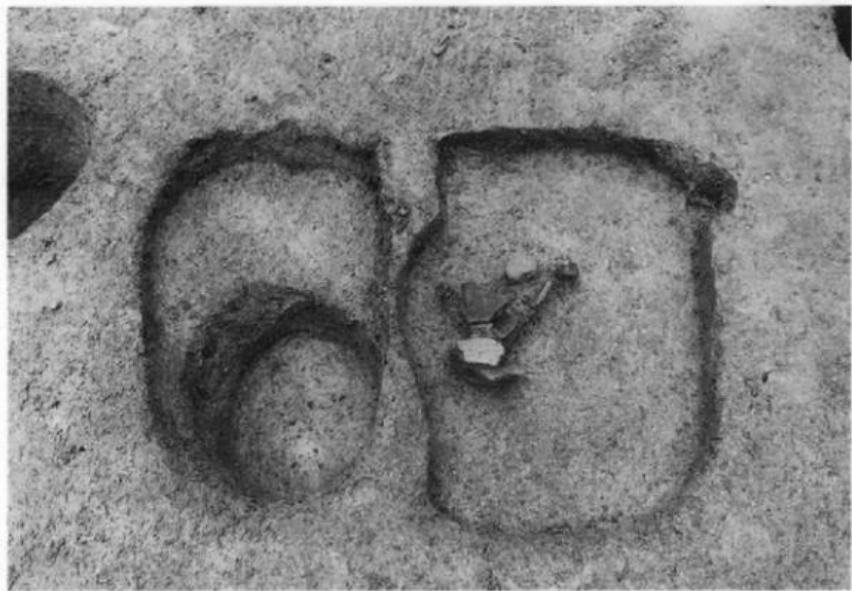
(2) 38号土壤 (北から)



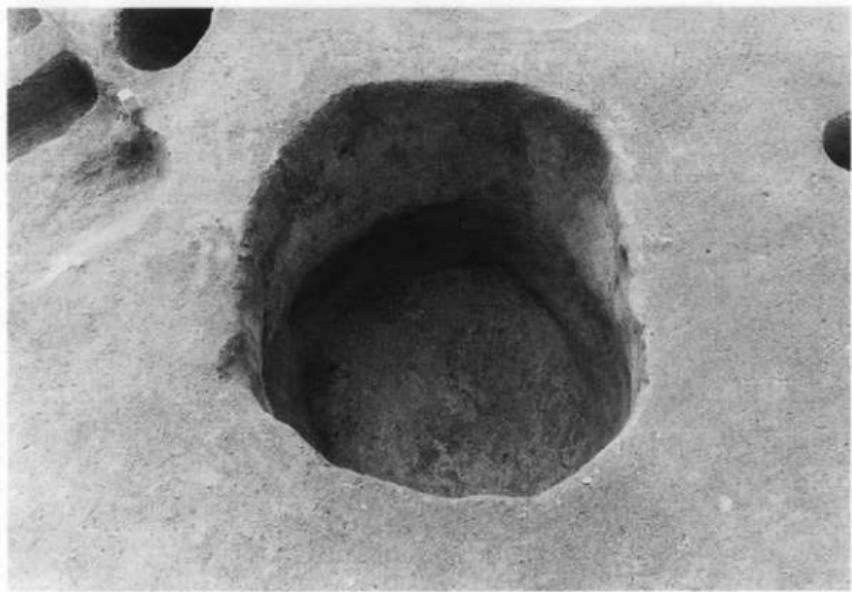
(1) 40号土壤（北西から）



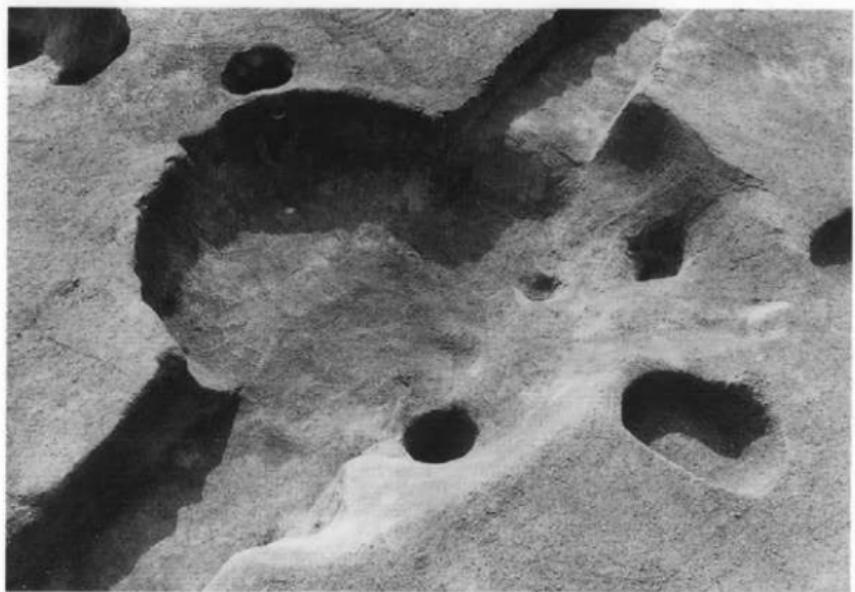
(2) 41号土壤（南から）



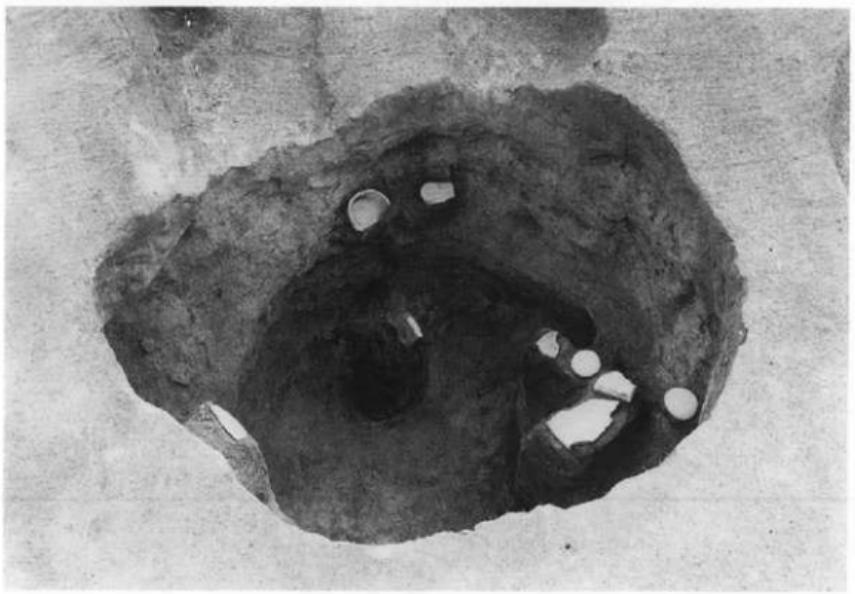
(1) 42号土壤 (北から)



(2) 45号土壤 (北東から)



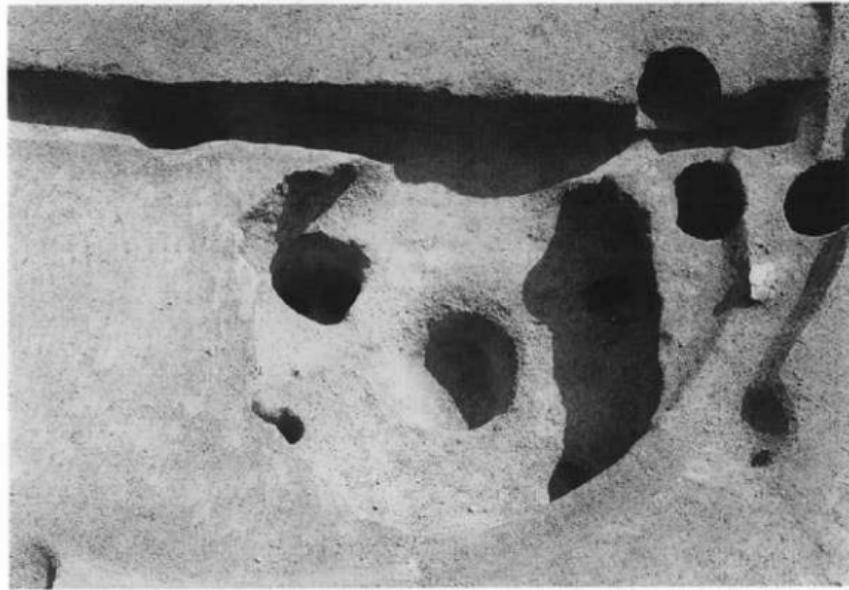
(1) 46号土壤 (北東から)



(2) 47号土壤 (北から)



(1) 48号土壤 (東から)



(2) 49号土壤 (東から)



(1) 1 ~ 4号竖穴群全景 (西から)



(2) 1号竖穴 (西から)



(1) 2・3号竪穴（西から）



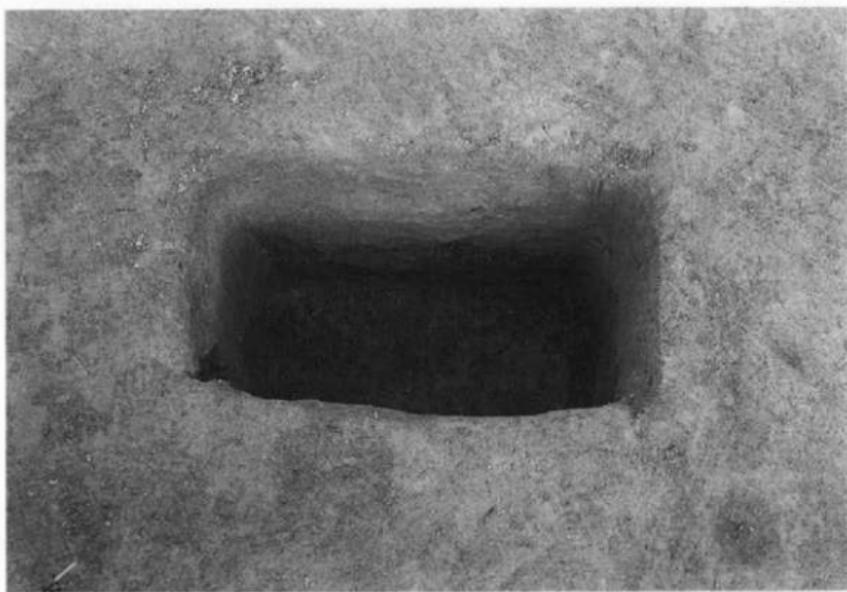
(2) 4号竪穴（東から）



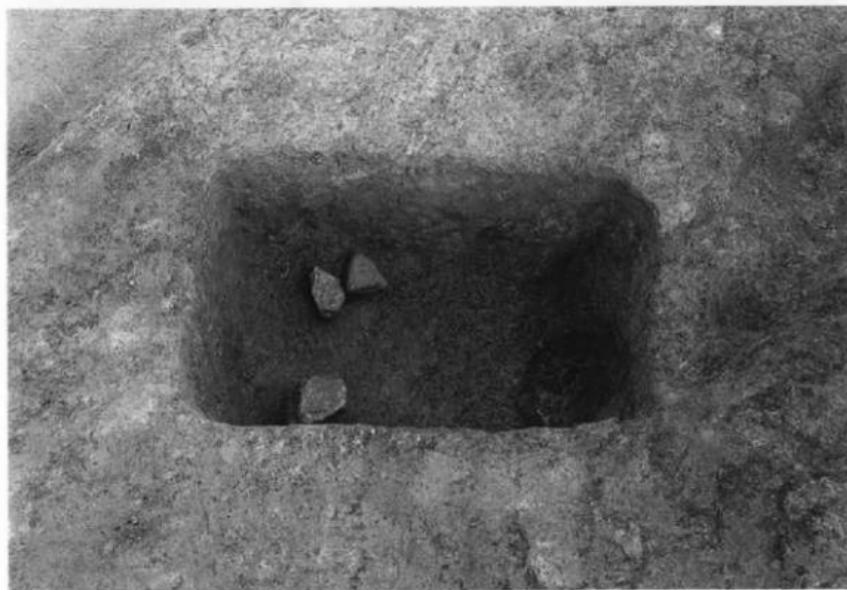
(1) 1号土壙墓（北東から）



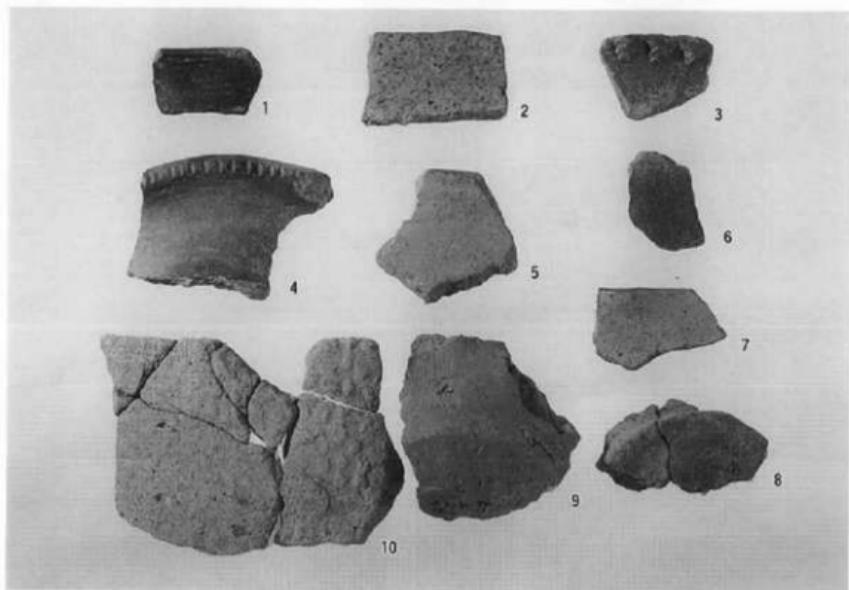
(2) 供獻された土器



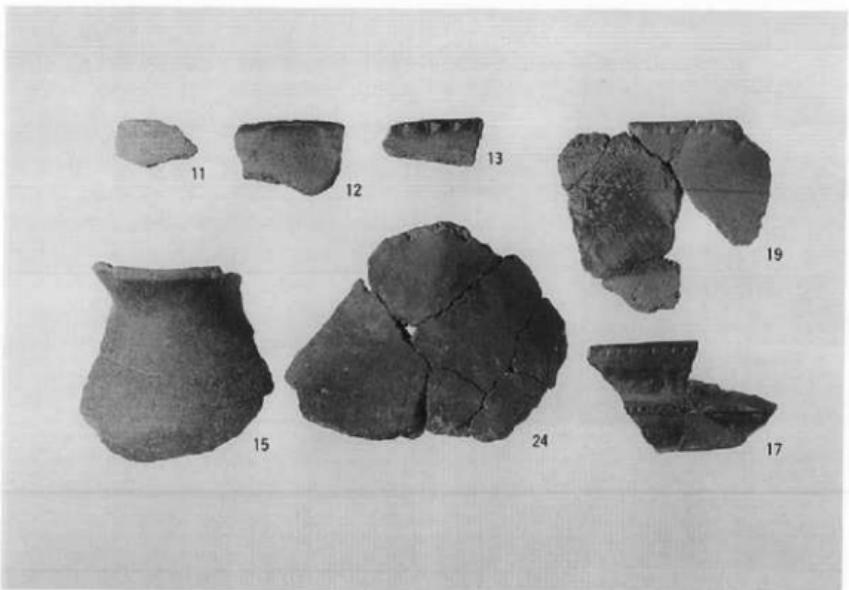
(1) 2号土塚墓（西から）



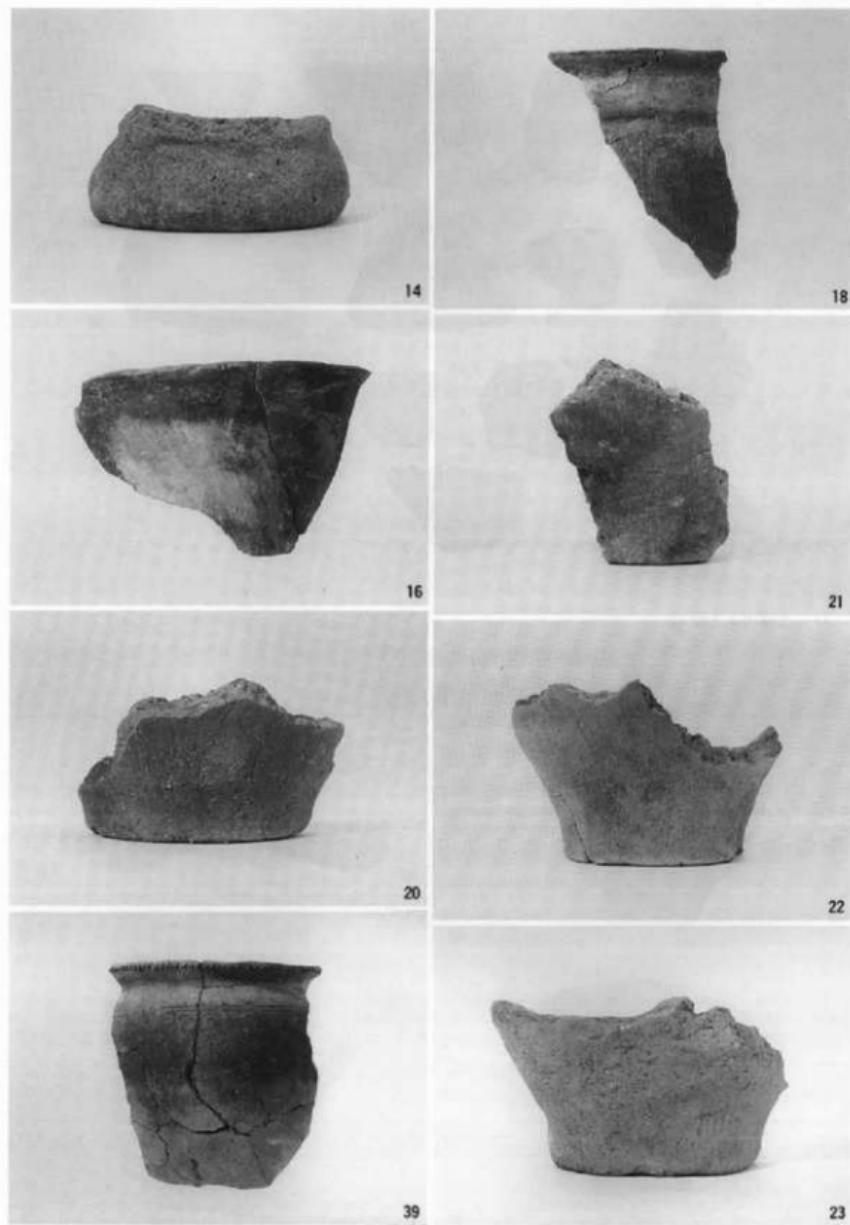
(2) 3号土塚墓（南から）



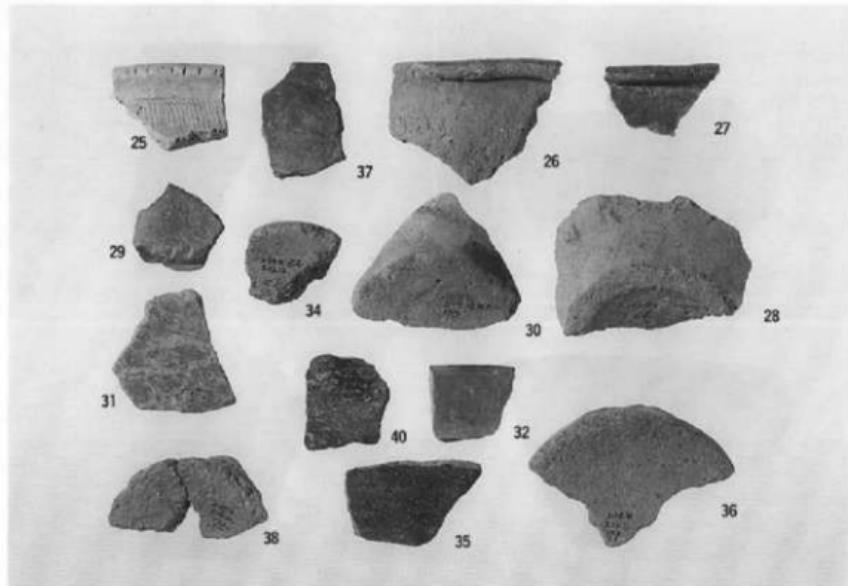
(1) 住居跡出土土器 ①



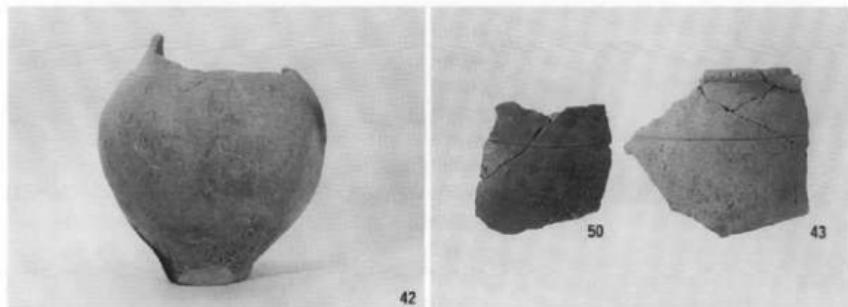
(2) 住居跡出土土器 ②



住居跡・土壤出土土器



(1) 土壤出土土器 ①



42

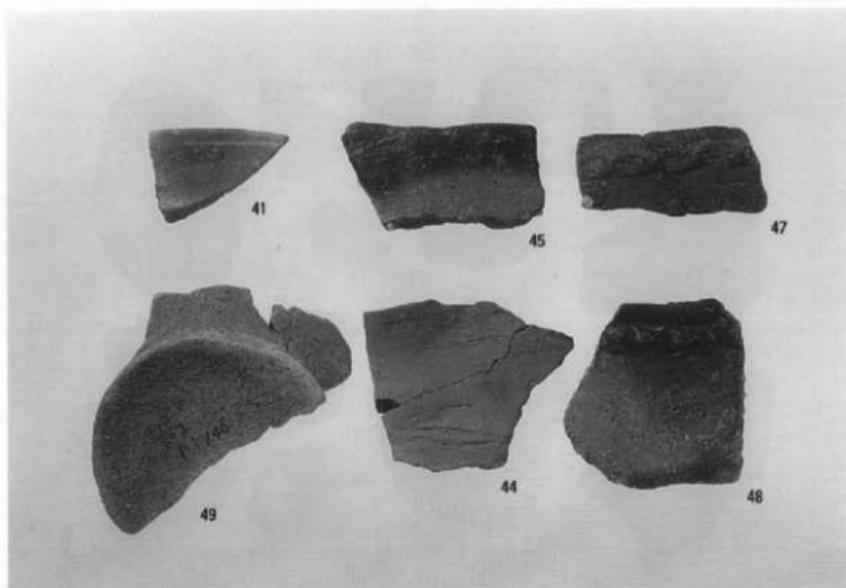
50

43

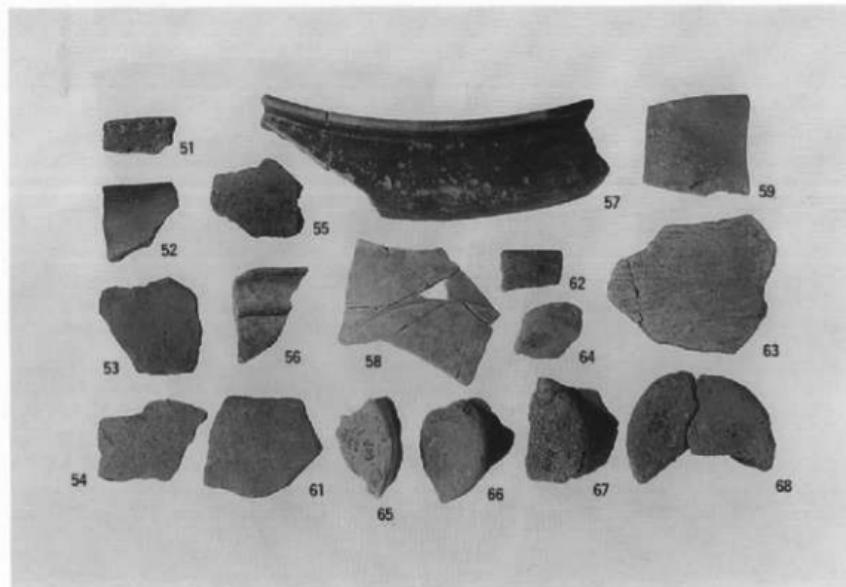
86

89

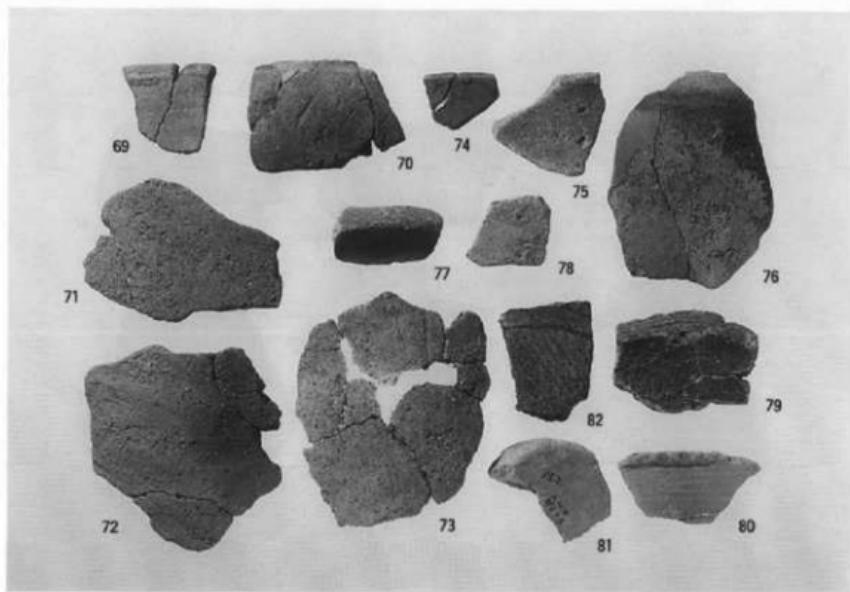
(2) 土壤出土土器 ②



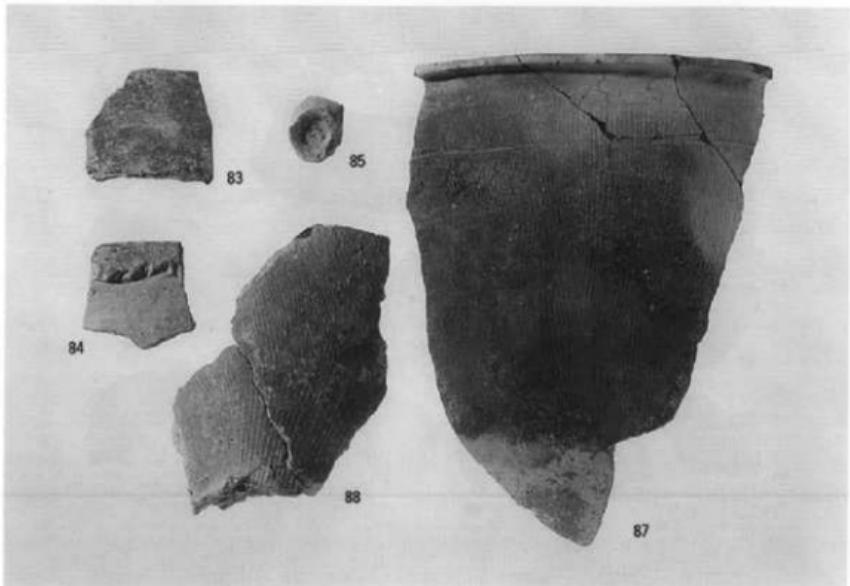
(1) 土壤出土土器 ③



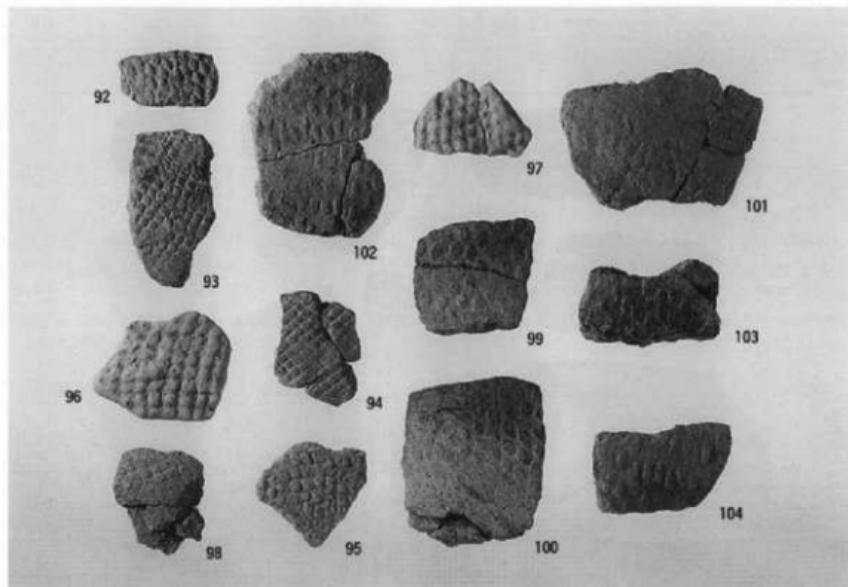
(2) 土壤出土土器 ④



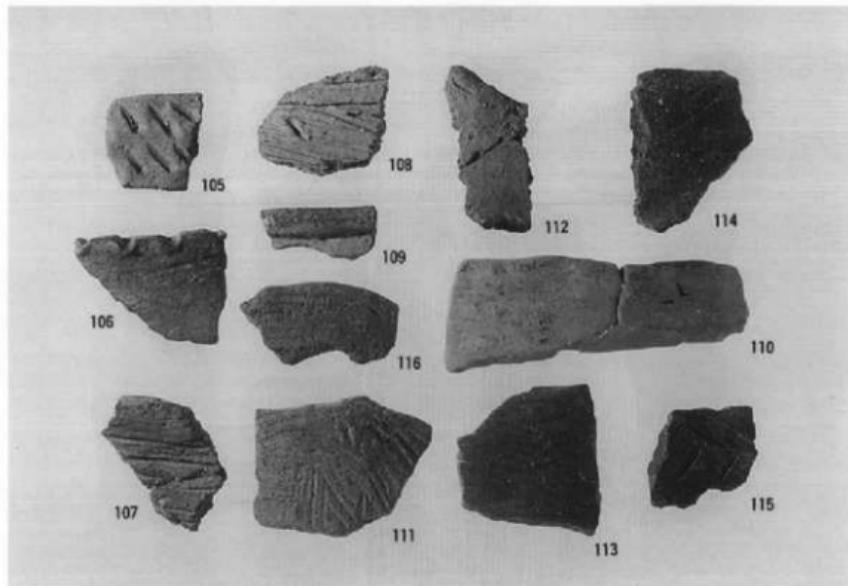
(1) 土壤出土土器 ⑤



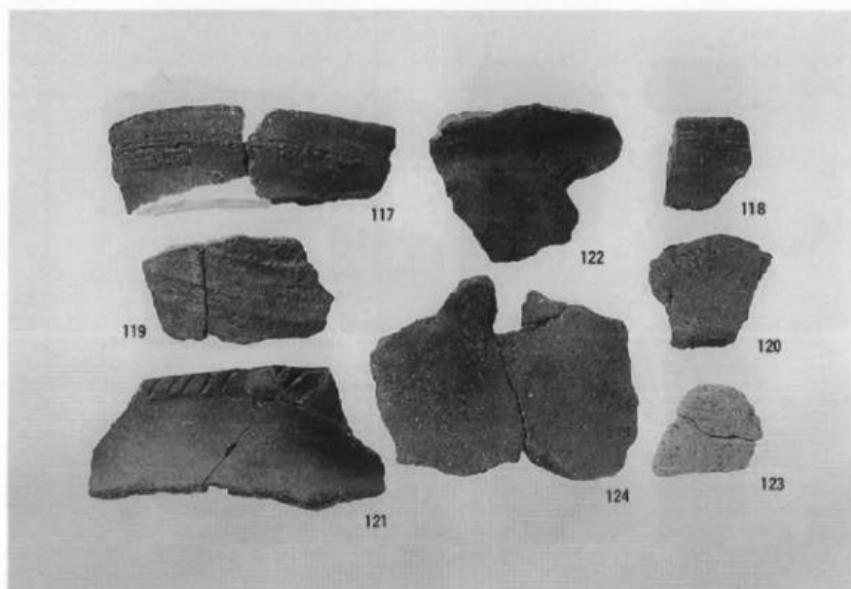
(2) 土壤出土土器 ⑥



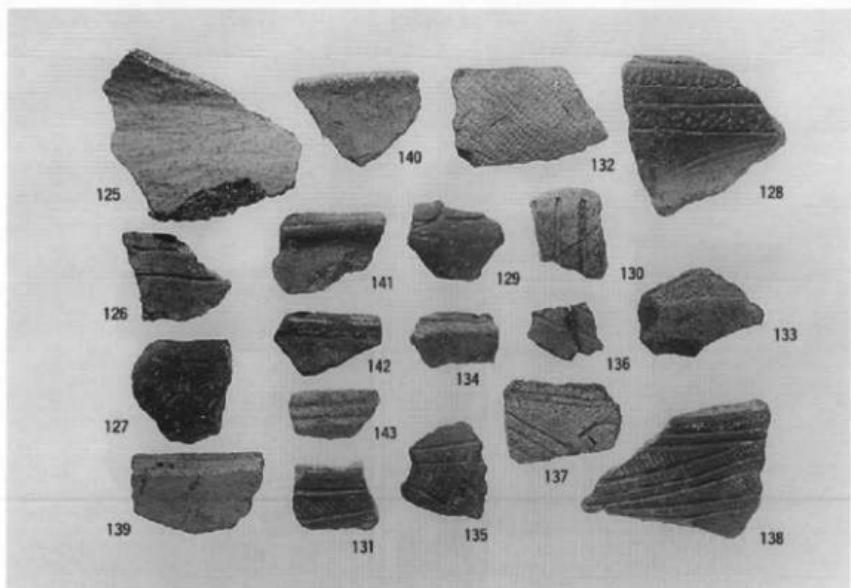
(1) 包含壠出土繩文早期土器



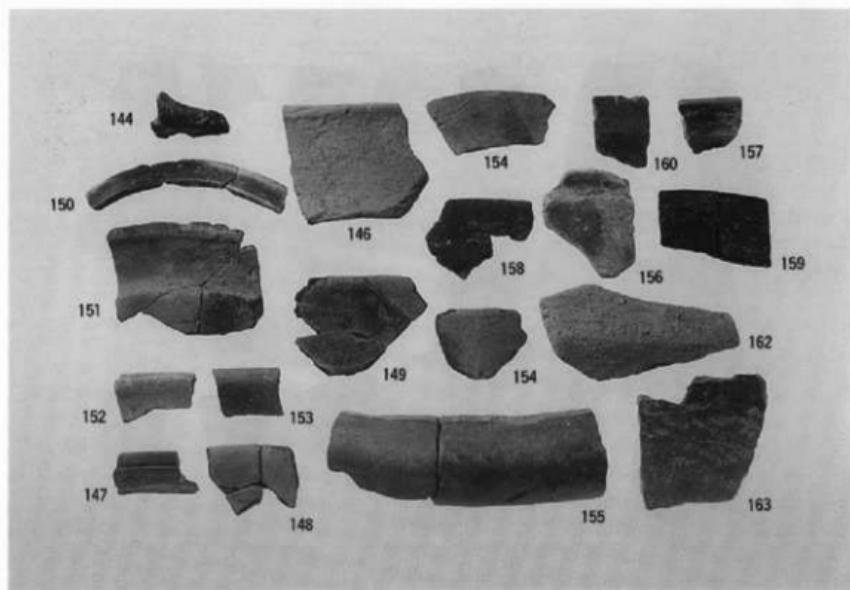
(2) 包含壠出土繩文中·後期土器



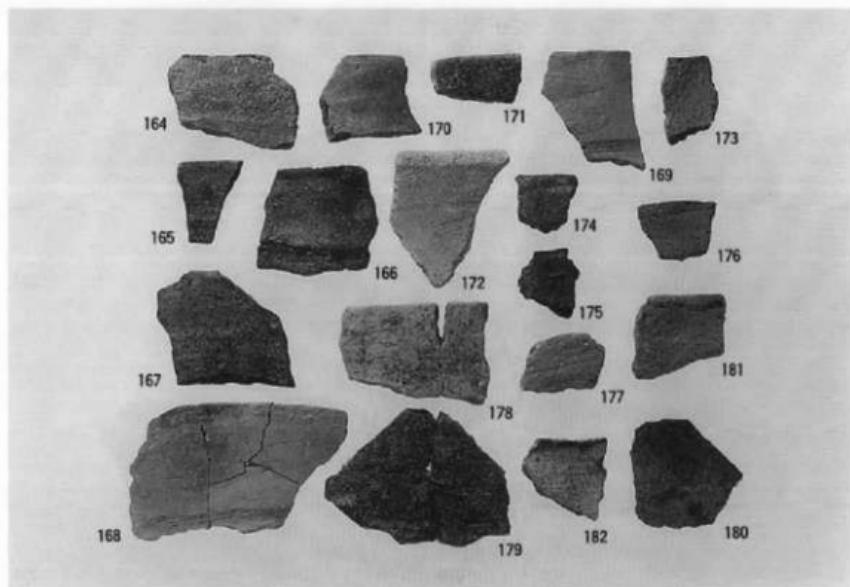
(1) 包含層出土繩文後期土器 ①



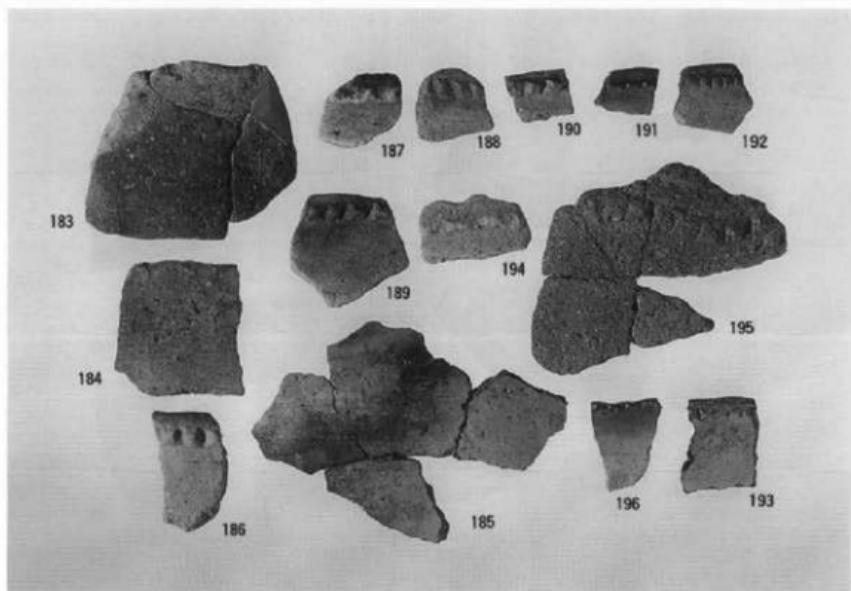
(2) 包含層出土繩文後期土器 ②



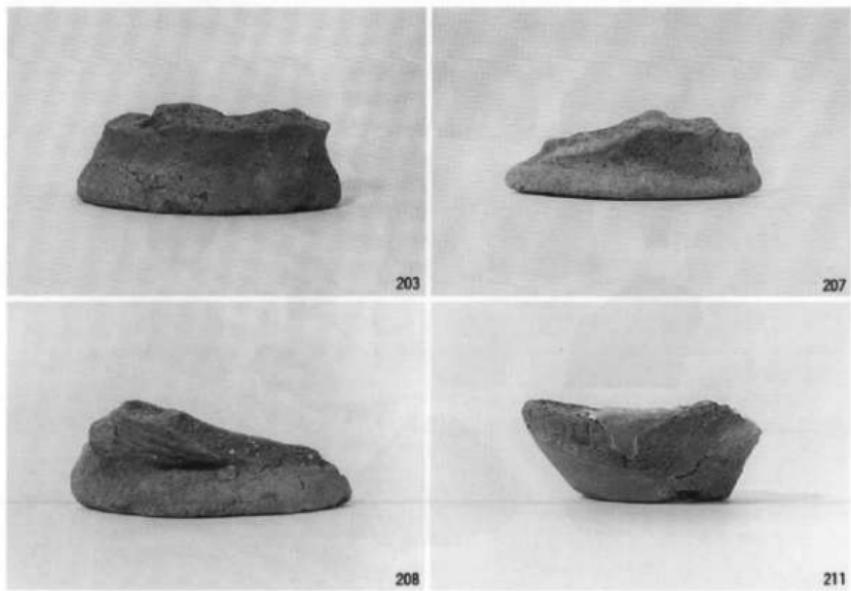
(1) 包含層出土繩文晚期土器 ①



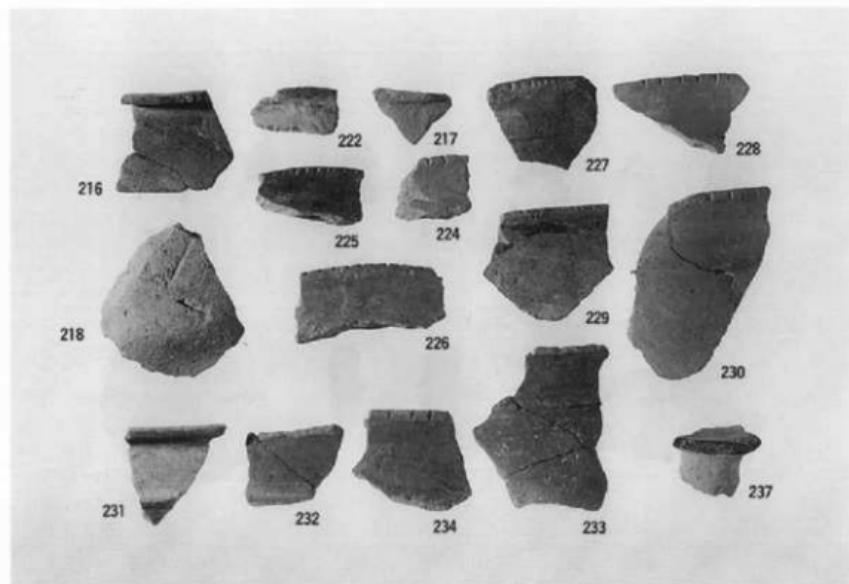
(2) 包含層出土繩文晚期土器 ②



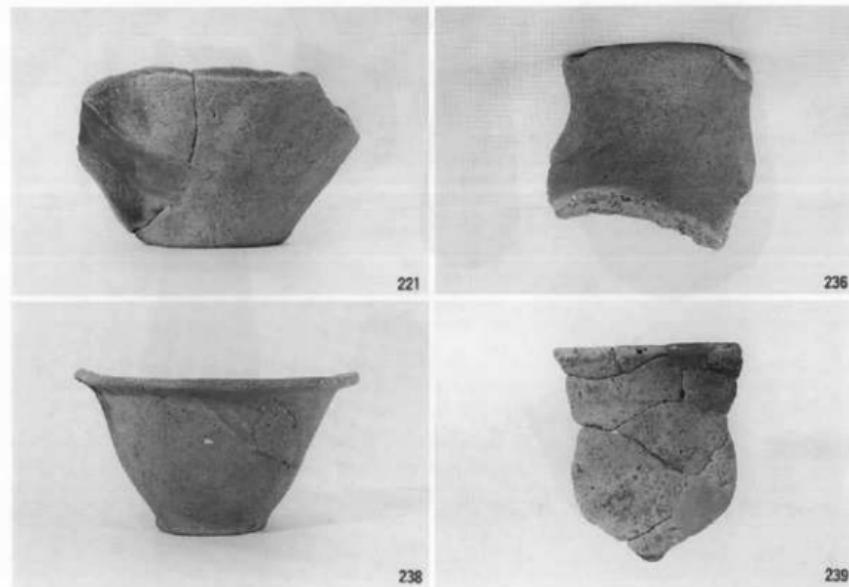
(1) 包含層出土繩文晚期土器 ③



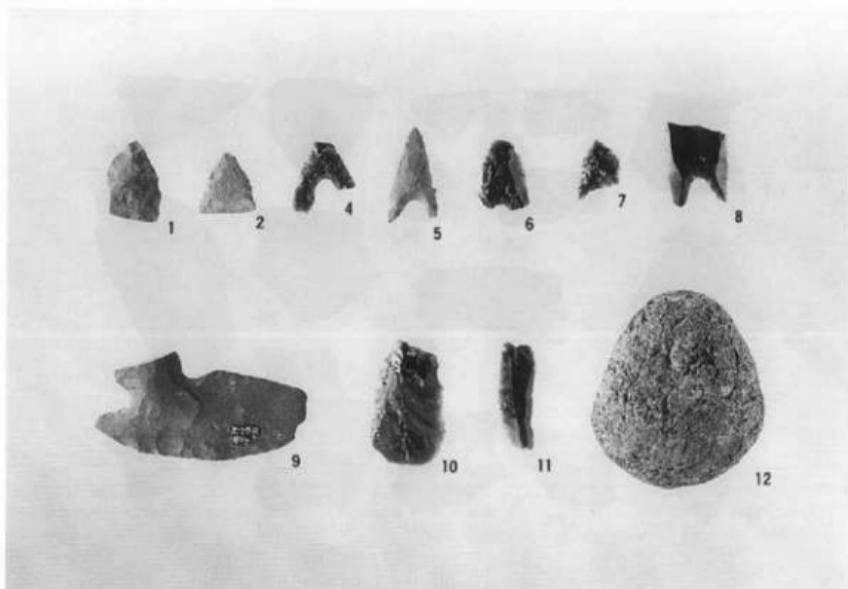
(2) 包含層出土繩文晚期土器 ④



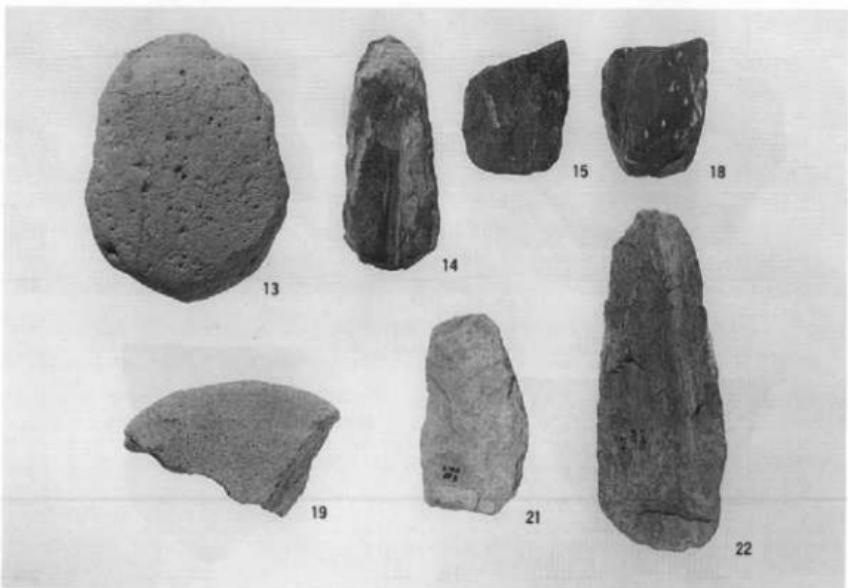
(1) 包含層出土弥生土器 ①



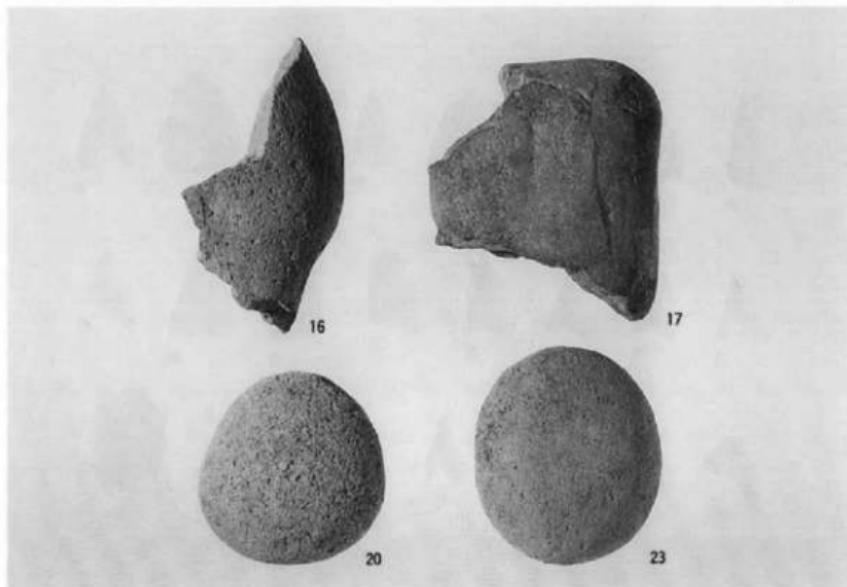
(2) 包含層出土弥生土器 ②



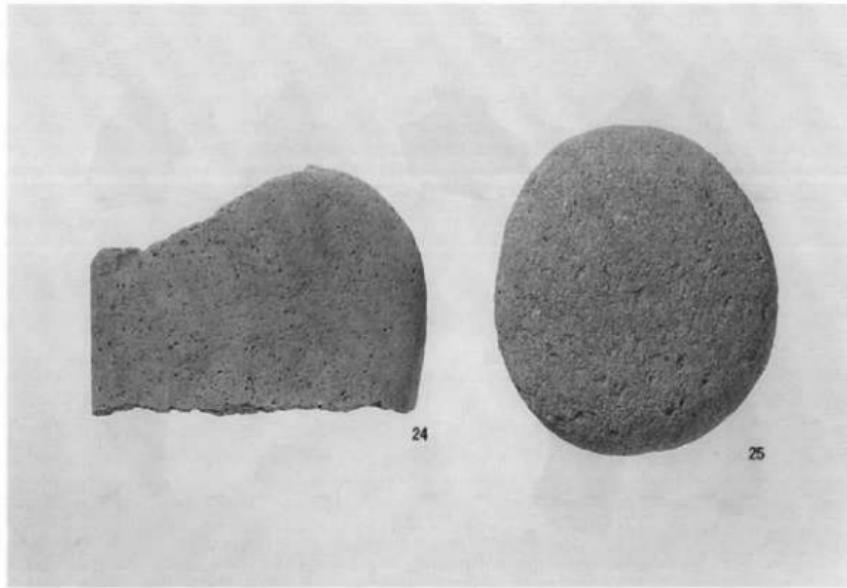
(1) 住居跡・土壤出土石器 ①



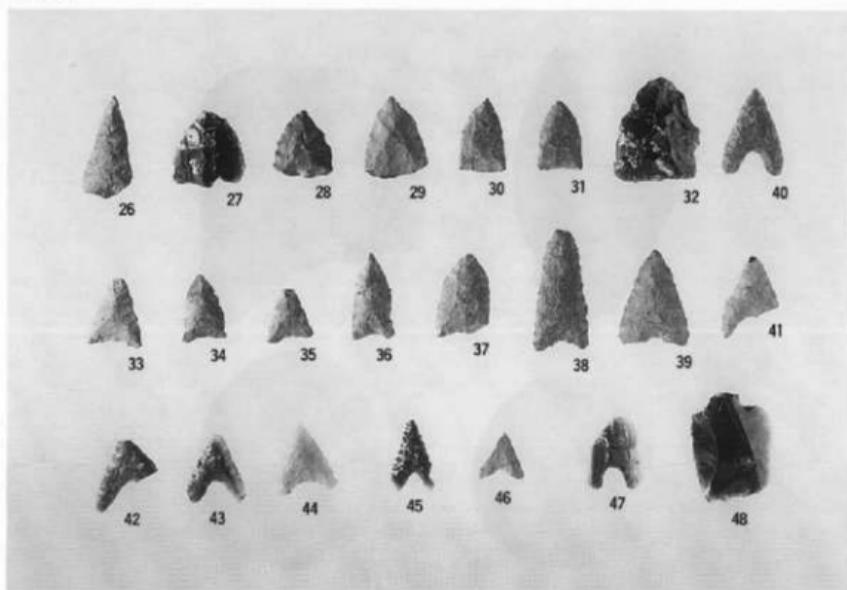
(2) 住居跡・土壤出土石器 ②



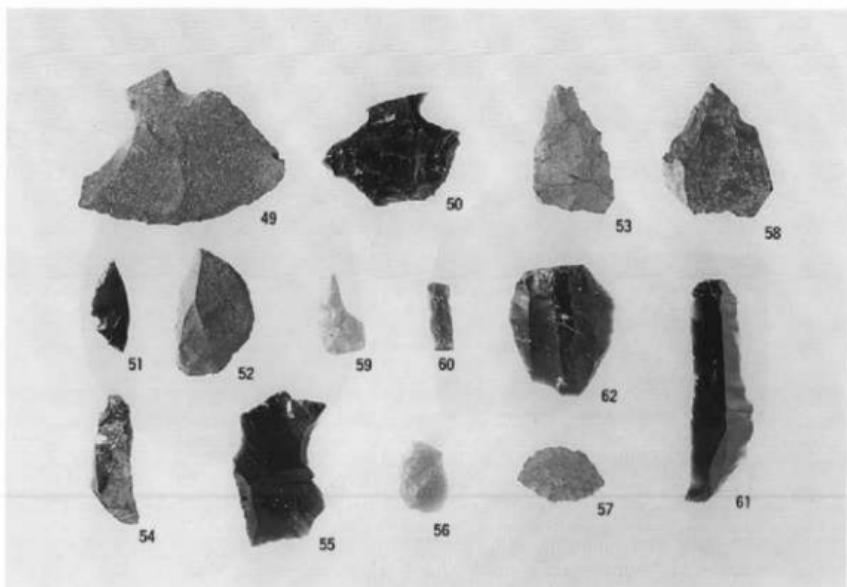
(1) 土壤出土石器 ①



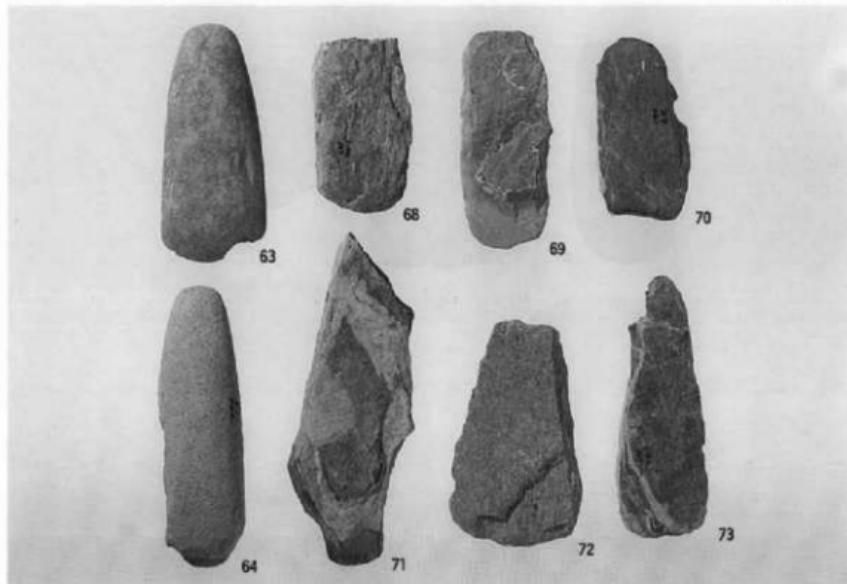
(2) 土壤出土石器 ②



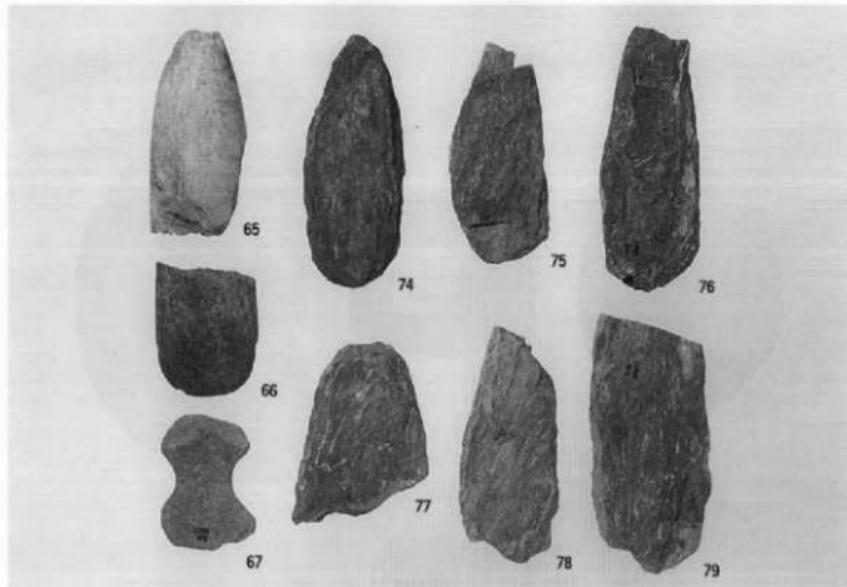
(1) 包含层出土石器 ①



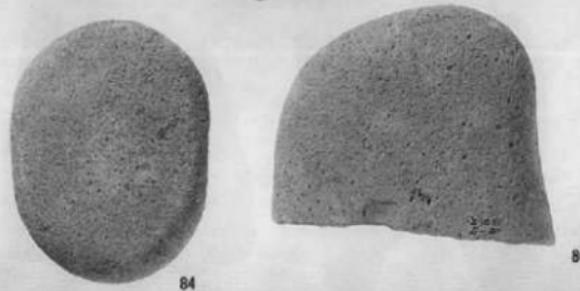
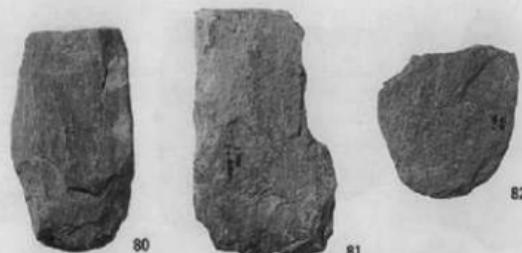
(2) 包含层出土石器 ②



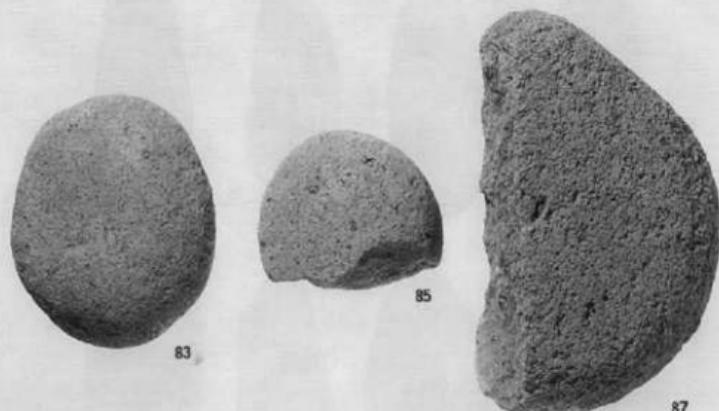
(1) 包含层出土石器 ③



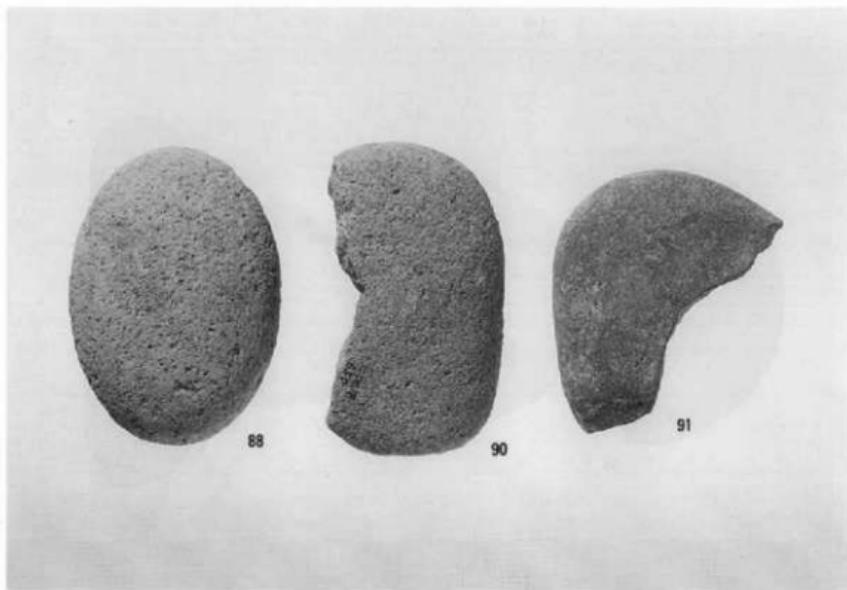
(2) 包含层出土石器 ④



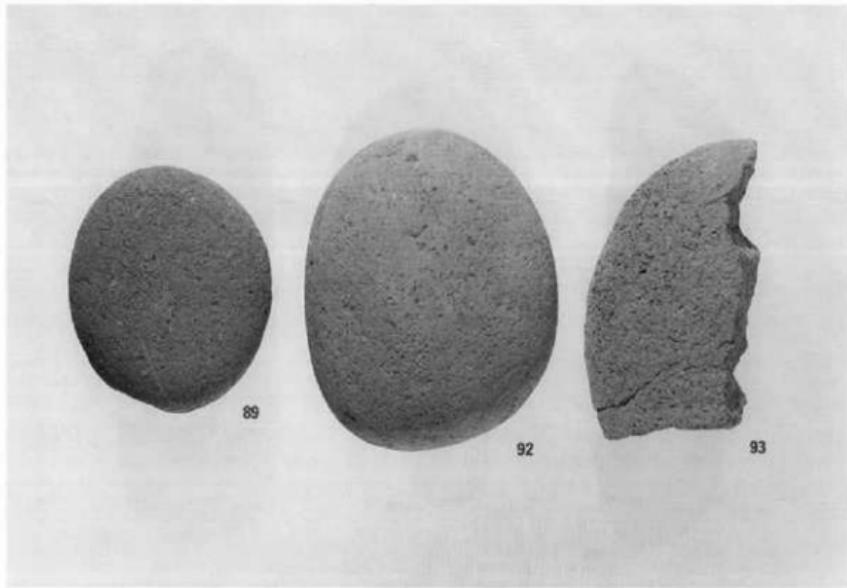
(1) 包含層出土石器 ⑤



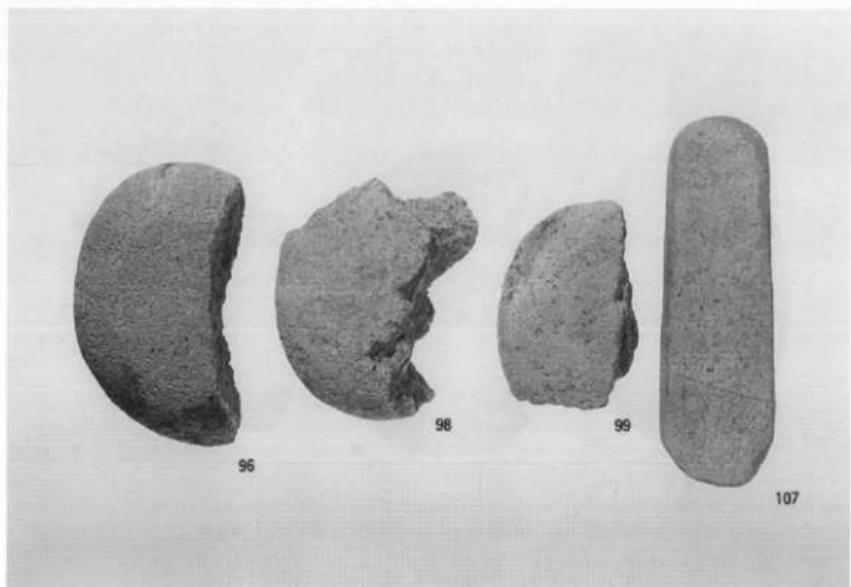
(2) 包含層出土石器 ⑥



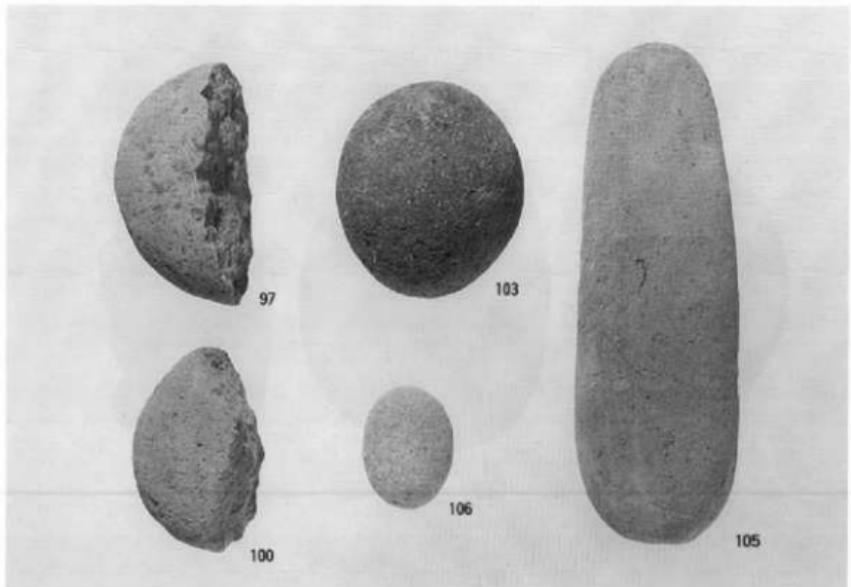
(1) 包含砾出土石器 ⑦



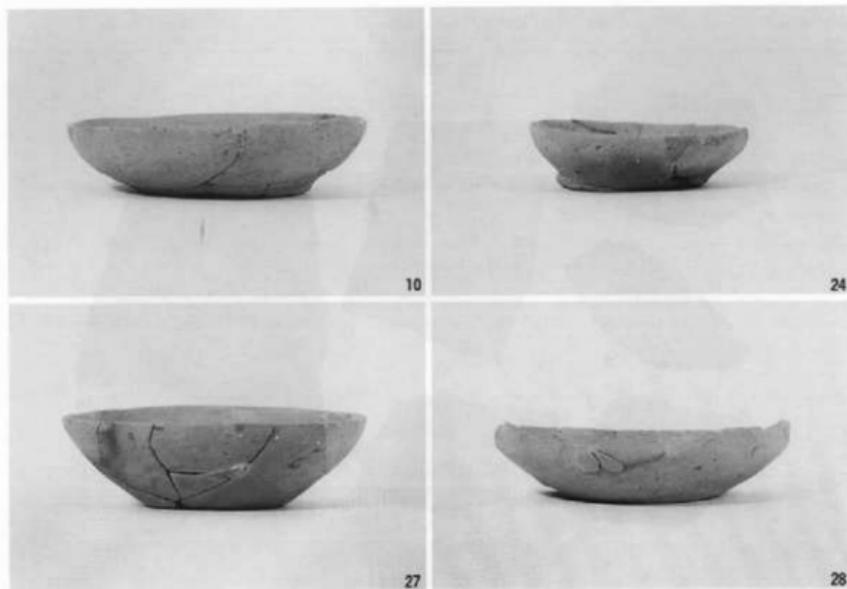
(2) 包含砾出土石器 ⑧



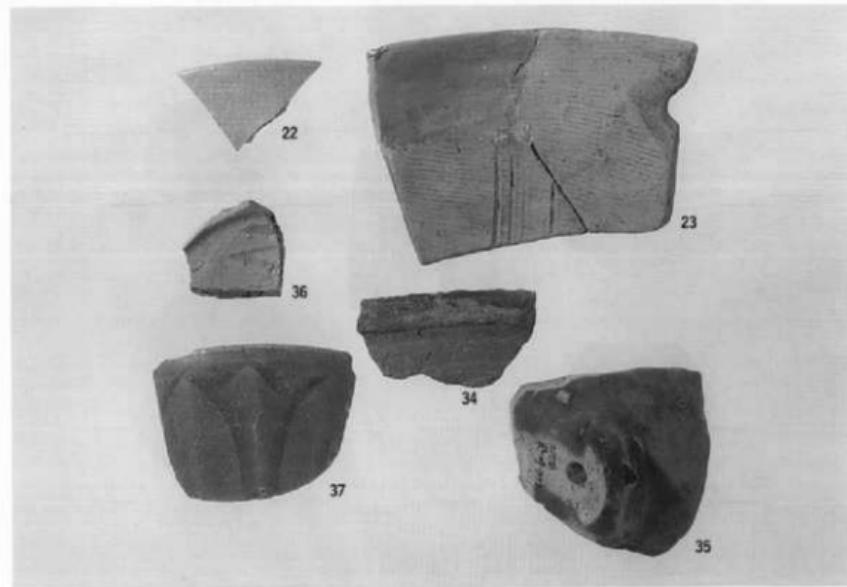
(1) 包含层出土石器 ⑨



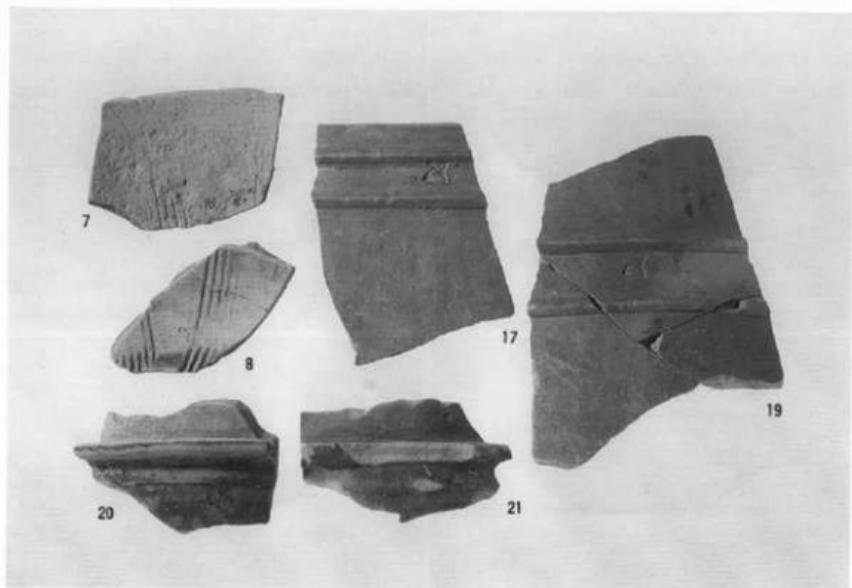
(2) 包含层出土石器 ⑩



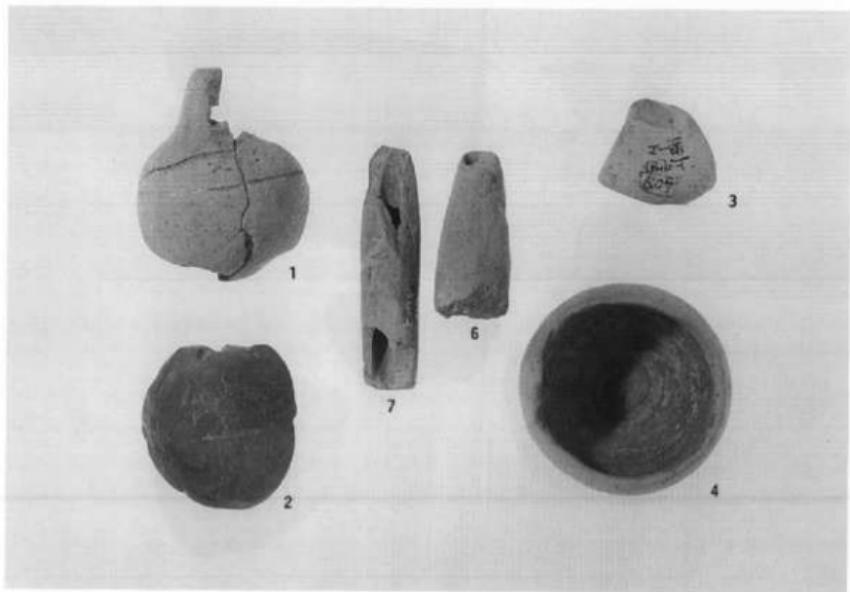
(1) 穹穴出土土器 ①



(2) 穹穴出土土器 ②



(1) 壓穴出土土器 ③



(2) 壓穴・包含層出土土製品



9



55



39



59



47



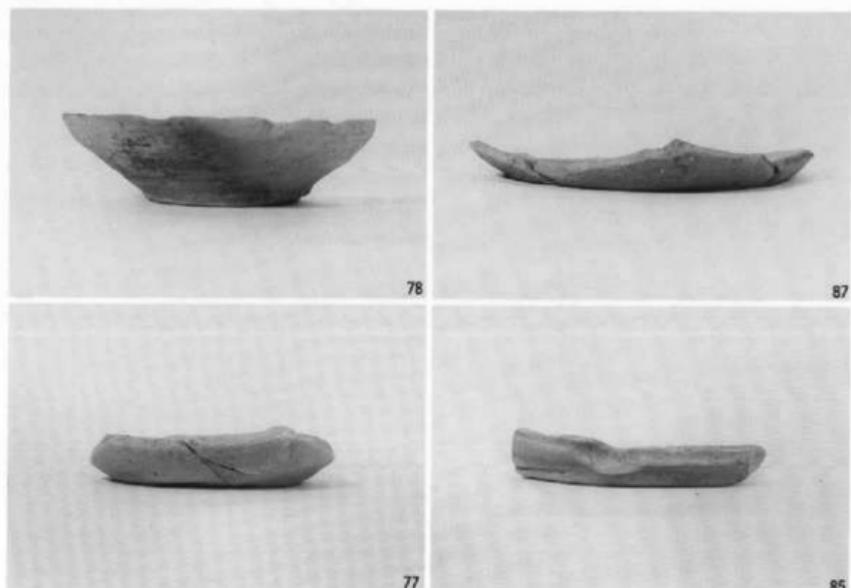
60



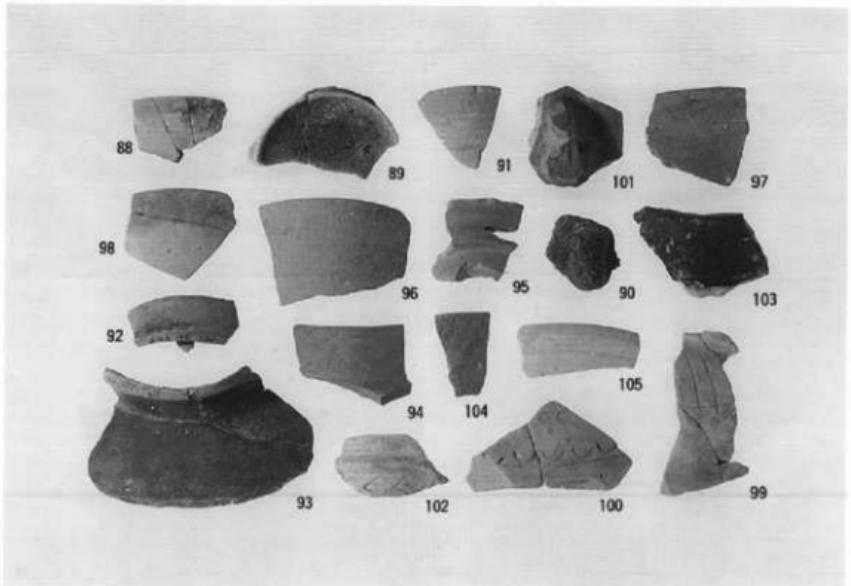
46



70



(1) 包含層出土土師器



(2) 包含層出土土師器、須惠器、瓦器、瓦、磁器

報告書抄録

ふりがな	きゅうしゅうおうだんじどうしゃどうかんけいまいそりぶんかがいちょうきほうこく						
書名	九州横断自動車道関係埋蔵文化材調査報告						
副書名	朝倉郡杷木町所在天國・夕月・上池田遺跡						
番次							
シリーズ名							
シリーズ番号	第42集						
編著者名	中間研志・井上裕弘						
編集機関	福岡県教育委員会						
発行機関							
所在地	〒812 福岡県福岡市博多区東公園7-7						
発行年月日	西暦 1996年3月31日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コ一ド 市町村	北緯 ° ° °	東經 ° ° °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
天國遺跡	朝倉郡杷木町大字古賀字天國	580158	33° 22'	130° 48' 18"	1987年11月 ~ 1988年3月	2,500	高速道路建設
夕月遺跡	朝倉郡杷木町大字古賀字夕月	580158	33° 22'	130° 48' 18"	1988年3月 1988年7月	225	同上
上池田遺跡	朝倉郡杷木町大字池田字上池田	580159	33° 27'	130° 50' 24"	1987年12月 ~ 1988年3月	3,200	同上
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
天國遺跡	集落 古墳 集落	绳文 古墳 平安-鎌倉	堅穴住居跡1 土塙11 埋葬3 円墳3 土塙墓4 火葬墓1	押型文・轟B・曾畠 石鏡・石斧・石匙 耳環・鉄錐・須恵器 青磁・白磁・土師器			
夕月遺跡	集落	绳文	土塙4・溝2	押型文 石鏡・スクレイパー・磨石			
上池田遺跡	集落 墓地	绳文 弥生 中世	堅穴住居跡4 土塙37 堅穴住居跡2 土塙8 土塙墓4 墓穴造構14	押型文・阿萬・北久根山 西平・夜白 石鏡・石斧・石匙・ドリル 弥生土器 土器・土縫			

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告

-42-

平成8年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 福岡印刷株式会社
福岡市博多区東公園1丁目10-15

福岡県行政資料

分類番号	所属コード
JH	2133051
登録年度	登録番号
H7	9

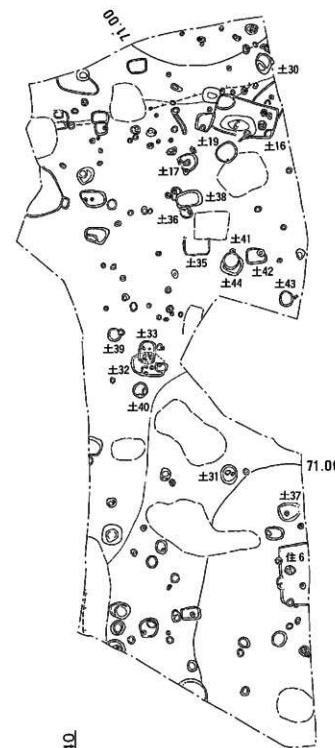
九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告

天園
夕月
上池田 遺 跡

福岡県朝倉郡杷木町所在遺跡の調査

付 図

付図 1 上池田造構配置図(1/200)



付図1 上池田遺跡遺構配置図(1/200)